
時と宇宙（そら）を超えて～分割版～

琅來

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

時と宇宙^{そら}を超えて〜分割版〜

【Nコード】

N7986X

【作者名】

琅來

【あらすじ】

こちらは分割版となります。

長編版 ↓ <http://ncode.syosetu.com/n0697p/>

身分が物を言う世界——そこは、今から千年後の、宇宙進出をも果たした、遠い遠い未来だった。そこには、二人の少女がいた。彼女達は身分が違いながらも、仲のよい親友だった。けれど、中学一年生の夏休みから、二人は運命の渦に翻弄されることになる。そうし

て知った、衝撃の事実とは――。

序章「総ての始まり」（前書き）

この話は基本的に友情物ですが、話の都合上恋愛も入ってきます。
また、途中で近親相姦も入ってくるので、苦手な方はご注意下さい。

序章「総ての始まり」

「嗚呼。この子は……この子はあの時に、産まれて来てしまったのですわね。せめて……せめて、もう少し遅ければ……」

「そのことは、言うな。今は、産まれたてのこの子供に、名を付けなければな」

「それは、考えがあります」

「どのような名だ？」

「はい。それは、今この国にはない、富や名声を陰謀などによって手に入れるのではなく、優しい行いによって心を富ませること、樹木を視てその神秘を感じる美しい心、そして、その時に実った果実を、単なる食糧として感謝する気持ちすら持たないのではなく、ここまで育ってきたその生命力と大地の恵みに感謝する心を願って、——と名付けましょう。この子が——になった時の繁栄を願い」

「ああ。それはいい。美しい名だ」

「ところで……」

そう言つと、美しいその女性は、一息置いてから、隣の男性に話しかけた。

「この子は、やはり、あちらへ……？」

「その時は、お前の名をつけよう……きつと」

「あの……この子に、弟か妹が産まれたら……そして、信頼でき、決して裏切らないような子供がいた時は、その時にはこの子が——と言つて、いいですわよね？　いくらあんな人でも、まだそのような酷いことをやろうとは思わないでしょうから」

「ああ。我らはいつまでもいられるとは、限らんのだからな……」

この二人の間に、なんとも淋しそうな空気が流れた……。

「まあ、なんて可愛い子なんでしょう。ぴったりの名前は何かしら？」

「そうだなあ。そうだ。古い言葉で、『鶴は千年 亀は万年』と言うではないか。だから、鶴はどうだ？」

「そんな名前は嫌よ。なんて言っただって、この——に相應しい名でないで、絶対にからかわれるはずだわ。それに、古風すぎるわよ。絶対に、断固として拒否します」

「しかし、縁起がいいと言うと……」

「じゃあ、この——を取って、私が好きな音で響きのいい、『——』という音をつけましょう。そして、この『——』の漢字は、このように」

女性はそう言うと、手元にあったパネルに一つの漢字を書いた。

「そう、そしてこの二つをくっ付けて、——にしましょう！ 貴方、反対、しないでしょね？」

「も、勿論だ！ 反対する訳がない！ ……それに、響きのいい名だな」

「ええ。本当に……本当に、可愛い子。大きくなった時、どんな子でもいいわ。この子に合う友達が、沢山できるといいわね……」

「ああ……そうだな……」

先程の二人とは実に対称的に、何とも暖かく、優しい想いが満ち溢れた……。

第一章「日記帳」――1

ここは、今からおよそ千と数百年後の、西暦三二四八年、全宇宙共通暦一三二一年の世界。

西暦二七〇〇年頃、地球は他の遠く離れた星から発見されたことを告げられ、しかも文明がこちらの方が大分遅れていることに気付かされ、大混乱に陥った。

だが、ここではもうそんなことは遠く昔の過去の出来事となり、地球は地球連邦となり、日本国はただの日本州となつて、みんなが全宇宙共通語を話す時代となつた。

ここはそんな日本州の、とある街にある公園だ。

季節は夏真っ盛りで、夏休みである。

「由梨亜^{ゆりあ}！ お待たせっ！」

「あら、遅かつたじゃないの、千紗^{ちさ}。呼び出したのはそつちのくせに」

声を掛けられた少女――由梨亜は、背中の中程まで届く、柔らかく波打った茶色の髪を一つにまとめている、緑がかった黒の瞳の美少女で、声を掛けた少女――千紗は、肩甲骨辺りまでの、長くもなく短くもない長さで、墨を流したかのような、柔らかく光る真っ直ぐな黒髪を一つにまとめ、瞳の色は髪よりは茶色い色をしている。

それだけならいいのだが、今の地球連邦の常識で考えると、この光景は可笑しく見える。

何故なら、由梨亜はいかにもお嬢様に見えるのに対し、千紗は普通の少女なのだ。

もしもここに常識のある、普通の人がいたら、首を捻ったはずである。

何故ならこの地球連邦は身分社会で、大きな会社を経営し、しかも慈善団体などに寄付するお金を惜しまない、何十代も続く家を貴族と呼び、いくら稼いでも、寄付するお金を惜しむ家や、まだ成つ

て間もない成り上りは富豪と呼ばれ、それ以外の人は庶民と呼ばれる。

また、商売をしていても、老舗と呼ばれるような昔から経営しているお店でも、支店がなかったり、少なかったり、手を付けている仕事の幅が狭かったりすると、いくらお金を稼いでも、寄付しても、ぎりぎり富豪には認められるかもしれないが、貴族として認められない。

そして、この由梨亜は正真正銘大貴族のお嬢様で、千紗は正真正銘の、親戚のどこを捜しても富豪や貴族がない、立派と言ってもいいほど立派な庶民なのだ。

しかし、この二人は敬語を使わず、しかも相手の名前すら呼び捨てで普通に通している。

なので、珍しくはあるが、二人は身分を越えて友達になったと考えるのが妥当である。

「あのね、由梨亜。さっき先輩から連絡あつて、あたし達も百不思議に挑戦しろって！」

そう……七不思議ではない。

百不思議である。

この二人の通っている学校はかなりの曰く付きで、そう言った怪談物が数限りなくあるのだった。

「本当！ 千紗？」

「勿論！ それで内容は、夕方頃に学校の使われてない備品室に行くことだって。それで、怪談によれば、そこには、昔自殺した女の子が遺書につて遺したノートが、逢魔ヶ時になると現れるんだって。それを見つけるっていうのが、あたし達が挑戦することだってさ」

この二人の会話で大体分かったかも知れないが、二人の所属している部活は、『心霊研究部』という部活である。

だが、その名前の響きとは違い、普段のこの部活は、科学的な根拠を元に心霊現象を説明していくという、至って科学的な部活である。

この二人は、その部活の一年生だ。

だが、年に一度——三年生が引退してしばらく経った夏休みに、何故か一年生が、この学校の百不思議の中から一つを挑戦するという慣習がある。

そしてこの二人も、その順番が回ってきたということだ。

「それで、時間は？」

「今週の水曜日、夜の六時だって。先生もいって言ってたよ」

「ってことは、先生からも許可を得ているんだ」

「当たり前でしょ？ あたしはともかく、先輩がそんな手抜きするはずないよ」

……自分で分かって言っている所が、特に問題な発言であった。

「まあ、そりゃそうよね……それで、場所は？」

「旧校舎三階の北端の、さっきも言ったと思うけど、備品室。けど、今は使われてないから、埃に気を付けないとね」

「ええ。ねえ千紗、今日暇？ 時間あるのなら、うちで遊ばない？」

「うん、いいよ！」

この二人の名前は、本条由梨亜ほんじょうと彩音千紗さいいん。

二人は、とても仲の良い親友だ。

しかし、二人はこの後に起こることを知らなかった。

知っていれば、断るに違いなかった、恐ろしいことを。

丁度、明日初めての任務に挑戦するという、火曜日のことだった。

「千紗」

「何？ 由梨亜？ 明日の確認？」

「違うの。あのね、千紗。明日……行かない方がいいよ」

「どうしてっ！」

「千紗、煩い。ちょっと黙って」

由梨亜は大声を出した千紗に注意をしてから言った。

「あのね、私の曾お祖母様は、この学校に通っていらしたらいいの。曾お祖母様は、本家から外れてたから。それで、私が明日、これに挑戦するっていうことを聞いて、注意して下さったの。曾お祖母様はこの、私達が試そうとしているこの怪談で、危険な目に会ったんだって。だから、この怪談は、飛ばされたんだって」

「何それ。由梨亜。それ、ほんとに信じてんの？」

「えっ？」

由梨亜は、きょとした表情で言った。

「あのさ、それって、どの曾お祖母さん？」

「……えーっと、お母様の、お母様の、お母様に当たる曾お祖母様よ」

由梨亜は、指を折って数えた。

「……その人ってさ、前、あたしが由梨亜の家に遊びに行った時に、私立の超頭がいいので有名な幼稚園から大学までの一貫校出身で、その中でも常にトップクラスだったって、あたしにすごい自慢してた人だよね？」

「……………」

由梨亜は、言葉が出なかった。

「これはあたしの想像だけどさ……多分、由梨亜の曾お祖母さん、由梨亜を心配して言っただけで、何にも根拠はないと思うよ……………」

千紗が恐る恐る言った言葉に、由梨亜は頭を抱えてしまった。

全く否定できないだけに、とても痛い。

「うん……多分、そうかも……………」

「じゃ、明日、予定通りにね？」

「……うん。ごめん…………千紗」

「いいって。ほら、行こ？」

「うん……………」

由梨亜は半ば脱力したまま、千紗と共に歩いて行った。

そして、その夜が来た。

「千紗〜！」

「遅い！　今まで何やってたの！？」

「えっ……。だって千紗。今、五時四十分だよ？　五時五十分集合
って言うてなかったっけ？」

「え……。アハッ」

「もう。ボケないでよ」

由梨亜が頬を膨らませて言った言葉に、千紗は笑いながら答えた。

「じゃあ行こっか」

「うん！」

「うつわ〜！　こんなに薄暗くって人氣もない学校って怖いね〜由
梨亜。何だか気味悪いし……。ねっ、由梨亜。あたしはこんなこと
するの初めてだけど。由梨亜はある？　あっ、そうだ、そういえば、
この中にあるノートって……」

「千紗！」

「はい！」

千紗は、思わず背筋を伸ばして答えてしまった。

……。ちなみにその叱責は、正直言っただけで今まで聞いたどの先生や親
からの叱責よりも迫力があり、逆らいがたい物であった。

「煩い！　ちよつとは静かにしたらっ？　ほんとと言うと、私、怖い
んだから……。ちよつとただけだね」

「ふ〜ん……。ちよつと、意外かも……」

「いいから、さっさと行くわよ！」

「は〜い……」

二人は、薄暗い廊下を歩いて行った……。

「由梨亜、着いたよ」

「ええ」

「それじゃあ、行くよ!」

ガラツ、という音を立てて千紗と由梨亜が戸を開けると、使われていない机の上に、何かが一瞬ピカツと光った。

光は一瞬にして消えたが、千紗は構わずにその机へと歩き出した。

「ちょ……待ってよ! 千紗!」

呆気にとられていた由梨亜が、我に返って千紗を追いかけた。

千紗は追って来た由梨亜を従え、その光った場所へ行ったが、光った机の上に置いてあった物を見るなり、息を呑んだ。

「……ほんとに、ノートがあつた……」

「千紗……でも……でも、さ。これ……もしかしたら、先輩の悪戯かもよ……?」

「うん……でも、悪戯にしてはちょっと悪質じゃない?」

「うん……まあ、悪質って言えば、悪質だろうけど……ちょっとした、ドッキリかもね」

……既に、二人の中では『先輩の悪戯』と確定されてしまっている。

「うん……じゃあさ、これ、先輩に報告した方がいいよね?」

千紗は携帯端末という、地球連邦内ならどこでも繋がり、希望すれば立体映像にできる優れ物であり、大抵はみんな持っている物を取り出して言った。

「じゃ、あたしが柑奈先輩に電話掛けるね?」

「ええ。私って、こういうの持っていないもんねえ……」

由梨亜の溜息じみた言葉に、千紗はにやつと笑った。

「こういう時、お嬢様って不便だねえ」

「もっつ! いいから、さっさと先輩に連絡取ったら?」

「はいはい」

千紗は、すぐに柑奈に電話を掛けた。

その時、柑奈は苛々と携帯端末を手に取ったり置いたりと繰り返していた。

と、その時、いきなりコール音が鳴り、ぱつと携帯端末を手に取った。

「もしもし？」

『もしもし、柑奈先輩ですか？ あたしです。千紗です』

柑奈は、それまでの苛々とした様子を消し、手をぽんと打った。

「千紗？ …… ああ、そういえば今日だったね。 …… それで、どうだった？ 何か、見付かった？」

柑奈の悪戯っぽい言葉に、千紗が映像に映るように、一冊のノート掲げた。

『はい。こんなノートが置いてありました』

「へえ。こんなのがねえ。中身、見てみた？」

『あ、いえ…… まだです』

「じゃあ、見てみなさいよ」

『はい……』

柑奈は、しきりと千紗を急かした。

そのノートをパラパラと捲っていた千紗は、少し怪訝そうな顔になった。

「ん？ どうした？ 千紗」

『あの…… これ、普通のノートじゃないんですけど……』

「どんななの？」

『え…… と、何て言うか……』

『日記帳に見えますね……』

横から、由梨亜が顔を出して言った。

「ふ…… じゃ、しばらく二人でそれやっというて」

『はっ？』

『はいっ？』

二人は、揃って驚いたような顔になった。

『え〜っと……これを、ですか？』

「うん。そう。二人で交互にやつといて？ 一人だつたらずつと一人でやればいいだろうけど、二人だからね。だつたら、二人で交互にやつたらいんじゃないの？ あ、でも、後で見せて貰うことになるかも知れないから、見せられない内容は書かないこと。いい？」

『はい、先輩』

「それじゃあ、明日ね」

『はい。さようなら、先輩』

千紗と由梨亜はそう返事をする、端末を切った。

柑奈はしばらく端末を手に考え込んでいたが、一つの番号を押した。

短いコール音の後に、柑奈と歳が変わらない少女が出る。

『もしもし……柑奈？ もしかして、千紗と由梨亜から連絡来たの？』

「うん。見事に引つ掛かってくれたわよお」

柑奈は、につこりと微笑んと言った。

そう、これは毎年恒例の肝試し——というか、悪戯なのである。

『じゃあ、どうする？ 千紗と由梨亜で一年は全員終わったけど……ネタばらし、いつやる？』

「う〜ん……じゃあ、九月入ってからにしょ？ あんま早過ぎても、興醒めでしょ」

『じゃあ、また明日ね、部長さん』

「はいはい、明日絶対遅れないですよ？ 副部長さん」

二人はそう冗談のような口調で言つと、それぞれ端末を切った。

「じゃあ、先輩はああ言ってたけど、順番どうする？」

二人は学校から帰りながら、会話を交わしていた。

「ん〜、じゃ、由梨亜からでいいよ」

「ええ。分かったわ。じゃあ鈴南すずなが早く帰ってって言ってたから、急ぐわね」

鈴南とは、由梨亜付きの召し使いである。

けれど、その鈴南にしても、実は貴族階級のお嬢様であり、千紗よりも身分が高い。

そんな人間を複数人使用人として抱えている由梨亜は、それこそ真正正銘のお嬢様なのであった。

「うん。じゃ〜ね」

「じゃ〜ね〜！」

「あの由梨亜は、どんなことを書くのかなあ……」

由梨亜が去っていくと千紗は独り言を漏らし、そして角を曲がり、自宅へと帰って行った。

由梨亜は、屋敷の扉を潜ると、声を掛けた。

「ただ今戻りました」

すると、すぐに鈴南が出て来る。

どうやら、由梨亜が帰るだろう時間を待っていたようだ。

「お帰りなさいませ、お嬢様」

鈴南が頭を下げると、その後ろから、由梨亜の母が顔を覗かせた。

「あら、お帰りなさい。由梨亜」

「ただいま。お母様、鈴南」

「それでは奥方様、お嬢様。こちらへ。夕ご飯のお支度が整っております」

「ええ、鈴南」

第一章「日記帳」―2

「お帰りなさい！ お父様！」

その日の翌日、本条家の広い屋敷に、由梨亜の元気な声が響いた。
「ただいま、由梨亜。お前の誕生日の前までに、シャリート国から帰れて良かったよ」

由梨亜の誕生日は、八月十六日。

そして、何の偶然か、千紗も同じ誕生日だった。

今は、八月十四日だ。

「ところで由梨亜、明日は部活あるかい？」

「いいえ。夏休みは木曜の午前中だけなの。明日は金曜だから空いているわ」

「それでは明日、十八日にするお前の初めてのパーティーの為に、ドレスを買って来ようか？」

「ええ。それでは私、着替えて来ます」

由梨亜は部活から帰って間もなく父親——本条耀（よう）太を迎えたので、制服のままだった。

由梨亜は階段を駆け上がって部屋に駆け込むと、溜息を一つ吐いた。

「ふう〜」

（良かったあ。怪しまれなかった。お父様もお母様も鈴南も頭固いから、もしも見られたら大変なことになっちゃうわ。早速書こう！）

由梨亜はしばらく日記に何かを書いていたが、五分後、書き終えたのかその手を止めた。

「できた〜！」

（これ、明日……は無理だから、明後日渡そう！ あっそうだ！
千紗に、その時一緒に招待状渡そう！ 私のパーティーに。ついでに、部活の人全員に、都合がつくなら招待状送ろうかな。ああ、楽しみっ！）

由梨亜が楽しげに心を弾ませていると、コンコン、という音がして、外から鈴南の声がした。

「お嬢様、お食事の時間にございます」

「ええ。今行くわ」

その翌日、由梨亜は耀太や母親の本条瑠璃^{るり}、他に荷物を運ぶ為と、運転の為と、車の盗難防止の為に車に残ってもらう為に連れてきた召し使い達と共に、本条紳士淑女高級店という、本条家が開いている店の本店に、わざわざ四十分も掛けて行った。

交通網が発達している今、四十分も掛けた移動というのは大事である。

本来なら屋敷に運び込んでもいいのだが、あまりにも品揃えが豊富だった為、それもできず、またいい物が揃っているのはやはり本店なので、時間を掛けることにしたのだった。

店に入ると、由梨亜は少し甘えるように言った。

会えない時は、一ヶ月以上も会えない相手でもあるので、自然とそうなってくるのだ。

「お父様。私、ドレスとか靴とか、青や白で統一したいわ」

「ああ。いいとも」

「あつ、このドレス可愛い！ 綺麗な色。この色も綺麗ね。ああ、迷ってしまうわ」

「由梨亜。どんなに迷ってもいいから、お前の気に入る物を買いなさい」

「はい、お父様」

結局由梨亜が買ったのは、裾が南国の海の海底が一段と深くなっ

た所のような深い藍色で、上に向かって少しずつ淡くなっているグラデーシヨンの長袖で膝下丈の、今時珍しい——つまり、かなり高価な——本物の絹でできたドレス、少しだけ灰色がかった白いエナメル靴、群青色の毛系のポンポンのような物を真つ白なレースでくるんだ髪留めだった。

「由梨亜。これでいいのか？ 他に買わなくて」

「ええ。だって、これと言えるアクセサリーが見つからなかったんですもの」

由梨亜は少し唇を尖らせると、すぐに笑顔になり、言った。

「でも、ドレスとか靴とか、気に入った物があつて良かったわ」

「そうだな」

その時、由梨亜は確かに何かの視線を感じたが、振り返ると、何もなかった。

（まただわ。また、何もない……この前も、その前も、そして今も、確かに誰かからの視線を感じたのに……）

「どうした？ 由梨亜」

「いいえ。何でもないわ」

「さあ、お乗り下さいませ。旦那様、奥様、お嬢様」

チャイムが鳴り、千紗がドアを開けると、そこには珍しいことに由梨亜の姿があつた。

「由梨亜！ 来てくれたんだあ。上がって」

「お邪魔します」

「一々言わなくても別にいいって！ ほらほら」

由梨亜は千紗に急ぎ立てられ、玄関を上がった。

「はい」

コトン、と千紗は、二人の前にお菓子の入った器とジュースを置いて、話しかけた。

「それで、どうしたの？ 由梨亜がうちに来るのって、珍しいよね？ って言うか、一年振りぐらいじゃない」

千紗は由梨亜に、単刀直入に訊いた。

「あ、うん。そうだね。はい、日記帳。うちだと、鈴南達の目が厳しくて渡せないの」

由梨亜はそう肩を竦めて言うと、千紗に手渡した。

「ありがと、由梨亜。じゃ、あたしが書き終わった後も、由梨亜に来て貰うか部活の時の方がいいね」

「ええ、そうね。あと、私の初めてやる誕生日パーティーの招待状。他にも、都合つく部員の人も招待するつもりよ」

「へえ。あっそうだ！ 由梨亜、あたし、由梨亜に今プレゼント作っている途中なんだ。楽しみに待っててよね？」

「へ。何作ってるの？」

「ブレスレットと、あとネックレス！」

「ふん。何色？」

「白とか、水色とか、青とかを組み合わせているの」

「そうなんだ。偶然だね。私も、千紗に薄いピンクや赤紫とかの、ブレスレットとネックレスを作っている最中なの。ちょっとびっくりだわ」

「じゃあ、交換するみたいだね！」

「そうだねえ」

由梨亜は、日記帳の存在を知られずに千紗に渡せたことをとても喜んでいた。

そして、次に回って来た時も、上手く出し抜けられるようにと祈った。

「それは……それは、どういうことだ。由梨亜！」

耀太の、怒りが燃え上がり、もう手が付けられない状況に陥った

罵声が、屋敷を揺るがすが如く響いた。

だが、由梨亜はそれに全く動じず、困惑したかのように、たった今言っただけの事を言った。

「何って……ただ、友達や先輩方を、私の誕生日パーティーに誘いたいって、言っただけじゃないの。これの、どこがいけないの？」

由梨亜が至つて不思議そうに言った為、耀太も怒りを少し抑え、こう言った。

「いけないも何も、大量の庶民を屋敷に招待するなぞ、前代未聞の珍事だぞ。過去には庶民の友人を招いたこともあったから、千紗はいい。しかし、その他の者を招いたことなど前例がない。いくら年上とはいえ、身分を考えればお前の方が上なんだぞ。本来ならば貴族であるお前が敬語を使われる立場であり、庶民に敬語を遣うような立場ではない。そこをきちんと踏まえておけ」

「……はい」

「分かったのならよい。しかし、部活部活と浮かれて勉強をサボるような真似はならぬ。鈴南、由梨亜に家庭教師が来る時間だ。先生をお迎えしろ」

「はい。畏まりました。お嬢様、お勉強のご用意を」

「分かっているわよ。鈴南」

「それでは由梨亜、先に行け。私は鈴南に話があるからな」

「はい、分かりました。それでは失礼します。お父様」

由梨亜が出て行くと、耀太は声を潜めて言った。

「鈴南」

「何でしょうか」

「由梨亜は、何故あのようになってしまったのだろう」

鈴南は額に皺を寄せ、難しい顔で黙ったかと思うと、小さな声で慎重に言った。

「お部屋にいる時や学校にいる時は、人権侵害に触れる為、監視は不可能です。ですが、その他の時……本条家の者が付き添わずに外出する時は、身の危険を回避する為という名目を持って、なるべく

目を離さぬように、召し使い達に手を回しておきます」

「さすが鈴南。そういう所もしっかりしている」

「お褒めの言葉、ありがとうございます。それでは、先生を迎えます」

鈴南が出て行くと、耀太は半眼を伏せた。

（鈴南に任せたから、大丈夫だと思いがな……）

「こちらも、手を回しておくか。用心はいくつ重ねても足りる物でもないし。私の可愛い由梨亜の為なら、害になる物全てを取り除いておかねば……」

由梨亜は耀太の言葉を扉の陰で聞いていたが、それを聞き遂げると足音もなく立ち去った。

千紗は、由梨亜が帰った後、すぐに日記帳の中身を見た。

「へえ」。由梨亜のお父さん、シャリート国から帰ってきたんだ。

そつえば、なんか嬉しそうだったよなあ、あの日。えっ……ゆ、

由梨亜……」

千紗は、思わずその文字を絶句して読み返した。

そこには、

『この日記帳を手にしてから、出掛けた時に視線を感じるようになったの。不思議よね。しかも、大勢の人がいても、沢山の車が走ってても、そこだけが視えないかのように、存在しないように、一人が余裕を持って立てるくらいの幅の空間が空いているの。その一瞬後には人や車が通ってその空間は埋まるんだけど……ま、気にし過ぎなのかもね。やっぱりこれ、どうしても先輩の悪戯としか思えないんだもの』

と書いてあった。

それに、千紗は思わず吹き出していた。

「全く、由梨亜ったら……ま、ほんとに先輩が監視してたら怖いけ

ど。でも……そんなのあり得ないし。やっぱ、気にし過ぎなんだよ、由梨亜」

そう呟きながらも、親友である由梨亜を心配しているのだろうか、千紗の顔にはあまり笑顔がなかった。

翌日、由梨亜は千紗の家に、勉強道具を抱えて行った。

一緒に宿題を片付ける為だ。

その途中、昨日のことを思い出した由梨亜は、申し訳なさそうに言った。

「千紗、ごめんなさい。お父様から、千紗以外は駄目って……」

「何で！ あたしがいいなら、他の人もいいはずじゃあ……」

「それが、大勢の庶民を屋敷に招待するのは、前代未聞の珍事。過去には、庶民の友人を招いたこともあったから千紗はいいけど、他の人を招いたなんてことはない。いくら年上とはいえ、身分を考えれば、私の方が上。本来ならば、貴族である私が敬語を使われる立場であって、庶民に敬語を使うような立場ではない。そこをきちんと踏まえておけて……お父様が」

「そっか。じゃあ、しょうがないよね……。でもさあ、由梨亜。何でこうなのかなあ。今のこの世の中、身分制度でガチガチに凝り固められて、階級重視じゃん。何も由梨亜を批判するわけでもないけどさ、お嬢様は幼稚園からずっと、あたし達庶民が通えないようなお嬢様学校に通ってるでしょ？ ホテルも、あたし達は一流な物なんていくらお金を出しても泊まれないし、二流の物はお金持ちの倍取られるし。貴族の人に遠慮して、庶民を近くに寄せないようにしているのかも知れないけど……でも、ここまで差が激しいと嫌になるよ」

「でも、昔から……そう、約四千年近く前の昔から、この制度は続いているのよ。その頃はもっと格差は大きかったけれど、今とはあ

んまり変わらないわね」

由梨亜はそう、溜息をつきながら言ったが、千紗の可笑しな様子に、首を傾げた。

「……………」

「千紗？」

「……………」

「ちよつと、聞いているの？ 千紗」

「……………」

「ねえ、千紗。千紗ってば！」

「あのさあ。由梨亜」

由梨亜が煩かったのか、それとも珍しく考え込んでいたのか、千紗はようやく口を開いた。

「あたし達って、今日、十三歳の誕生日だよね？」

「あつ……………」

ようやくその事実に気づいた由梨亜は、今までしていた会話が、あまりにも誕生日にそぐわないことだということに、やっと気付いた。

そして千紗は、さっきあんなに長々と現代の格差について熱く語っていたのに気付いて、黙り込んでしまったのだった。

その帰り、千紗は由梨亜に、由梨亜は千紗に、それぞれ青系、赤系で作ったビーズのネックレス、ブレスレットを渡した。

どちらも素晴らしい出来で、手作りの汚さはなく、手作りの良さのみがあった。

そして思わず由梨亜は、

「うわあ。千紗、ありがとう！ 丁度着るドレスが青いんだよね」と言って感激したのだった。

「何言ってるの！ お礼を言うのはあたしの方だよ！ 赤はあたし

の色って言われるし……本当にありがとう！」

お互いに感激しながらも、別れ道に来てしまった。

「それじゃあ、明後日の私の誕生日パーティーで！」

「うん！ また明後日！」

「はい、どうぞ。さっさと食べちゃいなさい」

「いっただっきまゝす！ うわ！ やっぱりお母さんのご飯美味しい！」

「全くもう。千紗つてばお世辞が上手！ ……そういえば、今はもう天国にいるお父さんも、私が作った料理をいつも美味しいって食べてくれたのよね……」

千紗の父は、千紗が五年生の時……つまり、二年前に交通事故で逝ってしまったのだった。

しみりしてしまった空気を払うように、千紗はことさら明るい声で、母親に話しかけた。

「お母さん、よく覚えてるよね。あたしだったら、そんな細かいことまで覚えてらんないよ。……そう言えば、明後日に由梨亜の誕生日パーティーがあるのね。それで呼ばれているんだけど、何着ればいいかな？ あたし、そんな余所行きの物、大して持っていないんだけど……」

「うーん……そうねえ、私が前着ていた、薄い赤紫色のドレスは？ それに千紗。『そんな細かいこと』とは聞き捨てならないわ。貴女、初恋もまだなんだからそんなこと言えるのよ」

目を不気味にキラッと光らせながら言う母親に、千紗は苦笑しながら言った。

「こつちこそ、『初恋もまだ』とは聞き捨てならないよ。初恋ぐらい経験済み！ そんな、ドレスって、あのドレスのこと？ 濃い目の赤紫色で蔓草模様が刺繍されてるの。あれちよっと大人びてるよ

ねえ」

「――それはそうと、そう言えば千紗、夏休みの宿題は？」

いきなりの母親の話題転換に、千紗は反応が遅れてしまった。

「……………え、えつとお。それはあ……………そのお……………」

「つて、いうことは、まだ、全然手を付けてないわね？」

「ぜ、全然じゃあないんだけどお……………さっきも由梨亜とちよつとやつたしい……………」

「千紗！ 下らないこと喋ってないで早く片付けなさい！ さもないと……………」

「……………さもないと？」

千紗は上目遣いに、そつと母の様子を窺った。

「宿題持つて学校に行かせるわよ！ 丁度先生がいて、片付けるのがさぞ楽でしょうねえ？」

その、あまりにも恐ろしい言葉とにつこり笑った笑顔……………。

思わず千紗は身震いしてしまった。

「はい、はい！ すぐ片付けます！」

そう言うのと、千紗は急いでご飯を掻っ込み、部屋へと走っていった。

それを聞いていた母は、思わずクスツと笑ってしまった。

「あの子は私に遣された、たった一人の娘……………。大事に育てなくっちゃね……………」

つい、そんなことを呟いていた母は、部屋から聞こえる声に、思わず破顔してした。

「あつれ。夏休みの宿題どこ置いたつれ？ えーっ。ない！」

その声が聞こえてくると、千紗の母親は、リビングのテーブルの片隅にその宿題があるのを発見し、ぷつと吹き出して言った。

「千紗！ 宿題ここにあるわよ！」

「えーっ！ うっそ！」

ドタバタと、凄い勢いで部屋から出て来た千紗に、母は思わず笑ってしまった。

「全くもう、千紗ったら」
母親はくすくすと笑うと、千紗に宿題を手渡した。

第二章「誕生日パーティー」―1（前書き）

今回、途中でかなり差別的な発言や、敬意が全くないような発言が出て来ます。そういう物が苦手な方は、ご注意ください。

第二章「誕生日パーティー」――1

八月十八日月曜日の午後三時、由梨亜ゆりあの誕生日パーティーが、本条家じょうけ本宅にて行われた。

だが、由梨亜はまだ子供なので午後三時から午後八時までの五時間だけだった。

由梨亜の家の門の前に行くと、本条家に仕えている、黒い、揃いのスーツを着た男性達と、薄手の白の長袖、踝丈の清楚な感じのするドレスを着て、髪をこれまた白いレースのリボンで高めの位置に一つ結びに結んだ女性達が、それぞれの招待状を一枚一枚確認していた。

千紗ちさは、緊張しながら、招待状を渡した。

それは、千紗が今まで見たことがない立派な模様と本条家の印章が綺麗に印刷してあり、門にいた召し使い達は、実に丁寧な態度で招待状と、目の前に置いてある端末機で招待状を出した人の名前が載っているリストを確認し（これは偽の招待状を使って潜り込まれないようにする為と、誰が来てくれたのかを確認する為である）、中の大広間まで案内してくれた。

千紗は、由梨亜の家には何度も行ったことはあったが、そのほとんどが由梨亜の部屋がある棟にしか入ったことがなく、おまけにこの大広間がある棟は由梨亜の部屋があるとは別の離れている棟にあったのでこの大広間に入ったのは初めてだった。

そして、この大広間はとても広く、千紗の家が二つ入ってもまだまだ余裕がありそうだ。

天井はとても高く、三階までの吹き抜けになっており、大きな、本物のシャンデリアがいくつも輝いている。

庭から見ても一階部分の左半分はダンスフロアに、右半分は立食が
できたり座って食べたりできるようになっている。

そして一階から三階に掛けて、吹き抜けになっている。

庭と二階、三階はテーブルやベンチがあり、食べたり話したりが
できるようになっていた。

千紗は感嘆すると同時に、周りの様子を観察した。

やはり、千紗の年頃と同じような子供はいるが、少女達は千紗の
何倍も立派で真新しいドレスを着て、しかも全員一箇所に集まり、
談笑をしながら千紗や少年達を……特に、自分達よりもみすばらし
い格好をした千紗の方を、無遠慮にジロジロと眺めていた。

少年達は何人かずつ固まり、談笑しながら少女達の集団をチラチ
ラ見ていて、千紗のことは虫けらほどにも気を留めていなかった。

まあ、その反応は、千紗にとっては気楽なことだったが。

大人達は男同士、女同士で固まり、談笑していたり、その固まり
から抜け、ダンスの申し込みをしていたりしていた。

しかし、千紗がいくら見渡しても、人混みの中に目を凝らしても、
由梨亜の姿はない。

時間は、もう三時三十分になろうとしている。

（こういう風に時間が過ぎてから主役登場なのが、上流階級風なの
かな……）

と、千紗は思いながら、到って大人しく、静かに待っていた。

「由梨亜お嬢様、準備はお済みですか？」

すずな
鈴南の声が、由梨亜の部屋の前で聞こえる。

由梨亜は、ドレスの着付けを

「たまにはいいじゃないのよ。ほつといて。それに、こういうこと
も今のうちに経験しておいた方が将来困らないと思うし。だから、
ねっ、自分でやるから」

と、理屈になっているのかなっていいのかよく分からない理屈（我儘とも言う）をこね、言い張り、その勢いに反論できずに固まってしまった召し使い達を尻目に、部屋にドレスと靴を持ち込んでしまった拳句、内側から施錠してしまったのだった。

「由梨亜様、髪を結わなくてはなりませんから、お早く……」

「うるさいわねえ、鈴南。まだ三時じゃないの。終わったから、扉の前を退いて頂戴」

「はい」

鈴南はそう言って下がり、それを部屋の中から確認した由梨亜は、扉を開け放した。

そこには、この前本条紳士淑女高級店で買った、裾が南国の海の海底が一段と深くなった所のような深い藍色で、上に向かって少しずつ淡くなっているグラデーシヨンの長袖・膝下丈の絹地のドレス、少しだけ灰色がかった白いエナメル靴を身にまとい、そこに千紗のプレゼントした青系のビーズで作ったネックレス・ブレスレットを付けた由梨亜の姿があった。

ネックレス・ブレスレットは、グラデーシヨンだけの無地のドレスを邪魔せず、すっきりと収まって、由梨亜の若さ、まだ幼いからの独特の美しさ、大人びた気品を矛盾せず、それどころか強調して放っていた。

鈴南は、その勢いに吞まれたかのように見えたが、由梨亜のつけているネックレス、ブレスレットに目を留めると

「それは……？」

と、問いかけてきた。

「千紗がプレゼントしてくれたの」

と、由梨亜は茶目つ気たつぷりに、悪戯っぽく答え、その答えに思わず絶句し、彫像のように固まってしまった鈴南を、その場に置いて立ち去り、本来ならそこで着付けをするはずの部屋へと向かった。

そして、魂がどこかに飛んでいったような鈴南は、二、三秒後慌

ててその後を追った。

由梨亜がその部屋へ着いたのが三時五分だったが、髪をセットし、メイクを終えたのが三時四十五分だった。

鏡に映った由梨亜は、普段は少しフワフワと波打っている髪を真っ直ぐにし、毛先をクルクルと巻いて、それを首の少し上辺りで留め、その先を右肩の方へ垂らしていた。

その髪留めは、この前の買い物で買ってきた物だった。

顔は、睫毛にはマスカラを塗り、唇はほんのりと紅く染まり、目の上は薄い水色で彩られ、美しい美少女に……しかも、余所行きの格好をした大金持ちの家の令嬢となっていた。

いや、普通なら、この格好が普通なのだ。

由梨亜がお嬢様離れしていて、いつも庶民のような格好をしているだけなのだから。

「さあ、お嬢様」

と、促され、由梨亜は部屋を出て耀太^{ようた}、瑠璃^{るり}と合流し、大広間へと向かった。

千紗は、大広間で由梨亜がくるのを待っていた。

そこへ、

「その貴女。ちょっといいかしら？」

と、いかにも上品な声が掛かった。

「何ですか？」

と、千紗が振り返って言うと、そこにはさっきこちらをジロジロと眺めていた少女達の集団があった。

「ちよつと、伺いたいことがあります……お時間、宜しくて？」

「ええ、いいです」

「それでは、少し庭で……」

そう言うと、少女達は千紗をあまり目立たない庭の片隅へと連れ

て行つた。

そして、千紗を片隅に押しやり、少女達は腕を組んで一列の半円形になり、千紗が逃げられないように閉じ込めた。

「お前、私達のような上流階級ではないでしょう？」

と、先程大広間で千紗に声を掛けてきた、一番年上の、少女達のリーダー格だと思われる少女が、氷のように冷やかな声で千紗に話しかけた。

その言葉には、先程のような、美しい、丁寧な響きはなく、侮蔑や軽蔑するような響きが含まれていた。

「ええ、そうよ」

千紗は多勢に無勢な状況を、聞く人に全く思わせないような言い方で、身分の高い人にとっては不遜に、そして挑発するかのようになり、相手の顔を、顎を上げ、胸を張って答えた。

「あたしは、確かに貴女達に言わせればただの一般庶民、中流階級よ。親戚がそういうのになつたっていう人も、一人もいないわ。でも……それでも、あたしと由梨亜は親友よ。だから何だって言うの？ 何が悪いって言うの？ 身分の違いが、何よ。一体何になるって言うの？ この日本州を治めておられる天皇陛下だって、貧しく、それ故に泥棒をしたりして、地に這いつくばり、その日を生き永らえている人だって、みんな同じ人間よ！ 同じようにお母さんのお腹で育ち、母子共に痛い思いをして産まれて来た、人の子よ！ 気が合えば、友達にだって……いいえ、親友にだってなれる！ だって、同じ人間よ。そんなの当たり前過ぎるほど当たり前なことじゃない！ だからあたしと由梨亜が親友になつて、なにが悪いと言うのよ！ 悪いと思うなら、その理由をあたしが納得するまで述べなさいっ！」

千紗は色々溜まっていたので、つい途中から声を荒げてしまった。

だから、すさまじい気迫で少女達に啖呵を切った千紗は、その気迫に少女達が飲まれたことを感じ、形成が逆転したことを確信した。

しかし、それは早計に過ぎなかったようだ。

先程の少女達のリーダー格だと思われる少女が自分を取り戻して、睨みつけながら言い返してきたのだから。

「んまあ、なんて汚らしいことを！ あんな野獣以下の下等生物と神にも等しい天皇陛下を同列に並べるだなんて！ 天皇陛下とそのご家族ご一族は神よ。神の子よ！ そして降嫁なされた天皇陛下の姫君とそのご家族、そして私達何代も続く貴族……そう、大商人や上流階級と呼ばれる一族が人間。そういう者だけが人間と呼ばれるのに値するのよ。残念ながら地球連邦の総人口の半分にも満たないのだけれどね。そしてお前達、一般庶民、中流階級と呼ばれる、この地球上に最も多くいる生き物達は半人よ。私達人間と下等生物達との中間。ありがたく思いなさいな。下等生物とも、野獣とも言われても仕方のない生き物を、『半人』と呼んであげているんだから。そして、お前がさつき言った最下層……あの下等生物達は野獣や溝鼠、そして泥よ。生き物ですらないわ。人間がそういった『物』と親しむのは、言語道断。今からでも遅くはないわ。お前と由梨亜様を今後一切近づけやしないんだから！ さあ、地に這いつくばり額を擦りつけて、許しを、私達の慈悲を請いなさい！ そうすれば、私達は人間ですから、考えてあげなくもないわ。あら、それとも……」

と、その少女は含み笑いをし、軽蔑しきった口調で言い放った。

「『半人』ですから……言葉も通じませんか？ 私達人間の上品な言葉は。ねえ、皆さん」

少女はそう言うとお上品に笑い、周りの少女達もそれに同調し千紗のことをなじりまくった。

「ほーらほら。早く謝らないの？」

「さあ、早く頭を下げなさい」

「いえいえ、土下座にすべきよ」

「そうそう。それでは、そのドレスを土で汚しなさい」

「そうね。それにそんな時代遅れのドレスなんて、もう既に汚れま

みれになっ ていますわ」

「それならば、もう少し汚れても、文句はいえませんか？」

「いいえ、それだけでは何か物足りませんわ」

「そうね。それだけでは足りませんから、額と顔を泥で汚すことにしましょう。ねえ、皆さん？」

「そうよ。異存はありませんよね、この『半人』っ」

「いいえ、半人とは、ちよつと……いいえ、大分美化し過ぎではないかしら？」

「ええ、そうですわ。これは奴隷よ」

「それに、奴隷は人間ではないわね」

「私達に使役される為に生まれてきた『物』よ」

「人権もないわ」

「口答えも許されなかつたわよね？」

「侮辱も、許されなかつたはずよ」

「直接手を触れることも許されないわ」

「私達『人間』の顔をまともに見詰めるなんて、生き恥もいい所ね」

「お前の本当に従順な先祖と比べたら、その先祖が泣くわ」

「それに、天皇陛下とそのご一族のことを口にする時は、地に跪き、額を擦り付け一言『自分のような「物」が貴方様方の御名を口にすることをお許し下さいませ。どうかご慈悲を』と言わなければいけないのでは？」

「ああ、それと最上級の敬語を使わなければならなかつたのではないかしら」

「それどころか、奴隷なんかは、滅多に声を出してはいけないはずよ」

「なら、この奴隷は、奴隷に認められている生存権違反を次々に犯しているわ」

「それなら、直ぐ様この奴隷を躰けなければね」

「感謝しなさい。公共機関に言い付けしないで、私達の手でやるんだから」

「ええ。それと、後で本条家の方々や私達のお父様やお母様にも言い付けなければね」

「それでは話がまとまった所で、その『物』、さつさとおやりなさいな」

「お前には、拒否権などと言う権利は……それどころか、生存権に定められている、『生きる』という権利以外は何の権利も持たないのよ」

「さあ、さつさとやりなさい。私達、そんなに長時間待てませんわよ」

「あら、ひよつとして、もしかすると……」

「本当の本当に、上品な人間の言葉が、お前みたいな奴隷には、通じないのかしら？」

以上、ほとんどの少女達の、千紗に対する侮辱であつた。

そのことに気分を良くしたのか、少女達は勝ち誇り、驕り高ぶつたように笑う。

そんな中、少女達の満足そうな、こちらを蔑む顔に囲まれた千紗の頭のどこかがブツツと音を立てて切れた。

「はあ？ あんた達、何言つてんの？ 気は確かですか？」

千紗は到つて穏やかに、それでいてどこかふざけているように聞こえる声で、言い放った。

千紗は、激情したり興奮したりした時は、先程のようにはつきりきつぱり言い放ち、見事に啖呵を切りまくるが、完全に切れてしまつと、ふざけたように、静かに、穏やかに、それでいて言葉の一言一句にすら、実に丹念に丹念に猛毒を仕込んだ毒針を地肌が見えなくなるぐらいにまでまぶし、それを伝えたいと思う人のみに、真冬の北極と南極を足して二で割らないぐらい冷たく、心を凍らせるように響く。

それでいて、関係ない人には全くそのようには聞こえない。

凄いの一言しか……出てこない。

「全く何を言つてるのかしらねえこの人達は。ほんつとくに全く意

味が解らないわ。あたしと由梨亜が、由梨亜の両親召し使い共々二年前に完全公認の親友だとも知らないでねえ。あんたらって、そんな頭もない産まれたての小鳥かしら？ それともミジンコ？ ミカヅキモ？ アメーバ？ アオミドロ？ ゾウリムシ？ ヤコウチユウ？」

千紗は、小学校の理科で習った微生物の名前を次々に挙げていったが、少女達は眉を顰めた。

「な、何よそれ。この世に存在しない、ありもしない想像上の名前を挙げて欲しくないわ」

勇気を取り戻した少女のうちの、千紗と同じ年の少女がそう言ったが、千紗は皮肉たつぷりにニコニコ笑いながら言った。

「あゝら。何言ってるの？ この微生物の名前を知らない訳？ おつかしいわねえ。あゝあ……あんた達は受験しなくてもいいし、そのまま黙ってても将来は保証されそうなんだけどねえ……最低限、義務教育の中で習った内容は覚えていて欲しいわねえ。それに、この微生物の種類を学ぶことは必修科目だったし……。ミカヅキモ、ゾウリムシ、ヤコウチユウ、アオミドロの名前を知らないのは、まあ、馬鹿過ぎだからしょうがないとしても、よ？ ミジンコとアメーバの名前ぐらいなら、ちよつと賢い幼稚園児でも知っていそうだけれどなあ？ ああ、それとも今あたしが言ったように微生物程度の頭脳しか持ち合わせていない訳？ それとも、右から聞いたことが左へ抜けて行く竹輪耳？ 三歩歩けば忘れる鶏？」

「この……！」

と、少女達が気色ばんで大声をあげようとした時、絶妙のタイミングで、その気を挫くように、後ろから声が掛かった。

「お嬢様方、どうかなされましたか？」

皆が振り返ると、そこには本条家の、それなりに高い地位で仕えているらしい、召し使いの中でも立派な服装をした男性が立っていた。

少女達は、千紗の、皇族と貴族を卑下する、あまりにも傍若無人

な態度を告げ口しようと思ったが、生憎相手の名前が分からない。

もし自分の家や、自分と同じ階級、または自分より格下の家で使えている召し使いで名前が分からなくても、

「その貴方」

などと、呼びかければいい。

だが、本条家は地球連邦の上流階級のなかではトップクラスである。

様々な分野で活躍し、辺境に当たる地球連邦なものにも拘らず、地球連邦初の他星に支店を出店したほどで、だからといってお金儲けにしか目がない悪徳商売人ではなく、そうやって稼いだお金を地震などの天変地異や自然災害があつた所に全く惜しげもなく送り、世界中にいる貧しい人達の為に医療物資や食料、学業用品を送り、様々なことに寄付をしている。

極め付けが、何十代も続く大貴族である。

なので召し使いとはいえ、本条家に仕えている以上、ただ『貴方』と、軽々しく呼べないのだ。

そういう理由があり躊躇っていた少女の間をすり抜け、千紗はその人の下へと歩み寄った。

そして、千紗は何と、半ベソをかきながら、その人に訴えたのだった。

「坂本さん。あの人たちが、何だか分からないんですけど、何かあたしに身に覚えのないことを責められているんです……」

それを聞いた少女達は呆れ返ってしまった。

（あんなに私達を侮辱しておいて、その白々しさは一体何！）

と、全員が思った。

本気で呆れ返った。

しかし、そんなことは知らない坂本は、こう慰めた。

「千紗さん、大丈夫ですよ。貴女は分からないと思いますが、彼女達には、彼女達なりの誇りという物があるのですよ」

「そうなんでしょうか？」

それで少女達はようやく千紗の名前を知ったが、それどころではなかった。

何故かと言えば、千紗はうつすらと涙ぐんでいるだけではなく、声まで涙声になってしまっているのだ。

少女達は、あまりのことに、今度は膝がヘナヘナと崩れ、土にのめり込みそうになるのを堪えなくてはならなかった。

さすがにそれだけは、貴族の誇りに賭けてもできない。

そしてこんな腹芸は、今の自分にはできそうにない、と本気で思った。

また、何故一般庶民がこんな技を持っているのか、真剣に考え込んでしまった。

身分の上下に拘らず、商売をやっていたり政界に身を置いていたりする人間は、思ってもいないことや、物事を有利に運ぶ為の駆け引きを口にする……つまり、腹芸が重要となる。

なので、ある程度は子供のうちからできるし、やらなければならぬことだが、今の千紗のように堂々と口論し、啖呵を切り、相手を窮地に追い込みながらもその仕上げとして、召し使いとはいえ、見知っているとはいえ、事情を知らない相手に涙ながらに縋りつき、それを覚られずに丸ごと信じさせるなんてことは、まだ幼い彼女らには到底無理な話である。

それどころか、そんなことができる大人もあまりいない。

しかし、二度目になるが、本当に何も知らない坂本は、少女達を追い立てた。

「そうです。さあ皆さん。由梨亜様が来られますよ」

「はい。分かりましたわ」

そういうと、何とか持ち直した少女達はツンとすまして、千紗を睨みつけながら、部屋に戻っていった。

第二章「誕生日パーティー」―2

庭から見て、ダンスフロアの一番左端は、幅が十メートルほどある階段がどっしりと構えている。

そして、その階段を上って曲がると、それぞれ五メートルほどの幅の通路があり、その使用法は先程も述べた通り、食べたり話したりする場所である。

二階の食事スペースの奥には両開きの扉があり、そこから屋敷の中に入りができるようになっていた。

三階は、大きい階段や扉がないことを除けば、二階とほぼ同じだった。

千紗が、
(由梨亜はあそこからくるのかなあ……)

と、待っていたら、階段の横に司会者が立った。

(いよいよ始まるんだ……)

と思いながら時計を見ると、丁度四時になる所だ。

(上流階級つてのは……)

千紗は頭が痛くなるような思いをしたが、何とかそれを堪え司会者の言葉を聞くことにした。

『長らくお待たせ致しまして、申し訳ございませんでした』

千紗はこれを聞き、確信した。

このように待たせるのが普通なのだと。

一般的に考えれば、やっぱり時間が掛かったのかな、と思う所だが、千紗は声の響きから、ただの社交辞令に過ぎないと分かった。

『ただ今より、本条由梨亜様の誕生日パーティーを開催致します。』
本日は八時までと、大変短い時間ですが、皆様、どうぞお楽しみください。それでは、本日の主役、由梨亜様とご家族が入場されますー！』

会場にいた全員は、ぱつと後ろを向いた。

そして、二人の召し使いにより、二階の両開きのドアが開けられ、そこから由梨亜と両親が入ってきた。

会場にいた者は皆、由梨亜の姿を、まるで光の妖精、海の精霊のようだと思った。

何故なら、由梨亜が身に纏っていたのは、まだ中学生という幼さにぴったりの無地のドレスだが、だからこそ放てる威厳という物があつたので、下にいた者達は固唾を呑んで見ているしかなかった。

扉から出てくると、三人は左側の通路を通り、階段で三人並んで下に下りてきた。

下に着くと、司会者は

『皆様、これからパーティーを始めますが、その前に、本日の主役、由梨亜様からご挨拶があります。それでは由梨亜様、お願い致します』

と言い、由梨亜に簡易拡声器を渡した。

『皆様、本日は私の誕生日パーティーにご出席戴きありがとうございます。本日は私の年齢のこともあり時間は短めとなりますが、どうぞごゆっくりお楽しみ下さい』

由梨亜はそう言い、完璧なまでに見事に貴族の令嬢に相応しい礼儀正しいお辞儀をして、父母の所へ行つた。

『えー、皆様。本日の主役は由梨亜様でございますが、由梨亜様はまだ婚約者がおられませんので、本日は由梨亜様のご両親、本条ご夫妻が最初に踊られます』

そこで、^{ようた}耀太と^{るり}瑠璃はお辞儀をして前に進み出た。

ダンスフロアの一階部分の壁は、一面は階段に、もう一面は庭に通じるガラス扉となっていたが、更にもう一面は紅色の垂れ幕に覆われ、こちら側からでは見えなくなっていた。

千紗は今までそこには一体何があるのだろうか、と考えていたが、その時に謎は解けた。

そこには最低で五十人、最高で百人ほどの楽人が控えて、と言うよりは、いつでも楽器を弾いたり吹いたりできるような体勢で待つ

ていた。

そして、指揮者が指揮棒をあげ、ワルツを弾き始めた。全員が見守る中、二人は見惚れてしまうほど優雅に一曲踊り、お辞儀をした。

拍手が一斉に沸き起こって、司会者は律儀に待っていたが、一分ほど経った所で、このままでは時間がずれまくって仕方がないと思ったのか、召し使いとしては失礼ながらも、拍手の途中で拡声器を使って大声を張り上げた。

『えー、皆様！ お静かに！ お静かに願います！ 皆様！！』

そして、ようやく静まった所で、司会者は司会の仕事を再開した。『皆様。ただ今、グラスをお配りしておりますので、少々お待ち下さい』

この言葉に千紗が失礼にならない程度に辺りを見回すと、カートを押している召し使い達が、大人にはシャンパンを、未成年やお酒の飲めない人にはジュースを配っていた。

『お飲み物が皆様の手に渡られたら乾杯を致します。それが終わられたら七時半まで自由でございます。楽人達は、基本的にずっと演奏を続けておりますので踊られていても構いませんし、皆様が今おられる所の後ろや二階や三階、お庭などで飲食をなさってもかまいません。しかし、七時半までにはここに今のようにお集まり下さい』

司会者がそうして話している間に、全ての人にグラスが渡った。

『それでは、皆さんにグラスが渡ったようですね。それでは、由梨亜様、お願い致します』

由梨亜が前に出て、左手に司会者から手渡された簡易拡声器、右手にグラスを持つと乾杯の音頭をとった。

『皆様、今宵は十分に楽しんで下さい。乾杯！』

「乾杯！」

と、皆が復唱し、一斉に飲み物を飲み干した。

そこから、空気は一気に砕けた物になり、それぞれ談笑しながら、食べ物を食べたり、ダンスフロアに出て行ったりした。

楽人達は、先程とは全員入れ替わり、ワルツを演奏し始めた。

千紗は、乾杯が終わってからすぐ由梨亜の元へと向かおうとしたが、先程の少女達がそうさせなかった。

「生意気よ」

と、小声で言うのと、さりげなく数人ずつ固まって散らばり、千紗が由梨亜の元に向かうのを阻止したのだった。

千紗は、そのせいだけではなかったが、由梨亜の元に向かうことを諦めざるを得なかった。

何故なら、少年達三十人のうち五人が由梨亜にダンスの申し込みをしていたからだ。

残りの二十五人は、そこら中に散らばった少女達を値踏みし、ダンスの申し込みをしていた。

ちなみに言うと、千紗にその目を向ける少年はただの一人もいなかった。

千紗は食事が並べてある所に行くと、食べ物がある程度取り、庭に行って食べ始めた。

千紗は、なるべくゆっくりと食事を摂り、一番建物から離れて座って、しかも二、三回ほどお替りまでしたが、五時半頃にはもう全て食べ終わり、お腹も一杯になってしまった。

そこで、仕様がなから、中に入って優雅な貴族のダンスでも眺めていようと中へ入った。

そして、ふと

（由梨亜って、まだ踊ってるのかな……？）

と思い、踊っている人の合間を縫って視線を巡らすと由梨亜がまだ踊っているのが見えた。

だが、相手の少年は先程の五人ではない。

一曲踊る分と、パートナーを変えたり、楽人が変わったりする為に曲の間に空く時間が、合計でおよそ十分は掛かることを考えると、時間的に見て今はだいたい九曲目なのだから、九人目となる。

千紗には由梨亜のニコニコとした笑顔が見えたが、その笑顔は他

の人が見れば普通にニコニコ笑っているなあと思うかもしれないが、千紗には由梨亜が疲れているのが見て取れた。

（由梨亜、よくそんなにできるなあ……）

と、思いながら、由梨亜が踊るのを眺めていた。

曲が終わると、由梨亜は相手と別れたが、また次の相手が来て踊った。

（由梨亜の相手をするぐらいの人が、このパーティーに最低十人……）

千紗はそう思うと目眩がしてきた。

本条家は上流階級の中ではトップクラス。

本条家とほぼ同等の上流階級の家はそれなりにあるが、敵対する家を除くとその半分以上になる。

その中でも、由梨亜と釣り合う年齢の子息がいるのは、更に半分……。

それに、いくら初めてとは言え、一人娘とは言え、このパーティーは『本条家の一人娘、本条由梨亜の誕生日パーティー』である。

なので、そんなに招いた、由梨亜の父、本条グループの再頂点に立つ本条耀太に対する思いが、感心を通り越して、呆れた物に変わってしまった。

由梨亜が踊るのは見ていて飽きず、飲み物を飲みながら一時間ほど見続けてしまった。

そして十五人目と踊り終わった後、ようやく由梨亜はダンスの相手から解放された。

そして、千紗は今度こそ由梨亜の所へ行った。

今回は、邪魔する少女達はみんな踊ってしまっていて、邪魔ができなかった。

ちなみに、その少女達は自分に申し込んで来た少年達と踊っている、

「しまった！」

と、思い、すぐに駆け寄って間に割って入れないことを悔やんだ

のだ。

「由梨亜！」

千紗は、由梨亜が解放されるとすぐに呼びかけた。

由梨亜もすぐに気付いて、

「千紗！」

と、返した。

「由梨亜……大丈夫？」

と、千紗は思わず声をかけてしまった。

何故なら由梨亜はとても疲れ切っていて、見ているほうが疲れるような様子だったからだ。

「もう駄目、絶対に踊れないわ。十五人と踊ったんだもの。これ以上踊れて言われたって脚が疲れていて無理だし、お腹もペコペコよ。絶対に踊らなきゃいけない義理や縁のある人とはもう踊り終わったし、これ以上申し込まれても断れるし私自身断る気にいるからもう大丈夫！ 後はゆっくり休めるのよ！」

「じゃあ、お庭で夕ご飯食べなよ！ あたしはもう食べ終わっちゃったから飲み物でも飲んでさ！ 丁度いい穴場があるんだ。あんまり周りから見えないから、内緒話とかするのにすっごい丁度いいの！」

「そうなんだ。じゃあ、そこで食べたり飲んだりしよっか」

そして、由梨亜は一人で食べ切れるのかと思うほど沢山食べ物も盛った二皿のお皿が乗ったカート、千紗は大きめのコップを二つに更に大きな入れ物に入った飲み物が二本乗ったカートを押して、千紗の言った穴場——つまり、千紗が食事をした所に向かった。

そして、食事をしながら、他愛のない話をしていた。

つまり、こんなに大きなパーティーを開くと一体どれくらいお金が掛かるのだろうとか。

こんなに人が来ていたら、顔も名前も覚えていられないとか。

夏休みの宿題が、どれくらい終わったとか。

部活のこととか。

この前やった、百怪談で見つけた、何の変哲もない日記帳のこととか。

そして、由梨亜が食べ終わると、千紗は本題に入った。

「由梨亜、あのね、ここに招待された女の子達いるでしょう？ その子達に言われたの。あたしと由梨亜を近付けさせないって」

そして、千紗はさっきの少女達との言い争いの内容をほとんど正確に、しっかりと伝えた。

もしその少女達が千紗の言うことを聞いたら、真っ蒼になって逃げ出すこと間違いなしだろう。

何故なら、第一に由梨亜にそんなことを聞かれたら、今後社交界での彼女達に対する由梨亜の心証が悪くなるだろうし、第二に彼女達は、千紗のようにそこまで正確に会話の内容を復唱することは全くもって必要のないことであるし、実践する機会すらないので、そのこと自体に恐怖を覚えるだろうからである。

そして、それを聞いた由梨亜は、思わず笑ってしまった。

「千紗……い、いくら何でも、て、天皇陛下と、物乞いや奴隷を……同列に、並べるなんてっ……！ スケール大きい！ そんなの誰も思いつきやしないよ！ さっすが千紗！」

由梨亜は時間を掛けてようやくそこまで言っていると、身体をくの字に曲げ、声を殺して大爆笑した。

「由梨亜……笑うか話すかどっちかにして……」

千紗のそう呆れ返った意見は、千紗にしては珍しくしっかりした物で、周りからの賛成も得られそうだった。

「まあ、でも彼女達も言い過ぎね。半人やら野獣やら下等生物やら。それに、奴隷だなんて……一体何千年前の話よ。今のこの世の中に、奴隷なんている訳ないのにね」

「ん」。でもあたし、あいつらが『奴隷に生存権がある』って言う

たことに驚いたな。だって生存権って、『健康で文化的な最低限の生活を営む権利』でしょ？ あの人達の、その前後の発言とは矛盾してると思うんだけどなあ。それに、人権はないのに生存権はあるって……矛盾の塊じゃない」

「まあ、知らなかったんじゃないかしら。あの人達は無知な貴族の典型例だからねえ。知らなくっても不思議じゃないわ。あの人達、生存権をただの『生きる権利』とでも勘違いしてたんじゃないかしら。でも……」

そういうと、由梨亜はクスツと笑った。

「千紗が切れるなんて……よっぽど頭が悪い上に口も悪いのね。それに、『貴族』という身分でガチガチに固まっている、『偏屈婆あ』の予備軍よ」

そう断言すると、由梨亜はヒソヒソ声で千紗に話した。

「ねえ、千紗。相談したいことがあるの」

由梨亜のさつきとは打って変わって真剣な顔と口調に、千紗も半分笑っていた顔を引き締め、千紗も真剣に問い返した。

「何、由梨亜？」

「あのね……夏休みに入る一ヶ月くらい前、席替えがあつたでしょ？ その時、私の隣の席、藤咲香麻君ふじさきこうまになったの、覚えてる？ それでね、話しかけられた時、笑いかけられた時……。胸が苦しくなつて、ドキドキしたの。ねえ、千紗。これって、一体何？ すっごく、辛くて……」

「由梨亜……」

千紗は、思わず呆れ返ってしまった。

由梨亜が『お嬢様』だということは、千紗も重々承知していたが、ここまでの箱入りだったとは――。

「ねえ、千紗、教えて」

「由梨亜……それはねえ……貴女は香麻君のことが好きなのよ」

「そ、う……なの？」

「由梨亜、初恋してたことないの？ って言うか、たとえ初恋が

まだだったとしても、よ？　そういうの、小説とかドラマとかアニメとか漫画とか……そういうので、知らなかったの？」

千紗は、呆れてしまった。

そして、

（まさか……そんな分かりきったことを訊くなんて……）

と思い、思わず溜息が出てしまった。

「ええ。まだなの。と、言うよりは、恋って物——好きっていうことが、よく分らないのよ」

「そうなんだ……。ところで、由梨亜」

千紗は、先程の重い溜息とは打って変わって、明るい口調で言った。

「その、あたしがあげたアクセサリー、全部付けててくれたんだあ」
千紗は、感激したように、続けた。

「由梨亜、やっぱりお嬢様だからさ、アクセサリーとかも一杯あるでしょう？　それに、いくらでも気に入った物はバンバン買うことができるし……だから、新しいドレスを買ったとしても、それに合わせてアクセサリーも買ったりすると思ったから、あたしの作ったのなんて、付けないかと思ってたよ。精々が、持って来るくらいでそれに、たとえ付けることがあっても、こういう大きいのでは、絶対に付けないと思ってた。なのに……」

「もっつ！　千紗ったら、馬鹿じゃないの？　折角千紗が私の誕生日の為に、手作りで作ってくれたんだよ？　そんな大事な一生の宝物、私が付けない訳ないじゃない！　それに……」

と言うと、千紗の方を見た。

そして、にっこり笑って言った。

「千紗だって、私が作ったの、付けてくれてるじゃない！」

「それこそ、その言葉そっくり返すよ！」

二人でひとしきり笑った後、七時三十分が近づいてきたので、会場に戻って行ったのだった……。

第三章「婚約者」― 1

由梨亜は、とってもご機嫌だった。

日記帳は先輩の悪戯だと思っていながらも、先輩に直接訊ねることはできなくて少し苛々していたが、自分が初恋と言う物を体験できたことが分かり、千紗に貰った誕生日プレゼントのアクセサリーが気に入ったこともあり、その日はにこにこしっぱなしだった。

ある、耀太からの報告を聞くまでは。

その翌日、由梨亜が部活に行つて帰ってきた午後のことだった。

「由梨亜、話がある。ちょっと来てくれないか」

そう耀太に言われ、由梨亜は客を迎える応接間へと向かった。

由梨亜がそこではらく待っていると、鈴南すずなが誰かを連れて来た。「失礼致します。どうぞ、こちらへ。由梨亜お嬢様がお待ちでございます」

「失礼します」

と、由梨亜と歳の近そうな少年が三人……。

由梨亜が呆気にと取られていると、最初に入つて来た、どこか気取っている少年が、取つて付けたような微笑を顔に浮かべ、挨拶した。「初めまして。僕は眞湖グループ第百三代総帥眞湖翔暮まいくの三男、眞湖聡めいと申します。歳は十六です。貴女のような素晴らしい女性と知り逢えた僕はかなりの果報者でしょう。どうぞ僕のことをお忘れなきようお願いします。そしてこれから宜しくお願い致します」

と、昨日の由梨亜の誕生日パーティーで一緒に踊つたので初対面ではないものの、たったの二回目の由梨亜を口説き優雅に一礼し下がると、厳つく頑丈な身体付きの少年が挨拶した。

「初めまして。僕は蔡条グループ第百十四代総帥蔡条瑛彦えいひこの弟の三

男、蔡条護まつろと言います。僕の二人の兄は子供のいない伯父の為に養子となり、一番上の兄は蔡条グループの跡取りとなりました。その為、僕がこのような晴れがましい榮譽に浴することとなり、とても光栄に存じます。歳は十五です。宜しく願います」

見た目とは大変裏腹に、かなり優しい口調で（演技かも知れないが）自己紹介と自分の宣伝を行うと、サツと一礼し、今度は護とは対照的な、あまり筋肉もついておらず、痩せていて、少し青白い顔で眼鏡を掛けた、学者タイプの少年が挨拶をした。

「初めまして。その、僕は紺城こんじょうグループ第九十八代総帥、紺城智早ちはやの四男で、紺城早宮さみやと申します。歳は、その、由梨亜さんと同い年で十三です。このような大役が、僕に務まるかどうかは分かりませんが、精一杯頑張るつもりですので、宜しく願います」

そう早宮が言い、頭を下げて一歩下がり、由梨亜は他の二人と並んだ三人を、眺めながら、

（さつきから『果報者』やら、『晴れがましい榮譽に浴する』やら、『大役』やら……一体、何を言っているのかしら……？）

と思い、由梨亜は自分の隣に立っている耀太を見上げ、訊ねた。

「お父様……この方達……は？ 何故、今日家にいらっしゃるのでしょうか？」

「由梨亜、この方達は、由梨亜の婚約者候補だ」

「……………はいっ？」

裏返った声で、由梨亜は言った。

たっぷり、十秒間の沈黙だった。

「由梨亜、お前ももう中学生だ。婚約者を決めなくてはならない。今はまだ決まなくてもよい。だが最終的に、遅くても大学に入学する時に決める。時間はまだたっぷりあるからな。但し、この中の三人から、絶対に選べ」

耀太はそう由梨亜に言うと、

「さあ、今日は対面だけだからな。今後は、毎週土曜日の午後か日曜日に来てくれ。それでは、ありがとう。また来週」

そう言うと、耀太は

「鈴南、聡殿、護殿、早宮殿をお送りしてくれ」

と言い、部屋を去り、聡、護、早宮の三人は、

「それでは、由梨亜さん。また来週お会いしましょう」

とそれぞれ言い、鈴南に連れられて出て行った。

皆が部屋からいなくなった途端、由梨亜は近くのソファ―に座り込んでしまった。

（そんな……せっかく、初恋ができたって言うのに……まあ、私は本条家の跡取り娘で、婚約者候補の存在がいるってことを忘れていた私も悪かったんだけど……）

そう思うと、もうやる気がなくなってしまふ。

（せめて、携帯端末で千紗に連絡とってこのこと伝えないと……って嗚呼！ 私、端末は内線用しか持ってないんだっ！ 千紗に外線で連絡しようにも、鈴南とかが見張ってる中で、どうしたらあんなことを言えるっていうの！？ 嗚呼、もう……無理だよ……）
しかも、夏休み明けでもある、五日後の月曜日の二十四日にならなければ、部活すらない。

こうなってしまうては家から出ることすらも怪しまれ、出られないので、千紗の家にも行けない。

我慢して、耐えるしかなかった。

五日後、由梨亜は教室に行くと、真っ先に千紗に声を掛けた。

「ねえ、千紗。ちょっと……いいかな？」

「どうしたの？ 由梨亜」

「ちょっと、ここだと話にくい話だから……昼休みに、いい？」

「うん、別にいいよ？ で、どこで話せばいいかな？ 教室なんか論外だし……校庭だと、運動部とかが昼練しに来たり、遊んだりする人がいるし、食堂も……」

「だったら、屋上とか……どう？ 屋上の、東屋みたいになってる、緑で囲まれていて、でもベンチのないとこ……」

「うん。わかった。じゃあ、ついでお昼屋上で食べない？ お昼食べながら話すような内容じゃなかったら、食べ終わってからでもいいし」

「ええ……そうね」

「じゃあ、あたし先生に許可取ってくるね」

「うん……お願い」

そう言った由梨亜の姿は、頼りなく、儚げで、長く由梨亜という千紗には、何か思い悩んでいるということが分かった。

千紗は珍しく眉根を寄せて考え、結局答えは出なかったが、昼休みになれば分かることだ。

千紗は難しいことを考えるのを放棄し、とりあえず授業に集中することにした。

昼休み、二人は朝約束したように、屋上で食べていたが……二人とも無言で食べていた。

食べ終わった後、千紗は由梨亜に言った。

「ねえ、由梨亜。何、あたしに教室じゃあ言えないことって？ 何のことなの？ お弁当も食べ終わったし、言って？」

「うん……。あのね、千紗。五日前、あの私の誕生日パーティーの次の日、お父様が、十六歳で、眞湖家の三男の聡さん、十五歳の、蔡条家の会長の弟の息子さんと、二人のお兄さんがその伯父さんの養子となった三男の護さん、十三歳で紺城家の四男の早宮さんが……私の、ね……婚約者候補として、来たの。それで、高校を卒業してから大学に入る前の冬休みの間に、その三人の中から、婚約者を決めるって。ほんと、私……」

そう言つと、由梨亜は涙ぐんだ。

ちなみに、この全世界では、基本的に新年を迎えると同時に進級することになっていて、地球連邦も同じだ。

「あ……ちょっと、いい？ 由梨亜」

「何……？ 千紗……」

「あの、さ…… 由梨亜、まさか三人と結婚するわけじゃないでしょ？」

「うん……そうだけど……？ 何当たり前のこと訊いてるの？」

「ってことはさ…… 必ず二人は選ばれない訳でしょ？」

「うん」

「選ばれなかったら、どうするの？」

「それは、ちゃんと男の跡継ぎがいる場合の女の子、または私みたいに女の子しかないけどその子に姉がいる子とか、とにかく跡継ぎじゃない女の子と結婚するの。まあ、相手が一般庶民の漫画みたいな大恋愛もあるけど、確率としては、一パーセント未満ね。で、私みたいな跡継ぎ娘と婚約する場合、聡さん、護さん、早宮さんにとって、私は『第一婚約者』なの。で、さっき言った、跡継ぎじゃない女の子が『第二婚約者』。私が結婚した人の第二婚約者は結婚できないけど、将来にはいくつか方法はあるわ。まず、行かず後家になって一生屋敷に残る道。だけど、その道を選ぶ人は非常に少ないわ。第一、特別な理由がない限り親兄弟が追い出すわね。余程その家に役立つような特殊能力を持っていたり、とても外にもお嫁に出したりできないような人じゃない限り」

由梨亜はそう言っただけを疎めた。

「あと、自分の興味の高い物とか、自分に向いている分野を、専門学校とか大学とかで技術を手にいれて、庶民として一人暮らししながら働くの。それと、自分の家より身分の高い家に仕えることね。私の家で働いている女性は、ほとんどそうよ。鈴南だってそう。男性で働いている人は、特に次男が多いわね。何て言っただって、長男に子供ができずにもしものことがあれば、その後を継ぐのは次男だもの。他家にお婿に出したら、その結婚した人の子供がすっごい迷

惑を被るわ。だけど、他家に仕えさせればその家との縁もできるし、いざとなったら仕事を辞めさせて家を継がせることもできる。

お婿に出すよりかなりお得よ。もしくは、男女両方ともだけど、一般庶民と結婚する場合もあるわ。確率的に多いのは、他家に使える、一般庶民と結婚、独り立ちする、行かず後家の順番ね」

「へえ……そんなことできるんだあ」

「まあ、結婚の場合、九十九・九パーセント政略結婚なんだけどね」「はっ？」

千紗は、思わず訊き返してしまった。

貴族との結婚なら、政略結婚なはずだが、一般庶民との結婚なら、該当しないはずなのだ。

一体、何故――。

「一般庶民と言っても、本当は違うの」

「……え？」

「一般庶民って言っても、それなりに力はあるけどまだ一代目、二代目の成り上がりとか、お金をがっぽり溜めて寄付も何もせず富豪と呼ばれる家、それに政治家……その人達も貴族と庶民の区分で見れば庶民に入るから、政略結婚で庶民と結婚なのよ。それに、たとえ独り立ちしても、結局働く所は、自分の親とか親戚とかの会社や、その会社と繋がりがあある会社。そしていざ結婚するとなっても、その会社の有力者と結婚してその伴侶が自らの家を裏切らないように……もしその伴侶が裏切ろうとしたら、自らの生命を懸けてそれを止める……見張り役。それが敵対する会社、同じだけの力を持った会社……もしかしたら、将来自分達に危害を加えるかもしれない会社の人と、事実上の人質として結婚するわ」

由梨亜はそう言うと、悲しげに目を伏せた。

「それに、この人と結婚したいと思って結婚する人は、ほとんどいない。私達は、そう言う風に育てられてないもの。私だけが例外な訳で……。まあ、他にもそういう人はいるかもしれないけど、その結婚したいと思っている相手がその家の条件に合わない人だったら、

絶対に認めないわ。何があっても阻止しようとする。まあ、その条件に合わない人と駆け落ちしたらひとまず諦めるけどな。でも……もし、子供が産まれたら……最悪よ」

「えっ……何で？」

（駆け落ちしたら諦めるのに、子供が産まれたら最悪？　つまり、諦めないってこと？　普通、逆なんじゃないの？）

千紗は、全く分からなかった。

「子供が産まれたことは、戸籍を見れば分かるもの。どんなに隠そうとしても。役所の人間も、貴族には逆らえないでしょうね。そして、どこにいるのか見つけ出したら、その子供は実の祖父母の命令によって、親から誘拐される。そして、その両親は二度と子供に会えないまま一生どこかで働く。時にはその二人すら引き離すこともあるわ。でも……でもね、もし見つけれなくて捕まえられなかったら……そして子供がある程度大きくなったら、認めてくれるの。そして自らの娘、息子、孫として認められて、様々な便宜を図ってくれるわ」

「そうなんだ……でも、由梨亜は……」

「ええ。私には、できないわ」

そう言った由梨亜の顔には、諦めの色が濃くあった。

「私には兄弟姉妹がいないし、父方の叔父さんや大叔父さんなんていないから、他に直系の跡継ぎはいないのよ。この本条家の跡を継げるのは、この私、ただ一人だけ。たとえ駆け落ちしたとしても、捕まって、家に閉じ込められて、一生、自由に外には出れなくなる……」

由梨亜の疲れたような、諦めたような声を聞き、千紗は胸が痛くなつた。

「でも、諦めちゃ駄目！」

千紗は激しく、強く言い放った。

「千、紗……？」

思わず呆気にとられる由梨亜を尻目に、千紗は立ち上がって言う

た。

「あたしは、人を好きになるって、そういう物じゃないと思う！勝手に決められて、好きでもない奴と無理やり結婚させられて、『後からいくらでも好きになれる』だなんて勝手なお題目を、さもあり得そうに言い切って……そんなの、生き物のすることじゃないよ！そして、そんなことをさせる奴は、絶対に生き物の生き方を知らないし、知ろうともしない！少なくとも、普通の生き物の心なんか持っていない！由梨亜、諦めたら駄目だよ！絶対に！」

「千紗……そんなことよりも……」

「何?! そんなことって!？」

「お弁当箱」

「……オベントウバコ？」

千紗は氣勢を削がれ、ぽかんと間が抜けたように、オウム返しに言ってしまった。

「お弁当先に食べ終わってて良かったね。お弁当箱、膝から落ちて、転がっちゃってるよ」

「ちよつ……ちよつと、由梨亜！気付いてるなら早く言ってよ！

あゝあ、お弁当箱が砂まみれ……お母さんになんて言おう……」

その呆然とした声に、笑いを噛み殺しながら、苦笑するように、たしなめるように言った。

「千紗、何かを乗つけてそのまま立ったらどうなる？それは見事に従順に、重力従って落下するでしょうが。それに人の話に途中で割り込むだなんて、人としての礼儀に反するわ」

「あつ……そつか……」

「まったくもう。千紗ときたら。あつそうだ」

由梨亜は、なにやら鞆をゴソゴソと探った。

「えゝつと……あつた！はい、千紗。遅れてごめんね。これ、もう書いてただけど、あの婚約者候補のことがあって、お父様と鈴南達の目が厳しかったから、外に出にくくて。ごめんね」

「そつか……ありがとう、由梨亜。でもさあ、この交換日記帳って、

本当に先輩達の悪戯なのかなあ？」

「えっ？」

「だってこれをするようになってから、由梨亜が変な視線感じたり、婚約者候補がいきなり出てきたりしたんでしょう？ 何の前触れも予兆もなしに。それって、変だよ。そんなの、いつだっていいのに。これは、偶然って言うの？ もしかして、何かの力が働いているんじゃないのかな？」

「ま、まさか……ただの偶然よ。千紗らしくないわ。全然、科学的じゃないわよ」

「……だけど、きっと何かあると思う。だって、これ、変だよ。それに……悪戯ごときで、先輩達があたし達をつけるとは思えないし」「うーん……そんなこと言われても、ねえ……じゃ、今日の部活の時、先輩に問い質してみましよう？ そうすれば、私の勘違いだったって証明されるかも知れないし」

由梨亜が明るく言った途端、女性の澄んだ声が……ただし、男のような口調で、二人の耳に届いた。

『よく、分かった』

「えっ……」

「嘘……」

二人が驚いたのも、無理はない。

何故なら、その声は、千紗が持っていた日記帳の中から聞こえてきたのだから。

「日記帳が……喋ったのかしら……」

「ま、まさか……あり得ないよ……もしかして、先輩達……こんなのに、小型スピーカー付けてた、とか……？ あ、あと、盗聴器……？」

あまりの出来事に現実とは思えず、啞然呆然としている二人を余所に、交換日記帳は眩しい金色に輝いている。

『お前達の望みを叶えよう。さあ、行くのだ。自由な、千年前の世界へ……！ お前達の、真の姿を取り戻す為に……！』

（千年前……確か、その時身分同一化運動が起こって、成功して……一時的に……確か二百年間、身分の同一化運動に成功したから、世界は身分社会じゃなくて完全な学歴社会になって……身分の面では、確かに……確かに、自由で！）

そこまで、千紗が一瞬のうちに考えた途端、直視すれば失明してしまうかも知れないほどの、眩い光が駆け抜け……。

そして、その光がやつのことで去り、目を瞑ったりしなくても見えるようになった屋上には、何と、由梨亜と千紗の姿が、跡形もなく消えていた。

しかも、その光に気付いた人物は、誰一人としていなかった。

二人は空間と空間を繋いでいる、『何だかよく分からないトンネル』にいた。

と言っても、正確には、二人がしっかりと手を握り合ったまま、矛盾しているとは思うが、無重力に似た足元の心許なさを感じたまま、下に向かって落下しているのだが。

周りは一体何色と言ったらいいのか……それとも言葉で言い表せないのか……様々な色が輝き、けれど混ざって汚い色にはならず、色が流れていると言う表現がぴったりだ。

そんな中を下に降りていくと、下にしっかりと固定された色が――いや、景色がある。

そして、そこに近づくほど、キーンとした音が、強くなり、強くなり……そして、様々な色が輝くトンネルから吐き出される瞬間、二人はあまりにも大きな、大きすぎる音によって、気絶してしまった。

気絶してしまうその瞬間の少し前、千紗の耳には、鈴を振るような、高く澄んだ、綺麗で不思議な声が聴こえて来た。

『何も、怯えることは御座いませぬ。貴女とその友の、乱れ絡ま

り合った運命を、元に戻すだけなのですから……。貴女にとっては、とても、とても辛いことでは御座いますが、それが——貴女の身体で感じ、体験した、それだけが、真実で御座います。元に戻るだけなのですから……。落ち着かれて、全てを、御受け入れ下さいませ……」

（何言ってるの？ この人。あたしと由梨亜の絡まり合った運命って、一体……何？ 何なの？ 元に戻るって？ 受け入れるって？ たって、何を受け入れればいいの？ もう……もう、訳分かんないよ！ って言うか、何この敬語！ こんな敬語、普通は使わないでしょ！）

千紗は少々変なことを考えながらだったが、由梨亜と千紗は、二人にとっては異世界としか言いようのない時代に、飛ばされていた。生活習慣は勿論、言語までもが違う時代へと――。

第三章「婚約者」―2

「千紗……千紗！」

珍しい由梨亜の慌てているような、急かすような声が聞こえ、千紗はこの時代で目覚めた。

「由梨……亜？　ここって、一体……」

「分からないの。私もたった今日が覚めた所で……」

と、由梨亜は泣きそうな顔で言った。

そこへ、ドアを開き、一人の女性が入って来た。

「――？」

「えっ？」

「何て言ったの？　解る？　由梨亜」

「いいえ。私にも、さっぱり……」

「――？　――？　――？」

「千紗、私、この女の人は何て言っているのか確実に答えられないけど、大体の意味は解ったわ」

そう言っつて溜息をついてから、由梨亜は言った。

「『すみません。あの、何て言っただんですか？　もしかして言葉が解らないんですか？　私にも、何て言ってるのかさっぱり解らないんですけど……』って」

そして、そこにいた女性は、また何やらよく解らない言葉を発し、いきなりドアを開けて、飛び出して行った。

千紗は、まだ目覚めてからあまり時間が経っていない為、どこかぼんやりとしていたが、由梨亜はそれよりも前に目が覚めていたのだ、頭が少しはつきりしていた為、何とかパニックになりそうな気持ちを抑えてから周りの様子を観察した。

そこは全面白い壁になっている小さな部屋。

出入り口の所には水道があつて、手が洗えるようになっていた。

他には、とつてもとつても古い、小さな冷蔵庫と思われる物、あ

とは、歴史の授業で習った、だいたい千年ぐらい前まで使われていた、テレビと言う情報を得る為の端末、二人の寝ている、二つのベッド……。

辺りは、薬臭いような、消毒液の臭いがして……。

そこまで考えた途端、直感的に、由梨亜にはここがどこだか分かった。

「千紗、ここ病院よ」

「えっ？　でも病院の普通病棟って昼間は階全部が一繋がりで、場合によって隔壁装置を作動させる明るい場所でしょ？　ここは何だか暗い雰囲気だし、ここじゃあ治る病気も治らないよ」

「ええ。だから、ここはそんな装置もなくて、そんな分かりきったことも分からない……大分昔の、時代。それも、何百年前、って言う……」

「ここって、やっぱり……千年前の世界なのかな……」

そこまで言った時、さっきの女性——そして、ここが病院だとすると、恐らく、看護師と思われる女性が、様々な人を連れて来た。

その人達は十人ほどだった。

そして、恐らくその人達の母国語であるような、先程の女性とはまた違っている言葉を喋っていたが、ほとんど分からなかった。

だが、中に一人、言葉が少し解る人がいた。

「貴女は？」

と訊いて来たのだ。

彼は地球連邦の古代語を喋っていたが、千紗はその古代語で、喜んで答えた。

千紗と由梨亜は、中学校に入ってから選択授業で、古代語を習っていたのだ。

だから、簡単な会話なら、できるようになっていた。

「あたし、貴方の言っていることが解るわ！　あたしは彩音千紗^{さいいん}。十三歳よ。彼女は本条由梨亜^{ほんじょう}。十三歳」

「貴女は、彩音……千紗？　そちらは本条……由梨亜？　そして、

十三歳？　そして、何故——？」

その後、その人が喋った言葉は、まだ古代語を習って間もない二人にとって、少ししか意味の解らない物だった。

その二日後、二人がその病院らしき所で、図書室に行った。

そこには様々な本があったが、ほとんどが読めない物だった。

やはり、少しなら意味の解る本はあったが、まだ習っていない単語や文法が大量にあり、よく意味が解らなかったが、大抵の発行年は二千百年代頃だった。

そして、その中から、千紗がある物を発見した。

「ねえ、由梨亜。これって……」

呆然としたような千紗の口調に、由梨亜は首を傾げながら言った。
「どうしたの？」

由梨亜が駆け寄り、千紗の手に持っていた物を見た途端、啞然としてしまった。

何と、あの日記帳が千紗の手に載っているのだ。

「な、何、これ……一体、何がどうなっているの？」

由梨亜がそう言った途端、千紗の手の上にあった日記帳から眩しい銀色の光が溢れ、千紗と由梨亜は思わず目を瞑ってしまった。

そしてその光が去った後、看護師がやって来た。

「あら、ここにいたの？」

（えっ？）

二人はとても驚いた。

今までは何を言っているのか解らなかったのだが、今は何を言っているのか解るのだった。

「もうそろそろ検査の時間だから戻りなさい……」って、ニホンゴは通じないんだった。エイゴも初歩的な物しか通じないし……えっと、私と」

と言い、右手の人差し指で自分を指すと、

「貴女達二人が」

と言い、左手の人差し指と中指で由梨亜と千紗を指し、

「一緒に行く」

と言つて、その三本の指をくつつけ、移動させた。

由梨亜と千紗は、

「分かりました」

と言つたが、相手が首を傾げたので地球連邦の古代語で言い直した。

すると、その看護師は、

「ほんと、何言っているんだか解らないわ。名前を言った言葉とか、こつちに話し掛けてくる時に喋っている言葉はエイゴだけど、名前はニホンジンっぽいし……でも、二人で話している言葉はニホンゴどころじゃなくって全然聞き覚えもないし、意味も解らないし……」
と、独り言を言った。

だが、千紗はその話の内容でもなく、先程の異常現象のことでもなく、別のことを考えていた。

（エイゴ……って、何？ ニホンゴ？ ニホンジン？ 意味解らないよ。でも、あたし達が話しかけられて少し解った言葉……あれは『エイゴ』だったのね。そして、彼女が話している言葉は『ニホンゴ』……）

そして、由梨亜と千紗は一緒に病室に向かった。

あの、交換日記帳を抱えたまま……。

検査が終わった後、二人はその交換日記帳を開いた。

自分達がこんな所に来た理由を知る為に。

その交換日記帳には、二人が書いた内容もなく、二人が期待したような内容もなかった。

しかし、実際書かれていた内容は、読まなければ良かったと思うほど、嫌な物だった。

《我ハ コノノートニ 閉ジ込メラレシ者ナリ

面白半分ニ フザケタ願イヲスル者ニ 禍アレ 呪アレ

真剣ナ思イヲ 抱エシ者ガ コノノートヲ手ニスル時ニハ 祝福ヲ

我ハ 知ッテイル

コレヲ手ニシ 我ガ祝福ヲ与エル存在ト ソノ者ガ望ムコトヲ

故ニ 我ハ一時的ナ物ナレド ソレヲ授ケヨウ

差別ノナイ 世界ヲ

ソシテ》

そこで、交換日記帳の文章は、途切れていた。
と言うより、恐ろしいことに、血に汚れて見えなくなっていた。
そしてページをめくると、そこには、ぽつりと、まるで切望する
かのように続きがあった。

《我ハ……望ム

其方達ノ 真ノ幸セヲ

我ハ コノノートニ 吸収サレタ生命

ナレド 未ダ消滅シテオラヌ 生命ナリ

ソノ生命ガ 消工失セルヨウナ危険ヲ 冒ソウトモ 我ハ 其方

達ヲ護ロウ

永遠ニ——永久ニ》

ここは……恐らく、北の方なのか、山に近いのか——もしかした

らその両方なのかも知れないが、あと三、四日後にようやく十月なのに、窓からは、紅葉した落葉樹が見える。

その樹を見るときもなしに眺めながら、二人は考え込んでいた。

このノートに書かれていた内容を。

その一週間後、由梨亜と千紗がこの時代……つまり、千年前の時代に来た衝撃でできた打ち身、痣、捻挫、打撲などの怪我が治ると、修道院兼孤児院の、『香封畏院^{かほういん}』に入れられた。

この時代では、小学校を卒業する十二歳で、小成人式と言う物を受ける。

それは、小学校を卒業して、中学校に入学してもやっていけるかどうかをテストする物で、その段階は、特級から八級と分かれ、その段階によって扱いが違う。

例えば、特級ならばどの学校にも入れるが、その下に行くに連れて、学校の選択肢がどんどん減っていくのだ。

つまり、下に行けば行くほど将来や進路の選択の幅が狭められてしまうという制度である。

なので、産まれ持った身分は、社会では

「フン、そんな何になるのさ」

と、粗雑に扱われるが、逆に有名な学校を卒業すると、

「ああ、あの学校の卒業生ね！」

と、随分大事に扱われ、場合によっては、様々なことに掛かる料金が優遇される場合もある。

また、会社などの就職も、かなり有利になる。

また、あまり有名でない学校の場合は、差別も何もない。

なので、学力でそこにいったという人だけではなく、もっと上に行けるような学力を持った人——そう、随分優遇されるような学校に行ける人でも、その特別扱いが嫌だと言って、わざとレベルの低

い学校に入る人もいた。

そして、そういう学校にも入れなかった人達は、優秀な学校に行けた人とは完璧に逆の扱いになる。

なので、身分による差別はないものの学力や学歴による差別があり、賢い人物が頭の悪い——賢い人に言わせれば、愚者に対する軽蔑の思いは、千年後の時代で、身分の高い人物が身分の低い人物に対して抱える軽蔑の思いと比べると、圧倒的にこちらの方がとても強いのだ。

由梨亜と千紗の場合は、この言葉が一切解らず（と思われる）で、喋れないので（これは本当）、この小成人式は受けられない。そして、この小成人式を受けられなければ、本当の成人式を受けることができない。

なので、大人になっても就職できない。

だから、このような修道院で、一生働いて生涯を終えることだろうと、思われていた。

さて、香封畏院に入った由梨亜と千紗だったが、意外と人数がいて、百人ほどの規模の修道院だった。

だが……その修道院の過ごし方が、あまりにも過酷で、激しく辛い物なのだ。

何と、平日は睡眠時間が五時間ほどしかない、かなりのハードスケジュールだ。

だが、休日は自由時間があり、睡眠時間が六時間摂れ、しかも、自由時間に昼寝もできる予定だった。

そんな所で、二人は過ごし始めた。

そのおよそ二ヶ月後、驚くべきことが持ち上がるとも知らずに……。

第四章「仲違いと、そして——真実」——1

「さあ、皆さん。働きなさい。吾らの守護者に視られても、恥ずかしくないように！」

朝の祈祷がそういう言葉で締めくくられると、みんな一斉に席を立った。

何があるのかと言うと、だいたい二週間後の十一月十八日はこの宗教が興った記念日で、その日の一日前から三日間、この香封畏院かほういりんでは、封香奏祭ほうじょうそうさいというお祭りがあるのだ。

ちなみに、香啓畏院かけいいりんと言う、男子専用の修道院の方は、啓香奏祭けいこうそうさいと言うお祭りとなる。

何ともファンタジーで、夢見がちで嘘にしか聞こえないが、何でも昔、この宗教の創始者が、悪人の集団を捕まえ、こらしめたそう
だ。

その悪人達は、こらしめられて改心し、二度と他人に悪さをしないと誓い、その印としてその悪人の頭の一族に代々伝わる珠、『香封珠こうふうじゆ』と『香啓珠かけいじゆ』を、創始者に渡した。

二度と、自分のような者に悪用されないように。

それは実に不可思議な珠で、香啓珠を持った者が念じれば様々な天変地異が起こせる、不思議な、そして恐ろしい珠なのだそうだ。

……どうせ、嘘だろうけれど。

また、香封珠を持った者が念じれば、逆に様々な天変地異を抑えることもできるそうだ。

……本っ当に信じられないと言うか、絶対確実に眉唾物だろう言い伝えだ。

そして、その創始者は、この雌雄の香封珠・香啓珠を、その悪人の望み通り、再び悪用されないよう呪術を施した箱に入れ、それを十重に囲み、普段は絶対にその箱を開くことはできなくしたらしい。たった一日を除いて。

この日、十一月十八日は、創始者がこの雌雄の珠を封じた日。

そしてこの日、創始者のような呪力を持つていない者、呪法をか
けられない者でも、それなりの人数が集まり、強い祈りを捧げれば、
それによって、箱は開くことになっている……らしい。

そして、香封畏院の最高巫女が、祈りが終わると前まで歩き、そ
の箱を一つずつ開いて珠を取り出し、厳かに、一年にたった一つの
願いを唱え、信者達がそれを唱和する。

そして香封珠（たった二つしかない為修道院も二つしかなく、女
子の方に香封珠、男子の方に香啓珠が納められている）に祈りを捧
げ、箱に戻しまた一年間の封印をする。

また、それとは別にその創始者を称える為の祭りでもある。

そしてそれが行われる間、近くに住んでいる信者でない人達も来
て、祭りを楽しむ。

信者でない人が来ても、それはこの宗教、（しんけいけうぎょう）香封啓教の宣伝になる
ので、喜んで迎え入れている。

だからこそ一ヶ月前から掃除や準備に様々な時間を取られ、平日
も休日も区別が全くない。

その為、一ヶ月前からは修道院に入っていない一般の信者達は礼
拝には来ず、個人や学校などで、宗教の勉強に来る人もいない。

そして、何と睡眠時間がたった四時間である。

本当に身体が保たない。

だから、休憩時間に椅子に座り込んで仮眠を取り、休憩終わりの
鐘が鳴ると同時に目を覚まして掃除を再開するのだった。

勿論、それは十代から五十代の、掃除をする女性達もだった。

そしてもし鐘が鳴っても起きなかったら、夜に祈祷書を写さなけ
ればいけないのだ。

それは、とても大変な作業で、何より睡眠時間がなくなる。

だから、由梨亜も千紗も必死で起きて仕事をしていた。

本当は言葉の通じぬ異邦人に祈禱書を写させる訳がないのだが、二人はそんなことは想像できなかったし、その気力もなかった。

そして、一週間前になれば大分楽になった。

今まで、普通の日……封香奏祭の一ヶ月以上前でも睡眠時間は五、六時間だったのに、一週間前になると何と七時間睡眠になるのだった。

それは、ここしばらく寝足りなかった由梨亜と千紗にとっては、まさに天国のようだった。

まあ、油断して寝坊し過ぎるのも罰則が待ち構えていたけれど。そして、三日前になると、また予定が変わった。

勿論、前日は封香奏祭の準備に明け暮れるけれど。

「ねえ……由梨亜。お願いだから、教えてよ。あたし、そういう風に悲しそうな由梨亜の姿、もうこれ以上見たくない。あたし達、今まで隠し事なんかしなかったじゃん。それは、あたし達が出会った五年生の時から、ずっと、ずっとそうだったでしょ？ ……ねえ、何で？ 何でよ、由梨亜。お願いだから、意地張らないでさ……ねえ、由梨亜」

封香奏祭の五日ほど前、千紗は悲しげに、嘆願するように、そして、半分諦めたかのように、今夜も同じ問いを口に出した。

由梨亜の答えも、毎回同じで、

「千紗、ごめんね。今は言えないけど、封香奏祭の日に分かるから……。だから、今は……。おやすみ、千紗」

「……おやすみ、由梨亜」

そして、二人の会話は途絶えてしまった。

今、この時代で言葉が解り合えるのは、お互いしか、いないというのに……。

やはり今夜も同じ答えが返って来た千紗は、ひどく哀しく苦しい気持ちを感じていた。

（どうして？ 何で由梨亜はあんな風になってしまったの？ 封香奏祭が近づいてから、落ち込んで、塞ぎ込んで、あたしも話さなくなつて……一体、何が原因なの？ それが分かれば、あたしは全力でそれを阻止、排除するのに……！ なのに、由梨亜は何も言わなくて……何で！ 何で由梨亜はあたしに何も話してくれないの？ もう……訳分かんないよ！）

そして、また、今夜も同じことを思い、器用なことに、怒りを感じながら眠りについた。

千紗は布団に入ってから眠りにつくのが速く、今日も僅か一分ほどで眠った。

その数分後、由梨亜は二段ベッドの上の段にある自分のベッドから降り、すぐ下の段で寝ている、千紗の顔を覗き込んだ。

そして、呟いた。

「千紗……ごめんなさい。私は貴女のこんな顔が見たくて、ここに来た訳でも、留まつてる訳でもないのに……でも、もうそろそろしたら、貴女は戻るから……だから、その時まで……ごめんなさい。本当に、ごめんなさい、千紗。あと、もう少しだから……」

そう言つと、由梨亜は目尻に垂れてきた涙を拭い自分のベッドに上つて行つた。

一体、ここで何が起こるといふのだろうか？

そして、二人は元の世の中に戻るのだろうか？

今の時点では、まだ誰にも分からないが、ただ、一つだけ言えることがある。

それは、この時代に、時を超えて来たその理由、そしてそこで何が起こるのかが、封香奏祭で、もしくはその後で分かるということだ。

そして……二人はどうなるのかと、いうことも。

早朝の空気の中に、香封畏院の鐘が鳴った。

今日は、封香奏祭第一日目。

当日になったら、少しはゆつくりできるかなあ……などと千紗は考えていたのだが、それは大間違いだった。

何故なら、今日までみんなで作ったタオルやぬいぐるみ、クッション、枕カバーなどの手芸品を大聖堂で売るのが、またその量が半端でなく多い。

それと比例するように、売り子の人数も多い。

そして、簡単な手作りお菓子や、搾りたてのジュースを有料で出すのでキッチン担当もいて、更に給仕係もいるので、それぞれ交代してやっていた。

勿論、由梨亜と千紗は常にキッチンでお菓子及びジュース作り担当か、休憩だったが。

けれども、それでも由梨亜は何も喋ろうとはせず、黙々と手を動かし、休憩時間も千紗のことを意図的に避けているようだった。

そして午前中が過ぎ、夕方になり、日が暮れると、封香奏祭に来た人々は、それぞれ客室に戻ったり、家に帰ったりして行った。

そして、その後小聖堂で祈祷を行った。

いつもは鐘と同時に祈りを捧げ始め、鐘と同時に終え、香封畏院の最高巫女……処女で最年長の女性から一言二言戴いてから部屋に戻って行くのだが、今日は祈祷の最後に、最高巫女が長々と話し始めた。

この香封畏院の最高巫女は、御歳八十七歳となるが、肌には艶があり、背筋も伸び、どんなに高齢でも精々七十代ぐらいだろうと思われるほど若々しい方だ。

「皆の者、今日のお勤め、ご苦労であった。明日は、中聖堂にて、祈祷を、街の信者達と、合同で行う。明日の、八時から九時頃に。全て、善きように。皆の者」

その声は、外見の若々しさから見るととても深く、落ち着いた声で、そこに立って、話しているだけで、威厳が辺りに満ち溢れていた。

「全て、善きように。最高巫女様」

皆で唱和した後、この香封畏院で、処女で二番目に年長の御歳七十九歳の副巫女が言った。

「皆の者、今年の願い事は、決まった。今年は、昨年出た意見、皆でアンケートを採った結果、一番多かった意見、『地球の森林保護、二酸化炭素削減が、これまでに以上進むよう』という物に決まった。休みなさい。全て、善きように。皆の者」

「お休みなさいませ。全て、善きように。最高巫女様、副巫女様」そして、みんなで席を立ち、部屋へと戻って行った。

（森林保護？ 二酸化炭素削減？ この頃、まだそんなこと言っていたの？ 一番酷かったのって、確か地球暦二千年代初め頃だったはず……あつ、思い出した。確か、この頃ってそれまで使われてた化石燃料っていうのが、もうほとんど使われなくなってきた、この時で言う、新エネルギー、エコなエネルギーって奴が一般的になってきた頃だっけ……だから、まだ地球温暖化問題があつて……その時には、今あたし達がいる時代には、人間は生きているかどうかよく分からないって考え方が一般的だったんだよね……そう言えば、あともうしばらくしたら、地球は初めて他星の存在を知って、しかもこっちの方が大分技術が後れていることを思い知らされて、大パニックに陥るんだよね……）

そう思い、布団に入りながら考え事をしていた千紗は苛立ったように寝返りを打った。

（ああ、駄目。今まで布団に入ってから考え事なんてしてなかったから、分かんなかったや。寝る直前に難しいこと考えると、眠れなくなるんだ……やばい。本気で寝れないかも……）

そう思っていた千紗は、上で起き上がるような気配がして、不思議に思った。

そして降りてきた由梨亜に、千紗は驚きながら声を掛けた。

「由梨亜。何やってるの？ 今はもう十一時過ぎたんだよ？ それに、早く寝ないと、明日身体が保たないよ」

千紗の不思議そうな言葉に由梨亜はギクツとして固まり、ギクシヤクと千紗を振り返った。

「ち、千紗……び、びっくりさせないでよ。っていうか、それが久しぶりに言葉を交わす相手に対する言葉？」

「そりゃあ、由梨亜とはこの頃何も喋ってないけどさ……。でも、あたしが声を掛けられないような雰囲気を出してたのは、由梨亜じゃん。おまけにあたしのこと意図的に避けまくってさ……。あたしはずっと、由梨亜と普通の会話がしたかったよ。だって、ここに入つて、封香奏祭が近づいてから、まともな会話なんて、誰とも、一度もしなかったじゃん。あたしは……ずっと、淋しかったんだよ。周りの人とは、古代語じゃないと喋れないし……。あたしは古代語、まだ習いたてだから詳しい会話なんてできないし、元々そんな重要な科目でもなかったし……。由梨亜としか、普通の会話はできないんだよ？ なのに……。なのに、ずっと避け続けられて……。あたし、本当に淋しかったんだからね。由梨亜は、本当に、何とも思わなかったの？」

「私は……」

と、由梨亜は目を泳がせ、言葉を濁らせた。

「だから、そう誤魔化さないで。分かってる？ 由梨亜。そうやって全部曖昧にするのは、貴族階級がいつもやっていることも知れないけどさ。あたしとの間ではやめて。そう誤魔化すぐらいなら、最初から何にも言わない方がマシだよ、由梨亜」

千紗にピシヤリと言い放たれ、由梨亜は

「……ごめん。本当に、ごめんね。千紗」

と謝った。

「それにさ、由梨亜、封香奏祭の日にわかるって言ったよね？ 今日、封香奏祭一日目だけど、何もなかったよね？」

「三日目に分かるわ。お願いだから……待つて。そうすれば全部教えるから。まあ、私もこの前知ったばかりだからちゃんと伝えられるかどうかはいまいち不安だけど……でも待つて。全部分かるから私達が、この千年前の世界に時を越えてまで来た理由。何でこうなったのかも、全部。その後、千紗は元の時代に帰れると思うから、心配しないで」

由梨亜は、自覚症状もなしにうつかり失言をしてしまったが、それを大人しく見過ごす可愛い千紗ではなかった。

そういうことは、厳しく問い詰めるのが千紗流である。

「……『は』？」

「えっ？」

「今由梨亜、『千紗は』って言ったよね。由梨亜は元の時代に、帰れないって言うの？」

由梨亜は、思わず手で口を覆ってしまった。

失言してしまったと思ってるのは、まず間違はなく確かだ。

千紗は、幼い頃から本条家の跡継ぎとして鍛えられてきた由梨亜が、思わずたじろぐぐらいの据わった目をして、はつきりと言いつつた。

「あたしは嫌。あたしだけ帰って由梨亜がこの時代に残るって言うのなら、あたしも残る。あたし、由梨亜の居ない時代に帰ったって全然意味ないもん。あいつが……並樹咲なみきさき（中流の貴族）が、前の学校で騒ぎ起こしたからうちの学校に……私立小学校から普通の公立小学校に来て、あたしが咲に意見したからってあいつにいじめられて……・友達いなくなっちゃったあたしにとって、由梨亜しか友達がいないんだから。だから……お願い、由梨亜」

「……大丈夫よ。千紗。私は、この時代に何か、残らないから」

「……本当？」

「ええ。私は絶対に、必ず現代に戻るから。この時代で、一生を終わらせなんかしない」

「そっか……。そう言えば由梨亜。何しようとしてたの？」

「ああ。あのね、千紗の寝顔、見ようと思って」

「はあ？」

千紗はあまりにも予想外の言葉に拍子抜けして、間抜けな声思わず口を付いていた。

「毎晩見てるんだあ、実は。それから寝てるの。千紗って、眠りにつくの光速並みに速いしね。今日は寝てなくて驚いたよ」

「へ、へえ」

かなり久し振りに和やかな雰囲気になった二人に、突然鋭い声が掛けられた。

「ちよつとあんた達。何やってんの？ 煩くて煩くて眠れやしない。せつかくの睡眠時間なのにそれをさらに短くされたら堪えないわよ……ってあんた達か。全く、言葉が通じないってほんと不便ねえ。えつと……エイゴで言うのメンドイからジェスチャーでいっか」

そう言ったのは、同室の十代の少女だった。

「あんた達」

と言って、由梨亜と千紗を指し、

「ベッドに戻って」

と言って二段ベッドを指した。

二人は頷き、大人しく布団に入った。

（一体……何なのかな。でも、由梨亜は封香奏祭最終日に教えてくれるって言うってたし。だったら、色々考えないで、さっさと寝ちやおう）

そして、すぐに眠りに落ちたのだった。

何とも暢気なことだが、これが、千紗が千紗たる所以である。

第四章「仲違いと、そして——真実」——2

そして、封香奏祭^{ほうこうそうさい}一日目が終わり、二日目が過ぎた。

二日目にやった内容は、一日目とほとんど同じだ。

千紗^{ちさ}は、由梨亜^{ゆりあ}と約束した通り、由梨亜が落ち込んでいた理由や、隠していることなどについては触れず、笑顔で、今まで通りに由梨亜と接していた。

千紗は後からこのことを振り返った時、もっと早くに由梨亜と言いつけて仲直りしておけば良かったと思ったが、この時は、ただ、単純に、由梨亜と仲直りできて嬉しいと思っていた。

三日目は、それまでやっていた、普通のお祭りのようなことは一切やらず……と言うより、信者以外立ち入り禁止とし、一日中祈祷となった。

朝早く、それまでバザーで使われていた大聖堂の片付けをし、片付け終わった頃、客室から信者達も集まって来た。

そして、みんなで大聖堂の長椅子に腰掛けた。

六百人収容できる大きな聖堂であるにも拘らず、その実に半分以上もの席が埋まっている。

そして、周りの人達は、呪言を唱え始めた。

それは、こちらの言葉を理解できるようになっていた由梨亜と千紗にも、全く解らない異国の言葉、もしくは呪文だった。

だが、声の響きは、親が子を慈しむような、慈愛の想いに満ち溢れていて、聴いているだけで心も身体も温かくなった。

そして、その呪言がしばらく続いた後、神器と呼ばれる、処女で三番目に年長の女性が就く物で、その名の通り、神託のような物を得る時の祈祷を行った時、降臨して来た創始者の寄坐となる、御歳七十三歳となる女性が、最高巫女と副巫女と共に入ってきた。

最高巫女の両手には、二十センチ四方の箱が捧げ持たれている。その中に入っている物は、あの『香封珠^{かうほうしゅ}』だ。

「皆の者、祈りをやめ給えよ」

最高巫女の、八十七歳とは思えない豊かで深みのある、大きな声が大聖堂に響き渡った。

「これは、初めて見る者もいよう。これは、この宗教、香封啓教創始者、ながてみよし長手深芳様から賜った神聖なる珠、他院に納められている、『香啓珠』こうけいじゆと雌雄の珠である、『香封珠』である。今年もまた、様々なことがあった。そして、今年は昨年出た意見、『香封珠に願い得る神聖なること、皆の想いを取り入れ給えよ』、と言う物を受け入れ、この香封畏院かほういゐんにいる者達から、何を願えばよいかを訊き、そして、最も多かった物にした。皆の者、心して、聞け」

そう言つと、最高巫女は一息つき、その『願い』を口にした。

「昨年の物と似ておるが、違つ物である。その願いを、皆の前で発表しよう。」

『この美しき星…… 地球。吾等はこの星以外に棲む所はあらず。しかしこの地球、吾らが棲むには適さぬ環境になりつつある。もし棲むのに適さなくなったのであれば、吾々は死に絶え、この星には死のみが立ち込めるであらう。今は改善に向かつて来ておるが、それでも、まだ良くなつてはあらず。それどころか、また、悪くならないとも限らぬ。吾らはそうならぬ為に、願う。森林がこれ以上減らず、それどころか増えるように。それに伴い二酸化炭素急増を抑え、減るように。この願いが叶えられれば、長手深芳様、貴女様は敬われ続けることと成るであらう。そして、深芳様を守護された神々、精霊達も敬われ続けることと成るであらう。故に、吾らは願う。吾らの未来を願う想いを、どうか、叶え給えよ』

「吾等の未来を願う想いを、どうか、叶え給えよ」

「香封啓教創始者、貴き力をお持ちになる長手深芳様よ、吾らの願いを叶え得る力を持つ香封珠よ」

最高巫女が願いを口にし終えると、今度は副巫女が祈りを捧げる役目に就き、それを信者達が何度も何度も復唱した。

「香封啓教創始者、貴き力をお持ちになる長手深芳様よ、吾らの願

いを叶え得る力を持つ香封珠よ」

「香封啓教創始者、貴き力をお持ちになる長手深芳様よ、吾らの願いを叶えうる力を持つ香封珠よ」

みんなが、長手深芳と香封珠に対して祈りを捧げている間、最高巫女は香封珠の入っている箱に手をかざし、口を僅かに動かし、無心に祈っていた。

すると、普段は（実際にやったことはないが）叩いても落としてもうんともすんとも言わないはずの箱の鍵がカチリと開き、蓋が開いた。

すると最高巫女はそこから出て来た箱を取り出し、同じことを繰り返していった。

その間ずっと神器は床に跪き、最高巫女同様、口を僅かに動かし、無心に祈り続けていた。

そして、最終的に香封珠が最高巫女の手によって取り出され、皆の視界に入るぐらい、高く高く掲げられた。

まるでそれが合図だったかのように、皆の祈りがふっとやんだ。

その途端に、神器の口から、女性の神々しい声が大聖堂に響き渡り出した。

千紗は、千紗と同じ時代に生きる大多数の人間と同じように無神論者であり、科学的な根拠が何もない物を全然信じず宗教なんかとんでもないと思う人間だったが、この声を聞いた途端、神を信じなくても、少しは超常現象を信じてもいいかと思ってしまうた。

それほどまでに、神器の声は普段の声とは全然違う、神々しい声に変わっていたのだった。

『その願い、叶えよう。皆の言うこと、この妾が承知した。近いうちに、その願い叶うであろう。しかし、努力を怠ってはならぬ。妾が願いを叶えるのではなく、妾が其方らを手伝うのである。このこと、しかと申し付けたぞよ』

神器は言葉を紡ぎ終わると、首がガクツと垂れ、意識が戻った。すると、最高巫女が話し始めた。

「皆の者、これにて今年の祈りの儀を終える。長手深芳様の仰せらるること、しかと心に留めよ。夕刻、香封珠の封印の儀を行う。それまで休むように。全て、善きように。皆の者」

「はい、今年も長手深芳様の御加護を。全て、善きように。最高巫女様、副巫女様、神器様」

そして、人々は大聖堂を後にした。

今日は、封香奏祭最後の日で、また、長手深芳が香封珠・香啓珠を封印した日でもある。

つまり、普通の人にとっては一日目、二日目がお祭りで、三日目は『なにやら得体の知れない、信者しか参加できないお祭り』と認識している。

しかし、信者達にとっては一日目、二日目が前夜祭であって、三日目こそが本祭りなのだ。

そして、この日は最も清い日である為断食をする。

しかし……千紗のようによく動き回り、まさに『子供はよく食べよく眠る』の見本のような成長期の少女達には、かなり辛いのだ。た。

千紗は、グウグウ鳴るお腹を抱え、ベッドに横たわっていた。

理由は勿論、『動くとお腹が空く』からだ。

その時には、部屋には千紗以外誰も居なかった。

他の八人の少女達のうち、真面目で将来ここに残りそうな五人が小聖堂にお祈りに、他の一人が食堂に忍び込みに行き、そこに巫女や規則に厳しい老女達が行かないようにあとの二人が見張りをしていた。

そして由梨亜は、千紗が気付いたら既に居なかった。

最初はトイレにでも行っているのだろうと思っていたが、さすがに一時間もトイレに入っている訳がなく、どこにいるのか全く分か

らない状態だった。

そこに、コンコンと扉が叩かれた。

千紗は起き上がることさえ億劫だったので、寝たまま

「誰……？ 鍵は開いてるわよ」

と、扉の外の相手に、意味が通じないことを承知で問い掛けた。すると、驚いたことに扉が開き、そこには由梨亜が立っていた。

「由梨亜……？ どうしたの？」

「千紗、ちよつと来てくれる？」

由梨亜の顔は強張り、少し蒼褪めているようだった。

「由梨亜、どうしたの？ 顔色悪いよ。少し寝たら？」

「いいえ。それどころじゃないの。私は、やらなくちゃいけないの。千紗、私達がこの世界に来た理由を話すわ。だから……来て」

「えっ？ でも、ここで話してもいいんじゃないあ……」

「いいえ。ここで話すと、迷惑が掛かるもの。それに、誰がいつ来るか分からないし……」

「そう……。じゃあ行くよ。本当は、お腹空いて、あんまり動きたくないんだけどね」

千紗がそう答えると、由梨亜はちよつと笑い、

「そういう所が、千紗らしいわ。私……そういう千紗が、好きよ」

「由梨亜……？」

千紗は、訝しげに答えた。

今まで、『千紗らしい』と言われたことはあっても、『そういう千紗が好き』とは、一度も言われたことがなかったからだ。

そして、由梨亜は理由を話すだけではなく、何かを起こすとも……直感的に分かった。

そして、由梨亜は

「こつちよ」

と言い、千紗の手を取り、小走りで進み始めた。

第四章「仲違いと、そして——真実」——3（前書き）

警告

今回、あまり直接的ではありませんが、近親相姦の表現があります。またこれ以降の話では、普通に近親相姦が行われ、兄妹で夫婦、または恋人になっているという表現も出て来ます。他にも、一夫多妻制や後宮などのハレム的な要素も出て来るので、そういう表現を生理的に受け付けられないという方は、これ以降の話は読まないで下さい。この前文で気分を悪くされた方がいらっしやいましたら、申し訳ございません。

第四章「仲違いと、そして——真実」——3

由梨亜は千紗の手を握り、スタスタと歩いて行った。

千紗はどこに行くか分からなかったが、由梨亜の緊張した雰囲気
に圧され、訊けなかった。

そしてしばらく歩き続けると、由梨亜がどこに向かって歩いてい
るのか分かってきた。

何故なら、その道はここ一ヶ月ほどずっと通い続けた道……客室
のある棟へと向かう道を通っていたのだから。

（一体、何が起きているというの……？ それに、あたしと由梨亜はど
うなるの……？）

と、千紗は考え続けていた。

やがて、客室の中の使われなかった部屋の一つに着いた。

由梨亜は扉を静かに開け、閉める時でもできるだけ音を立てないよ
うに気をつけていた。

そんな由梨亜の様子にただならぬ物を感じ、千紗は由梨亜を見つ
めた。

千紗は、掠れた声で話し掛けた。

「由梨亜……とうとう、教えてくれるんだね……」

「ええ……そう。私は……」

そこまで言うと、由梨亜は一息つき、真っ直ぐに千紗を見つめた。

「千紗、落ち着いて聞いて欲しいの。そして、全て信じて欲しい……」

「……うん。分かった」

千紗は、由梨亜の真剣な表情を見て、決心した。

由梨亜は、このような様子で冗談が言える人ではない。

だから、これから話すことが真実であると千紗は知っていたし、
直感でも感じていた。

由梨亜は、それでもしばらく躊躇した後、思い切って、千紗に告

げた。

「……私は……私は、この星の……地球連邦の人じゃないわ」

千紗は、あまりのことに頭が真っ白になってしまった。

覚悟はしていたけれど、そこまでの物とは思ひもしなかった。

「由梨、亜……？　じよ、冗談じゃ……」

「勿論、冗談じゃないわ。私がそんな冗談、言える訳ないわよ。まあ、私もこっちの時代に来て、初めて知ったんだけど……」

「で、でも……由梨亜のお父さんとお母さんは？　どうなの？」

「いいえ。違うわ。あの人達は、実の親ではないわ。血が繋がらない……育ての親」

「でも、子供が産まれた記録は残ってるじゃん。それは？　そんなの、偽造しようがないよ」

千紗は必死で食い下がった。

「ええ、身分の高い人達の出生記録を作るのはそういう記憶があっても無理。けど身分の低い人なら遅れても大丈夫でしょう？　理由だって、名前を決めるのに時間が掛かったと、母体が弱かった為産まれるまでは油断が許されない状態だったと言えば済むことだしね」

千紗は『身分の高い』という所に引かかったが、由梨亜の言う身分が高いというのは王族などだと思い直し、それを横に置いて言い返すことにした。

「でも……そんな、人の記憶って換えることなんてできる訳ないじゃない。そんなお話の世界だけでしょう？　そんな都合良くできたら、世の中何も苦労はないよ」

「いいえ。一つだけ方法はあるわ。……千紗、『魔法』って、信じる？」

「魔法？　まさか、これっ……！」

由梨亜は、これまでの記憶を辿るかのように遠い目をした。

「私達が産まれた家が変わったのも、それに伴って周りの人の記憶もそれに沿って変わったのも、出生記録が変わったのもここに来たのも、香封珠（カハツツブ）に願いを叶えさせたのも、全て魔法。それに、宇宙連

盟——この全宇宙の平和と共存を維持する団体の、事実上の長たる役割を持つ国、花鶯国かおうこくが特許を持っている物は、魔法を使っているわよ。特に、過去を見る去解鏡きょかしょうは、科学技術なんかじゃできない代物よ。魔法じゃないとあり得ないわ」

由梨亜は重大なことをサラツと言った為、千紗はそのことに気付くのに時間が掛かった。

だが、数秒後、気付いた千紗は、思わず唾を飲み込んだ。

「由梨亜……そんな、まさか、あたし達って……」

「そうよ。貴女の名前は本条千紗ほんじょう。名前ぐらいなら、後で変えましたと言えはいいのだから、そういうことはどうとでも繕えるのよ。

そして、『彩音千紗さいいん』という人物は、本来なら、この世のどこにもいない(……)」

「どういう、こと……？ どういうこと、由梨亜？！」

思わず千紗は声を荒げた。

「千紗、静かに。つまり、こういうことよ。『他の居住可能惑星Aで産まれた赤ん坊Bが、地球連邦の本条家に産まれた赤ん坊Cに成り代わり、本条由梨亜となる。赤ん坊Cは子供に恵まれなかった夫婦Dに産まれた赤ん坊として、記憶を変えられ、彩音千紗となる。そして育ち、赤ん坊Bと赤ん坊Cは大きくなってから出会い、親友となり今ここにいる』」

由梨亜の真剣な表情と、感情の全く窺えない声音に、千紗は由梨亜が本当のことを言っているのだと、何故かすんと腑に落ちた。

「じゃあ、由梨亜は？ あたしが、本当はお父さんとお母さんの間に産まれた子供じゃなくて、由梨亜のお父さんとお母さんの間に産まれた子供だということは分かったし、信じる。だけど……だけど、由梨亜は？ 一体、誰なの？ 誰の子供に産まれたの？」

「そうね、何から話せばいいのかしら？ ……じゃあ、まず、私は誰なのかを話すね。私は……私は、宇宙連盟の長たる役割を担う花鶯国の王女、花雲恭富実樹かうんきよふみきよ」

「花鶯国って、王族のみが日本州や中華州と同じ名前を漢字で表す

国で……確か……！」

千紗は、とんでもないことを思い出した。

そのことは、先生が、教職にある身とは思えないほど嫌悪感に満ちた顔で言っていたから、千紗の記憶に色濃く残っていた。

そして、だからこそ、由梨亜は地球連邦に來たのだと確信した。

「……そうよ。花鶯国の王族の苗字は『花雲恭』。そしてね、花鶯国の王……花雲恭家の長には、常に六人の妻がいるの。前王の娘で最も高い王位継承権を持つ王女がなる后。他国の王女がなる妃。貴族の中で最も身分が高い戦祝・政財・宗賚大臣の誰かの娘や孫がなる妾。地封貴族と言う、土地を封じられている貴族の娘が官吏の娘がなる最貴。後宮に勤めている侍女がなる最侍。それなりの地位の一般庶民の娘がなる最女」

由梨亜はずらずらと後宮の女性達の官名を挙げた。

「私は王の娘だけど、妾の娘。だけど、誰の子であろうと女であるうと、最初に産まれれば第一王位継承者となるの。そして私が産まれてほんの二時間後、妃の娘である異母妹が産まれたわ。次の日には、後の息子である異母弟も。順番から言うとな私が王位を継ぐんだけど、二時間差の異母妹に変わるべきだと、妃や後見人の貴族が騒ぎ出してね。こっちの方が血筋は上だと。そっちはたかが妾の子ではないかと。そして、自分は妃だが元々他国の王族。この国の『因習』で自分は妃になったが、自分は王女だったと。外交関係上の問題となる前に、こっちに第一王位継承権を寄越せと」

由梨亜の顔は、どんどん険しくなる。

「しかも、彼女の性格は過激で、私はあの国にいたら消されていたでしょうね。第一、后と妾は何度も彼女に生命を狙われ、流産されかかったらしいわ。あと、他の弟妹達のことだけど……」

由梨亜はそこまで言うのと、一息をついて言った。

「私が産まれて八ヶ月後に最女の長女、十ヶ月後には最貴の長男、一年一ヶ月後に最侍の長男、一年五ヶ月後に後の長女、一年八ヶ月後に妃の長男、二年後に妾の次女、二年二ヶ月後に最女の長男、二

年六カ月後に最侍の長女、二年八ヶ月後に最貴の次男、二年十一ヶ月後に後の次女、三年一ヶ月後に妃の次女、三年四ヶ月後に妾の長男が産まれたの。だから上から行けば妾の長女、妃の長女、後の長男、最女の長女、最貴の長男、最侍の長男、後の長女、妃の長男、妾の次女、最女の長男、最侍の長女、最貴の次男、後の次女、妃の次女、妾の長男ね。さっき言った理由——あの人が妃になったせいで、私の本当の御父様と御母様は、私を地球連邦に送ったのよ。理由は他にもあるでしょうけどね」

由梨亜は、少し寂しげに言った。

千紗はと言うと、あまりに沢山のことを一度に言われたせいで、少し混乱気味だ。

由梨亜はベッドの上に置いてあった箱を取り上げ、歌うように、千紗には意味の解らない言葉を唱えながら、箱を開けていった。

そして、出てきた物を見て、千紗は息を吞んでしまった。

「それは……『香封珠』！」

「よく覚えてたわね、千紗。そういえば思ったんだけど、千紗は記憶力がいいのに勉強ができないって嘆いてるのは、勉強を頑張るってやる気が足りないんじゃない？」

「由梨亜！ また話逸らさないでっ！」

また、千紗は声を荒げた。

「あ……またやっちゃった」

「でさ、由梨亜。由梨亜はどうやってそのこと知ったの？ 由梨亜、こつちに来てから知ったってことは、あっちでは知らなかったってことでしょう？」

「うん。封香奏祭ふうかうそうさいの準備が始まってからの朝の祈禱の時間に、情景が浮かんで来たの。それは、あの花鶯国の様子だった。科学技術は地球連邦とは比べ物にならないくらい進んでいたのにも拘らず、自然が沢山あってとても美しい星だったわ。そして、最後に、私が産まれた時の様子、それで起こった争い、何故私が地球連邦に来たのか、そして、元いた時代に戻る方法が分かった。全部分かったのは、

封香奏祭の一週間前だったわ」

「一週間前って、丁度由梨亜があたしと話さなくなった時……」

「ええ、そう。ところで、戻る方法は、実は三つあるのよ」

「み、三つ……？」

千紗は、少し動揺してしまった。

何故なら、常識的に（？）考えて普通はあり得ない状況から戻る方法は、そんなに多くないと思ったからだ。

「一つ目は『富実樹と入れ替わった少女を生贄として奉げ、その生命力を使い花鶯国へ戻れ』」

「……あたし？ あたしを、生贄、に？ その……方法使えば、あたし、死ぬの？」

「ええ。生命力を使うということはその生命を全て使い切ることだからね。ちなみに、それが一番いい方法らしいわ。だけど、私は絶対嫌。生贄なんて時代錯誤なこと、誰がするもんですか。それに、誰かを殺して自分が幸せになるなんてことやりたくないし。特に、それが私の親友の千紗だなんて。そして二つ目は、『何か強力な力を持つ物を、入れ替わった少女を媒体として力を注ぎ込み、富実樹は花鶯国に戻れ。だが、媒体とされた少女はこの時代に残される。但し、媒体とされた衝撃に耐え切れず、寝たきりになってしまいう可能性が高い』」

「その方法使ったら、あたし、この時代に取り残されて、しかも一生寝たきりになるかも知れないの？！」

千紗は、驚き過ぎて、かなりの大声で叫んでしまっただけで口を押さえた。

「大声出さない。一応結界張ってるからあんまり洩れないけど、千紗は規格外よ。絶対に洩れるわ。で、話を戻すけど、私もこの二つの方法は使いたくない。千紗がこの時代に残るのは嫌だし、死ぬのも寝たきりになるのも嫌。だから、三つ目の方法を使いたいと思うの」

「三つ目の方法って……？」

千紗は、ほんの少しだけ期待を混ぜて言った。

その様子に、由梨亜は微笑して、言った。

「あのね、三つ目の方法は、『富実樹と入れ替わった少女の二人で力を合わせ、強力な力のある物の媒体になり、負担を半分にする。そして富実樹は花鶯国に戻り、入れ替わった少女は現代の地球連邦に戻り、本当に産まれた家に戻る。周りの記憶も、最初からその少女がその家に産まれたという物になり、出生届もそれに合わせて変わる。但しその入れ替わった少女は、最初は富実樹のことを憶えているが少しずつ忘れていき、最終的には富実樹を完全に忘れる。しかし富実樹は覚えている。また、互いを信頼していなければこの方法は使えない。この方法は、互いを信頼していれば最も成功率が高いが、逆の場合成功率は最も低い』」

「つまり、この方法は場合によって最も成功率が高く、最も成功率が低い方法ってことね」

「そう。……千紗、どうする？ 千紗が嫌なら、私はここに残るわ。私は、見たことがない御父様御母様よりも、千紗の方が大事なの」

「何言ってるの、由梨亜。そんなの認めないよ。由梨亜は花鶯国の王女で、第一王位継承者でしょ？ そんな由梨亜が戻らなかつたら、花鶯国のお父さんとお母さんがどんなに悲しむか分かる？ あたしは三つ目の方法を試すよ。由梨亜が戻れるのならどんなことでもやる。あたしは由梨亜を信じてるし、由梨亜もあたしを信じてるでしょ？ だから今のあたし達にとって三つ目の方法が、一番成功率が高いつてことだよ。もし失敗したとしても、由梨亜は戻れるように祈るよ」

「千紗……」

由梨亜は涙で声を詰まらせた。

「ありがとう。三つ目の方法をやってみよう。私は、絶対に千紗のこと忘れない」

千紗も、少しでも瞳を涙で潤ませながらも、精一杯の晴れやかな笑みを浮かべた。

「あたしはどう足掻いても由梨亜のことを忘れるけど、それでも覚えていれる最後の瞬間^{とき}はできる限り延ばす。約束するよ。あたしは由梨亜のことを忘れても、心の奥底に、由梨亜のことを……由梨亜と過ごした楽しい時間を刻み付けて、記憶じゃなくて感覚で、絶対に覚えてる」

「じゃあ、始めよつか」

「うん。由梨亜、絶対に、成功させようね」
「勿論」

千紗と由梨亜は、不敵に微笑んだ。

まるで、今の自分達には、不可能なことはいとも言うかのように。

まるで、自分達に残された最後の時間——『彩音千紗』と『本条由梨亜』として過ごせる、最後の瞬間^{とき}を、心に刻み付けるように。

二人は、最後の賭けに出た。

互いを想う気持ちのみで……。

第五章「時と宇宙（そら）を越えて……」――1

「由梨亜、まず、あたしはどうすればいい？」

千紗は、真剣な目をして由梨亜に問い掛けた。

「うん。まず、この香封珠（かふうしゆ）の力を引き出す為には、呪言が必要なの。それを言った後お願いをするんだけど、お願いの方を聴いて繰り返して」

「うん、分かった」

そう千紗が答えると、由梨亜は香封珠を両手で持ち、目を閉じて呪言を唱え始めた。

それは意味の解らない言葉で、千紗は少しボーっとしていたが、由梨亜が見詰めているのに気付き、その後と言った意味の解る言葉を必死で繰り返した。

「『富実樹（ふみき）の父である花雲恭峯慶（かうんきやうほうけい）、母である花雲恭由梨亜、富実樹を花鶯国（かおうこく）へ、千紗を現在の日本州へと戻らせて下さい』」

「『富実樹の父である花雲恭峯慶、母である花雲恭由梨亜、富実樹を花鶯国へ、千紗を現在の日本州へと戻らせて下さい』」

「『その証として、わたくし達の友情の徴を、ここに示します』」

「『その証として、わたくし達の友情の徴を、ここに示します』……
…つえ？」

「あれ？ どうした？ 千紗」

「シルシって？ 何？」

「ああ、それは今から言うわ。……『その徴として、わたくし達の血を捧げます』」

「『その徴として、わたくし達の血を捧げます』……うつ、血なの？」

「ええ。『この力ある物、「香封珠」に血を捧げるので、わたくし達にその御力を御貸し下さい』」

「『この力ある物、「香封珠」に血を捧げるので、わたくし達にそ

の御力を御貸し下さい』」

「それじゃあ、これで血を」

そう言って由梨亜は、どこで手に入れたのか、今となってはアンティークに等しいほど古い短剣を取り出した。

勿論、千紗は見るのも触るのも初めてである。

由梨亜は、自分の右手で短剣を抜き、左手の人差し指にその刃を当てた。

そして、血が出ている左手をそのままにして、右手で千紗に短剣を渡し、それを千紗は同じように指に当てた。

「……………っ！」

思わず、千紗は顔を顰めた。

たかが左手の人差し指から少し血が出ているだけなのだが、それでも痛いのだ。

しかも、今この世の中では包丁にも安全装置が付けられ、百パーセントに近い確率で指が切れなくなっている為、刃物で指が切れるのは本当に初体験だった。

そして、由梨亜はよく顔を少しも歪めないなど感心した。

由梨亜は千紗の手を取り、二人の左手を、人差し指が付くように合わせた。

そして、混ざって滴り落ちる血を香封珠に垂らした。

そうすると、香封珠は真っ赤なワインの色に輝き、滴り落ちる血を吸収した。

「あっ……………！」

と声を上げた由梨亜の回りを光が取り囲み、こちらの世界に来てから、ずっと解かれていた髪が、室内にも拘らず強く吹いている風に煽られ広がる。

そして、由梨亜の少し波打っていた髪が更に波打ち、フワフワと広がり、色は茶色から栗色へと変わり、その毛先が腰に届くぐらいの長さまで長く伸びた。

そして背が四センチほど伸び、顔立ちは変化し、由梨亜の面影は

少し残ったが、今までの由梨亜とは到底思えない外見となった。

そして、光の乱舞がやみ、由梨亜は……いや、『花雲恭富実樹』は目を開けた。

けれど、その目の色も、花鸞国王家の血筋特有の、桃色へと変貌を遂げていた。

そこに現れた女性を見ても、耀^{よう}太も、瑠^る璃も、鈴^{すず}南も、クラスメイト達も、部活の仲間達も、『由梨亜に似た女性』、『似ているけれど他人の空似』といった印象しか受けにくいぐらい、由梨亜は富実樹になった途端、印象が変わってしまった。

長く付き合ってきた千紗でも、ぱつと見には別人に見えるほどだった。

「ゆり、いいえ。貴女は……『富実樹』？」

「ええ、この姿の私は『富実樹』よ。そして千紗、貴女も産まれた時の本当の姿で育っていたのなら、その姿になっていたはずの姿に変えなくちゃね」

『富実樹』はそう言うのと、千紗に向かって、手をかざし掛けようとしたが、その途中で、奇々怪々な音を聞き、ピタツと手を止めた。
「ゆ、ふゆ、ふ、ふみ、ふ……」

それは、何とか富実樹のことを『富実樹』と呼ばうとして、どうしても『由梨亜』と呼んでしまいそうなのを何とか抑えようとしている千紗の声だった。

富実樹は呆れて、伸ばし掛けていた両手を腰に当てて言った。

「千紗、呼びにくいなら、何も無理に富実樹と呼ばなくていいわよ。由梨亜って呼んでいいわ」

それから、富実樹は千紗を眺めた。

「ここまで外見違うのに同じに思えるなんて、千紗って凄いわ。私、そんな自信ないし」

富実樹のその呆れたような言葉に、千紗は少し唇を尖らせて言った。

「だっ、だって外見は変わっても、声の抑揚、顔の表情は全然変わ

ってないし、由梨亜の面影がちゃんと残ってるんだよ？　これで別人だと思えなんて……しかも目の前で変わったのに……無理があり過ぎるよ。少なくとも、あたしはそうは思わない」

「だから、そこが凄いのよ。大抵の人は、見た目が変わったら別人だっと思うんだもの」

そう言つと、富実樹は千紗の左手を取り、自分の左手と共に香封珠にくつつけた。

そうすると、不思議なことに、流れていた血が止まり、傷跡も癒えていった。

そして、今度は千紗の身体を光が取り囲んだ。

その光がやむと、千紗は香封珠からゆっくりと手を離し、部屋に備え付けてある洗面台の方にゆっくりと歩いて行った。

そこに備え付けられている鏡を覗き込むと、そこには、千紗とよく似ているが、千紗ではない別人が映っている。

今まで見てきた、自分の顔とは似ている。

それは認めるが、でも、違う。

まず、髪の色が墨を流したような黒から薄茶色へと変わり、顔立ちも、耀太や瑠璃と似た少し彫の浅い、色白でほっそりとした小顔へと変わっていた。

だが、よく見知った人物が見れば、

「髪染めた？」

「お化粧した？」

「プチ整形した？」

などと訊かれるほどしか変わっていなかった。

「由梨亜、これって……」

千紗がそう呟くと、いつの間にか斜め後ろから鏡を見つめていた富実樹が、自分の姿を苦笑しながら眺め、こう答えた。

「ええ。それが、貴女の本当の姿なのよ、千紗。私がこれから先、この姿で暮らすように、貴女もその姿で暮らすことになるわ」

そう言つと、富実樹は

「千紗、続きを始めるわよ。私達は、これから『花雲恭富実樹』として、『本条千紗』として、行動しなければならぬから」

「うん、由梨亜」

二人は香封珠を取り上げ、二人の両手で包み込んだ。

すると、千紗の頭に富実樹の声が流れ込んだ。

『千紗、これから最後の呪言を唱えるから、それを合図が出てから口に出して唱えてね』

『うん。分かった』

『「今、其方の持つ力を解き放ち、我らを正しく元いた場所へと戻し給えよ」。覚えた？』

『うん。分かった。あたし、記憶力は本気になれば凄いんだもの。言えるわ！』

『じゃあ、いくよ。三、二、一！』

「『今、其方の持つ力を解き放ち、我らを正しくもといいた場所へと戻し給えよ』っ！」

二人がそう叫んだ瞬間、香封珠が今までになく、直視したら目が眩れてしまいかも知れないほど、金色と銀色が混じりあった色に輝き、千紗は思わず目を瞑ってしまった。

「千紗……」

富実樹の静かな声が聞こえ、千紗が目を開けると、そこはこの世界に来る時に通った、あの様々な色が氾濫しているトンネルだった。一つ違うのは、来る時は抗いようのない力で引つ張られていたはずが、今は浮くようにして富実樹と一緒に立っているということだ。そして、何にも引つ張られてなく、まるで無重力の中に立っているように、けれど、床の上に立っているように足元は安定していた。「何？ 由梨亜。そういうええさ、本条由梨亜と彩音千紗の時は、彩音千紗の方が身長高かったけどさ、花雲恭富実樹と本条千紗だったら、花雲恭富実樹の方が身長高いんだね」

「でも、千紗の身長は大して変わってないわよ。私が大きくなっただけ。っと、今度は千紗が話ずらしたわね。……ねえ、千紗。ここ

って何だと思う？」

「……？ 分からない。由梨亜は分かるんじゃないの？」

「いいえ、分からないわ。ただ、一つだけ分かることがあるとすれば、ここは亜空間だということだけね。私達が生きている通常空間でもなく、異質な異空間でもない……『亜空間』」

「由梨亜……」

「だからね、私、そういうことを知ろうと思うの。地球連邦では、とつくの昔に魔法は存在を否定され、迫害されて細々と消えて逝ったわ。私達がさっきまでいたあの時代……あそこの時代が、『魔法』と言う名称を使わなくても、そう言う『力』をまだ信じている人達のいた、最期の時代なのよ。あの何十年後かには、そういう魔法を信仰する宗教は全てなくなっている。貴族制の、王権制の、復活とともに。だけど……花鶯国にはまだ魔法が残っているの。だから、私はそれを学ぶつもりよ。私は今の所、それが夢なの」

「由梨亜……嬉しそう！ 良かったあ……最後に由梨亜のそんな顔を見られて」

千紗は、本当に……本当に嬉しそうに、微笑んで、言った。

「千紗……私も、最後に千紗が嬉しそうなの見れて、本当に良かった」

「でも、由梨亜……」

千紗は、先程とは対称的に、哀しそうに目を伏せて言った。

「これで、お別れなんだよね。もう……これから先、会えないかも知れないんだよね」

「大丈夫よ。私、王宮に閉じ籠るばかりの王族にはならないから。だからニユースで私のこと見れるかも知れないし、それに王族が各国を訪れるのも外交関係上あるでしょ？ まあ、それで何かに巻き込まれて死んでしまったとしても十四人も弟妹がいるんだもの。問題ないわ。まあ、私は地球連邦だけじゃなくて色々な国を訪れるつもりなんだけどね。そして地球連邦に行った時って、大抵有名な地方を訪ねるでしょ？ それなら地球連邦五大経済地方のその三の位

置にいる日本州を訪ねても不思議じゃないから、私が日本を訪れることもできるし、その時々会えるかも知れないじゃない！　だから、また会えるかも知れないよ！」

「……由梨亜。ありがとう。あと……あの、ね、由梨亜。これ」

と、不意に千紗が話し始めた。

富実樹は少々困惑しながら訊き返した。

「何？　千紗」

「これ、あたしがこの前あげた誕生日プレゼント。前、ここ通って行ったでしょう？　で、その後病院で目覚めた時、あたし、これ握ってたの。返すタイミングが掴めなくて返せないでいたけど、これで最後だし……だから、これ、返すね」

千紗はそう言い、富実樹にそれを手渡した。

「千紗……ありがとう。本当に……本当に……！」

「あたしは由梨亜の姿をニュースとかで確認できるかも知れないけど、由梨亜はもっと難しいでしょ？　それに、あたしの方は次第に由梨亜のことを忘れて、由梨亜は永遠にあたしのことを憶えている……だから、これを見てあたしを思い出して」

千紗がそう言い終えた途端、二つの大きく輝く光が降り、二人を包んだ。

「時間切れなのね……千紗、私、千紗に逢えて本当に良かった……ありがとう！」

「それは、こっちの台詞だよ。由梨亜に逢えて本当に良かった。ありがとぅ、由梨亜！　花雲恭富実樹としてのこれからの人生を、精一杯生きてね！　……またね、由梨亜！」

「千紗も……千紗も、本条千紗としての人生、楽しく過ごしてよ！　絶対に！　またね、千紗！」

その言葉を口にし終えた途端あまりにも眩し過ぎる、爆発したかのような光に包み込まれ、何も見えなくなり、また、何もかも分からなくなった。

しかし、最後の最後まで二人の胸の内に抱えていた想いは一緒だ

った。

互いに、ありがとうと、出逢えて良かったと感謝する気持ちを抱えて……。

第五章「時と宇宙（そら）を越えて……」―2（前書き）

途中でいじめの表現があるので、苦手な方はご注意ください。

第五章「時と宇宙（そら）を越えて……」――2

千紗ちさが気付くと、そこには見慣れない天蓋があつた。

それ以前に、身体が柔らかな布団の上に横たわっていることに途惑いを感じた。

（一体……ここは、どこ……？ 確かあたし……千年前に、飛ばされて……色々あつて……それで……。そうだ。香封畏院かほういんに入ったんだつた。そして……由梨亜ゆりあと話さなくなつて……封香奏祭ほうこうそうさいがあつて……。それで、その、最後の日に……由梨亜はつ……。！ 由梨亜が……本条由梨亜ほんじょうじゃなくて、花鷲国かおつくの王女様、花雲恭富実樹かうんきよみき……で……あたしが、彩音千紗さいいんじゃなくなつて、本条、千紗で……。！ そうだ。由梨亜……由梨亜はっ？）

ゆつくりと身体を起こし、由梨亜を捜して辺りを見渡すと、鈴南すずながシーツの上に頭を乗せて眠っていたのに目が留まつた。

千紗は、少し焦つた。

鈴南は本条家に仕えている召し使いだが、本条家は上流貴族の家柄。

たかが召し使いといえども、普通、庶民は本条家の人の目に届く所には雇わない。

庶民は、庭の手入れや召し使いの身の回りの世話をしたり、屋敷を掃除する機械を手入れしたり、台所仕事をしたりする、本当の端者なのだ。

本条家の令嬢に仕えるならば、最低でも下流貴族の娘なのである。なのに、人前で寝てしまうなんて……。それも、自分の仕えている人の前で寝てしまうなんて、とっても恥ずかしいことだ。

少なくとも、自分の知っている限り、鈴南はそう考える人物である。

一瞬、千紗は鈴南を起こすことを躊躇つたが、思い切つて起こすことにした。

「鈴南……起きてる？」

千紗がそう呼び掛けると、鈴南は一瞬ビクッと身体を震わせ起きた。

「お、お嬢様……お……お目覚めですか？　これは、申し訳ありませんでした」

鈴南はそう恐縮して謝った後、

「千紗様、少々お待ち下さいませ。今、旦那様、奥方様、侍医をお呼びして参ります」

鈴南はそう言うのと慌てて部屋を出て行った。

余程恥ずかしかったのだろうか、可哀想なことに、顔が真っ赤である。

千紗はその間に、鈴南に気を取られてあまり詳しく見なかった部屋を見渡した。

千紗は、自分の記憶の中にある由梨亜の部屋の記憶とこの部屋を照らし合わせたが、やはり、これは由梨亜の寝室だ。

今の千紗の状態から見て右側にある扉の向こうは由梨亜の居間のような所で、千紗が遊びに行くとその部屋でよく遊ぶ。

その更に奥にある扉の向こうは、勉強部屋のはずだ。

いつも、由梨亜の家に遊びに行くと、沢山の部屋が由梨亜一人の為にあることに、呆れ半分、羨望半分の思いを抱えていたことを、はつきりと思い出す。

（……良かったあ……まだ、由梨亜との記憶を……彩音千紗としての、あたしの記憶を、失ってない……）

その時、鈴南が侍医と由梨亜（ではなく千紗）の父と母を引き連れて戻って来た。

「千紗様、具合が悪い所はありますか？」

そう侍医が問い掛けてきて、千紗はようやく自分の身体がどういう状態なのかを確認した。

大した痛みはないが……何だか、よく分からない。

「えっと、少し眩暈がするよう……グラグラするよう……変な

感じですよ」

千紗が正直に言うと、侍医はあっさりと言った。

「それは、お腹が空かれたからでしょう。ですが、まだ消化のよい物を食して下さい。少しずつ元に戻っていくでしょうから、それまでは我慢して下さい」

侍医は、由梨亜（ではなく千紗）の父と母に言った。

「薬を処方しておきますので朝と夕に飲ませて下さい。あと無理に起こして疲れさせないようにお願い致します。それでは鈴南殿、薬を調査してお渡ししますのでこちらへ」

侍医はそう言うのと鈴南と一緒に部屋を出て行った。

「千紗……」

由梨亜（ではなく千紗）の母は、千紗の額にかかっている髪を掻き上げ、優しく、にっこりと微笑んだ。

「千紗、貴女は一日、眠り続けていたのよ。夏休みが明けたその初日に、貴女、一人で、屋上でお弁当を食べていたでしょう？ その時、貴女は倒れてしまったのよ。貴女が倒れたと聞いて、本当にびっくりしたわ。心臓が止まったのかと思ったのよ」

「千紗、お前は起き上がれるようになったが、まだ本調子ではない。無理せず寝ていなさい。なにか欲しい物があれば、言ってくれ。できる限りのことは叶えてやるから」

「いいえ。何もありません」

千紗がそう答えると、由梨亜（ではなく千紗）の父は

「そうか。では、何かあったら鈴南に言え」

と寂しそうに言い、部屋を出て行った。

由梨亜（ではなく千紗）の母は、千紗の枕元に座った。

「千紗、もうしばらく眠っていなさい」

由梨亜（ではなく千紗）の母は、千紗を愛おしそうに撫でて、子守唄を謡い始めた。

千紗は、

（十三歳になったのに子守唄か……）

と少々呆れながらも、その手の感触を楽しんだ。

千紗の（実は養）父と（実は養）母は共働きで、幼い頃の記憶は、ほとんど保育所で遊んでいる記憶だ。

物心がついてから、（実は育ての）両親に甘えた記憶は少なく、親としての優しい手をほとんど知らないのだった。

しかも、千紗の（実は養）父が死んでからは、（実は養）母は家計を支える為に今まで以上忙しくなり、休みもほんの少ししか取れなくなった。

そして、その手触りを楽しんでいるうちに、千紗は、深い眠りへと引き込まれて行ったのだった……。

千紗は三日も経つと、元通り元気になった。

千紗は動き回れるようになると、屋敷中の絵や写真、今まで撮った成長記録などを全て確かめたが、恐ろしいことに、全て由梨亜の代わりに幼い千紗が写っていた。

最初は記憶を探っても何もなかったが、しばらく時間が経つうちに、その光景が浮かび上がり、その頃の、自分の本当の記憶が思い出しにくくなり、千紗は鳥肌が立つのをまざまざと感じた。

「ど、して……」

そう、声が漏れるのを、抑えることができなかった。

（あたしは……由梨亜の記憶を、少しずつ失っていくの？ だんだん？ 少しずつ？ だったら……いつそのこと、最初っから、全部奪えば良かったのにつ……！）

そう思うことを……抑えることが、できなかった。

千紗は目覚めてから一週間後、学校へ行くことになった。

そして学校へ行った千紗が教室のドアを開けると、喜色満面の並なみ樹咲きさきが振り返った。

「あら、千紗様！」

そう言つと、驚異的な速さで千紗の前まで来て、その勢いに、思わず千紗は一步退いた。

「千紗様、お加減は宜しいですか？ あたくし、千紗様が学校に来られるようになって本当に嬉しく思います！」

咲はそう嬉しそうに言つと、嫌そうに後ろを振り返った。

「おお、嫌だ。千紗様、ご覧下さいな。この清潔な学校に黴菌があります。お前達、何をしているの？ すぐに追い出しなさい。千紗様にも、このあたくしにも、この黴菌と同じ空気を吸わせるおつもりっ？ お前達庶民とは違い、大貴族である千紗様はとても繊細なのですよっ？！」

その言葉に、千紗は由梨亜が転校してきたばかりの頃のことを思い出し、嫌な気分になって眉を顰めた。

けれど、咲に一喝されたクラスメイト達は、咲に目を付けられるのが嫌なのか、続々と動き出した。

「おい、香並かなみ、立てよ」

「そうよ。第一、咲様と名前が二字も被ってるなんて、目立ちたがりにもほどがあるわ！」

みんなにいじめられている香並都樹つきは、優しく大人しい気性の少女である。

だが、そこが咲の癪に障ったのか、都樹は咲にとって、千紗以来である二年振りのいじめのターゲットになっていた。

都樹は、みんなに囲まれ、怯えていた。

「おい、何か言えよ」

「えーっ。黙秘権かよ」

「っつーか、香並にそんな権利なんてあんのかあ？」

「って言うか、香並に人権ってあったっけ？」

「ないない、絶対ない！ って言うか、香並って、人間だったっけ

か？」

「ああ、こいつは黴菌だ！」

「ええ、その通りです！　これからみんなもそれを黴菌と呼びなさい！　それは人でもないし、名前もないのですから！　力でもって、このことを思い知らせなさいっ！」

咲の言葉にクラス全員で笑い、都樹の持ち物を全て都樹に向かって投げ付け、殴り蹴る。

その笑いには、咲は気付いていなかったが、恐怖が滲み出ていた。本当はいじめたくないけど、言い返したり、参加したりしなかったら、自分がいじめられるから――

自分だけはいじめられたくないし、人身御供が他にいるなら別にそれで――

そういう思いが、このクラスを覆っていた。

しかも、このいじめは、傍観者という者が存在できない。

もし傍観していたのなら……例えば、みんなでいじめている人物を取り囲んでいる時、もし一人だけ取り囲まなかったら、今度はその人がいじめられる。

もし全員でやらなかったら、咲が教育委員会に泣き付き、全員、退学か停学となるだろう。

先生達も、怖いから言いなりだ。

千紗には、その思いが痛いほど分かる。

千紗も、二年前までいじめられた一人だったから。

その思いを、まざまざと付き付けられた張本人だから。だが、だからと言って無視する訳にはいかない。

千紗は、都樹を庇うつもりだった。

由梨亜が千紗を救ってくれたように、今度は千紗が。

「あんた達っ！　もう、好い加減やめなさいよっ！」

「千紗……様？」

咲は呆然としながら言った。

恐らく、五年生の時に転校して来た『本条由梨亜』と、それまで

いじめられていた『彩音千紗』という存在が消え、五年生で転校して来た『本条千紗』という存在のみになった為、咲が千紗をいじめていた事実はなく、勿論『本条家の令嬢』に咲がいじめを咎められることもなく、いじめが再発したのだろう。

その事実に苛ついた千紗は、途惑う咲を丸っ切り無視する。

「あんた達ねえ、そういう風に嫌々いじめるのがって楽しい？ 本当は嫌なんだけどって思ってるの、ものすっごく分かるよ？ そうやって、咲が喜ぶだけ！ もう、こないじめなんてやめてっ！」

千紗はそう叫ぶと、都樹の所に行き、手を差し伸べた。

「大丈夫？ 都樹」

「すみません……ありがとうございます、千紗様」

「やめてよ、敬語なんて。他のみんなも」

千紗は、周りをグルッと見渡した。

「今後一切、いじめはやめて。もしあたしの目の届かない所で咲がいじめていたら、すぐにあたしに言って。……咲」

そう言くと、千紗は咲に向き直る。

「今後一切、いじめを禁じます。それがあたしの耳に入ったら、どんなことになるのか分かってるわよね？ 本条グループには、そういうようなことをやるだけの力はあるわよ」

千紗が脅しを掛けると、咲は顔を歪め立ち去った。

「千紗様……本当に、ありがとうございます」

都樹が千紗に向かってお礼を言くと、

「そんな大したことをやったつもりはないわ。だから、お礼なんて必要ないわよ」

「ええ。分かりました、千紗様」

「あ、そうだ。あたしのこと敬語で呼ばないでね。絶対に」

「そ、そんな……本条グループのご令嬢を……」

「だから、そういうことを気にしないでね！」

千紗が強引に押し切ると、都樹は顔を僅かに引き攣らせながらも、何とか言った。

「は……う、うん！　ち、千紗、ちゃん！」

千紗は、嬉しそうに微笑んだ。

そしてそれを見た都樹も、ぎこちないながら微笑み返した。

その日、千紗は感覚的にはかなり久し振りに部活へと行った。

「あゝっ！　大丈夫？　もう何ともないの？」

「あ、はい。ご心配をお掛けしました……」

「ううん、そんなのは大丈夫よ。でね、その……夏休みにやった、あの百不思議のことなんだけど……」

「やっぱり、悪戯ですか？」

千紗にズバツと切られ、柑奈^{かな}は絶句した。

「うん……そう。気付いてたの……。何かがっかり。からかいようないじゃない」

「当たり前じゃないですか、柑奈先輩」

千紗と同級生の子が、ガツと近寄って来た。

「ね、千紗。あたし達^{たち}がやった時に見付けた、この指輪^{ゆびわ}。やっぱり、先輩の悪戯^{いたづら}だったんだ。で、千紗が学校休んでちよつと経ってから、先輩達がネタばらして言って、冗談^{冗談}だったってばらしたの」

その言葉に、千紗は笑って言った。

「やっぱりそうかあ……なんか、怪しいって思ってたんだよねえ……。ね、あたし達が見付けたのって、ほんとにその『指輪』だった？」

「うん。そうだよ？　何言ってるの？　千紗」

その言葉に、千紗の顔は笑っていたが、背筋に冷や汗が流れるのを抑えることはできなかった。

第五章「時と宇宙（そら）を越えて……」――3

「御久し振りに御目に掛かります、陛下。この度、わたくしを花鶯^{かおう}国^{こく}へ連れ戻して下さいましたこと、本にありがたく存じます」

「富実樹^{ふみき}第一王女よ、大きくなられ、再びこの国に御戻りになられたこと、喜び申し上げます。これからは、この国の王女として、また跡継ぎの娘として、そして弟妹達の姉として振舞うよう、御願い致します」

そう言ったのは、一段高い所にある玉座の足元に控えている、一見ただでかなりの大貴族だということが分かる男性である。

そして、その玉座に座った威風堂々とした男性の足元に、略式ではあるが一国の国王に、そして自らの父に、公式な場で挨拶するのに相応しい礼をした、美しい少女がいた。

ここは花鶯国の王宮、カサミアン宮の玉座の間。

男性の足元にいるのは、生後一ヶ月足らずでこの国を離れ、そして十三歳になった今戻って来た、花鶯国第一王女にして第一王位継承者である、花雲^{かつぎよう}恭富実樹。

そして、玉座に座っている男性は言うまでもなく、ここ花鶯国の国王にして富実樹達十五人兄弟の父である、花雲恭^{ほふ}峯慶^{ほうけい}。

そして、左右の長机に座っているのは、普段から王族との接触が許されている大臣級の貴族や官吏十数人と、庶民からの選挙で議会の委員になつたうちの代表五名。

そしてその短い対談が終わり、富実樹と峯慶は、一緒に後宮の峯慶の部屋の一つに行った。

部屋に着いてから、峯慶は富実樹に向かって尋ねた。

「富実樹……本当に、良かったのか？ 戻ってきて。来年でも良かったのだよ？ いくら向こうにいても、こちらに戻って来るその時は、変わらなかったのだから……」

「……そのことは、仰らないで下さい。私も、後悔していますから

……」

「では、何故そうしなかったのかな？ 私の娘よ」

峯慶が茶目つ気を出してそう尋ねると、富実樹は少し唇を尖らせて答えた。

「あれ以上、千紗ちさが——私と入れ替わった人が、真実から押し出されていくのに耐えられなかったんです。それに、知らせてしまったとしたら、私も千紗も、どこかきこなくなってしまうです。それだったら、告げたらすぐに戻る方が良かったんです」

「そうか……それでは、お前はこれからこの国の地理歴史、王族としての立ち居振る舞い、言葉遣いその他諸々を学びなさい。丁度よい教師もいることだしな」

「御父様、丁度よい教師とは、どなたですか？」

「今呼んで来るから焦らないように。由梨ゆり亜妾あしやう、富瑠美ふるみを呼んで来なさい」

由梨亜妾——富実樹の母は、その『富瑠美』を呼びに行った。

しばらくして、ノックの音がして、由梨亜妾と、その『富瑠美』だと思われる、富実樹と同じくらいの少女が入って来た。

「失礼致しますわ。御父様」

（御父様……？）

富実樹は嫌な予感に駆られたが、見事にその予感的中した。

「富実樹、これは深沙祇妃みさぎひの娘で第二王女、第二王位継承者である富瑠美だ。つまりは、お前のすぐ下の異母妹いもむとだよ」

そう紹介された富実樹の異母妹の富瑠美の髪は、富実樹と似てふわふわと波打っていたが、金系に勝るとも劣らない見事な金髪で、目は富実樹と同じ桃色だが、色は富実樹よりも濃い色で、背は富実樹より少し小さい。

そして、髪の色、瞳の色、それに身長を見ないことにすれば、瓜二つであった。

「御異母姉様おねえさま、御初に御目に叶いまして、わたくし、本当に嬉しゅう御座いますわ」

「貴女は……私の異母妹の……富瑠美様？」

富実樹はどこか呆然としながら問い掛けた。

だが――

「それはいけませんわ。御異母姉様」

いきなり、富瑠美がきつぱりと言い返して来た。

「まず、一人称は『私』ではなく『わたくし』と仰つて下さい。それにいくら母親が妃と妾ではあつても、第一王位継承者、及び第一王女は貴女様で御座います。つまり、わたくしの異母姉に当たります。ですので、わたくしのことは富瑠美と御呼び下さいませ。それから、絶対に他の兄弟に様付けをしないで下さい。実の兄弟で、それも貴女様の方が格上であらせられるというのに、それは大変可笑しいことですわ。誰に何度訊こうとも、誰もがそう返すはずに御座います」

いきなりどぎつぱりと言われ、思わず目を白黒させていると、苦笑しながら峯慶が言った。

「富実樹、富瑠美はお前の異母妹ではあるが、お前を裏切る可能性の少なく、そして最も地理歴史儀礼祭典等に通じている。これからお前は富瑠美に付いて、様々なことを学びなさい」

「は、はい……分かりましたわ。御父様」

それから、

（どうして……富瑠美は、あの深沙祇妃の娘なのに……）

と不思議に思い富瑠美を見ていると、富瑠美は苦笑して答えた。

「御異母姉様、このことを不思議に思うのも、無理は御座いませいわ。わたくしは、御異母姉様とはほんの二時間差で産まれ落ちましたが、そのたったの二時間で、わたくしは第一王位継承者にはなれませんでした。それに、わたくしの御母様――深沙祇妃は失望して御母様付きの侍女侍従共々、生後間もないわたくしを育児放棄してしまつたのです。早い話が……そうですね、ボイコットですわ」

「ボイ、コット……？」

富実樹の問いに、富瑠美はあつさりと答えた。

「ええ。第二王位継承者とは言え、王位継承権を持つ子供が死んでしまつては堪りませんから、御父様が、わたくしを御母様から無理矢理取り上げて、由梨亜妾に預けたのですわ。そして名付けもして頂きました。ですから――」

「ちょ、ちよつと待つて。貴女の御母様……深沙祇妃は、名前も付せずにボイコットした訳？ それつて大事じゃない！ 誰も、何も言わなかったの？」

咄嗟のことで、富実樹は思わず敬語を使うのを忘れてしまった。

だが、その途端……富瑠美の冷たい視線が、富実樹を射抜いた。「それでは、後で言葉遣いの猛特訓をさせて頂くといいことで……」その地を這うような低い言葉に、富実樹は思わず一歩後退つてしまった。

「まあ、そうですね。それどころか、御母様の後見人は、皆それに便乗してしまいましたわ。しなかつた方も、いるにはいましたけれど……。ですが、他の方々は、わたくしが第二王位継承者であること、そして阿実^{あみ}亜女^{あじよ}に懷妊の兆しがあることから、御父様と由梨亜妾以外からは、本当に無視されましたわ」

「へ、へえ……」

思わず、富実樹は感心してしまった。

「そうですね。こんなことを話している場合では御座いませんでした。それでは、早速授業の方を始めたいと思います。御異母姉様、授業のことですが、この国のことについてどのようなことを御存知ですか？」

「はい。えつと、この国が宇宙連盟の長的役割を持っていることや、地球連邦が他の星の存在を知らなかった時の日本国との関係など、基本的なことしか……」

「そうですね。では、地理歴史から始めましょう。また、それらの合間を縫って言葉遣いと儀礼作法を。それでは地理から始めましょう。こちらへ。あと、昼餐は御食事のマナーの練習です。やることは沢山ありますわ。それと、ことによつては他の弟妹達の力も借り

ますわよ」

「は、はい……」

さっさと歩き始めた富瑠美の後を慌てて追って行っただ、富瑠美が滑るように歩いているのに対し、富実樹はそれと逆だった。

そして部屋に残っていた富実樹の父母は、富実樹の

「どうしたらそういう風に歩けるの……？」

と言う弱音を聞き、笑い出してしまった。

峯慶はゆったりと重々しく、由梨亜妾は軽やかに。

「まあ、なんて面白いこと……」

由梨亜妾が言つと、峯慶も言つた。

「ああ。こつ言つ子供達に育つとは、正直言つて、あの時は思つてもみなかった……」

「そうですね。本当に、予想も付かないことばかりで、面白う御座います。……そう言えば、陛下。富瑠美があゝの誓約書を書くこと、深沙祇妃は御承知なさいましたの？」

「ああ、それか。勿論、気が狂ったかのように騒ぎ出したよ。だが喚いている隙に富瑠美がさっさと署名して、それでことなきを得た。さすがは、富瑠美だ。其方が育てたことはあるな」

「……ええ。まあ、そのことは置いておくとして……それは、深沙祇妃は騒ぐでしようね。富実樹に何も無い限り、王座を狙わないという誓約書だなんて……」

「ああ……。そうだな」

峯慶は小さく笑みを洩らして言つたが、ふと、真顔になつて由梨亜妾に問い掛けた。

「話は変わるが、あの二人は、本当に自分の名前の意味を解つてくれるだろうか。我々が、心を込めて付けた名を……」

峯慶のその溜息のような言葉に、由梨亜妾が風のように呟いた。

「富実樹は、『富や名声を陰謀などによって手に入れるのではなく、優しい行いによって心を富ませること、樹木を視てその神秘を感じる美しい心、そして、その時に実つた果実を、単なる食糧としてみ

なし、感謝する気持ちすら持たないのではなく、ここまで育ってきたその生命力と大地の恵みに感謝する心』を、富瑠美は『心を富ませ、豊かな心を持つように、高貴さを表すラピスラズリ——瑠璃のように気高い心を持ち、それでいて弱者を思いやる気持ちを持ち、宝石のように美しく、きらきらと光る美しさ、心を持つように』と、わたくしが付けた名のことですね？」

「ああ。……富実樹は解ってくれるかも知れないが、富瑠美は、真実解るとは思えないな。あの深沙祇妃の血を引いているのだから、やはり似る所はある。富瑠美は、物事を深く追求せずに、上辺だけを飲み込んで行動することが多々あるから……。富瑠美には、この意味が、解らないだろう。……さて、そろそろ行かなければ。処理しなければならぬ書類が山ほど残っている」

「いつてらっしゃいませ、陛下。ですが、わたくしの記憶違いでなければ貴方様は、書類の処理は、他の御兄弟と比べて、凄まじい速さでこなされていたと思いますが……」

由梨亜妾は、茶目っ気たっぷりに含み笑いをし、峯慶も同じように笑い返してきた。

どうやら、この夫婦は茶目っ気がたっぷりとある、似た者夫婦のようだ。

「それは、他の兄弟が少し遅くて、私が少し速かったということだけだよ」

そう言つと峯慶は部屋を出て執務室へと向かい、由梨亜妾は自分の部屋へと向かった。

第五章「時と宇宙（そら）を越えて……」――3（後書き）

今回の話で、第？部はようやく中盤まで進みました。ここまで読んで下さって、ありがとうございます。

次話からは、少し時間が飛んで四年後になります。それぞれ、本来の居場所に戻った二人、特に富実樹（由梨亜）の方が、どんな活躍を見せて、どんな選択をするかに焦点が当たることになります。富瑠美以外の富実樹の兄弟達も登場する予定ですので、お楽しみ頂けたらと思います。

この話はまだまだ続きますので、どうぞ宜しくお願いします。

第六章「四年後……」― 1

それから、四年近くの月日が流れた。

現代に戻って来ておよそ二年半後、千紗^{ちさ}は高校も公立校へと、両親の反対を無理矢理押し切って入学した。

そこは、大学への――特に有名大学への進学率がとても高い学校で、しかも偏差値も平均が七十近くあるというとても頭のよい学校であり、いくらお嬢様でも簡単には入学できない、実力で申し上がつて来た学校なのだ。

なので、耀太^{ようた}も

「公立校……進学校……うゝん……」
と唸るしかなかった。

進学校と言うことは跡取り娘が優秀であるということを証明できるが、私立ではなく公立、しかも男女共学という所が躊躇^{ちゅうちゆ}わせるのだった。

だが、結局は千紗が勝利したのである。

しかし、三人の婚約者候補の問題があった。

千紗はこの婚約者候補達と会いたくないから、高校も部活に入ろうと決めていた。

そしてどうせなら一番忙しい部活に入ろうと思い、体験入部した文化部（運動部だけは何かあっても絶対に駄目だと言われたので）の中で、レベルが高く忙しそうだった吹奏楽部に入部し、ホルンを担当した。

そして、意外と千紗には才能があったらしく、中学から続けている人には及ばずとも、そうでない一年生の中では一番上手くなった。三年生が引退した頃には、中学校から続けている人と並ぶぐらいまで上手くなった。

そして二年生になり、全地球コンクールのユーラシア大陸大会で好成績を修め、しかしながら連邦大会には出場できずに先輩達は引

退して行った。

先輩が引退した後、千紗が部長となり部活を引き継いだ。それでも耀太と瑠璃は婚約者候補を諦めず、しつこく誰が一番いいかを訊いて来た。

千紗は本条家の令嬢として相応しい身のこなし方を身に付けていたが、それと同時に由梨亜のことを少しずつ忘れていき、一年経った頃には完全に忘れた。

たまに釈然としないことや、寂しく感じる事があったが、小さなことだった為、そのことすら忘れてしまった。

富実樹は、一年間富瑠美達富実樹に好意的な弟妹達から時に厳しく、優しく、厳しく、厳しく、厳しく色々なことを教えてもらい、他の弟妹達に追いつくぐらいまでになった。

そして、富実樹が戻って来て一年後の年、峯慶は身体の調子を崩してしまった。

長い間ベッドから降りられない身体になってしまったのだ。

なので、峯慶は譲位して病気の治療に専念することになり、多数の反対があったものの、第一王位継承権を持っている、この国に来てまだ一年と少しの富実樹が女王として王位に即くことになった。

富実樹はただ純粹に父を心配し、王位に即いたからには、他の弟妹達と力を合わせて国を護って行こうと考えていた。

そして、富実樹が王位を継いで二年間が過ぎ、三年目が始まって半年が経った頃、この花鶯国では何かが起ころうとしていた。

そこでは、官封貴族と呼ばれている、官位を封じられている貴族、官吏、成人した王族が大会議室で討論会を開いていた。

「陛下、地球連邦は陛下が御育ちになられた地でおられることは存じておりますが、そのような些事に心を傾けるのではなく、寛大な御心を御持ちになられて下さいませ」

「だから、そういう意味ではありません。貴方方は地球連邦を、武力を持って従わせ宇宙連盟に加盟させ、宇宙連盟の長である花鳥国の言うことを聞かせようと仰いますが、わたくしはその方法が間違いだと言っているのです。武力ではなく話し合いを持って連盟に加盟させないといけません。武力を使ったら、必ず死者が出ます。それは、誰かの親であり、兄弟であり、子供であるのです。誰かが死んだら、誰かが悲しみます。そして、悲しみは恨みを呼び、そして復讐へと発展する可能性が高くなります。そして、復讐はまた新たな悲しみと恨み、復讐を呼び、グルグルと回り続けます」

富実樹は、唇を引き結んでぐるりと辺りを見渡した。

「ですが、その原因となることを起こさなければそのようなことは起こらず、復讐自体なくなります。そして、そのようなことがあるのなら、どこかで断ち切らなくては国と国との関係が成り立ちませんわ。そして、一度亀裂が入ってしまった関係は戻りがたい物です。だから、そのようなことを、他の方法があるにも拘らず行使することはなりませんわ。絶対に。それに、宇宙連盟の存在意義は、全宇宙の平和と共存を維持すること。武力などを使ってしまうと、その理念に真つ向から相反することになりますわ。何か反論は御座いますの？」

富実樹の呼び掛けに、富瑠美派の貴族は黙り込んだ。

反論しようにも、富実樹のあまりにも上手い弁舌に、上手く反論する術が見つからないのだ。

だがそんな状況の中で、富瑠美は何と富実樹の言葉遣いを注意した。

「陛下、『だから』ではなく『ですから』と御言いになられなければなりませんわ。また、『ずっとグルグル回り続けます』も、できれば『半永久的に悲しみ、恨み、復讐と連鎖するのです』に直した方が宜しいかと。一年間の特訓が足りなかったのかしら……？」

「いいえ、充分足りておりますわ！ただ、熱心になるとつい……」
「なるほど。では、熱心になって言葉遣いをきちんとするよう常に

御心掛け下さいませ。それではもう意見は出ないようなので、本日はこれでお開きということに宜しいですか？」

富瑠美が立ち上がってそう言くと、皆が頷いた。

「それでは、明日の総票会そうひょうかいで、この議題の結果を」

総票会とは、一定年齢に達した王族、官封貴族、地封貴族ちほう、官吏、宗教家、学者が投票する物である。

富実樹がそう言い、討論会は終了となった。

富実樹は早々と書類を自分の親族の貴族に預け、大会議室を立ち去って行った。

富実樹は自らの部屋へと戻り、長椅子の上に、バフィンと倒れ込んだ。

「もう、嫌になってきちゃうよ……」

「何が嫌になるのですか？ 富実樹御姉様。それと、言葉遣いを直して頂かなければ」

「分かっておりますわ。ただの独り言です。それよりも些南美さなみ。どうかなさいましたの？」

富実樹を、十四歳の富実樹の妹で第五王女、峯慶の第九子である些南美が覗き込んだ。

些南美はくすくすと笑うと、富実樹に言った。

「富実樹御姉様、そのように寝転がるのはとても御行儀の悪いことで御座いますわよ。即刻やめて頂かなければ富瑠美御異母姉様おねえさまの御所に参りますが、どう致しますか？」

「はいっ。起きますわっ！」

富実樹は跳ね起き、長椅子に座り直した。

「それで富実樹御姉様、今日で、あのことについては最後の御前会議でしたが、何か御座いましたの？」

「ええ。わたくしは地球連邦を宇宙連盟に加盟させるのは大賛成で

す。地球連邦の方々にはわたくし達よりも器用ですし、科学の発展にも繋がると思いますのよ。ですが、武力でそんなことをしてしまつたら、地球連邦から好意的な協力は得られにくいと思うのです。わたくしも、同じ立場でしたらそう考えると思います。ですから、できれば最初から武力を使うのではなく、まずは話し合いで加盟させた方がよいと何度も言っているのですが、富瑠美派の貴族達の反対が激しくて。総票会でどうなるかは、最後の御前会議で大体分かると御父様は以前仰っておりますが、わたくしには全く分かりませんでしたわ。それは、他の方も同じようです」

「そうなのですか。ですが、いつの世にも、国民全員から支持される完全無欠の王なんておりませんわ。もし反対意見が出たら可笑しいという物以外で反対意見が絶対に出ないのなら、そこは王の言うことが絶対で、王に反対することは諸悪の根源だと決め付ける国だけです。真に喜ばしいことながら、この国はそうでは御座いませんもの。反対に合うのは仕方のないことですわ」

些南美は少し苦笑気味に言った。

「それよりもわたくしは、富瑠美御異母姉様がおうだいじん 篤大臣に御着任なされたことに、とても驚きましたわ」

ちなみに、篤大臣とは花鶯国の大臣の一種で、その大臣には代々王の弟妹になる。

そして、王が退位すれば篤大臣も政から身を引き、篤大臣が位を退けば王も退位するという慣習がある。

つまり、花鶯国の国王と篤大臣は、いわゆる一蓮托生の間柄なのだ。

一年も前の話を言われ、今度は富実樹が苦笑気味に言った。

「ええ。大抵の方はそう思われるでしょうね。富瑠美は、あまり物事を深く考えずに表面を見て判断することは多いのですけれど、政治力と様々な方面に通ずる知識は、賞賛に値しますわ。まだこの国に来て四年のわたくしとは、まるで比べ物になりませんもの」

「それは、わたくしも認めますけれど……」

些南美は少し唇を尖らせて言いました。

「わたくし、やはり富瑠美御異母姉様を鶯大臣に据えたのは、間違いだと思えますわ。幼い頃はわたくしと一緒に育ち、御母様のことを慕っていらつしゃるとはいえ、何しろあの深沙祇妃みさぎひの娘ですから他にも、富瑠美御異母姉様に準ずる方はいらつしゃるでしょう」

富実樹は小さな溜息をつくと苦笑し、何も知らない子供に教えるように言った。

「いいかしら？ 些南美。物事は……特に政治は、こちらの信じる物だけを推し進めては成り立ちませんわ。これは、わたくしと富瑠美のことでも言えることです。わたくしが十三でこの国に戻ったことで、自らが後見する深沙祇妃の子である、富瑠美が王位に即けなくなってしまうたのですもの。深沙祇妃の後見人達は、皆大損をしたと思われますわ」

富実樹はそう言つと、苦笑した。

「沙樹奈后さきなこうは、息子がわたくしの夫となることに決まりましたし、何よりもこの国で生まれ育った王族で御座いますし、御母様とも仲が宜しい方でいらつしゃいますから、このことは深く理解しておいでです。ですが、深沙祇妃はそう簡単にはいきませんわ。元々は他国の王族でいらつしゃいますし、ことは外交問題にまでも発展する惧れが御座います。そして、その不満を解消するには、深沙祇妃の子供のいずれかにそれなりの役職を与えるのが一番ですわ。丁度、富瑠美は政治面でも知識面でも才能に溢れておりますから、鶯大臣に就けただけのことです。それに、富瑠美がいなくても、他の誰かが富瑠美と同じことを言い出すでしょう。つまり、結果としてあまり変わりはありませんわ」

「ですが、富実樹御姉様……」

些南美が反論しようとした時、扉が叩かれた。

「失礼致します、富実樹御異母姉上あねうえ」

そう言つて、たった今話題にしていた沙樹奈后の長男で、第一王子であり峯慶の第三子、そして富実樹の婚約者である杜歩埜とふやが入つ

て来た。

「あら、杜歩埜。どうなされましたの？」

「またもや富瑠美異母姉上達を論破なされたと小耳に挟み、やって来たのですが……」

そう言つて苦笑すると、

「どうやら、先客がいたようですね。さすが些南美、情報が速い」

「そんなことは御座いませぬわ。わたくしは結果しか存じ上げませんでしたもの」

そう言つて、二人は互いの目を見つめ合い、くすくすと笑つた。

富実樹はそれを苦笑して見ていたが、長椅子から立ち上がると、
「どうやら、わたくしは御邪魔なようですわね。それでは失礼致しますわ。久しぶりに、御母様に会つて参ります。どうぞ、わたくしの部屋での逢引きを御楽しみ下さいませ」

と言ひ、本当に部屋を出て行つてしまった。

見る人が見れば、杜歩埜と些南美は相思相愛だということがはっきりしている。

だが、現実的に見て、二人が結婚できる確立はとても低い。

この国の王家は、近親婚で成り立っている部分がある。

男王の場合、二人が嫌がらなければ——まあ、滅多に嫌がることはないのだが——后は一番高い王位継承権を持つ妹がなり、女王の場合は一番高い王位継承権を持つ弟と結婚する。

男王の場合、確実に妹の子供が王籍に残るとは限らないが、女王の場合は血が色濃く保たれる。

しかし、それは王位に即くことができれば、の話。

それを叶える為には、富実樹と富瑠美がどうにかなつて王位を継ぐことができなくなり、更に阿実亜女あみあじよの長女で第三王女、峯慶の第四子の璃枝菜りえなと、沙樹奈后さくしなごの長女で第四王女、峯慶の第七子の早理恵さりえがどうにかならなければならない。

そして、それはとても可能性が低い。

また、他の臣下達はそのことに気が付いていない。

二人は、互いに視線だけで満足するしかないのだった。

だが、杜歩埜が富実樹と結婚すれば、正式に認められなくても可能性はある。

それは、『総下』^{そうげ}と言う制度だ。

この国では、男王の場合、后、妃、^ひ妾の^{めかけ}子供が三人、最貴、^{さいき}最侍、^{さいじ}最女の子供が二人産まれれば、もうその妻達は妻としての役目は終わる。

総下とは、昔それに不満を持った王がいて、それを解消させる為に作られた制度だ。

だが、今はそのような意味合いとは違う。

今は、まず貴賤を問わず総下になることを嫌がらなかった二十一歳の娘達が年に一度集められ、王に目通りを許される。

そして、それは一生に一度の大チャンスだ。

王に目通りし、その娘達の中から王の気に入った娘を年に二人から五人ほど選ぶ。

そして、選ばれた娘達は二十四歳の誕生日を迎えるまで王の総下として過ごすのだ。

二十四歳の誕生日を迎えた後は、大半はどこかの貴族の二番目や三番目の妻になる。

つまり、女性としての箔が付き、玉の輿に乗れるということになる。

そして、王位に即いたのが女王だとしても、その夫が総下達の相手をする。

それを利用すれば、富実樹が杜歩埜と結婚した後に、些南美は総下になれるのだ。

また、王や女王の夫が気に入った総下がいたら、もしくはその子を産んだら、その総下は一生後宮にいてもよいことになる。

それまでのおよそ九年間、富実樹は些南美達の恋愛を見守るつもりだった。

たとえ自らの子供が王位に即けなくても、総下の子供は後宮の侍

女や侍従となる慣例だから、血縁者の為に働かされるとしても、それでも愛する人の隣にいられるのなら満足だろうから。

自分なら、そうだ。

今でも、夢の中で目覚めたら香麻こうまが目の前にいた、と言う夢を度々見ている。

あの日、最後に逢った香麻は、少し照れ臭そうに笑っていた——その笑顔が、夢の中で蘇る。

そして、いつもその時の自分は、中学生の由梨亜なのだ。

諦めてはいる——だが、心の何処かで諦められない自分がいる……。

そのことで、富実樹の胸は張り裂けそうに痛んだ。

そのようなことを考えながら歩いていたら、いつの間にか母親の部屋の前まで来ていた。

第六章「四年後……」― 2

「失礼致します、御父様、御母様」

今、峯慶は妾とその子供達の住まう階に当たる、二十階にいる。

なので、父に会いに行く時も、母に会いに行く時も、同じ階に行けばいいのだ。

「あら、富実樹。どうなさいましたの？」

「いいえ。何もなかったのですけれど、御二人に御会いしたくて来てしまいましたわ」

富実樹はそう言うと、峯慶の足元のベッドに座った。

「御父様、御久し振りで御座います」

「富実樹、御前は相変わらず元気だな。その元気を少し分けて欲しいくらいだよ」

峯慶は苦笑して、目を覗き込んだ。

「そんなことを言って、本当は何か別の理由があるのではないか？」

「えっ？ 何がですか？」

富実樹はしらばつくれると、机の上に置いてあったプズイと言う、甘くて皮ごと食べられる一口大の果物を取り、口に運んだ。

由梨亜妾はくすくすと笑うと、富実樹に向かって言った。

「富実樹、丸分かりで御座いますわよ。嘘を付く時に何かをするのは、富実樹の癖のようですからね」
「うっ」

富実樹は、軽くむせてしまった。

「これ、富実樹。ここでむせたら大変なことになるぞ」

「は、は……い、御……父……様っ。ゴホゴホ」

富実樹は何とか飲み込むと、一息ついた。

「それで？ 富実樹。何がありましたの？ わたくし、気になりますわ」

由梨亜妾が、少女のように目をきらきらさせて言った。

「あ、あの……えっと、その……」

「富実樹、私も由梨亜妾も気になるのだから、さっさと言って御終いなさい」

これまた峯慶も、まるで少年のように目をキラキラさせて言った。歳を取っても、もう十六になる子供がいても、相も変わらず少年少女のような夫婦だ。

富実樹は言葉に詰まり、

「し、失礼致しますわ。わたくし、やはり戻りますわね」

そう言つと、慌てふためき、部屋を逃げるように『静々と』飛び出して行った。

それを見ていた峯慶と由梨亜妾は、思わず吹き出していた。

「面白いこと。必死で隠そうとしても、わたくし達には分かっていることですの……」

「ああ。しかも、それを解消するには杜歩^{とふや}と結婚するしかないかな。富実樹は地球連邦で育つた為、恐らく近親婚には嫌悪を抱いていることだろう。それを、この国の風習に合わせるようになって……可哀想なことをするな」

「ええ。わたくしはこの国で生まれ育つて来たものですから、王家の近親婚に嫌悪などを感じたことは御座いません。わたくしは深沙^{みさ}祇妃^{ぎひ}の、沙樹奈后^{さきなこう}と紗羅瑤侍^{しゃらさじ}に向ける目に、他の方に向ける目とは違つて嫌悪が入り混じっていたことで、初めて近親婚を忌み嫌う方がおられるということに気付きましたから。沙樹奈后は陛下の異母^{いも}妹^{いも}ですし、紗羅瑤侍は陛下の従姉であり三従姉^{みつとこ}でありますから、血の繋がりが御座いますもの。最初は信じられなかったのですが、やはり富実樹は嫌悪感を抱いていることでしょうね。近親婚をすれば異常が出る可能性がある為、『汚い』と禁じられている地球連邦で育つたのですから……」

二人は前王と妾^{めかけ}だが、この国の風習を変えることはできず、助言をしようとしても、女王である富実樹が隠そうとしているからには気付かないふりをしなくてはいいけない。

二人は軽く、けれど、それに込められた意味はとても重い溜息をついた。

富実樹は先程の峯慶と由梨亜妾の態度について、頭の中で大癪癢を起こし、不満をぶちまけていた。

（全く、御父様と御母様ときたらっ！ 私が杜歩埜と些南美さなみの恋愛を隠していることを分かっているからさっさと吐きなさい、みたいに！ 御父様にも御母様にも、絶対に分らないわ！ 御父様は最初に産まれて、王位に即くことは分かり切っていたから色々危険はあったけど、ちやほやされて女なんか選り取り見取りで、しかも自分の妾と大恋愛なんかしてっ！ 御母様は戦祝大臣せんしゅだいじんの孫に産まれて、しかも八歳の時に御父様との婚約も確定してっ！ しかも下手に他人に惚れないように屋敷の外には滅多に出ず、侍従なんかとも滅多に会わず！ そして御父様に会った途端に一目惚れなんかしてっ！）

どすどすと、思わず強く足を踏み鳴らしてしまう。

（絶対あの二人には、私の香麻こうまへの、まるで身を斬られるかのように切なく心を絞られるかのように苦しい、何年も逢ってないのに慕い続けてしまうこの気持ち——杜歩埜も些南美も感じているこの気持ち、分らないわ！ 杜歩埜達も、私と似たような境遇ね。互いに好き合って、結婚してもいいってぐらいに好きなのに、相手もそれぐらい好きだって分かっているのに、それでも想いを伝えることは許されず……私は叶わない恋だと知ってるし、もう逢えないから諦められる。だけど、もしこの侍従か官吏か貴族が香麻だったら耐えられないわ。それが杜歩埜達の場合だと、毎日顔を見られるし目配せもできる。だけど、想いは伝えられない……。きつと、私よりも辛いはずだわ）

富実樹は、そこまで考えると、フウツと溜息をついた。

（何とかしてあげたいけど、私には無理……せめて私にできるのは、

私が杜歩塾と二十五歳で結婚した後、あの子を総下そうげにするしかないんだわ……」

「何とか、ならないかしら……」

富実樹は思わず口に出したが、実現不可能だと自分でも分かりきっていること、余計にその言葉は虚しく耳に、心に届いた。

一つ、大きな溜息をついた後、ふと、資料庫の一つに入ってみようと思った。

いつも、自分の周りには人が居る。

そして、気の休まる時はない。

久し振りに一人になりたいのと、周りの人が自分を見つけられるのか試す気持ちだった。

そして、一番近い資料庫へ入った。

そのことで、自らの運命が再び変わろうとするとは、露程も知らずに――。

ガッチャ

ギィィィ

ガッ　グッ　ガッチャン

という、何とも不気味な音と共に、富実樹は資料庫に入った。

この王宮では、トイレや風呂などの一部の例外を除いて、扉は全自動式になっているのに、この資料庫は、簡単な暗号のタッチパネルが付いている所だけが近代的と言える部分であり、扉は人力で開けなければならないのだ。

「何これ。ろくに掃除してないわね……。空調設備もないし。こんな埃っぽいところ入ったの、あの交換日記帳を見つけた時以来よ……。そういえばここ、今現在必要な書類を溜めておく所のうちの一つだっけ。それにしても……。うわ、何これ。九百六十四年前のサマヌ国の王朝交代劇の新王朝を認める許可？　こっちは花鶯かおうこく国の、九百

九十八年前の総下制度の許可？ 確かにこれは捨てるに捨てられない書類ね……。全然使わないけど。それにしても、こんな部屋があると三部屋あるって言うのに、どれだけよ……」

確かに、富実樹の言う通りだ。

データを入れている『キエシュ』自体には、混乱させないようにする為一種類ほどこしかデータは入らないが、見失わない為縦一センチ、横五センチほどの大きさで、それを入れている箱は縦一メートル、横七十センチとなり、その中にはかなりの量が入る。

しかもその箱が天井に付くほどの棚となり、壁など見えず、さらには通路も人が擦れ違える程度の隙間しかない。

富実樹は、頭が痛くなった。

「こんな量、バックアップの為とはいえ、よく取って置くわね……ほんと、頭が痛くなるわ……」

そう思いながら、とりあえず一周することにした。

そして、最後に一番奥の片隅に行った。

そこに行くと、不思議な紋様の描かれた円があった。

「何、これ……？」

近づき、靴の先でその端を擦ってみたが、何も変化はない。

もつとよく見ようと床にしゃがみこみ、その時、体勢を崩してしまい……その円の中に、両手を付いてしまったのだ！

すると突風が富実樹を包み込み、富実樹を円の紋様の中に引きずり込んでしまった。

富実樹は前にも似たような経験をしていたから、驚きはしたものの恐れはしなかった。

何故なら、そこは富実樹が現在の日本州から過去の日本国へ、過去の日本国から花鶯国に行ったその時に通った、あの亜空間と同じだったからだ。

そして、富実樹は半分忘れかけていた、地球連邦の古代語の声が聞こえた。

『貴女は何を望みますか？』

（『貴女は、何を望みますか』、ですって……？ そんなこと、決まっているじゃないの！）

富実樹は理不尽なこととは知りながらも頭にきて、地球連邦の古代語で叫んでしまった。

「当たり前じゃない！ 千紗に会うことよ！」

その途端、身の丈が二メートルほどの、今の富実樹では、どんなに暑くても不可能な軽やかな服装をした女性が立っていた。

そして、何か意味不明の言葉で話しかけられた。

「――？――。――。――」

それは意味が全く分からなかった物だが、前にも聞いたことのあるような物だった。

「いいえっ！ わたくしはまだ、できませんっ！ 御引き取り願いますっ！」

恐怖に駆られた富実樹がそう叫ぶと、さっきの円の外側に座り込んでいた。

（嫌だ……何、これ。怖いっ。怖いよっ！）

富実樹は不安に駆られ、先程の悪戯心を忘れ、資料庫を飛び出していた。

（何……何なの？ これ、怖いっ！）

富実樹が部屋に戻ると、既に杜歩埜と些南美は居なかった。

富実樹は誰の目もないので、寝室のある、後宮の二十五階へと上がり寝てしまった。

「富実樹はようやく気付いたか。しかし、乗り越えられなかったようだな……」

「ええ。冷静に、もつとじっくり考えられれば意味は解ったでしょうね。わたくしとしては、仰っている意味が解り、それでもまだこの国に留まってくれる方が宜しいのですが。それにしても峯慶様、

あの大きさと雰囲気はどうかと思いますが。あれでは誰でも逃げ出しますわ」

由梨亜妾は、あれを仕掛けた峯慶に、文句のような物を言いながらも、刺激しないように、慎重に言葉を選んで言った。

それは、仕方がない。

峯慶は富実樹の望みを何よりも第一に考えているが、由梨亜妾は、十三年ぶりに再会した我が子とそう簡単に別れるつもりはなかった。だから三年前、富実樹が王座に即く前にこのような仕掛けをした峯慶には、軽く恨みを抱いていた。

「それは仕方がない。そう簡単に国を離れてもらっては困る。慎重に考えてもらわねば。それにチャンスがない訳ではない。富実樹はあの時すぐには思い付かなかったが、後で考え付けば……」

「ええ。そうですわね。ですが峯慶様、このように長い時間御起きになられていれば、体力も危うくなりますわ。御夕食の前で御座いますか、御眠りになられた方が宜しいのでは？」

「ああ、そうだな。娘の為とは言え、私は今日、少々無理をし過ぎた……」

そう言つと、峯慶はストーンと眠りに落ちていった。

第六章「四年後……」―2（後書き）

三従兄弟^{みいとこ}：親同士が再従兄弟、祖父母同士が従兄弟、曾祖父母同士が兄弟である者同士の関係。一組の高祖父母（曾祖父母の親）が共通している。自分から見て八親等で、続柄的に見て同世代。

第七章「二人の悪戯」― 1

富実樹^{ふみき}は、眠りから目が覚めた。

窓から外を見ると、もう既に暗くなっている。

時計を見ると、既に午前零時。

この時間は、明日の為に皆が眠りに付いている時間であり、すなわち夕ご飯を食べ損ね、お風呂にも入り損ねたことを意味している。
（あゝあ。お風呂は仕方ないとしても、夕ご飯くらいは食べたかったなあ……）

そのようなことを考えていると、猛烈にお腹が空いてきた。

おまけに、盛大な音を立ててグウグウと鳴り出す。

（やっぱり、こうなったら……）

「厨房に、忍び込むしかないわよ、ねえ……」

そう一言漏らすと、完璧に行く気になってしまった。

（よし、行くか）

富実樹は、今着ていたひらひらで豪華で裾を引きずる服を脱ぎ捨て、ちよつとした悪戯心とお忍びの為に盗んだ、料理と上級侍女のお世話を行う下級侍女の女官服を着た。

久し振りの質素な服、直接脚に風を感じる膝下丈のスカートと、髪を一つに結んで垂らした髪型を楽しみながら、こっそりと部屋を抜け出した。

富実樹は最上階の二十五階にある自分の部屋を抜け出し、昇降機で一気に王族専用の厨房のある三階まで降りた。

三階で降りた後、静かに辺りを見回したが、さすが深夜のこと、誰も見当たらない。

明かりを点けると、もしかしたら起きているかも知れない人に見

られる可能性があるから、そのセンサーを切ろうとしたが、最初から切られていた。

（何なのかしら？　もしかしたら、誰か厨房に忍び込んで……？）
富実樹は不安を抱きながら、こっそりと一番近い厨房の入り口まで行った。

近づいてみると、抑えてはいるが、灯りを点けているかのように細い光が洩れている。

富実樹は一気に扉を開けると、

「そこにおられるのは誰で御座いましょうか？　ここは王族専用の厨房で御座います。ここに忍び込むのは、たかが侍女風情では――」

富実樹の言葉は、途中で途切れてしまった。

そこにいる人物は、王族の話し相手などをする上級侍女の女官服を身に纏っていたが……それを着ている人物は、あまりにも見知り過ぎた顔だった。

「え……」

「あ……」

「お、おね……！」

「し、静かに！　ここで声を上げてしまわれたら、見つかってしまいますわっ！」

富実樹が声を押し殺して、けれども鋭く注意をした上級侍女の女官服を着ている女性は、何と富瑠美ふるみだった。

富瑠美が何とか声を上げるのを抑え終わった時、富実樹は呆れたように言った。

「全く富瑠美、貴女と言う人は……貴女はご飯普通に食べたでしょう？　どうしてこんなとこにいるのよ」

富実樹の口調が王族貴族とは懸け離れた物になってしまったのは、言うまでもない。

「そ、そう仰る御異母姉様おねえさまこそ……何故、御夕食に来られなかったのですか？　そこまで御仕事が御忙しいとは、聞いてはおりませんけど……」

「寝ちゃったからよっ！ 私はすんごく眠くって、寝ちゃったのっ！ この頃あんま寝てなかったからっ！ それと今は言葉遣い注意しないでっ。私はいつも心の中ではこういう風な言葉遣いで物考えてんだからっ。他の人がいないんだから今はいいでしょっ」

「え、ええ、まあ……御異母姉様がそう仰るならば……」

富瑠美が勢いに圧されて思わず言つと、富実樹がいきなり本題に入つた。

「で、富瑠美は何してた訳？」

「ええつと、その、御父様と由梨^{ゆり}亜^あ妾^{じょう}に御食事を作ろうと思つたのですが……御異母姉様、助けて下さい！ わたくし、一度も料理を作つたことがなくて……どうすればよいのか、全く分からないのですっ！」

富瑠美はそう言つと、富実樹にしがみ付いた。

富実樹は途惑いながらも、何とか富瑠美を落ち着かせて話し掛けた。

「ちょ、ちょっと待つて。ええつと、御父様も御母様も、ご飯を食べていないの？」

「ええ、そうです。ですけど、さすがにそれでは、御身体が保ちませんわ。今日は、朝からほとんど何も御口にしていないのです」

「確かに、それじゃあね……そうだ、私が作るわ。で、富瑠美はその補佐をお願い」

「ええ。ところで、何を御作りになるおつもりなのですか？」

「そうねえ……ちょっと待つてね」

そう言つと、台所を歩き回つた。

「……そうね、雑炊とお握りとゼリーを作しましょう。私が雑炊とお握りを作るから、富瑠美はゼリーを作つて。ちょっと待つてね」
と言つと、富実樹は厨房を駆け回り、カートに道具と材料を量つて持ってきた。

「それじゃあ、この端末に調理方法全部書いてあるから。この通りにゼリー作つてね。分かつた？」

「わ、分かりましたわ……多分」

「じゃあ、分からなくなったら訊いて。それじゃあ、活動開始！」

「は、はいっ！」

そして、二人はゼリーと雑炊とお握りを作り始めた。

最初は二人とも無言で作業をしていたが、富瑠美は沈黙に耐え切れずに口を開いた。

富瑠美は、深沙祇妃^{みさぎひ}達が富瑠美が産まれた時にボイコットした為、峯慶^{みねけい}の命令で、十歳までは深沙祇妃と比べて質素な由梨亜妾の元で育った。

だが、それから今までの約六年間は、派手好きな深沙祇妃の元で育った。

つまり、最初的人格・性格構成は由梨亜妾の元で、第二的人格・性格構成は深沙祇妃の元で行われたことになる。

その為、優しい性格と気性の持ち主で質素を厭わない性格でありながら、派手な物や豪華な物を見ても普通に見ている、もしくは好むということが矛盾せずに存在するようになった。

富瑠美は朝起きる時には静かな音楽と優しい侍女の声で目が覚め、食事の時にはずっと楽団の生演奏が演奏され、^{おうだいじん} 篤大臣としての仕事中は高位の貴族官吏の声と侍従や侍女の声が聞こえ、また精神を集中させ、リラックスした気持ちで仕事に臨めるように音楽が鳴り、仕事がない時は侍女と喋ったりゲームをしたり、眠る時は穏やかな眠りに誘われるように音楽が鳴り、またお風呂でも音楽が鳴り、富瑠美の身の周りでは音が絶えることはほとんどない。

だから富実樹と違い、このような沈黙には長時間耐えられないのだった。

「あの、御異母姉様」

「何？ 富瑠美。何か分からないことでもあった？」

「いいえ。けれど、ただ、少し気になることがあって……」

富瑠美は、今まで言えなかったことを口にした。

「貴女は、時々悲しそうな目をするでしょう？ 哀しく、懐かしそうな目をして……あれは何を、誰を思い出しているのですか？ わたくしはそれが気になるのです」

「ああ……あれは、ね。……千紗のことを思い出しているの」

「『千紗』？ それは、誰ですの？」

「私の…… たった一人だけの、何にも換えられない、とても大事な親友よ。大切な…… 大切な友達。そして、私の為に運命を狂わされてしまった、可哀想な人」

「まさか、その方とは……」

富瑠美が富実樹の方を振り返ると、富実樹は料理をする手を止め、遠い目をしていた。

「彼女の名前は、本条千紗。私が本条由梨亜だった時は彩音千紗だった人よ。私が本当は花雲恭富実樹で、千紗が本条千紗だということとは、こちらに来るおよそ一週間前に知ったんだけど、それから、千紗の顔がまともに見れなかったわ。申し訳なさ過ぎて……」

富実樹は、そこまで言うと言作業を再開し、富瑠美にも「早くしないと終わらないわよ」と注意した。

富瑠美が慌てて作業に入ると、富実樹の溜息が聞こえ、話が再開した。

「でもね、千紗はそれを知っても全然怒らなかったし、取り乱しもしなかったし、それどころか信頼してくれたのよ。自分の人生が大きく変わってしまったのに。千紗は、性格が大胆っていうか……その、大雑把なんだけど、正義感の強い子で、いじめられたりもしてた。でも、千紗はそんなことは気にしなくて……私に上流階級の貴族という身分がなければ、今でもいじめは続いてたわ。とにかくそんな性格の子で、私のせいで彩音千紗になったことを知っても、『あたしは由梨亜と会えたし、悲しいことも起こったけど、楽しいこ

とも一杯あったから全然気にしないよ!」って、本気で言えるような子だった。それが分かってたから、申し訳なくて……夢の中でも地球連邦のお父様とお母様より、千紗が出てくる回数の方が多いのよ。それで、益々懐かしくなって、申し訳なくて……ごめんなさい。つまらない話だったでしょう?」

富実樹が申し訳なさそうに言うのと、富瑠美は強く反発してきた。

「そんなことは御座いませんわ! 普通の方でしたら、そのように思うのは当然に御座います。御異母姉様が地球連邦の方々を懐かしく思われるのは、花鶯^{かおつく}国側としては王としての心構えが成っていない、王として相応しくない、すぐにその御気持ちに御捨てになつて下さいませ、と思いますが、強い思い入れのある所なら無理は御座いません。王といえども、人で御座いますからっ!」

富瑠美はそう言うのと、鍋にふやかしていたゼラチンを勢い良く入れ、掻き混ぜ始めた。

ところがあまりにも強く掻き混ぜた為、手が鍋に触れ、軽い火傷を負ってしまった。

「……………っ!」

「どうしたの? 富瑠美」

富実樹は鍋の中に小魚を入れようとしていたが、それをやめて富瑠美の方に行った。

「お、御異母姉様、手が御鍋に触れてしまったら、熱くて痛くて…

…」

「あ、当たり前じゃない! ほら、よく見せて……やっぱり火傷してる」

「『火傷』……? これが、火傷なのですか? わたくし、初めてなります」

何だか嬉しそうな富瑠美の様子に、富実樹は頭を抑えて溜息をつき、さつさと水道まで連れて行って手を水で流し始めた。

「このまま、ちょっと待ってて」

と言うと、辺りを捜し始めた。

「あつたわ。薬箱。富瑠美、もうそろそろいいから水を止めてこち来て」

と言うと、ガーゼを取り出し、火傷の痕を覆った。

「とりあえずこれでいいわ。後でちゃんとやってもらいなさい。これは応急処置だから」

「ええ。ありがとう御座いますわ、御異母姉様」

そう言い、作業を再開し始めた。

そして、その間、富実樹は話をした。

地球連邦で育ってきた、今までのことを。

富実樹が学校で出会った上流階級及び富豪の傲慢さ、強引さ、身勝手さ。

それらの人達と、富実樹の違うこととか。

千紗と会ってから、富実樹の人生がどれほど変わったこととか。

それから、今までのこととか。

今現在の、宇宙連盟が提唱している自由、権利と遠く懸け離れた地球連邦のあり方。

そして……過去に行ったこと。

富瑠美は息を呑み、それらの話を聞いていた。

なんて、悲しい話なのか。

なんて、地球連邦は荒れているのか。

『全宇宙共通連盟憲章』の権利の章の自由の項の一つに、恋愛と結婚の自由がある。

それは、互いに納得していなければ、絶対に結婚はできないという決まりだ。

だが、地球連邦では王族以外でも（王族では慣習となっていることが多いので、王族はその枠から外れている）、互いの意思を無視して無理矢理結婚させるようなことが、今でも平然と行われているという。

確かに、それならば地球連邦が宇宙連盟に加盟するのを渋るだろうし、富実樹が宇宙連盟に地球連邦を加盟させるのに躍起になって

いるはずだ。

たとえ、それが富瑠美とやり方が違っているとしても、そして、富実樹も話し合いでは解決できないかも知れない、と思っ
っているに違いない。

何故なら、富実樹は戦祝大臣せんしゅたいじんに軍備を密かに整えさせている、と言
う噂があるからだ。

それは、いざとなったら武力を使うということで、それだけ、地球連邦の
状態が異常だということだ。

富実樹が語り終える頃には、富実樹はお握りを握り終え、雑炊の下準備も
だいたい終わり、富瑠美もゼリーを型に流し終えた物を冷蔵庫に入れていた。

時刻は、だいたい午前一時頃。
固まるのは、その一時間後ぐらいだ。

富実樹は、富瑠美の方を振り返って言った。

「後は固まるのを待つだけだから、お握り食べようと思ってるんだ
けど、富瑠美は？」

「ええ、わたくしも頂きますわ。やはり、慣れないことをいきなり
行くと、疲れてしまう物なのですわね。御腹が空いてしまいました
わ」

富瑠美はそう言うと、富実樹の元へと歩み寄った。

富実樹は、床の上に作ったお握り六個を乗せた皿を置き、手早く
お茶まで淹れた。

その手際の良さに、富瑠美は感心しながら、

「では、御異母姉様、頂きますわ」

と言って、お握りを食べ始めた。

それは、中に鮭の身をほぐした物が入っていて、塩味も丁度良く、
海苔もぱりぱりとしていて本当に美味しい物だった。

すると、富実樹は言った。

「ねえ、富瑠美。さっき私の方が話したんだから、次は富瑠美の番
よ」

と言つて話を促した。

そして、富瑠美は話し始めた。

物心付いた頃には、由梨亜妾の元で楽しく暮らしていたこと。けれど、富瑠美の母が由梨亜妾ではなく深沙祇妃だということを言い聞かされていたこと。

そして、何故由梨亜妾に育てられていたのかということ。

深沙祇妃に還されてからの生活、そして富実樹と初めて会った時のこと……。

それらを話し終える頃には、一時間近くが経っていた。

そして、冷蔵庫からゼリーの型を取り出して切り、それらを飾り付けカートに乗せた。

その時、富瑠美は不思議そうに言った。

「あの、御異母姉様。何故この王宮には厨房があり、ほとんどが手作りなのでしょう？ 全て機械任せの方が、人件費削減の面から見ても宜しいのではなくて？」

「まあ、確かにそうなんだけど……でも、機械と人の手で作られた物じゃあ全然味が違うのよ。大量生産を目指すスーパーやコンビニならそれでいいけど、こだわりの持ったお店は、そりゃあ機械に任せる部分もあるけど、大抵の部分は手作りよ。勿論、普通の家もね。だってそっちの方が美味しいんだもの。わざわざお金の掛かる機械を買わなくてもいい訳だし、いざとなったら機械を買うより安いスーパーやコンビニで買えばいいのよ。そういう面でみればこれはかなり理に適ってるわよ。侍女や侍従が余ることもないし、私達は手作りの美味しいご飯が食べれるんだもの。これ以上のことはないわよ。だからね、富瑠美。貴女の悪い癖は、物事を一面からしか見ない所にあるの。物事はその裏も考えなくっちゃ」

「え、ええ……納得致しましたわ」

富瑠美が圧倒されながらも、そう言うと、今度は富実樹が質問してきた。

「でも、私にはこのカートの方が不思議よ。どんなに揺れても物が

落ちないし、中身もこぼれないもの。どうも、不思議でならないのよ。ねえ、富瑠美。これって、花鶯国で開発された技術よね」

「え、ええ……。それが何か？」

「これって、どっちの力でできてるの？ 科学の力？ それとも、魔族の力——つまり、魔法？」

「これは、科学の力ですわ」

「そうなの？」

「ええ。これは花鶯国が発明元ですけど、特許を取っている訳では御座いませんし、花鶯国と同じくらい技術が進んでいる国でも作られておりますわ。魔族の力を利用して作られた物は、花鶯国が特許を取り、しかも首都のシャンクランにしか、工場がありません。それが見極めるコツですわ」

「へ」

二人は、そう会話を交わしながら、薄暗い廊下を歩いて行った。

第七章「二人の悪戯」― 2

そうこうしているうちに、由梨亜妾ゆりあしやうの部屋がある二十階に着いた。そして、互いに目線で喋らないように制止し合つと、峯慶ほうちやうのいる部屋の前まで行つた。

だが、驚いたことに薄く明かりが洩れている。

どうやら、起きているようだ。

そこで、富実樹ふみきは一計を巡らせた。

「富瑠美ふるみ、ちよつと声を出さないで見ててもらつてもいいかしら？」

「ええ……？」

富瑠美がそう言つと、富実樹は目を閉じ、何かを呟いた。

すると、一瞬強い光が出て、富瑠美が目を開けると、そこには別人が立っていた。

背は、富実樹が富瑠美よりも大きかったのが、富瑠美とだいたい同じくらいまで小さくなり、髪も背の中程まで短くなり、大分波打っていたのが少し波打っている程度になり、色も栗色から茶色へと変化した。

そしてその瞳の色は、薄桃色から緑がかった黒色へと変化していた。

それは、昔いた花鶯国かおうこくシュールリック大陸先住民——いわゆる魔族の身体的特徴と同じだ。

富瑠美は知らなかったが、もし千紗がここにいたのなら驚くだろう。

何故なら、それは地球連邦の『本条由梨亜ほんじょうゆりあ』が成長した姿なのだから。

「私の名前は……そうね、ユーリ・ウェルナ・シェヴィにするわ。貴女も変えた方がいいわね」

そう言つと富実樹は富瑠美に手をかざし、髪の長さを肩甲骨ほどまで短くし、髪質も真つ直ぐに近いぐらいにまでに伸ばし、目の色

も、花鶯国の一般的な瞳の色である董色に変えた。

「うーん……そうね、貴女はリリイ・マシュリル・ウェルトね。それで、貴女は富実樹付きの中級侍女で、私は貴女の世話をする富実樹付きの下級侍女。いいわね？」

富実樹の問いに富瑠美は答えず、ただただ目を瞠っていた。

「御異母姉様……何故……」

「ふふ、私はこれぐらいの魔力なら使えるの。何でかしらね。由梨亜の時は使えなかったのに、今は使えるのよ」

富実樹は悪戯っぽく笑うと、おどけて言った。

「リリイ様。それでは、どうぞ先王陛下の御部屋に御入り下さいませ」

「はい。分かっておりますわ」

富瑠美もツンとすまして言うつと、コンコン、と戸を叩いた。

「先王陛下、由梨亜妾様、御入り致しても宜しいでしょうか？」

富瑠美の問い掛けに、峯慶は答えなかったが、由梨亜妾が出て来て訊ねてきた。

「こんばんは。何か御用で御座いますか？」

「はい。先王陛下と由梨亜妾様は、御食事を御取りになられないまま御就寝致しましたが、昨日は何も御召し上がりになられておりませんのを思い出しまして、それで、勝手ながら、簡単に御召し上がりになられるような物を御作り致しましたので、いかがかと……」

「御氣遣い、ありがとう御座いますわ。どうぞ、御入り下さいませ」

そう言うつと、由梨亜妾は二人を部屋に入れた。

「御名前を御伺い致しておりませんでしたわね。何と仰るのでしょうか？」

その質問にも、前もって考えていた二人は動じなかった。

「わたくしは、リリイ・マシュリル・ウェルトに御座います。陛下の中級侍女を致しております。ユーリ、御挨拶なさいな」

富実樹は、控えめに自己紹介した。

「わたくしは、ユーリ・ウェルナ・シェヴィと申します。陛下の下

級侍女を致しておりまして、リリイ様の御世話を致しておりますわ」
そして峯慶の前に出ると、峯慶は吹き出した。

「……？　どうなされましたの」

由梨亜妾が尋ねると、峯慶は目尻に笑いを残したまま答えた。

「……富実樹、富瑠美……下手な変装をしても、ばれるぞ」

富実樹と富瑠美は、二人そろってつまり、由梨亜妾は

「……あら、富実樹と富瑠美でしたの。それは気付きませんでしたわ」

と棒読みで、明らかにとづくに知っていたように言った。

富実樹は魔法を解いて元の姿に戻ると、拗ねたように言った。

「何故、御分かりになられてしまわれましたの？　大分自信が御座いましたのに……」

「何故か？　何、頼んでもいない食べ物の世話をする侍女が、二人の娘に面影があり声が同じ少女であれば、そう思わない方が可笑しい」

「……誤算でしたわ」

富実樹は心底悔しそうに呟くと、首を傾げて言った。

「それにしても、御父様は、千紗ちさと同じことを仰りますのね」

「千紗……？　ああ、富実樹と入れ替わった少女か」

「はい。彼女もわたくしと別れる前、わたくしが富実樹に変わった時、わたくしを『富実樹』と呼ぶのに多いに抵抗があったようですね。理由を訊くところ仰いましたの。『外見は変わっても、声の抑揚、表情も顔の表情も全然変わってないし、由梨亜の面影がちゃんと残ってる。これで別人だと思えだなんて無理があり過ぎる』、とそれと同じことを仰ったので……」

富実樹はそう言うと、パン、と手を打って言った。

「さあ、召し上がられませんか？　これはわたくし達が腕によりを掛けて作った自信作で御座います。この雑炊とお握りはわたくしが、ゼリーは富瑠美が作りましたの。さあ、御召し上がり下さいませ。御母様も、御一緒に」

そうして、それらを皆で食べ始めた。

峯慶は雑炊を茶碗一杯分食べ、ゼリーも食べた。

由梨亜妾は峯慶に付き合いあまり食事を摂っていない為、雑炊とお握りを中心に食べた。

「これは美味しい。私は食欲がなかったが、これは大丈夫だ。ありがとう、富実樹、富瑠美」

「御父様、御礼は御異母姉様だけに申し上げるべきですわ。もし御異母姉様が来て下さらなかったら、わたくしは作れませんでしたもの。まあ、わたくしは御父様と由梨亜妾の為にお料理を致そうと思つて厨房へ下りていったのですが、御異母姉様は何と……」

「ちよつ、富瑠美っ！ それ以上は駄目っ！」

「御異母姉様」

と、富瑠美は冷たい声で言つた。

「は、はい？」

富実樹がそう返事をする、富瑠美はこう答えた。

「話し方が庶民的になつておいでです。御両親の前でそのような御振る舞い、断じて許せることには御座いませんわっ！」

富瑠美はそう叫ぶと、富実樹の元へ、迫力満点に近寄つた。

「わ、わっ！ 富瑠美、ストップ、ストップ！ 堪忍してっ！

お願いっ！ 富瑠美っ！」

「それでは条件が御座います」

「じょ……条件？」

「そうですね……まず、わたくしに、正式に、御謝り下さいませ。御父様、由梨亜妾、何か御座いますか？」

富瑠美がいきなり話題を振つたにも関わらず、二人は平然として答えた。

「そうだな……富瑠美が言い掛けたことの続きを話してもらおう。由梨亜妾は？」

「ええ。わたくしも大賛成に御座いますわ。さあ、御始め下さいませ」

そのきらきらとした瞳に見つめられて断ることのできる人が、どれくらいいるだろうか。

それほどまでに期待の込められた瞳だった。

「うつ……」

富実樹は

（余計なことをっ！）

と、恨みまくりの眼で富瑠美を睨んだが、あっさりと躲されてしまった。

「……申し訳御座いませんでした」

「もう少し」

「これからは御父様と御母様の前でこのような失態は致しません。

……いいでしょう？」

「貴女が何も言わないのなら、わたくしは許しを与えせんわよ」

「……御許し、下さいませ……」

「はい、宜しいですわ」

富瑠美がにつこりと笑って言うと、富実樹はそつと溜息をつき、思った。

（全く、この異母妹いもづとは……）

「それでは富瑠美、話しなさい」

峯慶がそう言うと、富瑠美は

「はい、御父様」

と言い、話を続けた。

「御異母姉様は、御夕食には来られませんでしたの。御眠りになられてしまわれたそうですわ。そして夜、御目が覚めてしまわれた御異母姉様は、御腹が御空きになられたそうで、何か御食べしようと厨房に忍び込まれに來たそうです。そこで、わたくしと鉢合わせなさったのですわ」

「それは、それは……クッ」

「ふふ、ふ……」

峯慶と由梨亜妾の、忍び笑いが部屋を覆い、富実樹は真つ赤にな

った。

「お、御父様、御母様っ！ あ、あまり笑われると、恥ずかしいですわっ！」

富実樹は何かそう言うのと、雑炊をすすりだした。

そして、料理が片付くと、富実樹は皿をカートに乗せ言った。

「さあ、わたくし達はそろそろ戻らなければ。さあ富瑠美、行きますわよ。明日……いえ、もう、今日は総票会そうひょうかいですわ。今日で、全てが決まりますわね。わたくしは負ける気はありませんわよ、富瑠美」

「ええ、こちらこそ負けやしませんわ。こちらが勝って見せます」
二人が密かに火花を散らしていると、由梨亜妾が苦笑して言った。
「けれど、総票会に参加する中で最も力を持っているのは王族ではなく、一般の貴族、官吏、宗教家、学者に御座いますわよ。二人とも、それを御忘れなく」

その呼び掛けに、二人は目を睜り、口々に

「そう致しますわ」と答えた。

そして、富瑠美は首を傾げていった。

「そう言えば、御父様と由梨亜妾は、どちらに投票なさるか御決めにしましたの？」

富瑠美のその問い掛けに、二人は顔を見合わせ、峯慶が答えた。

「まだ、揺らいでおるな。決定するのは明日、二人の最終論説を聞いてからだ」

「そうですか。それでは、失礼致しますわ。御休みなさいませ、御父様、由梨亜妾」

「御休みなさいませ、御父様、御母様」

二人がそう言い部屋を出て行こうとすると、峯慶が声を掛けた。

「富実樹、少しいいか？ 富瑠美は先に行って構わないから」

「はい。分かりましたわ」

富実樹と富瑠美が答え、富実樹が峯慶に向き合つと、峯慶は穏やかな目をして言った。

「富実樹。それは懐かしく聴き覚えのある物だ。そして、それを選ぶのなら、今は失っている物を取り戻すだろうが、今持っている物は全て失うであろう……。考えるのだ、富実樹」

（御父様は、一体何を言ってるの……？）

と富実樹は首を傾げながらも答えた。

「分かりましたわ、御父様。それに、わたくしが今得ている物を捨てることはないでしょう。歳を取ればあり得るかも知れませんが、御休みなさいませ」

「ああ、御休み……明日は、楽しみにしているぞ」

富実樹はそう言つと部屋を出た。

扉が閉まると、珍しいことに、由梨亜妾が非難掛かった目付きで峯慶を睨んだ。

「峯慶様。何故、そのように解りやすいヒントを御与えになられてしまわれましたの？ そのようなヒントを御与えになれば、富実樹は、わたくし達からつ……」

「ああ、そうだな」

その非難を、峯慶はあっさりと肯定した。

「峯慶様はまた、わたくしから富実樹を御奪いになられるおつもりですか？ わたくしは、もう我慢がなりません！ 今、はつきりと分かりましたわ。富実樹は手段があれば、地球連邦に戻りますつ！」

「マリミアン、落ち着きなさい」

峯慶のその落ち着いた、けれど厳しい声に、由梨亜妾は一拍おいてから息を呑んだ。

何故ならばその名前は、由梨亜妾が峯慶に嫁いだから今までのおよそ十七年間、一度も使われることのなかった——由梨亜妾が産まれた時に付けられた本名だったのだ。

「あの子の道は、十六年前に……あの子を手放した時、我らの手から離れた。それに、其方にはまだ他にも子供がいる。再会して三年でまた失うのは悲しいだろうが、富実樹の幸せを考えるのだ。富実樹は、こちらよりも地球連邦の方が安心できるだろう。我らには止められない。それに、死ぬ訳ではない。富実樹がこの国に還って来てくれただけでも、充分としようではないか」

由梨亜妾は、渋々ながらも頷いた。

「ええ……。嗚呼、あの時、富実樹を地球連邦に送らなければっ！そうすれば、富実樹はっ！」

由梨亜妾のその悲痛な想いに、峯慶はそうなっていたであろう事実を静かに告げた。

「それでは、富実樹は死んでいただろう。我々は、富実樹を殺されない為に地球連邦に送ったのだよ。事実其方も、何度も生命を脅かされていたではないか。そのことを……忘れるな」

由梨亜妾が唇を噛み、項垂れると、峯慶は優しく言った。

「由梨亜妾、もう、眠ろう。今日は、総票会だ」

「……はい」

由梨亜妾は、泣きそうな顔で頷いた。

第八章「あり得なかったはずの凶行」――1

「御早う御座います、陛下。朝に御座いますわよ」

「ええ、もう起きておりますわ」

そう答えた富実樹^{ふみき}の顔色はあまり良くなく、少し蒼褪^{あせ}めていた。

だが、起こしに來た上級侍女はそれを緊張の為だと思い、その様子を無視して言った。

「まあ、今日は早う御座いますわね。陛下の従姉としても、嬉しゅう御座いますわ」

そう……上級侍女の彼女は、由梨亜妾^{ゆりあしやう}の四歳年上の異母姉^{あね}、シュメリアン・リシエル・スウェールの長女、ユリザ・シュメリアン・フェルスだ。

ちなみに彼女は二十歳で、他にも由梨亜妾^{ゆりあしやう}の異母妹^{いも}、シュリエル・ハミシエ・スウェールの十二歳の長女であるシリユイ・シュリエル・ヒューンと、同じく由梨亜妾^{ゆりあしやう}の異母妹、アミエル・ハミシエ・スウェールの十二歳の長女であるマリア・アミエル・ウエリアムも、富実樹が即位したと同時に上級侍女として仕えている。

王族個人に仕える上級侍女は、その王族の従姉妹という慣習があるので、時たま再从姉妹が加わることもあるが、富実樹の上級侍女達は皆、従姉妹達であった。

「それでは、朝食室へ」

四人は朝食室でいつもより早い朝食を食べ、富実樹は最終論説の為の論文の推敲に入った。

と言ってもこのような大きな物になると、重要なこと以外では大勢の前では発言しないし、話さない。

今回その文章を読み上げるのは、戦祝大臣^{せんしゅくだいじん}――つまり、富実樹の

祖父だ。

ちなみに富瑠美^{ふるみ}の方では、深沙祇妃^{みさぎひ}の後見人で、貴族の中で二番目に位の高い、政財大臣^{せいさいだいじん}が文章を読み上げることになっている。

富実樹が推敲を終える頃、コンコン、と扉が叩かれた。

「どうぞ」

富実樹が顔を上げずに答えると、カチャツと音がして、人が入ってきた。

「陛下、推敲は御済みでしょうか」

それは、今年で六十六歳の戦祝大臣、ノワール・エリア・スウェールだった。

「もう少し御待ちいただけますか？ 戦祝大臣殿。あと少しで終わりますので」

そして約一分後、富実樹は顔を上げ、他に誰もいないのを確かめてから小声で訊いた。

「御祖父様、何か、おありですか？ 御祖父様が直接御取りに来られるはずでは……」

「ああ。……富実樹よ。重大も重大だ。大変な事件が起こった」

「何が、でしょうか……？」

富実樹は嫌な予感を覚えて、慎重に訊き返した。

「先王陛下が……其方の父が、刺客に殺されかけた」

「う、そ……そんな、まさか……！ 御父様が、刺客に……。何故？ それよりも、御父様は？ 御容態はどうですか？」

富実樹は思わず立ち上がり、掴み掛からんばかりにノワールに詰め寄った。

「そう近寄るでないっ。本当だ。私も聞いた時は耳を疑った。だが真実を信じなければ、全てが嘘にも真実にもなる。……先王陛下の御容態は、まだ何とも言えぬそうだが、午後の総票会^{そうひょうかい}にはとても参

加できぬそうだ。その遣り口だが、刺客は用意周到でな、先王陛下の中級侍女一人を魔術で操り、食事の中に毒を混入させたそうだ。しかもそれは遅効性で、一時間後にその毒が回り始めるらしい。そして毒味役だが、その中級侍女がやったらしい。その侍女は今までも毒味役をやっていたので怪しまれなかったそうだ。そして先王陛下に毒が回り始めた頃、拳銃で自殺したそうだ」

「そ、そんな……。御祖父様、このことは他に……」

動揺して顔色を変える富実樹に、ノワールは落ち着かせようと強く富実樹の肩を押さえた。

「口止めはしておる。このことを知っているのは、私、由梨亜妾、侍医、先王陛下の上級侍女達のみだ。私がこれを伝えに来たのは、富実樹に事実を伝えると共に、誰にこのことを知らせてもよいのかということを相談しに来た。……富実樹、其方の意見は？」

「……わたくしは沙樹奈后さきなこう、深沙祇妃りみあき、莉未亜貴りみあき、紗羅瑳侍しやらさじ、阿実あみ亜女あじよに御報せした方がよいと存じますわ。信じられるかどうかは別として。勿論、彼女達には口止めをしておいて下さいませ。弟妹達のことですが……わたくしは、彼らに無闇に報せるのは、不安なのです。なので、年長者のみ——杜歩埜とふやと、富瑠美にのみ御報せ願えませんでしょうか」

「鶯大臣殿下おうだいじんに……？　しかし、彼女はあの深沙祇妃の娘——」

「いいえ！　彼女はわたくしの弟妹達の中で、最も信頼できる方なのです！　……これから御話しすること、秘密にしてもらっても宜しいでしょうか？」

富実樹の真剣な顔に、ノワールは思わず居住まいを正した。

「ええ……どうぞ」

「わたくしが富瑠美の他に信頼している方は、些南美さなみや柚希夜ゆきや（第七王子、峯慶ほうけいの第十五子で十三歳の弟）など同母の弟妹と婚約者の杜歩埜とふや、そして絶対に王位を継ぐことのない継承権の低い異母弟妹ていまい達です。けれど、彼らは心変わりをして、どうせ自分が継ぐことはないのだからと裏切る不安があります。そして、些南美には絶対に

報せられませんわ。杜歩埜は仕方がないので外せませんけれど……二人は……杜歩埜と些南美は、慕い合っているのです」

「……今、何、と、仰い、まし、た、か？ それ、は……その、本当の……」

ノワールは、戦祝大臣といふかなりの要職にあり、かなり腹芸や駆け引きに手馴れていて、滅多なことでは感情を露わにしない。

だが、その彼でも度肝を抜かれるような、超衝撃的爆弾発言だった。

何しろ、自分の孫娘が、その姉の婚約者である異母兄^{あに}を……。

富実樹は、無情にもあつさりと肯定し、矢継ぎ早に言葉を重ねる。「本当ですわ。下手に些南美に報せると、この国を混乱させて、辺境の星に杜歩埜と共に逃避行をするかも知れないのです。柚希夜の場合、何故一番下の弟に報せて他の年上の信頼する方に報せないのかと後で騒動が起きる可能性があります。そして、第二王位継承権を持ち、更には鶯大臣の地位に就いている富瑠美は絶対に外せません。それに、彼女とわたくしは異母姉妹というだけでなく乳姉妹ですわ。彼女は深沙祇妃の娘とはいえ、由梨亜妾の手によって育てられました。ですから、わたくしのことは余程のことがない限り裏切るはずが御座いません。それに今回わたくしと意見が対立致しましたのも、鶯大臣は大抵、必ずこうしなければ駄目だということ以外は王と反対の意見のことが多いからですわ」

富実樹は、強い目をして言う。

「……ですが、わたくしの意見でしかありませんが、富瑠美は、御父様を暗殺しようとは絶対にしておりません。けれど、それをやったのは富瑠美派の人物でしょう。そしてその人物はきつと、こちらがこのことを直ぐ様公表すると思っているでしょうね。御父様がわたくしを生かそうと地球連邦に御送りになられたのは、一部の方限定では御座いますが、周知の事実には御座います。その御父様が、御倒れになられた……つまりこちらの陣営が危ういと、こちらに下手に肩入れすると自分の身も危ういと思わせるには充分です。そして

それをした人物は、かなりの地位と人脈のある人物でしょう。こちらに全く気付かせずに後宮の中級侍女と接触することは、とても難しいことに御座います。高度な技術を持つ魔術師を雇えるほどの金持ちで、後宮にもその人物を連れて入り御父様の中級侍女とも接触できるほどの人脈と金脈の持ち主……それほどの持ち主ならば、大した理由もなしに取り調べることは不可能です。濡れ衣と、侮辱と言われます。けれど、手がない訳では御座いません。御祖父様」

富実樹の強い言葉と視線に、ノワールは居住まいを正した。

「はい」

「黒幕の特定を御急ぎ下さいませ。御父様が暗殺されかかったとメディアに公表するのは明日に。毒が盛られたのは、今晚か明朝にするのです。その後、噂をばら撒いて下さいませ」

「それは、どのような……」

「それは、その黒幕の貴族が『どうもあの貴族は怪しい。先王陛下の暗殺を謀っていたのではないだろうか』という噂です。そうすればその人物は代替わりせざるを得ないでしょう。そのような噂に手を打てば、必ず、やはりそうかと噂が流れますから。それと、杜歩埜と富瑠美にはわたくしから御報せしておきますわ。御祖父様は、沙樹奈后達に御報せ下さいませ」

富実樹はきつぱり言い切ると、推敲した文章の入っているキエシユをノワールに渡し、

「それでは戦祝大臣殿、期待しておりますわ」

と、先程の会話が嘘かのように、至つて事務的でありながら威厳のある口調で言った。

「私もこちら側の案件が御通りになられること、祈っております。それでは失礼致します」

そう言つと、ノワールは部屋を出て行つた。

富実樹は小さな溜息をつくと、立ち上がつて杜歩埜の元へと急いだ。

後宮の二十四階にある、杜歩埜とふやの部屋を誰かが叩いた。

「どうぞ」

杜歩埜がそう言うと、彼の異母姉あねにして婚約者の、富実樹ふみきが入って来た。

「御早う御座いますわ、杜歩埜」

「御、早う、御座い、ます……富実樹異母姉上あねうえ」

彼は、途惑いながら答えた。

なにしろ、本当ならば、富実樹は本宮の執務室に居るはずだからだ。

「どう、なされたのでしょうか？」

「ええ、少し……」

富実樹は、そう言い淀むと、深呼吸をして切り出した。

「あの……大声を出さないで下さいませんか？ それと、これから話すことは魔力に賭けて他言無用で——些南美さなみにも」

杜歩埜は目を睜めくった。

杜歩埜は、富実樹に魔族の力（魔族の力には人間離れた知力、体力、魔法を使えるという意味で魔力の種類がある）の魔力が宿っていることを知っている数少ない人物だ。

ちなみに、これを知っているのは峯慶ほつきょう、由梨亜妾ゆりあしやう、そして先日暴露した富瑠美ふるみだけだ。

そして、魔族の力を持っている者が自らの持つ力に賭けて誓約しそれを破った場合、その力の持ち主の力は失われ、破った相手は最悪の場合、死に至る。

それほどまでに、拘束力のある誓約だった。

富実樹が、そのようなことを好んでするはずがない。

杜歩埜はそれを分かっているから、驚きながらも頷いた。

「はい……了承致します」

富実樹は息を吸い込むと、たった一言だけ、告げた。

「御父様が、暗殺されかかったわ」

「え……」

あまりのことに反応できないでいる杜歩埜に、富実樹は無情にも言い放った。

「本当のことに御座います。わたくしは忙しいのです。冗談を言っている暇は御座いませんわ」

そう言うと、一息付き、続けた。

「御父様の御容態ははつきりとしておりません。去解鏡きょかいきようを使用するにも、上手くいかないでしょう。それなりの時間の後には使用許可が戴けるかも知れませんが、その結果を報せる者が、その時間の間で黒幕の手の者に拘り替えられたり、買収されたりしておいででしたら言い逃れができますわ。なので、戦祝大臣殿に、去解鏡を明日中に御使用を御願ひ致しました」

「す、少し御待ち下さい、富実樹異母姉上。許可を戴くには、御時間が掛かりますよ？　そう、簡単におできになれるはずが……」

「ですが、できますわ」

「はっ……？」

「実はわたくし、去解鏡を創ってしまいましたの。そして、それを戦祝大臣殿せんしゅくたいじんの御家に……」

その言葉に、杜歩埜は絶句した。

いくら、相手が自分の外祖父がいそふとはいえ――

「ふ、富実樹異母姉上……何とも、大胆不敵と言つか、何と言つか

……」

「けれど、そう長く持たないので御安心を。……あと三年ほどしか持たないはずですわ」

そうにつこり笑って言うと、最後にこう付け足した。

「そうそう、この誓約は、今日限定と言つことで。明日、発表する予定ですから」

「あ……はい」

「それでは、失礼致しますわ」

富実樹は見事に要点プラスアルファのみを伝え、部屋を出て行った。

そして、その脚で本宮に戻るのかと思いきや……。

富実樹は、何と後宮の二十五階まで上がってしまったのだ。

そして、『花雲恭富実樹』から『本条由梨亜』へと変わった。

その上、下級侍女の服を着ると、厨房に一分ほど籠もり、出て来た時には、持ち運び用の小型カートに何かを乗せて出て来た。

第八章「あり得なかったはずの凶行」――1（後書き）

外祖父…母方の祖父。

第八章「あり得なかったはずの凶行」――2

富瑠美は、本宮の富実樹の執務室から離れた所にある、富瑠美専用の執務室に居た。

何をやっていたかと言えば……何と、うたた寝をしていた。

富瑠美の方も文章の推敲が終わり、既に政財大臣せいざいだいじんの手にキエシユは渡っていた。

今日は仕事を入れてしまふと総票会そうひょうかいに差し障るというので、他に仕事は入れていなかった。

なので、推敲が終われば暇である。

そしてぼんやりとして居ると、何時の間にかうたた寝をしていたという訳だ。

富実樹は、扉をノックすると、声を掛けた。

「富大臣殿下おうだいいしん？ 御入りしても宜しいでしょうか？」

……返事がない。

「もし、富大臣殿下？」

……それでも、返事がない。

意を決して、勝手にロックを外し、入ることにした。

「失礼致しますわ」

富実樹が部屋に入った途端、

「……………」

富実樹は固まってしまった。

何と、あの富瑠美が寝ていたのだ。

富実樹はゆっくりと歩み寄ると、肩を揺らした。

「う、うゝん……もう少しだけ……御願致しますわ……ムニャ」

「……………」

それでも、肩を揺らし続ける。

「駄目、ですわ……あと……あと、少しですから……」

「……………」

富実樹の頭で、何かがプチッといった。

「富瑠美、呑気に御眠りになられている場合じゃ御座いせんわよ」

富実樹は富瑠美の耳元に顔を寄せ、低い声で言った。

その上、富瑠美の身体に手を回し、何とそのまま持ち上げたのだ！
さすがにそこまでされれば、目が覚めない訳にはいかない。

「きゃっ……あ、ら？ 御早う、御座います、わ。どう、致しましたの？」

富瑠美は寝惚け眼でぼんやりと呟いた。

だが、次第に目が覚めてきたのか、

「あら、ら……夢、では……！」

と言うと、完璧に目が覚めたようで、慌てて富実樹の手から逃れ
ると、そのままへたり込んでしまった。

「お、おね、おね……何、な、な……か、変わ、って……」

あまりにも慌て過ぎたせいで、ろくに喋れていない。

富実樹は小さく溜息をつく、富瑠美に向かって言った。

「富瑠美、落ち着いて頂けませんか？ そして椅子に御座り下さい。
御話はそれからです」

富実樹は、富瑠美を椅子に座らせ、簡単に作ったフルーツジュースを飲ませた。

そして富実樹は峯慶のことを、恐らく富瑠美派がやったということ
を除き話した。

富瑠美はしっかりしているからこそ、一度憤るともう手が付けられ
ない。

……もう、誰も止められなくなる。

そして、下手をしたら富瑠美派の関わった全員を終身刑にする可
能性がある。

そこまで気性の激しい富瑠美を、敢えて刺激するつもりはない。

だが話を聞き終わった富瑠美は拳を握り締め、唇を引き結び、目
を怒らせ、般若のような形相になっていた。

それは、思わず富実樹が後退るほどだった。

「ふ、富瑠美……顔が怖いですわ……」

「あら、それは申し訳御座いませんわ」

全然、申し訳なく聞こえない上に、声が怖い。

富実樹が気迫を吞まれ、何も喋れないうちに、富瑠美が口を開いた。

「御異母姉様^{おねえさま}。犯人は、御分かりになられて？」

「い、いいえ」

「そうですね……身内の恥を曝すようになりますが、わたくしは、篤大臣派の方がおやりになられたことだと思いますの」

富実樹は、思わずはつと息を呑んだ。

それで、富瑠美には全て分かったようで、フウ、と溜息をつくとき、先程の表情とは打って変わり、意外なことに穏やかな目をして言った。

「やはり、そうでしたの……御父様の御生命を狙うなど、御異母姉様の陣営の人間がおやりになられるとは思えませんが……。それに、そのことを御公表されて困るのは御異母姉様ですからね。……許せませんわ。犯人の特定を御急ぎ下さいませんか？」

「す、少し御待ち下さいませ。勿論これは私論で御座いますが……わたくしも戦祝大臣殿も、富瑠美と同じ意見です。富瑠美派の人間がおやりになられたことだと思いますわ。けれど、何一つ証拠が御座いけません。去解鏡を使うといつても、許可が出るまで、時間が掛かりますわ。わたくしが勅命を下せばもつと速くできるかも知れませんが、それはそれで後に不穏分子を生み出す原因にもなりかねません。そして時間があれば、結果を伝える者を買収することが可能です」

「で、ですが……何か、方法は御座いませんか？　何か……」

富実樹は少し詰まると、ヒソヒソ声で言った。

「あの……これは秘密にしておいて下さいませ。実は戦祝大臣殿の御家に去解鏡がありますの。今日、それを見て貰えるように御頼み致しましたわ。そして、わたくしは勅命を下しません。それに、去

解鏡の結果を発表するのは、戦祝大臣の管轄でもなく、政財大臣の管轄でもない宗賽大臣しゅうさいだいじんの管轄です。宗賽大臣殿は特にどちら派と言う訳ではないので、買収の危険があります。なので、今夜買収させます。そして戦祝大臣殿には、御父様を暗殺しようとした方が……まだ、どなたなのかは分かりませんが、その方が御父様の暗殺を謀っていたのではないか、という噂をばら撒くように指示しておりますわ。そしてこのことは他言無用に御座います。話は、以上です。何か御質問は御座いますか？」

キツパリと言い切られると、富瑠美は何を言っているのか分からなくなり、首を横に振るしかできなかった。

本当は、訊きたいことが一杯あったのだが。

だが、富実樹はそれを見るとにつこりと笑い、「ありがとうございますわ。それでは失礼致します」

と言うと、カートの上に空になったコップを乗せ、部屋を出て行った。

廊下を出ると、政財大臣にばったりと出会った。

富実樹は侍女らしく廊下の端に寄ると、頭を下げて通り過ぎるのを待った。

だが、目の前で足を止められてしまった。

「その者、面を上げよ」

貴族に、たかが下級侍女が逆らえるはずがない。

ゆつくりと、顔を上げた。

「見慣れぬ顔だな。其方、名は何と申す」

「……わたくしは、ユーリと申します」

あっさりと名前だけを伝える富実樹に、政財大臣は不快な顔ををした。

「私は、名を申せと言ったのだ。つまり、其方の身分と全ての名を申せ。この私の命令に従えぬと抜かすか」

……ここで従う、先王付きの後宮勤めの下級侍女などいるはずがない。

なので、それに則ったやり方で、富実樹は答えた。

「あの……わたくしは、貴方様を存じ上げませんの。御無礼なものと存じますが、貴方様は一体どなた様でいらっしゃるのでしょうか？」

あまりの答えに、政財大臣は絶句した。

「何を……」

「ほんに御無礼なことで存じ上げます。ですが、わたくしは本宮勤めの侍女では御座いません。わたくしは、後宮の先王陛下の下級侍女に御座いますので……」

「なるほど、な。あの前陛下は、自らの娘に下級侍女をさせておったのか」

政財大臣のその勘違いに、富実樹は目を睜り慌てて言い訳を捻り出した。

「いえ、わたくしの曾祖母は、陛下の曾御祖母様にあらせられる花^か鶯^{おう}国第五百十代国王陛下であらせられた、癒^ゆ璃^り亜^あ女王様の父君であらせられた、花鶯国第四百九代国王陛下、襖^{おし}祥^{しょう}王様の娘に御座いました。つまり、癒璃亜女王様の異母妹^{いも妹}ですから、先王陛下との血の繋がりはありますが、娘では御座いませんわ。わたくしと先王陛下は、三^み従^{じょう}兄妹^{こい}に当たります」

富実樹のその答えに、政財大臣は目を睜り、頷いた。

「なるほど。私は、政財大臣のフォリュシア・アメリカ・シャリクだ。私が、其方の身分を訊ねたのは、王家との血の繋がりがなければ、妻にしようと思ったのだが」

富実樹はギョツとし、そして思い出した。

貴族は、王家との血の繋がりが無い侍女ならば娶ることができるのだ。

富実樹の祖父であるノワールも、確か妻の内に元侍女がいたはずである。

「だが、そのようなことなら無理だな……そうだ、ユーリとやら」

「は、はい、何で御座いましょうか？」

「先王陛下は、どちらに投票するか、存じておるか」

「はっ？」

富実樹は、本気で

（こいつって……正真正銘の、大馬鹿者？）

と思った。

そのようなことは、訊かないのが礼儀である。

「い、いいえ……ですが、最終論論説で御決めになられると思いますわ」

「存じない、か……」

その口調に、違和感を覚えた富実樹は、フォリュシアに訊き返した。

「あの、政財大臣様は、どちらに御投票なさるおつもりですか？」

どちらに自分が組していようと、敵対する陣営の意見の方がいいと思った場合は、統計は匿名化されて集計されるということもあり、そちらに投票することができる。

……まあ、フォリュシアの場合、代表者である為それはないだろうが。

「私が、か？ 勿論、鶯大臣殿下の方だ。陛下の御意見も、尊重すべき所はある。だが、現実問題として考えると、鶯大臣殿下の御意見の方が、やりやすいのだ。それに……」

フォリュシアは、そこで一息付くと、続けた。

「私は、あの小娘の仰ることは、いまいち信用がならん！」

富実樹は、思わず腰を抜かしかけた。

「あの陛下は、まだこの国に来て間がない。だが、鶯大臣殿下は違う。まあ、陛下ももう少しすれば御分かりになられるようになるだろうが……何故戦祝大臣の方が、政財大臣よりも位が高いのか。何故、王家の妻が六人、子供が十五人必要なのか。何故、何人もの王家の人間が宗教家になるのか。そのことが御分かりになられてこそ、私はようやく陛下を信頼できる。しかし、今はまだその段階ではない」

フォリュシアははつきりきっぱり言い切ったが、そこに富実樹は、ただ敵対心を燃やしているのではなく、王として信用できるか否か、という響きを感じた。

「わたくしは、貴方様に嫁ぐことも、何もできません。それに、わたくしは篤大臣殿下よりも陛下の方を信頼しておりますわ。ですが、敵方におられる貴方様が、陛下を信用する可能性があり、先王陛下をととても信頼していたということが分かりましたわ」

「な、何を……」

フォリュシアは慌てて言ったが、ヴェールに蔽われた人の心を読む訓練を長年積んでいた富実樹には、相手をたかが侍女だと油断している人の心を読むのは朝飯前だった。

「それでは失礼致しますわ。仕事がありますので。わたくしは貴方様と出会えて良かったですわ。貴方様は、陛下の敵では御座いませんと分かりましたから」

それを言い残すと、富実樹は一礼をし、立ち去っていった。その後姿を、フォリュシアが見つめているとは思ってもせず。

富実樹が遠ざかると、フォリュシアは、ぽつりと呟いた。

「何と言えればいいのか……気の強そうな、娘であるな。あの娘が王家の血を引き継いでいるとは残念だ。私の好みであったのに……」
そう言つと、富瑠美の執務室をノックし、入って行った。

フォリュシアはそこで、楽しみに『ユーリ』という下級侍女の話をしたが、それを聞いた富瑠美は、父が意識不明の重体であることを忘れ、大爆笑を堪えたり、真っ蒼になったりするのを堪えるので大変だった。

第九章「総票会」― 1

総票会そうひょうかいの開場はとても広く、また総票会のみに使われる所だった。席は、挿り鉢を半分に割ったような階段状で、目の前にある壇上を取り囲んでいた。

席は、下から言うところと学者、普通の宗教家、修道院長クラスの宗教家、王族の宗教家、官吏、地封貴族ちほうきぞく、官封貴族かんほうきぞく、王族だった。

だが、司会として前に立っている宗竇大臣しゅうさいだいじんと峯慶ほりぎょう、由梨亜妾ゆりあしやうの席が空いていた。

何故宗竇大臣が司会かというと、戦祝大臣せんしゅだいじんは富実樹ふみきを、政財大臣せいざいだいじんは富瑠美ふるみを擁護するので、他に空いている高位の者は彼だからだ。

「ただ今より『地球連邦の宇宙連盟加盟要求』についての総票会を開催致します。この案件について二つの御発案が御座いました。陛下の御発案である『いきなり武力行使をするのではなく、まず話し合いの場を設け言葉により説得する』と、鶯大臣殿下おうだいいんの御発案である『地球連邦がいつまで経っても連盟に加盟しようとしなのは、元々加盟する意思がないということであるので、武力をもって征する』に御座います。これからこの御発案を御擁護する最終論説を始めます。それでは政財大臣殿、鶯大臣殿下の御発案を御擁護致して下さい」

そう宗竇大臣が言うと、フォリユシアは最終論説を始めた。

「承りました。鶯大臣殿下の御意見を擁護致します。殿下は地球連邦を、武力を持って征すると仰られましたが、これには理由が御座います。地球連邦が我らに発見されたことを告げられたのは、今からおよそ五百年前。当時地球連邦は百何十国にも分かれ、言語も様々な種類があり、技術も後れておりました。その当初の状態では、加盟できないのは分かります。ですが、五百年で御座います。地球連邦の技術はそれなりの力をつけて参りましたのに、連盟に加盟しようとしません。連盟に加盟した方が技術発展や貿易には有利である

のに」

政財大臣はそこで一息つき、決然と顔を上げ、強い語調で告げた。「ということは、全宇宙共通連盟憲章に違反したことが地球連邦では行われているのではないでしょうか。それならば陛下の御発案である話し合いには応じないでしょうし、応じたとしても加盟は拒否するはずですよ。ということは、さすがに警告は致しますが、武力を持つて征圧し地球連邦の間違いを糺した方が、地球連邦の民にとってもよいことではないのでしょうか。それらの理由により、我らは地球連邦を連盟に加盟させた方がよいと存じます。繰り返しますが、これは我らの為でもあり、地球連邦の民の為でも御座います。どうか我らの意見を御理解頂き、我らに御投票を御願致します」

フォリュシアがそう弁論すると、司会である宗賽大臣が「ありがとう御座いました。それでは戦祝大臣殿、陛下の御発案を御擁護して下さい」

と言い、ノワールの番になった。

「承りました。陛下の御意見を擁護致します。陛下は話し合いの場を設け、言葉により説得すると仰られました。無論、武力で攻め入った方が、簡単に征圧でき、あつと言う間に連盟へ加盟させられることでしょう。花鶯^{かおう}国の民も、それがよいと、考えるかも知れませぬ。ですが、地球連邦の民は、どう思うでしょうか」

一言一言に重みを乗せたノワールの言葉に、大部分の人が、はつとした。

「大抵は、自らの国のことだけを考えることで、上手くいきます。ですが戦は違います。どんなに気を配っても、必ず死者は出ます。勝った国の方は、『名誉の戦死である』『国の為に戦った立派な英雄である』と褒め称えられます。ですが、それでもその遺族は悲しみます。自分の孫が、息子が、夫が、父が亡くなった。悲しまないはずがありません。ですが戦勝国の方は、まだ『勝った』という事実^{じじつ}に慰められることでしょう。ですが、戦敗国はそのようなことに慰められることもなく、逆に、何故自分の孫が、息子が、夫が、父

が逝ってしまったのだろう。何故、自分の知り合いだったのだらうと悲しみに身を浸すこととなります。すると、その悲しみは同じだけの強さの憎しみへと変貌します」

ノワールは小さく溜息をついて悲しそうに言うと、不意に顔を上げ、訴えるように言った。

「武力をもつて征圧致しても、何度もテロに遭遇する可能性があります。表面上は取り繕っていても、一気にその溜め込んだ物が爆発する惧れがあります。最終的には無理かも知れませんが、何度も加盟するよう働き掛けてからではないと、地球連邦の民からの信用が得られないでしょう。それに、周辺諸国からも、『いきなり攻めるのはどうだろうか』と言われかねませぬ。我が国の体面を保つ為にも、そして加盟後の信用を得る為にも、まずは話し合いの場を設けた方がよいと存じます。どうか、御投票宜しく御願ひ致します」

ノワールの言葉に、辺りはしんとした。

政財大臣の言ったことは考えたことがあるが、戦祝大臣の言ったことは考えたこともなかった——という思いが満ち溢れ、静まり返っていた。

富実樹は、予想外の展開に、複雑な思いで見下ろしていた。

何故なら、さすがにこれくらいのことなら誰かは考えているだろう、と思っていたのだ。

しかし、皆の反応は違った。

この沈黙が、富実樹の期待と大幅にずれていたことを雄弁に物語っていた。

宗賽大臣すらも、自らの役目を忘れ、呆然としていたのだ。

さすがに一分以上も沈黙が続くと時間の無駄なので、富実樹は軽く咳払いをした。

それにまた皆ははつとなり、それから少しざわめき立った。

「え、えー、皆様、御静かに願います」

宗賽大臣がそう言うと、また辺りは静まり返った。

「ただ今より、投票の決まり事を御説明致します」

その言葉に、列席していた若い貴族、官吏、宗教家、学者と、初めて富実樹、富瑠美、杜歩埜、璃枝菜、最貴の長男で第二王子、峯慶の第五子である風絃が耳を澄ます。

「まず、どちらに投票するのかを御決め致しましたら、陛下の御意見を御支持なさるならば『花』を、鶯大臣殿下の御意見を御支持なさるならば『鶯』の字を目の前のパネルに御書き下さいませ。書き終わりましたも、集計する為しばらく御待ち下さい」

宗賽大臣がそう言うと、宗賽大臣も自らに与えられている席に付き書き始めた。

しばらくすると、辺りが少しざわめき出した。

そして、その中の多くの視線が、峯慶と由梨亜妾が座るはずだった席に向けられた。

一部の人はいない理由を知っているが、他の人には体調を崩したと伝えてある為、二人がいないことに心配はしているものの、不安には思っていないようだった。

だが、知っている者は気が狂いそうになるほど心配していて、富実樹もその一人だった。

それを表に出したら気付く者もいるだろうから、知っている者は表には出せなかった。

特にそれだけではなく、富実樹や富瑠美の周りの高官達はピリピリしっぱなしだ。

だが、学者や官吏、宗教家など、下の方は特に砕けた雰囲気になっっている。

の、だが……何と、その元凶のはずの、富実樹と富瑠美が……喋って、いた。

普通なら厭味の報酬でもしているのだろと思うが、微かだが笑い声すら聞こえる。

絶対に、厭味など言うはずがない。

そんな視線に曝されている富実樹と富瑠美だが、そのことには気を配っていなかった。

そして始まってから五分後、恐るべき僅差の結果が表れた。
その数、何と五十三票差。

負けた方の陣営だった人は、その結果に顎を落としたのだった。

ドツと、拍手と歓声が富実樹の周りで上げられた。

ここは、カサミアン宮の本宮にある、大広間の一つだ。

「陛下、おめでとう御座います！ 私は……この歳にして……初めて感動と言う物を知ったような気が致しますっ！」

と言ったのは、どんなことにでもすぐに感動する、『感動癖』があるノワール戦祝大臣だ。

聞いた話によると、彼は少年の頃から感動すると、すぐ死ぬだの自殺するだの殺してくれたのと言い、ことによってはその手段を持ち出して来ることがあるそうだ。

彼を収めるのは、彼の長男である、マリミアンより六つ年上のシャール・リシエル・スウェールと、次男でありマリミアンより二つ年上のシャークヌ・カナージェ・スウェール、三男であるマリミアンの異母弟のシャール・ミシエル・スウェールである。

戦祝大臣であるノワールには、妻が五人いる。

そのうち貴族は第一妻と第二妻で、元総下^{そうげ}は第三妻と第四妻、元侍女は第五妻である。

ただし、その元侍女は子供ができなかった為、実質上は四人の妻である。

ちなみに官封貴族は第五妻、地封貴族は第三妻、官吏や学者は第二妻まで妻が持てる。

大抵の場合、その人数ギリギリまで持つことが多い。

おまけに、正式な妻にしくなくても、愛人として王宮の元侍女を入れることがある。

由梨亜妾の兄弟で例えると、第一妻の子供がシャール・ウィンとシュ

メリアン、第二妻の子供がシャーキヌと由梨亜妾、第三妻の子供がシユリエルとアミエル、第四妻の子供がシャーリンである。

この場を集った皆は、富実樹に向かって拍手喝采をした。

それは照れ笑いでかわしながら、ノワールに声を掛けた。

「戦祝大臣殿、感激し過ぎです。わたくし達は勝ちましたが、これからが正念場ですわ」

大部分の人々が予想し得なかったことだが、僅か五十三票差で勝ったのは富実樹だった。

その結果を聞いたフォリュシアは啞然呆然、全く使い物にならない置物になった。

しかし、一部の他の人の反応に比べれば、まだ害がないと言えるであろう。

何故なら、高位の富瑠美派の貴族達は、ほとんど失神状態だったのだ。

その中で、異彩を放ったのが富瑠美だった。

彼女は堂々と富実樹に近付き、

「おめでとう御座います、陛下。わたくしは敗れてしまいましたが、これからのことに全力を尽くしたいと愚考致します」

と言い、にっこりと微笑んだのだ。

そのことによって、まだ立てていたフォリュシアの身体は左斜め方向に向かってゆっくりと傾ぎ、ドシン、と言う音と共に姿が掻き消された。

また、富瑠美派の貴族達のほとんどが、そのことによって失神し、前代未聞のかなりの大騒動をもってこの総票会は終了した。

そして、富実樹の勝利を祝う為、と言う名目を持って、富実樹派の貴族と全ての王族、そして富瑠美派の主だった貴族がこの大広間に集められたのだった。

だが、取り敢えず揃っていたのはここまで、各自食事をしたり議論をしたりしていた。

そして、その中に富実樹と富瑠美の姿もあった。

「本当に参りましたわ、御異母姉様。おねえさま わたくし達の完敗に御座います」

富瑠美がそう言ったのは、大広間から出られるようになっていく露台の一つである。

そこは今、富実樹と富瑠美で貸し切り状態になっていた。

「いいえ。そう大したことはやっておりませんわ」

と、富実樹はいけしゃあしゃあと白々しくも言った。

「わたくしは、皆様が御考えになられていなかった事実を示しただけに過ぎませんわ。もし勝因があるとすれば、それだけですわね」

富実樹がそう言うのと、今度は瞳に強い光を燈し、富瑠美に向き直った。

「富瑠美、わたくしに何があつたとしても、この案を御進めして貰えないでしょうか？」

「御異母姉様……？」

富瑠美の訝しげな声には答えず、富実樹はなおも迫った。

「御約束を、願えませんか？ 勿論、この案を御進めしても拒否された場合、貴女方の案に移られても構いません。ですが、最初は……御願ひ致します」

「お、御異母姉様、少し御待ち下さいませ。勿論、貴女に何かあつた場合でも、総票会で可決されたことは絶対に御座いますわ。総票会での決定を覆すことができる方法は少なく、この後に議会に掛けられて覆されるか、国民の署名活動だけに御座います。そうでない限り、喜んで守らせて頂きますとも」

富瑠美のその返答に、富実樹は肩の力を抜き、ほっとしたように呟いた。

「良かったですわ……それでは、中に戻りませんか？ もう五月とはいえ、ここは北方の土地。まだまだ夕方は寒う御座いますから」

富実樹はそう言うと、富瑠美と共に中に戻った。

（何を御考えなさっておられるのでしょうか……）

富瑠美はそう思ったが、富実樹が本当に考えていることまでには、想像が及ばなかった。

それに、そのことは、峯慶と由梨亜妾以外には、分からないに違いなかった。

この祝賀会は大規模な物ではなかったのに、終わったのは翌日の午前二時だった。

それも最後は、富実樹達兄弟姉妹が力を合わせて説得して終わったのだった。

第九章「総票会」―2

富実樹^{ふみき}は、侍女達がベッドを整え、部屋を出て行くのを黙って待っていた。

そして、それを侍女達は

（きっと御疲れなのでしょうね）

と思い、サツサと部屋を出て行った。

その気配が感じられなくなった頃、富実樹は着ていた夜着を脱ぎ捨てて女官服を身に纏うと、『本条由梨^{ほんじょうゆり}亜^あ』に姿を変え、音もなく、誰にも見咎められずに部屋を出て行った。

富実樹は先程いた本宮に戻っていた。

そして、目的があるように見える足取りで、特に人の少ない一画へと向かっていた。

そして、着いた場所は……そこは、あの資料庫であった。

何故そこにいるのかを説明できるのは、富実樹自身と峯慶^{はなけい}、由梨^{ゆり}亜^あ妾^{めかけ}のみだろう。

ガツチャ

ギィーイ

ガッ　グッ　ガツチャン

と、またもや不気味な音を立てて、資料庫の扉が開いた。

富実樹は、ある決心をし、そして今朝見た資料庫の夢を思い出し、出ていた。

しかし、それは前の日にこっそり忍び込んだ時と違う所があった。まず、視線が違う。

それに違和感を覚え、ふとキエシュの入っているケースに映った自分を見ると、何と『由梨亜』になっていたのだ。

富実樹の意識自体は驚いたものの、身体はさつさと歩いて行った。そして、あの亜空間に通じる紋様の所まで来ると、千紗ちさと一緒に千年前に行った時、病院で見つけたあの交換日記帳から出た銀色の光と同じ光がその紋様から溢れ出て、その光を浴びた『由梨亜』は全く躊躇わず、その紋様の中に足を踏み入れていた。

そして、その中にいる女性と会い、その女性が言葉を口にした時……『由梨亜』には、彼女が何を言っているのか……そして、何語で喋っているのが解ったのだ。

彼女が示していたのは、地球連邦に還る方法——話していたのは、日本語。

そこで、富実樹は目が覚めたのだった。

富実樹は目が覚めると、今見ていた夢は真実だと、直感的に分かった。

そしてそれが、自分が喉から手が出るほどに望んでいることだということも知っていた。

だから、富実樹は決めたのだった。

総票会そうひょうかいが、自分の……『花雲恭富実樹かうきんよう』としての、最後の仕事だと。

勿論、簡単に自分の生まれた国を捨ててもいいのかと問われると、言葉に詰まるだろう。

だが、富実樹は自分の出した考えは……最終論説で述べた自分の考えは、決してこの国の人達には理解してもらえない物だと感じ取っていた。

勿論、投票者は、僅差ではあったが過半数を超えた。

だが、きつとそれは、富実樹の出した、他人には考え付きもしなかった『真新しい考え』に心を動かされたのが大半だろう。

『地球連邦』と『花鶯国かおうこく』……そこに住む人達の考えは、全く違っていた。

そんな花鶯国では、富実樹という平和的な考えを持った王などは、必要ない。

必要なのは、富瑠美ふるみのような考えを持った勇ましい王。

富実樹は、心残りはあったものの、この国の民にとってはもう必要がなくなった自分は、地球連邦に還つてもいいだろうと思った。

それに、王としての責務は、自分などよりも富瑠美の方がよっぽど上手くやれるし、そもそも自分が十三になるまでは、そちらの方が、確定していた未来だったのだ。

心残りは、父の生死と、暗殺者の黒幕、そして杜歩埜とふやと些南美さなみの恋愛。

だが、地球連邦に還つても父の生死は知ることができるし、暗殺者の黒幕も同じである。

杜歩埜と些南美の恋愛に関しても、富瑠美が王位に即けば、その夫は杜歩埜となり、つまりは、些南美は総下そうげになれ、杜歩埜と一緒にになれる。

富実樹の心残りは時間が解決するであろう問題で、自分が口出しできる問題でもない。

それらの解決を待つてから行くこともできるが、そうになると次の仕事が入ってしまう。

一旦仕事の区切りがついた今日を逃すと、次の機会はいつになるか分からない。

だから今、富実樹は資料庫へと向かったのだった。

富実樹は由梨亜の姿になると、あの紋様の所まで駆けて行き、一歩足を踏み入れた。

すると、一昨日のように突風が吹き抜け、あの亜空間に飛んだ。そして、あの女性が現れると、地球連邦の古代語で

『貴女は何を望みますか？』

と訊ねてきた。

富実樹は、今度は激昂せずに、穏やかに地球連邦の古代語で答え

た。

「地球連邦に……還ることです」

すると、あの女性が、また問いを重ねた。

それは、一昨日は意味の解らない物であったが、今は、意味が解った。

『その為に、貴女は全てを捨てられますか？ その覚悟があるのなら頷いて下さい。何か質問や希望があるのなら、仰って下さい。何か仰る時は、現代の言葉で構いません』

富実樹は静かに深呼吸すると、頷き、口を開いた。

「私は、地球連邦に戻りたいです。今まで、ここで得ていた物を全て捨て去っても。そして、地球連邦に戻った時にして欲しいことがあります。と言うより、変えて欲しいことが」

『何でしょうか？』

「それは……あの、私と千紗を、双子にして下さい。そして、千紗だけは真実を……今までの偽りの記憶も、本当の記憶も、全て覚えているようにして下さい」

『ふ………双、子？』

その女性は、呆氣に取られたように呟いた。

だが、それに対し、富実樹は大真面目に答えた。

「ええ、そうです。今の私が地球連邦に戻っても、戸籍はないですよね？ もし本条家に戻るとしたら、千紗は彩音家さいいんに戻ってしまう。千紗の本当の両親は、本条耀太よったと本条瑠璃るりなのに。けれど、これ以上関係ない人を巻き込む訳には行かないんです。なので、私と千紗が双子になれば……そうすれば、何もかもが解決するんです」

『……そう、ですか。では、どちらを「姉」とするのですか？』

「それは、産まれた順で——の方で」

富実樹は、内緒話をする時のように、女性の耳元で呟いた。

『はい。承りました。富実樹……わたくしの血を継ぐ者よ』

「血を……継ぐ？ 貴女は……一体、何者なんですか？」

富実樹は混乱してしまった。

この女性が、生きていた人間だということも、先祖だということも。

『わたくしは、貴女の曾祖母。何故死んだはずのわたくしがここに
いるかと言うと、わたくしの孫、峯慶に頼まれてのこと』

（えっと、私の御父様の、御祖母様って……あつ。もしかしたらこの人は……）

「花雲恭、癒璃亜様……？」

花雲恭癒璃亜とは、この花鶯国の元女王で、魔族の力を全て持つて産まれた前代未聞の人物であり、その時代はとても平和だったという、富実樹の曾祖母である。

『御名答。さすがですわ。さて、そろそろ行きましょうか？ ……
そうそう、峯慶と、わたくしと同じ名を持つ由梨亜妾になら、伝言が残せますわよ』

「ええ、それでは、御父様には——と。御母様には——と御伝え下さい。それと……親不孝者で、すみませんと」

『はい。それでは、富実樹。貴女が地球連邦に行っても、元気でいますように』

「はい。……ありがとうございます、曾御祖母様。それでは……さようなら」

『さようなら、富実樹』

癒璃亜は富実樹のことを暖かい目で見守り、亜空間を、真っ直ぐに下に向かって落ちていく富実樹——いや、もう由梨亜の身体になっている富実樹のことを、ずっと見ていた。

そして、由梨亜の姿が消えた時……それと一緒に、癒璃亜の姿も消えていた。

由梨亜妾は、ふと目が覚めて、枕から顔を上げた。
窓の外はまだ暗く、夜明けまではまだまだ遠い。

だが、嫌な予感が……ざわざわと、胸騒ぎがする。

由梨亜妾は微々たる魔力を持っているが、このこと自体は、別に珍しくない。

何故なら、花鶯国の人間で魔族の血が流れていない人間などほとんどいないからだ。

そして、由梨亜妾が使える魔法はないが、鋭い……鋭過ぎるほどの勘を持っていた。

おまけに、その勘が外れたことは今まで一度もない。

だから、由梨亜妾は起き上がった。

由梨亜妾は鋭い勘は持っていたものの、その出来事を特定することはできない。

だから、一番懸念していたこと——峯慶に何かが起こったのではないかと思ったのだ。

そして、由梨亜妾は峯慶の枕元に行ったものの、別に何もなかった。

峯慶は穏やかな寝顔で、月光を浴びていた。

だが、その顔はよく見ると、汗が出ている。

毒を体外から出そうとする働きの為、高熱も出ている。

しかし……言い換えれば、特に変わった様子はない。

由梨亜妾は首を捻り、だが峯慶に何もなかったことに安堵し……眠ろうとその場を動いた瞬間、部屋に突風が駆け巡った。

由梨亜妾が驚き、その風の渦の中心を見詰めていると、その中から人が現れた。

「癒璃亜、女王様……」

由梨亜妾が呻くように呟くと、その人は穏やかな、慰めるような微笑を顔に浮かべた。

そのことで、由梨亜妾は何もかもを察し、その場に崩れてしまった。

そして、嗚咽を漏らし、その頬を涙が滑り落ちた。

そんな由梨亜妾の背中を、癒璃亜はそっと撫でた。

「それでは……癒璃亜女王様がここにいらつしゃるということは、つまり、富実樹はもう、地球連邦へ……！」

『はい。そうですね。そして、貴女方に伝言を預かっております』

「伝言……？」

『はい。峯慶、目を御覚ましなさい』

癒璃亜のその言葉に、峯慶は目を開けた。

だが、それは癒璃亜の力を持つて一時的にしたこと……癒璃亜が術を解くか、一定の時間が過ぎれば、また眠りに落ちてしまう。

由梨亜妾はそのことを知っていた為、手早く峯慶に今の状態を説明し、癒璃亜からの伝言を聞く体勢に入った。

『由梨亜妾には、

「御母様、御免なさい。わたくしは御母様の気持ちを知っていたのに、それに答えることはできません。どうぞ御許し下さいませ」

と。峯慶には、

「御父様、わたくしのせいで毒殺されかかってしまい、本当に申し訳ありませんでした。犯人を捕まえる前に去ってしまいましたが、御祖父様に指示し、どのようにすればよいかを託しました。わたくしの代わりに、全てやって貰います」

と。そして、二人に、

「親不孝者ですみません」

との伝言でした』

癒璃亜の伝言に、由梨亜妾はそつと目を閉じて涙を流し、峯慶は静かに聞いていた。

そして、その伝言を言い終わると、癒璃亜はこう言った。

『さて、わたくしはこれで役目を終えました。逝かせて貰っても宜しいですか？』

その問いに、峯慶は頼み事をした。

「もし……もし、まだこの世にいらつしゃっても宜しいのならば、どうか、富実樹に憑いてもらえないでしょうか」

『富実樹に……？　しかし、あの子は』

「はい。だからこそ憑いて欲しいのです。もし大臣の座を得ている者が暴走したら、そのことを伝えて欲しいのです。あの子の護りとなって欲しい……守護霊として」

『守護霊、ですか……いいでしょう。富実樹には、確か守護霊が憑いていませんでしたから。地球連邦に行くのは少し骨ですが、やってみましょう』

「嗚呼……ありがとう御座います、御祖母、様」

峯慶はそう言うと、ガクツと頭を垂れ、眠りに付いた。

由梨亜妾はその突然のことに目を丸くしていたが、峯慶の身体を元通りにベッドに横たえると、癒璃亜に向き直った。

「癒璃亜女王様、どうぞ御願い致します。どうか……富実樹を、御護り下さいませ」

『由梨亜妾、其方は、このことに不満ですね』

「ゆ……癒璃亜、様……！」

由梨亜妾は、狼狽えた。

自分の心の真実を見事に言い当てられたからだだった。

由梨亜妾は、富実樹のことを目に入れても痛くないと思っているが、それは峯慶の前でも露わにはいけない感情だった。

富実樹は未成年だが、既に被保護者ではなく、この国の国民全ての保護者なのだ。

だから、そんな富実樹に占有物のように接することは、断じて許されない。

だが、そんな由梨亜妾に、癒璃亜は笑って答えた。

『その気持ちは、母ならば誰にでも共通する想いです。わたくしにも息子が二人、娘が一人いますが、後を継いだ籐聯も、鶯大臣になった奨砥も、他国の王子に嫁いだ梨美亜も、手放したくないほど可愛がっていましたから。そのことを思うと、貴女と富実樹を引き離れたのは、可哀想なことでした』

「いいえ、わたくしは、富実樹のことを手放したくないと、一生傍にいて欲しいと思っています。ですが、それはわたくしの自儘な考

えでした。富実樹は、わたくし達よりも、地球連邦の友の方が大事なのです。仕方がありません。ですが、それとわたくしがあの子を愛するのでは、全くもって話が違いますわ。ですから、今までこの国に留まってくれたことに、感謝したいと思います」

『そうですか……それでは、わたくしは富実樹の所に参ります。御元気で、由梨亜妾』

「はい。癒璃亜女王様も、どうか御元気で」

違う字ながら、同じ読みの名を持つ実体と幽体の二人——同じ花雲恭の名を持つ二人は、しばらく見詰め合い、そして癒璃亜は消えた。

由梨亜妾は、そっと涙を流しながら、眠りに戻った。

明日から、富実樹女王が消えたことで様々な懸案が出て来ることは、確実なことだったから。

由梨亜妾にとって血の繋がらない娘、鶯大臣である富瑠美のことも考え、眠りについた。

第九章「総票会」― 3

翌朝、とても慌てた顔をした、由梨亜妾ゆりあしやうの上級侍女であり従姉でもある、リーシェ・マリヌ・キルテットが慌てた様子で起こしに来た。

「由梨亜妾様……御起き下さいませっ。一大事で御座いますっ！」

「どうしたのです……？ リーシェ。総票会そひょうかいの結果ならば、昨晚聞きましたよ？ それとも、峯慶様はねけいさまに、何か御座いましたか？」

「いいえっ。違いますっ！ その……それが……」

リーシェは大分躊躇った後、喉の奥から絞り出すような声で告げた。

「陛下が……富実樹様ふみきが、行方不明になられましたっ！」

その言葉に、由梨亜妾の顔から、音を立てて血の気が退いた。

「富実、樹が……富実樹が、行方不明……？」

「はい。今日になってから祝賀会は御開きになったのですが、その後、陛下の上級侍女達の証言によると、御部屋まで御戻りになられ、夜着にも御着替えになられたそうですが、ベッドには寝た形跡が御座いませんでした。もしこれが誘拐ならばそれを直して行ったのかもしれません。もしかしたら、御覚悟の上での御失踪かと」

リーシェの言葉に、由梨亜妾は間髪を容れずに叫んだ。

「そんなはずは御座いません！ これからなのですよ？ 地球連邦に、連盟に加盟させる為に話し合いをすると提案したのは富実樹なのですよ？ それなのに、それをやり遂げずに失踪するなど……わたくし達の元からいなくなるはずが御座いません！ リーシェ、ミリュア、富瑠美ふるみと話し合う必要があります。すぐに富瑠美をわたくしの部屋に御呼び下さいませっ！ ルーシェ、アルアはわたくしの着替えを手伝って！」

「はい」

ちなみに、このミリュア・ルリアン・トーチェとルーシェ・クリ

ル・フットとアルア・ルザート・ジョートは、由梨亜妾の従姉妹達で、上級侍女である。

その由梨亜妾は、誰が見ても本当のことを知っているとは思わせないような様子だった。

そして準備は整い、僅か三十分後には富瑠美と対峙していた。

「そんな……まさか、御異母姉様おねえさまがいなくなれるなんて……」
顔を押さえて呻いた富瑠美に、由梨亜妾は慰めるように言った。

「富瑠美、それは今言うべきことでは御座いませぬわ。早急に手を打たねばなりません。貴女はおうだいじん鸛大臣であり、第二王位継承者。ここで貴女が動かなければ、皆が付いて行けませんわ」

そんな由梨亜妾に、富瑠美は疲れたような笑みを浮かべて答えた。

「由梨亜妾、わたくしは、自らの意思で、御異母姉様は出て行かれたのだと思いますわ。何故かと言うと、あの祝賀会で御異母姉様はわたくしにこう仰いましたの。」

『もし、わたくしに何かあったとしても、この案を御進めして貰えないでしょうか』

と。つまり、いなくなる決意をしていたのではないのでしょうか。

あの御異母姉様が、このような重要なことを置いて出て行くとはとても考えられないのですが、あの御様子からすると、御自分で出て行ったのではないかと思ってしまうたのです。残念ながら、この後宮には防犯カメラは存在しません。そんな物、設置する意味が御座いませでしたから。ですが、本宮の人がよく出入りする場所にはあります。至急、それを確認してもらいましょう。そして、去解鏡きょかいきようの申請を致します。由梨亜妾、御異母姉様は、絶対にわたくしが探し出して見せますわっ！」

富瑠美はそう宣言すると、部屋を颯爽と出て行った。

恐らく本宮に行き、鸛大臣の権限で昨夜の全ての防犯カメラを見

て、その一方で峯慶の暗殺者を視るよりも大事な、第一級緊急事項として去解鏡の使用を申請するのだらう。

由梨亜妾はそんな富瑠美の姿に由梨亜妾は苦笑し、思った。

（富瑠美つたら……何て可愛いのかしら。素直で、純真で……残念ですが、富実樹は防犯カメラに映っていないわ。あの癒璃亜女王様が憑いて下さったのですもの。それに、去解鏡は人の質問に答えるだけ。富実樹が夜どこに行ったかという質問には、寢室に行つたということしか映し出さないでしょうし……正しい質問の仕方としては、富実樹は最後に花鶯国のどこに行くのを望んだのか、もしくは、『本条由梨亜』が花雲恭癒璃亜女王様と会ったのは何故か、という質問でないとね……けれど、真実の断片を知らない人では、そのような質問は思い浮かばないでしょう。……富実樹）

由梨亜妾は、窓から空を見上げた。

空は、今日も高く青く澄んでいる。

（富実樹、貴女はこの空と通じる所にはもういない。けれど、時空を隔てた宇宙の果てに、あの子は元気でいる……。わたくしは、それだけで充分です。あと、峯慶様が御無事でおられるならば……わたくしは、それだけでいいです。神様、この世に、もし神が——そのような名でなくても、わたくしの願いを叶えてくれる力を持った方がいらつしやるのなら、峯慶様の御生命を御助け下さいませ。どうか、御願ひ致します……）

由梨亜妾は一心に祈り、願ひ、願ひ続けた。

「由梨亜妾様……」

由梨亜妾は祈り続けていたが、その声でふと現実に戻された。だが、目を上げた先には、富実樹の上級侍女がいた。

「あら……？ 貴女は、シリユイでは御座いませんか。どうなされましたの？」

そう、由梨亜妾に、富実樹の侍女が会いに来たのである。

由梨亜妾と富実樹は親子だが、今の富実樹は王である。

だから、生活する階が違ってくる為、本人同士ならばともかく、

侍女が会いに来るなんてことはほとんどないのである。

「由梨亜妾様、富瑠美様からの伝言に御座います。分かったことが御座いますので、本宮に御越し下さいませとのことで——」

由梨亜妾はシリユイの言葉が終わる前に立ち上がり、

「リーシェ、ミリュア！ わたくしと共に本宮へ来て下さい！

ル―シェ、アルアはここで待機し、連絡係となつて下さい！」

「はいっ」

「仰せのままに」

「承りましたわ」

「それでは早速参りましょう」

「ええ。ありがとうございます、シリユイ。それではリーシェ、

ミリュア。参りましょうっ！」

「はいっ！」

三人は、驚異的な速さで歩き去っていった。

シリユイは啞然として伯母の姿を見送っていたが、自分の役目を思い出し、慌てて部屋を出た。

次の日、由梨亜妾は暗い顔付きだった。

富実樹のことは何も分かっていないし、防犯カメラも去解鏡も、何の役にも立たなかった。

そして、峯慶は未だ意識不明である。

だが、それは分かっていたことなので、それが原因ではない別の……重要なことだった。

「ゆり……マリミアン様、御荷物は全てまとめ終わりました」

それを言ったリーシェの顔も暗いが、それよりも重大なことがある。

由梨亜妾は——もう、妾^{めかけ}ではなくなつた。

ただの、マリミアン・カナージェ・スウェールに戻つたのだ。

その理由は公表するわけにはいかず、表向きは、『ノワール・エリア・スウェールが体調を崩してしまい、心細くなり、無理とは承知しながらも由梨亜妾の帰還を求め、それに富瑠美が同意した』となっているが、本当は『決して大きな声では言えないような大罪をノワール・エリア・スウェールが犯してしまった。よって、戦祝大臣^{じん}の地位を剥奪、長男のシャーウィン・リシエル・スウェールにその座を譲る。また花雲恭由梨亜の妾の地位剥奪と王宮からの追放、王籍からの削除、また花雲恭由梨亜の侍女侍従の王宮追放をする』という物である。

つまり、由梨亜妾が花雲恭由梨亜でなくなると同時に、上級侍女のリーシエ、ミリュア、ルーシエ、アルアだけではなく、その下の階級にある、総下^{そうげ}の血を——つまり、王族の血を引く侍女も侍従も、王宮から出されるのだ。

「失礼致します、御母様……」

由梨亜妾——いや、マリミアンはその声に顔を上げた。

すると、目の前には富瑠美、杜歩埜^{とふや}、些南美^{さなみ}、柚希夜^{ゆきや}がいた。

「貴方、達……」

「ゆ……マリミアン様、本当に、行かれてしまうのですか？」

富瑠美のその不安げな声に、マリミアンは悲しげな微笑みを浮かべて答えた。

「富瑠美、貴女にも分かっているでしょう？　それが、決定したことですわ」

「御母様っ！」

些南美は耐え切れずにマリミアンに抱き付き、涙を流した。

「本当に……本当に、御別れなのですねっ……」

「ええ。わたくしは一人で行きます。富瑠美、杜歩埜、些南美、柚希夜。貴方達は、ここで幸せになりなさい。まあ、柚希夜は成人したらここを出るでしょうけれど……」

「はい、母上……」

王族は、王やその伴侶、そして篤大臣になる以外に、この王宮に

留まる術はない。

なので、個々の才能に応じて運動の世界に行ったり、科学研究・学者の分野に行ったり、芸能・芸術方面に行ったり、商売人や官吏になったり、宗教の世界に入ったりする。

柚希夜は教師という職に興味があったので、成人したら、柚希夜は城を出ることになるだろう。

その時だった。

ノックの音がしたかと思うと、いきなり扉が開いた。

「失礼致しますわ、マリミアン」

そう、居丈高に言い、深沙祇妃^{みさぎひ}が入って来た。

だが、その姿を見て些南美と柚希夜が抑え切れずに

「うっ」

と声を漏らし、顔を歪めてしまった。

何故なら、これから王宮を出る為、質素な服装をしているマリミアンに対する当て付けのように、年齢に似合わない豪華なふわふわのドレスを身に纏い、それには様々なずっしりとした刺繍を施した拳句レースをふんだんに巻き付け、透明と黄色と青の金剛石^{ダイヤモンド}を無数に縫い付け、髪は豪華に最近の流行に則ってアイロンで細い巻きを大量に作り、それを幾つかの束に纏め、それぞれの束に金系銀系を大量に編み込み、珊瑚^{コーラル}、翡翠^{ジェイド}、瑠璃^{ラピスラズリ}などの宝石を埋め込んだティアラを被り、ネックレスは、粒を丁寧に揃えた涙型の真つ白な真珠と^{パール}綺麗に澄んだ翠玉をそれぞれ一連ずつ首に掛け、ブレスレットには大粒の水晶^{クォーツ}と淡い色の青玉^{サファイア}、指輪には大粒な紅玉^{ルビー}と桃色をした金剛石^{ダイヤモンド}を嵌めていたのだ。

いや、よくよく見ると、ドレスには様々な色の小粒の宝石が、もつと大量に付いているようだ。

今のこの世の中、人工でない本物の宝石など金持ちにしか手に入らないのに、全て天然物で、おまけに大粒であり、厭味な宝石の展覧会である。

これからこのパーティーに行くのかと突っ込みたくなるような

格好でもあり、そしてそのパーティーでも浮くこと間違いなしの恰好である。

そして何よりも、既に四十代になっている『オバサン』のする格好ではない。

「御機嫌よう、マリミアン。貴女、王宮から立ち去ることになったのですってね。嫁いだ女性には、滅多に実家へ長期滞在できぬのに、御帰りになられるのですって？ それは大変御喜ばしいことに御座いますわね。戦祝大臣が御倒れになったことは残念でしたが」

深沙祇妃は真実を知っているのに、相変わらず図々しい物言いだ。あまりなことに、富瑠美の頭のどこかがブチッという大きな音を立てて吹っ飛んだ。

「小母様、邪魔ですから何処かへ行って下さりませんか？ わたくし達は御母様との御別れを悲しんでいるのですから。そして、姉が行方不明になったことも悲しく思っているのですから。部外者の小母様なんかに、邪魔されたくは御座いませんのよ」

そのあまりな言葉に、深沙祇妃は絶句し、次いで、見る見るうちに頭に血が上った。

「あ、貴女という娘は！ わたくしという母を持ちながら、よくもそんなことを……！」

「生憎ですが、貴女がわたくしを産んだ者でも、わたくしを育てて下さったのは由梨亜妾です。血が繋がっていない？ それが何です。由梨亜妾がわたくしを育てて下さったのは、深沙祇妃、貴女がわたくしを育てることを拒否なさったからでしょう。貴女がこのことについて文句を言う資格は御座いません。……さあ、ここから出て行きなさい」

富瑠美はそう言うと、煩そうに深沙祇妃を部屋から追い払った。その様子を杜歩埜、些南美、柚希夜は啞然として、マリミアンは静かに見守っていた。

「富瑠美、御願いがあのですが……」
不意に、マリミアンが言った。

「何でしょうか？」

「些南美が成人したら……その頃には、貴女と杜歩埜は結婚しているでしょう？」

「はい。それが、何か？」

富瑠美も杜歩埜も、それを全く変に思っていなかった。

それは、富瑠美がこの国の王族として産まれたことと、富実樹が還ってくるまでは、富瑠美は杜歩埜と結婚して王位に即くことが決まっていたからだ。

「それならば、些南美を総下にして欲しいのです。それが、富実樹の願いでもあります」

富瑠美は目を睜って絶句し、杜歩埜と些南美は居心地悪そうに身動きした。

一般的に、『総下』とは日蔭者であり、仮にも王家の姫君になりたいと思う物ではないと知っている富瑠美は、呆然と口を開いた。

「何故……総下、などに……」

「些南美と杜歩埜が両想いだからですわ。どうか、御願致します」
大事な異母妹いもむすめの一人である些南美を、そんな者にはしたくないとは思ったが、真剣なマリミアンの表情と、杜歩埜と些南美の懇願するような表情に、ゆつくりと頷いた。

「……分かりましたわ。それくらいならば、容易いことです。元々些南美には婚約者がおりませんし、官吏になる気も市井で働く意思もありません。些南美は宗教家になるという意思を示しておりましたので、何の問題も御座いませんわ」

「富瑠美御異母姉様……」

杜歩埜と些南美は椅子から立ち上がると、その場に膝を付いた。

「ありがとうございます、富瑠美御異母姉様。この御恩は決して忘れませんわ」

「私ものです。本当に、ありがとうございます」

「いいえ。でも、貴方達がそのことを何年も秘密にしておいたことは、とても驚きましたわ」

「大したことでは御座いませんわ。ただ『賢い異母兄あにを慕う純粋な異母妹』と『異母妹の面倒見のよい優しい異母兄』を演じていただけですわ」

その場にいた皆がクスツと笑ったその瞬間、リーシェが部屋に入ってきた。

「マリミアン様、そろそろ、時間で御座います」

「まあ……もうそんな時間。それでは富瑠美、杜歩埜、些南美、柚希夜……幸せになりなさい。それが、わたくしの願いです。それと……どうか、峯慶様を——貴方達の父を、宜しく頼みます。それでは、さようなら」

「御母様……さようなら」

「私は、絶対に忘れません。御元気で、母上」

「きつと……また会って見せます。その時までは、さようならですわね」

「さようなら……御元気で」

多種多様の別れの言葉を耳にし、マリミアンは部屋を出て行った。マリミアンが部屋を出て行くと、些南美が長椅子に座り込んだ。

「御母様……」

些南美の目から、涙が零れ落ちた。

そんな些南美の姿を、誰も慰めることができなかった。

何故なら、彼らも同じように打ちのめされていたからだ。

特に富瑠美は、視線を床に落とし、涙を必死で堪えていた。

（御異母姉様も、御父様も、マリミアン様もいなくなってしまった

……御異母姉様には、何も手掛かりがない。御父様は昏睡状態。マリミアン様は、王宮追放……そして、わたくしが王位へ……。まるで、呪われているようですわ。御願いです。御願いですから、御異母姉様……戻って来て下さいっ！）

だが、そんな富瑠美の生命を賭けるかのような必死の願いは……決して、叶えられることがなかった。

第十章「再会」――1

「千紗ちさ！　じゃあ、また明日部活でねっ！」

「うんっ！　藍南あいな、尚鈺しょうじゅく、素香もとかっ！　じゃあねっ！」

そう言い、千紗はその四人と別れた。

彼女達は千紗の部活の仲間であり、副部長が素香、金管楽器の代表的な役割を担っている金管セクションが尚鈺、木管楽器の代表的な役割を担っているコンサートミストレルが藍南で、他に副部長に睦月むつき、もう一人の金管セクションに涼斗りょうと、コンサートマスターに奏谷そうやがいる。

嶺郷れいこう高校吹奏楽部の幹部は、この七人で形成されていた。

その中ではこの上げた女子四人男子三人とプラス一名で仲のよいグループを作っている。

八人は、他の部員が苦笑するほど仲が良かった。

この日は、女子四人でカラオケに行つて来た所だった。

（遅くなっちゃったな……うっわ、もう五時三十分になる！　休みの日の門限六時なのにつ！）

千紗は慌てて走っていたが、声を掛けられて足を止めた。

「おい、千紗！」

「睦月っ！　どうしたの？　こんな時間に……」

「それはこっちの台詞だよ。千紗って門限厳しいだろ？　俺車あるからさ。近くまで乗つけてくよ」

「ありがとう！　睦月っ！　嗚呼、これで救われた……」

「何だよ、そこまで悲観することないだろう？」

その言葉に、千紗は気まずそうな顔をする。

「実は今日逃げて来ちゃったんだよね。それで、机の上に『門限までには帰ります』ってメモ置いて来ちゃったからさ。」

『サボっただけならまだしも自ら示したことすら破るとは何事か！　お前は本条家ほんじょうの人間としての自覚はあるのか！』

「ってお父様に怒鳴られるに決まってるもん」

千紗は肩を竦めて言うのと、睦月の車に乗り、家まで帰って行った。そして家に帰るとやはり、耀太ようたの怒鳴り声こゑが屋敷を揺るがした。

「お前という娘は！ 今日けふは聡殿さとの、護殿まもる、早宮殿さみやが来てくれると前から言っておいただろうが！ 彼らに無駄足を踏ませてしまった私の世間体はどうなると言うのだっ！」

その延々と続きそうな耀太の言葉を、煩そうに千紗は途中で遮った。

「んなもん知らないし。第一前々って何。言われたの昨日だよ？」

しかも夜。あたしはもう友達と約束してたんだから。先に約束した方が大事だって、最初に約束したことは守らなくてはならないって言ってたのはどこの誰だったっけ？ お父様じゃないの？」

「うっ……うぐっ……」

確かに、言った覚えがあるので言い返せない。

「あたしは最初の約束を守って遊びに行ったの。お父様の言うことには逆らってない。それに、お父様はあの人達に会って言わなかったでしょ？ 『明日は婚約者候補達が来る』としか言っていないもん。それにあたし、メモ残したよ？ 六時までに帰るって。あたしはちゃんとそれを守った。あたしはお父様に怒られるようなことは何一つやってないわ。なのに怒るの？」

正論過ぎて……反論も何もできない。

だが、立ち去ろうとする千紗に、耀太は思い切って声を掛けた。

「千紗、お前は明日の午後、何も予定はないか？」

「……ないけど」

「それでは、応接室に来い」

「……分かったわ。でも、午前は部活あるから駄目だからね」

そう言い置くと、千紗は部屋へと行った。

千紗の姿が見えなくなると、耀太は大きな溜息をついた。

「何故……小学校の頃は、もっと言うことを聞く、素直な子だったのに……」

当たり前だ。

それは、千紗ではなく由梨^{ゆりあ}だったのだから。
だが、それを知らない耀太は、嘆いていた。

「一体、どこで育て方を間違ったというのだ……」

千紗は、ベッドの上に倒れ込むと、溜息をついた。

（何でお父様はあんなに頑固なの？ 昔は優しく、た？ あれ？
何か違う……？）

千紗は今までに何度も感じていた違和感を覚えた。

今までは気にせずに通り過ぎていたのだが、今は無性に気になった。

『千紗、ご飯よ。そろそろ降りてきなさい』

『はい、お母さんっ！』

今まで一度もなかったことだが、記憶の底からそんな会話が飛び上がってきた。

普通は、自分が勝手に考え出したのか、話の中にでも出て来たのかと思うが、妙な胸騒ぎがした。

これは他人事ではない、自分のことだと……そう、直感的に感じた。

だからと言って、どうにかできる物でもない。

妙な胸騒ぎに鼓動が速くなるのを感じ、千紗は起き上がり呼吸を整えようとした。

その時、いきなり自分の部屋の一つから、オルゴールの音が聞こえてきたのだ。

隣の部屋と言っても、今ここの近くには千紗以外人がいない。

だから、聞こえたのだった。

（一体、何だろう……まさか、あたしの部屋に勝手に人が入ってくるわけないしね）

と思いながら千紗はその部屋に行った。

すると、部屋の隅に置いてある本棚の上のオルゴールが勝手に開いていた。

それは六年生の時の誕生日プレゼントとして、手作りの特注品として頼んだ物だった。

それは千紗のイメージとは全く違う、繊細で可憐な、基調が青の可愛らしい物だった。

その中には、赤系の色のビーズで作られたブレスレットとネックレスが入っていた。

何故、そんな物を持っているのか分からない。

だが、とても大切な物だということは分かっていた。

ふと、そのアクセサリーを手に取った千紗の脳裏に、声と顔が浮かび上がってきた。

『うわあ。千紗、ありがとう！ 丁度着るドレスが青いんだよね』

そう言って微笑んだ、明るく澄んだ声の持ち主……柔らかく波打った茶色い髪に、緑がかかった黒の瞳の美少女——そう、本条由梨亜の顔が浮かび上がってきた。

（これ……由梨亜っ！ あたしの……親友っ！）

そして、それに答えるかのように、自分の、今とは少し違う、幼い声が聞こえた。

『何言ってるの！ お礼を言うのはあたしの方だよ！ 赤はあたしの色って言われるし……本当にありがとう！』

（あたし達は、彩音千紗と、本条由梨亜……そして、今は本条千紗と、花雲恭富実樹！）

千紗の脳裏に、偽りの記憶ではなく、本当の記憶が雪崩れ込んで来た。

（……あたしは、由梨亜のことを忘れてた……だけど、今思い出せた……由梨亜！）

千紗の胸に喜びが湧き出て、気付けば、頬を涙が伝っていた。

千紗は微笑むと涙を拭い、そのオルゴールを閉めると、部屋を出

て行った。

（今大事なのは婚約者候補をどうにかすること。あの賢い由梨亜でさえもてこずった問題だし、すぐに上手くいくとは思わないけど、あたしはあいつらとは結婚しない。絶対に）

千紗の決意は固く、どんなに重い物でも動かせる梃子でも、絶対に動かない物だった。

「こつて……」

由梨亜は、途惑ったかのように小さく呟いた。

シャン克蘭と日本州では時差があり、日本州が午後七時の時、シャン克蘭では午前三時である。

つまり、日本州の方が十六時間進んでいるのである。

由梨亜は寝ていないが、それでもまだ日が昇る前と日が沈んだばかりでは違う。

おまけにシャン克蘭の五月は日本州の三月の気候と同じであり、日本州の五月の気候はシャン克蘭の六月の気候と同じである。

さすがに、そのせいで一瞬くらっと来たが、何とか立て直して自分の服装を見直した。

由梨亜は、ついさっきまでカサミアン宮の中級侍女の女官服を着ていたはずだが、今は七分丈の白いパンツに淡い水色のティーシャツと上着を着て、そして千紗に貰ったアクセサリーを付けている。

（何だか、便利だから便利じゃないのかよく分からないわねえ……この魔力って）

と首を傾げて、辺りを見渡した。

そこは、由梨亜の通っていた中学校の校門の前だった。

由梨亜はそつと溜息をつく、ふと自分が荷物に入った鞆を……それも大きい鞆と小さい鞆を持っているのに気付き、近くの公園まで行って中身を開けてみた。

大きい方には着替えや洗面用具など、しばらく暮らしていく分に必要そうな道具類が入っており、小さい方には財布や身分証明書など、盗まれたら大変な重要な物が入っていた。

（これがあれば、当分は困らないで暮らせるわ。けど、ずっとは無理……じゃあ、ある程度情報を仕入れてから家に帰ろう。……それまでは、千紗には秘密にしよう。もうそろそろ千紗の記憶も戻ってるだろうし、いきなり行って驚かせた方が面白いもの）

由梨亜はそう覚悟を決めると、お腹が空いてくるのが分かった。

（……そう言えば、あの祝賀会では大して食べれなかったんだった。あともうしばらくすればこっちでは夕ご飯の時間になるから、コンビニでちよつと買ってこつと）

由梨亜はそう決めると、近くにあるコンビニに向かって行った。

（うわゝ。しばらく来てないと、こんなに商品って変わるもんなんだゝ。あ、私のお気に入りのパンなくなってる！ あつてもこのパン美味しそうっ！ どれにしよう。迷っちゃう。そういえば、千紗と一緒に初めてコンビニに行った時もはしゃいで、千紗に呆れられたっけ）

そんなことを思いながら由梨亜が品物を選んでいると、

「いらっしやいませー」

という声がして、由梨亜が振り返ると二人の少女が入って来た所だった。

すると、二人の少女が笑い喋りながらこちらに向かってきた。

（うわゝ。大荷物抱えてここに居たら、邪魔かも……？）

と由梨亜が思った瞬間、案の定二人が由梨亜をまじまじと見詰めてきた。

「あの……邪魔、でしたか……？」

と由梨亜が恐る恐る訊ねると、二人は首を横に振ったが、穴が開

くほど見詰めてくる。

「あの、間違ってたらごめんなさい。貴女つてもしかして……千紗の親戚か何か？」

と、一人の少女が言い、由梨亜は思考停止した。

（そんなに私と千紗って……似てるかしら……？）

由梨亜の沈黙を別の意味に取ったのか、その少女が謝ってきた。

「やっぱり、人違いだったのね。ごめんなさい」

由梨亜の頭は、そこでようやく通常活動を始めた。

「あ、あの……千紗って、本条千紗のことですか……？」

「うん。そうだけど？」

「それなら、私と千紗は血が繋がっています。でも……そんなに似てますか……？」

「そっくりだよ。千紗がもつと大人びて、髪形と髪の色を変えて目の色も違ってたら、実の姉妹って言われても納得するぐらい似てるよ。つまりは、顔立ちが似てるってこと、かな？ あと、どっか雰囲気も似てるよね」

「……あの、っていうことは、千紗のことをよく知ってるんですよね？」

「そりゃあそうよ。だって同じ高校の同じ部活、同じ幹部の、周りが苦笑いするぐらいとっても仲良しの四人組だもん」

……自分で分かっていたいけば、世話はない。

だが、その得意げな口調を無視して、由梨亜は急いた口調で言った。

「じゃあ、買い物物を済ませたら、千紗の話を訊かせて貰えませんか？ 私、ついさっき戻って来たばかりで、三年間と半年ぐらい千紗に会ってないんです。だから、貴女達の知っている千紗の話を訊かせて貰えればと……」

「うん、いいよ。貴女と千紗の関係を教えてくれればだけど」

「ええ。それぐらいのことなら」

「じゃあ、決定ね。それじゃあ、ちょっと待っててね。買い物済ま

せるから」

「ええ」

由梨亜はにつこりと笑った。

（うまくいけば、明日にも千紗に会えるかも知れない……）

そう思えば、楽しくなった。

「へー。そうだったんだあ。でも、千紗があんなに頭のいい高校に入るだなんて思ってもみなかったな。やっぱり千紗、頭いいんだよ」
「何言ってるの？ 千紗、日本州の中でも常に上位百位の中に入ってるのよ。部活もやっていていつ勉強してんだか。本人に訊くと『効率良くやれば誰でも簡単にできるよ』って言うし。ほんと、凄いだからっ！」

「へー。ありがと。こんなに詳しく教えてもらって……」

「いいって。あたし達にとってもいい暇つぶしだったし。だって千紗の家、すごい門限厳しいんだよ。あたし達は、まだ遊び足りないのに……」

「ね、由梨亜。貴女は、千紗からみたら何なの？ 血が繋がってるって言ってたよね？」

と、素香が言った。

「私？ 私は、千紗の双子よ」

二人が絶句するのを面白く見ながら、由梨亜は嘘とも真実とも言えることを口にした。

「やっぱりびっくりされちゃった。私達って二卵性の双子だから、普通の姉妹並みにしか似てないのよね。だから、誰に話しても驚かれちゃうの」

「い、いや……それ、論点が違う……」

何とか藍南が喉を振り絞っていったが、由梨亜には全く意味が通じなかった。

「えっ？ どこが違うの？」

（こりや、言っても無駄だ……）

（さすが千紗の姉妹。呆け方が似てるっていうか、天然だっているか……あたし達が驚くのは、こんな楚々としたお嬢様風……っていうか、ほんとお嬢様なんだけど……とにかくこんな人と元氣と無茶無鉄砲の代名詞みたいなお嬢様とは到底思えない千紗が同じ環境で育ったなんて信じられないっていうことで……双子の中では二卵性よりは一卵性の方が多から珍しいかも知れないけど、あり得ない訳ではなくて……って何考えてんだ、あたし。っていうかつ！ どうしたら同じ環境でこんな違いが出る訳っ？！）

と、二人が思っていると、由梨亜がすまなそうに言った。

「あの、ごめんなさい。私、ちょっと用事があるから……別れてもいい？」

「あつ、うつん。あたし達もう戻らないときついから。それじゃ、じゃあね、由梨亜」

「じゃあねっ！」

「ええ。また会えるといいわね」

そう言つと、三人は別れた。

そして、由梨亜は小さなホテルのような所に行った。

そこは、よく家に居辛くて出てきた中高生達や、お金のない大学生が泊まっていて、公認の家出場所にもなっている。

つまり、自分の娘や息子が家出をして戻って来なかったら、そこに行けば九十パーセントに近い確率でいるという訳だ。

まあ、その家出と言うのも、むしろくしゃして家を出て来たものの、他に行く所がないといって泊まるということの方が多いが。

由梨亜はそこで軽い食事を摂り、眠りについた。

辺りは、静けさと闇だけが蔽っていた。

千紗は、寝返りを打つと、溜息をついた。

由梨亜のことを思い出してから胸騒ぎがする。

そして、千紗は起き上がると呟いた。

「やだ、どうして眠れないんだろ……明日、行かなきゃならないのに……」

そして起き上がると、千紗は勉強部屋へ行った。

「どうせ寝られないんなら、勉強したほうがいいよね。それに、明日は午前中から部活だし」

千紗は勉強を始めたが、それもあまり手に付かなかった。

「あゝあ。もうやだ……」

しかし、いくら胸騒ぎがしても、人の身体は眠らないといけないようになっていく。

それが、特にしぶとい千紗ならば尚更だ。

翌日の朝、千紗は気が付いたら机の上にもたれて眠っていた。

「千紗様……千紗様、起きて下さい」

「あ……おはよう、鈴南^{すずな}」

「おはようございます、お嬢様。旦那様からですが、二時までに応接室に来いとのことですよ」

「ありがとう」

そう言うと、千紗はダイニングに向かった。

耀太がそう言うのなら、朝は恐らく一人だろう。

第十章「再会」― 2

「お父様？ 来たけど」

千紗ちさがそう言っただけに入ると、そこには既に耀太ようたと聡護さとご、早宮さみやが来ていた。

千紗は、内心ゲツと思うのを抑えられなかった。

（何でこの三人がここにいる訳？！ 確か週に一度だよな？ 昨日来たばかりじゃ！）

「千紗、お前が何と言おうと、この三人がお前の婚約者候補だ。期限もあと一年半。今のうちに決めておいたほうが楽だぞ」

耀太のその勝手な言い分に、千紗は頭に來たが黙っていた。すると、益々図に乗ってまくし立てた。

「お前は何かと言っていると逃げようとするからな。時間がある内に捕まえておかねばならん」

千紗は小さく溜息をつく、耀太を真正面から見据えて言った。

「お父様。あたしはこの人達とは婚約者にならない。第一、人には結婚する人を選ぶ自由があるのよ。この三人の中から選べなんて、地球連邦の憲法に違反することになる」

「それは大丈夫だ。候補が一人だけなら問題だが、三人いるからな。違憲ではない」

いわゆるグレーゾーンの理論を胸を張って言う耀太に、千紗は怒りを堪えて、努めて冷静な口調で言った。

「だけど、あたしに他に好きな人がいるとしたら？」

「はっ？」

「千紗さん、今、何と言ったのです」

「そ……そんな暴言、見逃せませんよ？」

「虚偽偽りを言うのにも、ほどがあるという物です」

「嘘じゃないけど。あたしにはちゃーんと好きで、付き合ってる人がいるんだから」

「ち……千紗っ！ お、お前という娘は……まだ選ばないのは許す。だが、この三人以外と付き合うのは断じて許さんっ！ 即刻別れるっ！ さもないと、その彼に不利なことが起こるぞ！」

「不利なことって？」

「うっ、つまりその……例えば、彼の親が勤めている会社を経営難にするとかだなっ」

「公務員だったら？ 強大な力を持つ敵対会社だったら？ 何も考えてないね。このままじゃ埒が明かないから彼呼んで来るわ。ちょっと待ってて」

と千紗は言うつと、耀太にねだつても「絶対買わんっ！」と言われたので部活と両立という涙ぐましい努力の元、バイトをして溜めたお金で買った携帯端末で、ある一人の人物を呼び出した。

するとその十分後、その彼がやってきた。

「いらっしやい。ごめんね、こんなことに巻き込んだじゃって……」

「いいって。俺は千紗のことが好きだし、千紗の気の強さのことも分かってるしな」

「やっぱあんたの方が、お父様よりあたしのことをよく分かってる気がする」

と千紗は言うつと、応接室に彼を連れて行つた。

「お父様、聡さん、護さん、早宮さん。戻ったよ」

千紗はそう言うつと、彼を中に入れた。

「じゃあ、中に入って」

「失礼します」

そして、二人が椅子に落ち着くと、耀太はこちらを睨むようにして言った。

「お前は……誰だ」

「俺は睦月むつきと言います。莊傲睦月そうおうむつきです」

「それで？ お前は千紗と付き合っているのか」

「当たり前でしょう？ でなかったら、一体何の為にここまで来たって言うんですか」

睦月と耀太の間で、密かに火花が散った。

「ああ。ちよつと二人とも落ち着いて…… つかそこっ！ お父様に味方しようとしてんだか混ざりたいんだか分かんないけどにかく混ざらないっ！ そこ、こっそり逃げないっ！ そっちはサッサと退くっ！ 邪魔っ！！」

と千紗に怒鳴られた、味方しようとした護と逃げ出そうとした早宮と固まって動かなかった聡は、並んで壁際に立たされた。

まるで悪戯を見つかり、罰として廊下に立たされている小学生のようだった。

そんなてんでこ舞いの中でも、睦月と耀太の舌戦は繰り広げられている。

千紗は軽く呻いて額を押さえると、部屋を出て行った。

そして玄関ホールに辿り着くと、大きな大きな溜息をついた。

「はゝあ、何か疲れた……」

そして玄関を出て庭に行き、深呼吸を繰り返した。

「ほんつと、生き返る…… しばらくここにいていいよね……」

「全く千紗ったら、何でそんな死んでるの？ 千紗でもそんな顔するんだあ」

「……………えっ？」

「千紗ったら、もう私のことを忘れたの？ たったの四年足らずで？」

「……………まさかね。空耳だよ、空耳。昨日由梨亜ゆりあのことを思い出したからそれで由梨亜の声が聴こえるんだよね。きつとそれだよ。あたしちよつと疲れてるし」

「空耳だと思っんなら、後ろ見てみたら？ 千紗」

確かに人の気配を感じ、千紗は意を決して後ろを振り返った。すると、由梨亜の姿が見えた。

「夢、じゃ……ないの？」

「勿論よ。私は還つて来たの。私は花鶯^{かおつく}国には不要な人間だつてこ
と分かつたし、千紗に逢いたかつたし。だから……ね」

「で、でも……由梨亜、髪の毛が……」

「ええ、そうよ。私、髪が長かつたじゃない？　それで、富実樹^{ふみき}の
時もずっと髪が長かつたの。だからね、ちよつと短くしてみたかつ
たんだ」

「ちよつと短くつて……短くし過ぎ……由梨亜」

千紗のその呟きに構わず、由梨亜は千紗に宣言した。

「さつ。じゃあ乗り込むわよ。千紗」

「の……乗り込むつて、どこに？」

「鈍いわねえ、千紗。今この状況で言つたら、お父様の所しかない
じゃないの」

由梨亜は悪戯を思いついた子供のようにニンマリと笑つた。

「だから、私が言っているのはそのようなことではない！」

「ではどんなことだと？　第一本人の気持ちを無視するこのやり方、
大昔ならともかく今のこの世の中でやつたら時代錯誤としか言いよ
うがないですよ。それに、恥ずかしくないんですか？」

「……何だと」

「可哀想ですねえ、千紗みたいな気の強い娘を持つて。娘の言いな
りになる父親だなんて、恥ずかしくて外に出られませんねえ」

「き、貴様！　言いたいことを言わせておけば！」

「これはどうも。貴様と呼ぶということは、俺を親しい間柄の対等
な者、もしくは少し目下の者、それが目上の相手として認めている
ということでしょう？　本来『貴様』とはそういう意味です。極端
に相手を貶める意味合いは、本来含んでおりませんか？」

……さすがは、進学校に通っていることはある——のか？

睦月は頭脳をフル回転し、素晴らしい舌戦を繰り広げていた。

「……っの、こう言えばああ言う揚げ足取りめっ！」

「何だつて？ 俺は単なる事実を述べただけに過ぎませんが。反論できないのはそちらの責任でしょう？」

またもや壮絶な火花が散る。

この繰り返しが、既に十分以上続いていた。

まあ、やっている本人達は時間を気にしていないからいい。

可哀想なのはこの婚約者候補達三人で……永遠とも思えるような時間を感じていた。

（も、もう……お願いですから、誰か止めて下さい……）

というのが、三人の共通した思いだった。

「だ……旦那様っ！ 大変ですっ！」

その時、召し使い達が駆け込んで来た。

「何だ？ 何事だ」

と腰を浮かせた耀太に、混乱した召し使い達は必死の説明を試みるが、パニックに陥っている為、何を言っているのか分からない。

「みんな邪魔！ あっち行って！ あっ、でも鈴南、苓華、陵多、章平は残ってっ！」

と千紗が大声で指示を出すと、ようやく辺りは静まってきた。

だがそのお蔭で、皆ここにいるはずのない姿を目にすることになった。

（ま、まさか……）

（嘘……あり得ないだろ、これっ！）

（ど……どうして、どうしてあの人がここにっ？！）

その中で平然としているのは、千紗と由梨亜だけだった。

「お父様。お久しぶりです」

由梨亜のその声に、耀太は目を丸くして答えた。

「ゆ……由梨亜、か？」

「ええ。そうよ？」

「本当に……由梨亜なのか」

「見れば分かるでしょう？ まさか、四年も経ってないのに忘れたんじゃないでしょうね？」

「で、でも……由梨亜の髪は、そんな短くは……」

そう、耀太が絶句したのには、由梨亜が現れたのと他に、もう一つ理由があった。

それは由梨亜の髪が、肩に付くか付かないかまでバツサリと切られてしまっていたからだ。

いわゆる、ショートカットである。

「ええ。家出した時はそうだったわ。だけど、邪魔だったから切ったのよ」

（家、出……？ 由梨亜が富実樹になつたのを、家出……）

記憶を探ってみると、確かにその記憶はある。

それに、自分は家出に協力していたようだ。

微妙な寒気が背筋を這ったが、不気味な感じよりも呆れや脱力感の方が勝った。

千紗は変な所で考え込んでしまったが、由梨亜と耀太の言い争い（？）は続いている。

「邪魔とは……邪魔って……何故、邪魔に……邪魔……私は……」
既に耀太の言動は支離滅裂だった。

「あら、だって長いと働きにくいでしょう？」

「は……働、く？」

「ええ。生きていくにはお金が必要不可欠なもの。幸い、地球連邦に近いレイリア国の義務教育は四歳から十二歳だからね。全体の十分の一の人がその初等教育だけで働くから、そこに行けば働けたわよ。勿論偽名を使って、だけどね。ああ、だけどその後の中等教育から通信制とか定時制の学校があるから、勉強は続けてたわよ」

耀太は、由梨亜の言葉の後半を聞き取れなかったらしい。

前半の言葉を繰り返し呟いていた。

「……そんな……本条家の娘が……貴族の娘が……家出をしただけならともかく、生計を立てる為に働く……？ それも、他星に行っ

て……偽名まで使って……？」

「だって、偽名を使わなくちゃ、お父様達に見つかっちゃうかも知れないじゃない」

「そ、それも、そうか……って、違う！ 私はそんな話をしたいんじゃないっ！ ええい、忌々しいっ！」

「ところで、言いたいことがあるんだけど。いい？」

「ああ、言ってみる」

「私は地球連邦には戻ってきたけど、ただじゃあ家には戻らないわよ」

「どういうこと？ 由梨亜。今家にいるじゃん」

「いや、あの……千紗、そういう意味じゃなくて、ここでは暮らさないわよってことよ」

「ああ、なるほど。そういうことか」

千紗はすんなりと納得したが、耀太はそうはいかない。
警戒しながら言った。

「では、その条件とは何だ。言ってみる」

「それでは遠慮なく」

と由梨亜は楽しげに言うと、悪戯っぽい笑みを浮かべて言った。

「千紗とこの莊傲睦月君が付き合うのを、認めること」

「そ、それならば、お前は家に戻るんだな？」

「ええ。勿論」

「それでは、千紗と睦月とやらが付き合うのを認める」

「ええっ！ そんなあ」

とは、皆から忘れ去られていた婚約者候補達三人の中の一人、聡である。

「何か、文句でもあるのか？ 私の決めたことに」

と、凄味を持たせて耀太は言った。

「い、いえ……何も」

「そうか」

さすがに、まだ年若く未熟な聡は、耀太に逆らえなかった。

「それじゃあ、絶対に認めてくれるのね？ お父様」

「ああ。それに今まではお前だけが私の子供だったが、次女の由梨亜が戻って来た。由梨亜、お前はの中の誰かを今すぐ婚約者と決める。お前に拒否権はない。そうだろう？」

（次女……ってことは、あたし長女なの？ つまり、あたしが家を継ぐっ?!）

啞然とする千紗を尻目に、話はどんどん進んで行く。

「いいえ。そんな、とんでもない。私、家出する時に置き手紙にこう書いたわよ？」
『藤咲香麻ふじわら けいまと付き合うのを認めてくれないければ、この家には二度と戻ってきません』
「って。だから、私が付き合うのを認めてくれないければ、もう一度家出するわ」

「なっ……！ そんなこと、聞いてないぞ……！」

「でも、確かに書いたわよ。多分、まだそれ取ってあるでしょう？ 出してみれば分かることだわ。それに、もしそれを認めてもらえなかったら、最初の約束を破ったということで二番目の約束は無効となり、私は千紗と睦月君を連れて家出するわ。お父様、貴方が選べる道は二つよ。私が香麻と付き合うのと千紗が睦月君と付き合うのを認めるか、それを認めず私達を家出させるのか。あつ、そうそう、次の家出場所は花鶯国にしようかしら。遠いとこだけど、確かあそこはそういう人権に対しては、すごい厳しい国だったわよねえ？」

「うっ……うぐ……」

耀太は何も言い返せなかった。

もしこの三人を抑えようとすれば必ずコテンパンにやられてしまっただろうし、由梨亜がここまで自信たっぷりには、既に花鶯国に飛ぶ準備はできているはずだ。

「世間体を気にしてこの三人と結婚させようとしても、逆に私達がいなくなったら、もっと世間体は悪くなるわよ？ 目先のことだけ考えてやるのか、後々のことまで考えてやるのか……」

由梨亜の問い掛けに、耀太は深い溜息をついた。

そんなほとんど選択権のない二者択一など、答えは決まっている。
耀太は聡、護、早宮の方を向くと、

「すまないっ！」

と大声で言い、頭を下げた。

「そ、そんな……では、我らは一体何の為に、今までここに来ていたというのですか？ この中の誰か一人が選ばれるのはまだいい。それは三分の一の確率ですからね、諦めるとしましょう。ですが、こんな粗野な庶民と付きあわせるだなんてっ！ 娘は親の言うことを聞かなければならないのですから、命令すれば済むことでしょっ！ 何故、命令しないのです？」

護が激昂して言うつと、

「そ……そうですよ。我々は……父に、本条家とのよいパイプ役になるよう、命じられて、来ているんですよ？ なのに、そんなことを言われても……困ります。迷惑、ですよ」

震える声で、早宮までもが抗議した。

そして、とうとう聡が地雷を踏んだ。

「ええ。それに、そんな野蛮人のどこがいいのです？ そんなのよ、僕の方が相応しい。貴女は野蛮人ではないのだから。半人でも獣でもない、純潔で純血のお嬢様なのですから。そんな人ではない『物』の血が貴族の家系に——それも大貴族の、百何十代と続く本条家の中に入るなど、同じ貴族として到底許せることはありませんよ、千紗さん、それに由梨亜さん」

プツツという音と共に、千紗の頭の血管が切れた。

「上っ等じゃないの眞湖聡^{まつみ}。よくもここまであたしを切れさせてくれたわね。野蛮人？ 純潔で純血？ あたしが貴族なのは否定しないけど、あたしを流れている血の中にあなたの言う野蛮人の血が入っていることも否定しないわ。それにあたしは小学校の途中から高校までその野蛮人が沢山通ってる公立学校に通ってる。そのあたしが純潔？ 穢れてないって？ だったらそこに通ってる人や教えてる人は野蛮人でも半人でも獣でもないってことになるでしょ？ だ

からあたしは、貴族の身分を鼻に掛けた貴族の連中が嫌いなものよ。あたしが好きになるとしたらそういうことを鼻に掛けない貴族か、貴族じゃない人達。そして、あたしは睦月が好きになった。何か文句でも？」

誰も、何も言い返せなかった。

もしも『全宇宙図太さ大会』という物があつたとして、そこで一位を取るような人でないと言い返せない気迫が、その言葉には満ちていた。

そして、更にそこに追い討ちを掛けるように由梨亜がのんびりと言った。

「逆らわない方がいいわよ。そんなことしたら、千紗本気で切れちゃうから」

（今ので本気じゃなかったのか?!）

と、婚約者候補達三人は胸中で呟き——いや、喚き散らした。それでも何も喋らない三人に対し、千紗は冷酷に言い放った。

「分かったんなら、帰って。そして、二度とここに来ないで」

その言葉に逆らえる人が、この宇宙にいるのかどうか。

三人は、すごすごと引き返す他がなかった。

そしてその三人がいなくなると、千紗は満面の笑みで由梨亜を振り返り、言った。

「お帰り……お帰りなさいっ、由梨亜っ！」

「ええ……ただいま、千紗！」

終章「そして、二人は……」

「由梨亜、そういえばさ、どうしてこっちに還ってきたのか、詳しい理由訊いてなかったよね？ 何で？」

由梨亜が戻ってきた次の日、千紗は庭で訊いた。

「ええ。あのね、私は今、こうして千紗と普通に喋ってるでしょ？」

「うん。それが？」

「そのこと自体が、花鶯国じゃ……その中でも、王族、貴族とかでは信じられないことなの」

「はあっ？」

千紗が目を瞠って裏返った声を上げると、由梨亜はくすくすと笑い、冗談めかして言った。

「びつくりでしょ。私はカサミアン宮で、王族としての言葉遣いやら儀礼作法やらを色々叩き込まれたわ。異母妹の富瑠美や私の婚約者で異母弟の杜歩埜、あと妹の些南美とか、弟の柚希夜とか、とっても私に親切な弟妹達から教えて貰ったんだけど、その中でもこういう風には喋らなかったわ。どんなに仲のいい兄弟でも、『で御座いますわ』とか『〜ではないでしょうか』とか『〜ですわ』とか、女性だったら『わたくしが』とか、男性だったら『私が』とか、ほんつとくに舌噛みそうになる言葉遣いなの。それが窮屈だったのが理由の一つ。あと、私達地球連邦の考え方と、花鶯国の考え方がすつこい違ってたのも。私達が普通って思う考え方は、花鶯国じゃ平和的な考え方、消極的な考え方なの。私が花鶯国に来てからそういうことは感じ取ってたけど……あのね、花鶯国にはどうしても意見が纏まらなくて二つに割れちゃった場合、総票会っていうのが行われるの」

「総票会？ 何？ それ」

千紗は、眉を寄せて首を傾げる。

由梨亜は少し眉根を寄せてから、千紗の為に、わざわざ噛み砕い

た説明をした。

「総票会っていうのは、最終的にどっちの意見を支持するかっていうのを決める場で……まあ、普通の選挙を小規模にしたような感じね。けど、それに投票できるのは十五歳以上の王族、宗教家、貴族、官吏、学者だけ。その前には色々意見交換とかあるんだけど、その大人数が全部揃うのは総票会が最初で最後。そこで最終論説を行って、最終的にどちらかに投票するの。そして……三日前ね、『地球連邦を宇宙連盟に加盟させる為、武力か話し合いか』というテーマの総票会があったわ。だけど、そこで私が示した考えは、他の誰も考え付かなかった考えだったの」

「どういうことを言ったの？ 由梨亜は」

「『もし戦争が起こったとしたら、必ず戦死者が出る。そしてその身内は嘆き悲しむことになる。まだ戦勝国は勝ったという事実に慰められるが、戦敗国は違う。必ず憎しみが襲い掛かってくる。だからそういつたことの前に、できれば話し合いで解決すべきだ』って」
由梨亜はそれを言うてから、少し顔を顰める。

その時のことを、そしてその意見を言った時の周囲の反応を、思い出したのかも知れない。

けれど、千紗はそれが分からなかったのか、怪訝そうに首を傾げ、唇を尖らせた。

「まあ、それは……普通じゃん。頭がいい人なら、想像力が豊かな人なら、誰でも考え付くでしょ？」

千紗の疑問に、由梨亜は静かに首を振り、しんみりと告げた。

「だけど、花鶯国では違うのよ。花鶯国の辿って来た歴史上には、戦争に負けるという史実がほとんどないから。だから、花鶯国で必要とされるのは、富瑠美みたいな考え方を持った王なのよ。私はあの総票会では勝ったけど、それはきつと、みんなが目新しい考え方に惹かれただけのことだわ。私は、あの国には必要ない。それに千紗に逢いたかつたし、香麻こうまにも逢いたかつたし、何より戻る方法が見付かつたんだもの。戻らない人がいたら、そっちの方が可笑しい

わよ。千紗もそう思うでしょ？」

由梨亜が肩を竦めて訊ねると、千紗は笑い、由梨亜と同じように肩を竦めてみせた。

「だね。でも、由梨亜のお陰であたしは、元の記憶を取り戻せて良かったよ。そういえばさ、由梨亜。一体いつの間に、香麻と付き合うだの何だのっていう話になったの？ あたし何にも聞いてなかったから、すっごくびっくりしたよ」

「ああ、そう言えば、すっかり忘れちゃってたわね」

千紗は、思いつきりずっこけた。

その突然の動作に、由梨亜は思わず目を瞠る。

「だ、大丈夫？ 千紗」

千紗はしばらく呻いていたが、キツと由梨亜を睨み付けるように見上げ、うつすらと目に涙を滲ませながら叫んだ。

「由梨亜！ 忘れちゃってたはいくら何でもないでしょっ！」

千紗に怒鳴り付けられた由梨亜は、首を竦めた。

「ご、ごめん……でもね、私が香麻に告白したの、過去に行った、丁度あの日なの。お父様に婚約者候補達のことを聞かされて、あの時、ちよつと自棄になっちゃってね。それで朝、もう振られてもいいって思っで、決死の覚悟で香麻を呼び出して告白したら、受けてもらえたのよ。とっても……とっても、嬉しかったわ」

「へへえ。そうだったんだあ。良かったね、由梨亜」

「ええ。だから、本当はあの時、屋上で言うつもりだったの。けど、言う前に過去に飛ばされるし、そこで本当の出生を知って、もう地球連邦に戻れないって……香麻にも、もう二度と逢えないって知るし……。……本当は、もう諦めてたの。でも、こうして戻って来ることができたし……正直言っで、嬉しいわ。花鶯国の家族を、見捨てた、ってことには、なるんだけど……でも、それでも、戻って来て、良かったって……そう思う」

しみみりと言った由梨亜に、千紗は少し気まずげな表情をした後で、わざと笑い飛ばすように、由梨亜の背中を一回はたいた。

「まあ、『終わり良ければ全てよし』って言うし、今がいいんだからいいんだよ、きつと！ 花鳥国の人達には気の毒だけど、由梨亜は、こっちの方がいいんでしょ？ だったら、それで間違いはないよ。由梨亜が家族でも、全部を義理立てする必要なんかないもん」
千紗はそう言うと、悪戯っぽい笑みを浮かべた。

「……それにしても、由梨亜、あんな状況でよく香麻に告白したよね。信つじられない。あの、清楚で優雅なお嬢様が、さ」

その言葉に、由梨亜が頬を膨らませた。

「べ、別に、いいじゃないの。告白くらい。個人の勝手でしょ？ それとも何？ 私が香麻に告白して付き合うことになったこと、一度も千紗に言っただけだったからって僻んでるの？」

由梨亜がふざけて喧嘩腰で言うと、千紗は苦笑して両手を上げた。「僻んでなんかないよ、由梨亜。だけど、ちよつとは拗ねたくなっただけ。でもまあ、しょうがないってのは分かってるよ？ 確かにあの状況じゃあ、そんなことは言えないしさ。あたし、あの時はもう、何が何だか分からなかったもん」

千紗はそう言うと、芝生の上に寝っ転がった。

「うん。気持ちいい！」

「そう言えば千紗」

「何？ 由梨亜」

「私、嶺郷高校に途中入学しようと思うんだあ」

「へー。嶺郷高校って……へっ？ 嶺郷高校？ あたしの通ってる、あの嶺郷高校？」

「そうよ。他にあるっていうの？」

「な……何でっ？」

千紗が思わず大声を出すと、由梨亜にケロリと言い返されてしまった。

「だって千紗も香麻もいるし、吹奏楽強いし、何てったってその吹奏楽に香麻がいるんだもの！ それに千紗、私がいなくなってから、結構テストとかの順位上がったでしょ？」

「うん……まあ」

千紗は『彩音千紗』から『本条千紗』に戻った時に受けた、耀太と家庭教師の容赦ない猛攻を思い出し、思わず言葉を濁らせてしまった。

「だからね、千紗と競ってみたいの」

「……ってか由梨亜、その口調だともしかして……」

「もしかしくなくても吹奏楽に入るわよ」

「な……何でっ！　ってか、由梨亜楽器吹けんの？」

千紗は、思わず盛大に顔を引き攣らせた。

「勿論。私、本当は吹奏楽部に入りたかったの知ってるわよね？」
「うん」

「それで、私が花鷲国の御父様に訊いてみたら、別に楽器吹いてもいいって言われたから、今までトランペット吹いてたの。勿論ちゃんと先生付けて貰ってね。だから、それなりの実力はあるはずよ」
「そっか。何か、王女様らしくないなあ。王女様って言うと、ピアノとかフルートとか……でもさ、由梨亜。途中入学の試験は七月だよ？　夏休み中。あと二ヶ月もないんだから、勉強頑張らないとっ！　言つとくけど、うちの学校、結構難しいからね」

「分かってるわよ。私は、ここにずっといるつもりだもん。受かるように頑張るわよ」

由梨亜が肩を竦めると、千紗はふと思いついたように由梨亜に詰め寄った。

「でもさ、よくやってくれたよね、由梨亜。あたしが長女って。責任押し付けないでよ」

千紗は凄味を効かせて言ったが、由梨亜はあっさりと答えてしまった。

「あら、でも産まれた早さは、千紗の方が先よ。私は千紗よりも後に産まれたもの」

そう言つと、由梨亜は強制的に会話を終わらせ、そっと目を閉じた。

地球連邦は宇宙連盟に加盟していない為、あまり他国の情報が流れてこない。

だが、しばらくすれば、必ず富瑠美の即位という情報が流れてくるだろう。

由梨亜は、空を見上げた。

青く、澄み切った空。

それは、花鶯国と同じ色でありながら、違う空。

由梨亜も芝生に寝っ転がると、高い高い空を見詰めた。

ここでは今、途中入学テスト以外に気掛かりなことは何もない。

『富実樹^{ふみき}』とは、大違いだ。

平和な、平和な国——それが、今の地球連邦。

花鶯国が連盟に加盟するよう働き掛けてくるのも、まだ先のことだろう。

由梨亜は、横の千紗を見た。

すると、穏やかな寝顔を浮かべて眠っていた。

由梨亜は小さく笑うと、自分もそっと目を閉じた。

まだ、この国は平和でいられるだろう。

そして…… 自分も。

（続）

終章「そして、二人は……」(後書き)

ここまで読んで頂き、本当にありがとうございました！ 『時と宇宙を越えて』の第？部は、ここで完結となります。この後、しばらく時間が飛んで第？部が始まる予定ですので、どうぞそちらの方も宜しく願います！

序章「密談」

そこには、十名ほどの人がいた。

「御決断下さいませ、陛下」

「ですが……もう少し御願ひ致します。そうすれば、変わるかも知れません」

「そう仰つて、既に一年が経とうとしておりますぞ、陛下。どうか御決断を。第一、陛下は篤大臣であらせられた時、こちらの意見を提示した張本人では御座いませぬか」

「ですが……」

富瑠美の、躊躇うような、迷うような声音に、自信たっぷりの方が答えた。

「我らがかの国へと通達してから、既に一年が経ちます。しかし、彼らは未だに返事を致しておりません。新戦祝大臣と成られたシャーウィン・リシエル・スウェールも準備を進めており、新兵器も開発を重ね、充分に力を発揮できます。ですから陛下、御許可を。御許可を頂けるのでしたら、私は、貴女の願ひを一つだけ叶えて差し上げましょう。――陛下、これは取り引きに御座います」

宗賽大臣、シユールの言葉に、富瑠美はガツと立ち上がった。新兵器の開発は、寝耳に水の話らしい。

「それが……それが御前の思惑なのですか！ 宗賽大臣っ！」

眦をきつくする富瑠美に、シユールは嘲笑した。

「思惑とはまた、人聞きの悪い。私は元々、富実樹先王陛下が御提案なされた方ではなく、陛下が御提案なされた方の支持者だったということです。事実、総票会で私は、陛下の方に票を入れました」

「陛下。貴女は、もう引き返せませぬぞ。拒否などをするのにも、既に時が経ち過ぎております。残念ながら、それは御気付きにならなかった陛下の御怠慢とでも言うべき物に御座います。御諦め下さ

いませ」

追い打ちのように官僚が声を掛けると、富瑠美は拳を震わせて吐き捨てた。

「もう、いいっ！ どうせ、わたくしは飾り物の王。先王陛下ほどの実行力も決断力ありませんっ！ どうせ飾り物なのだから、わたくしに断らず、御前達で好きになされば宜しいでしょうっ！」

富瑠美はそう言い捨てて部屋を出て行き、部屋に残った面々はほくそ笑んだ。

……計画が、動き出した。

二年前から、練りに練られた計画が。

「さて、と。陛下を黙らせたことだし……次は、地球連邦の反応が楽しみであるな？」

「はっ。仰せの通りに御座います」

その場には、新戦祝大臣のシャーウィンも、新政財大臣せいざいたいじんのウォルトもない。

だからこそ、このように本来なら三番目の地位にあるシニールが一番権力を握っている。

彼を止められる人物は、今の所唯一人——先々王に当たる花雲恭かづんきょう峯慶ほうけいだけであつたが、彼は植物状態で、一年ほど前に暗殺されかかつてから、一度も目を開けたことはない。

その為、既に王宮ではなく国立病院にいた。

他のまだ生きている王族で、王や篤大臣を勤めたことのある——

つまり、政の経験が豊富な人物は、もう、誰もいない。

「どう料理しようかな？ 地球連邦の民を」

独り呟いたシニールの言葉に、誰もが頭を垂れた。

今、この王宮では、彼の言うことが絶対だった。

第一章「婚約式」― 1

「由梨亜ゆりあ！」

バン！ という音と共に、千紗ちさが部屋の中に走り込んで来た。

「ちよつと千紗っ！ そんなドレス着てまで走らないのっ！ いつもの服でなら走り回っても何も問題ないけど、ドレスで走られたら破けちゃうわよ。今日は婚約式だっていうのに」

由梨亜が溜息をついた先には、走って来たというのが丸分かりの様子ようすの千紗がいた。

「えゝ。でも、何でドレスって弱いのか？」

「天然繊維を使ってるからでしょうがっ！ 化学繊維は丈夫だけどこれは弱いんだからねっ！ 千紗と違って！」

すると、よろよろとしたノックと共に、扉が開いた。

「ち、千紗、様……！ は、速いですよう。つ、疲れましたあ」

千紗付きの召し使い、苓華れいかが、ぜいぜいと喘ぎながら言った。

「それは苓華が遅いのよ。あたしは普通だから」

「千紗と苓華を比べたら可哀想よ。何てったって、苓華は千紗と違って生粋のお嬢様だもの」

「由梨亜、一応、あたしもお嬢様なんだけど。んでもって、由梨亜の双子の姉ですが」

「ですが、千紗様はあまり姉といった雰囲気はありませんねえ。逆に由梨亜様の方が姉らしいです。この際、由梨亜様が跡取りになつてはいかがです？」

と、由梨亜付きの召し使い、鈴南すずなが言った。

「何？ 鈴南。あんたあたしに喧嘩売ってんの？」

「とんでもありません。第一、私が千紗様に喧嘩を売っても勝てる訳ないです」

「まあ、そうだけどさ……」

「とにかく千紗！ その格好で暴れないこと！ いいわね？」

「はい……」

千紗はしょんぼりと頂垂れた。

二人は、この冬休みが明けたらレイメーア国立大学の一年生になる。

そこは国立大学だが、将来社長や総帥、またそれに近い職に就くであろう人の為の経営学部がある。

「お願いだから、せめて経営学部に入ってくれっ！」

という必死の耀太ようたの嘆願で、二人はレイメーア大学の経営学部に入学したのだった。

そして、二人は今日一月三日、婚約式を執り行おうとしている。

勿論千紗の相手は莊傲睦月そうぶつぎだし、由梨亜の相手は藤咲香麻ふじなきうまである。その時、扉が開いた。

「二人とも、そんなに騒ぐなよ。外にいる俺らにも丸聞こえだぞ」

「あつ、睦月っ！」

「あつ、香麻っ！」

「やあ、二人とも」

「ってか、そんなにあたし騒いでないよ、睦月」

千紗は唇を尖らせて言ったが、睦月は首を横に振った。

「いいや、充分聞こえてたぞ。なつ、香麻」

「ああ、睦月。由梨亜は、そんなに聞こえてなかったけどな、俺にとっては」

「香麻……」

「ちよつとそこ！ 二人だけの世界に行かないっ！ さつさと現実
に立ち戻る！」

「チエツ。折角いい雰囲気になったのに……」

「いい雰囲気って…… 由梨亜」

すると、いきなり扉が開いた。

「おやおや、もうみんな揃ってしまっていたの？」

「お母様っ！」

と、千紗が言った。

「ゴホン。私の存在も、忘れてもらっては困るな」

「あ、お父様もいたんだ」

その素っ気ない由梨亜の言葉に、耀太は脱力しかけた。

「いたんだ……いたんだって……」

「まあまあ貴方。いいじゃないですか。私の方が先に入ったんですから」

「まあ、そうだが……」

「でもお父様、一体いつ東京から戻って来たんですか？」

そう、耀太と瑠璃は、昨日天皇に呼ばれて、昼に出て行ったのだった。

勿論そう時間は掛からず、皇居と屋敷は一時間もしないで往復できる距離である。

だが、今の時間は朝の十時。

二人が起きたのは七時だが、それから今までで二人が帰ってきた様子はなかった。

しかし、耀太と瑠璃は礼装である。

一体、いつ着替えたのであろうか。

「ああ、家に着いたのはつい五分钟前だよ」

「はあっ?!」

「どういうこと？」

「東京を出る時に着替えて置いたんだよ。天皇陛下も我らの事情を理解して頂けたのだね。それで他の方よりも早く出られてのだよ」

「でもね、お父様」

「何だい？ 千紗」

「あたし達の婚約式、十二時からでしょっ！　そこまでしなくてもいいじゃない！」

「ああ、そうだが、婚約式の前にできるだけ長く娘に会って置きたい父の気持ち、分かるだろう？」

「うっん」

「全然分らないわ」

と、身も蓋もない千紗と由梨亜の言葉に、睦月と香麻が反論した。

「いいや、俺は分かるぞ」

「俺もだ」

「何？ 睦月、香麻。あたし達を見捨てる気？」

「お父様についてちゃうの？」

千紗と由梨亜の非難に、二人は苦笑し顔を見合わせた。

「千紗、由梨亜、こういうのは、だな」

「男でないと分からないもんなんだよな」

「えゝつ。でも、そういうので男女を分けるのって可笑しいよ。ねえ？ 由梨亜」

「そうよ。第一、私達に対する感想って物はないの？」

と、まあ、ドレスを着た少女が言いそうな台詞を言った途端、

「……………」

全員、沈黙した。

「な、何でお父様もお母様も香麻も睦月も鈴南も苓華も黙るの！」

「あたし達、そんなに変かなあ」

千紗は自分の着ているドレスを見下ろすと、溜息をついた。

ちなみに、千紗は濃い藤紫という色のイヴニングドレスを着ていて、由梨亜は同じデザインの、少し薄めの群青色のドレスを着ていた。

「いや……可愛いと、思うぞ？」

「ああ。特に千紗の方が可愛い」

「何言ってるんだ、睦月。由梨亜のほうが可愛いぞ」

「そうですよ。絶対由梨亜様の方が可愛いです」

「何言ってるんですか鈴南さん。千紗様の方が可愛いですよ」

「いいや、違うね。絶対由梨亜だ。よく言ったな、鈴南さん」

「ありがとうございます、香麻さん」

「何言ってるんだよ、香麻に鈴南さんっ！ 絶対に千紗の方が可愛いっ！ な、苓華さん」

「はい。その通りです」

「ああ、もうそんな言い争いやめてっばっ！」

由梨亜のその一言で、ようやく静かになった。

「もう、私達はただ感想を聞いただけなんだよ？　なのにそんな言い争いしないでいいじゃんっ！　全くもう。これじゃあ落ち着けないよ」

「……ねえ、由梨亜」

「何？　千紗」

「由梨亜は緊張してないの？」

「へっ？」

由梨亜のその間が抜けたような返事に、千紗だけではなく周りの皆も溜息をついた。

「みんなが色々言ってるのは、緊張してるから。だって、あと二時間もないんだよ？　婚約式まで」

「あゝ……そういうば」

「全くもう、一体何の為にあたし達がこんなドレス着てると思ってるのよ」

千紗は近くの椅子に座り込んでしまった。

「あつ、そうだ。忘れてたわ」

と、急に瑠璃が言った。

「えっ？　何？　お母様」

「ほら、貴方」

「し、しかしだな……お前が言ってくれ」

「嫌よ。それに、貴方が言ったんじゃない。『私が言うから、安心して』って」

「うっ……分かった。千紗、由梨亜、睦月君、香麻君、婚約式が終わったら……そうだな、私の部屋の近くにある、私的な時に使う応接室に来てくれないか」

「ええ」

「……？　うん」

「はい」

「……何ですか？」

千紗と由梨亜と香麻が比較的あっさりと頷いたのにも拘らず、睦月は訊ねた。

「それは、ここでは言えぬ。分かったな」

「……はい」

その様子を眺めていた千紗は、ふと笑った。

二年ほど前、由梨亜が地球連邦に戻ってきてからは、ずっと平和だった。

由梨亜からは、宇宙連盟加盟の働き掛けが絶対に花鶯^{かおつく}国からあるという話は聞いていたが、今の所、そのような話はニュースで流れていない。

まだ、大丈夫であろう。

千紗は、何故婚約式の後に耀太に呼ばれたのかは分からない。

だが、天皇から何か重要なことが言われたのだろぅということとは想像がつく。

（由梨亜は……何か分かるかな？）

と思い由梨亜の方を見ると、俯いていた。

（何か考えてんのかな？）

そつと由梨亜の顔を覗き込むと、千紗ははつと息を呑んだ。

由梨亜の顔は蒼白で、思い詰めているようだったからだ。

（一体、どうしたんだろ……何かあったのかな？ 聞きたいけど……

でも、そろそろ婚約式の方の準備に行かなくちゃなんないし……

大丈夫かな？ 由梨亜）

「由梨亜……ちよつと、大丈夫？」

小声で千紗が訊くと、由梨亜ははつと顔を上げた。

「大丈夫よ。ただ、二年前までいた国に関係あるんじゃないかって

……心当たりが、ね」

「由梨亜……？」

千紗が眉を顰めると、由梨亜はちよつと笑って言った。

「大丈夫。本当に、大丈夫だから」

その時、耀太が言った。

「さて、そろそろ行くか。睦月君、香麻君、それでは、また」
「はい」

耀太と瑠璃は、来客の対応をする為、部屋を出て行った。

部屋には、千紗、由梨亜、睦月、香麻、苓華、鈴南が残された。

「それでは、私達も向かった方がいいですね。千紗様、由梨亜様は私に付いて来て下さい。睦月さん、香麻さんは苓華さんに付いて行って下さい」

「はい」

「ええ」

「うん」

「分かった」

六人は、それぞれ動き出した。

「じゃあまたね、睦月、香麻」

「ああ、そっこそ」

そう言い交わすと、六人は部屋を出て行った。

第一章「婚約式」―2

「あゝ……疲れたあ」

「千紗ちさ、情けないわよ。たかがあれだけの長さの式とパーティーで、ばてるなんて」

「パーティーの長さはいいんだよ、長さは……ハア」

千紗が情けない溜息をつきまくる理由は簡単である。

千紗は毎年最低でも六回はパーティーに出ている、今更それで疲れるといふことはない。

そして、親戚達も今まで婚約者候補だった三人から結婚相手を選ぶものとしていて、特に相手の身分にも文句がなかったので、パーティーでも微妙な厭味や軽い妬みとししか取れないような言葉しか口にしてこなかった。

その中以外から選ぶということは、その人達の考え付かないことだったのだ。

睦月むつきと香麻こうまを耀太ようたが認めたということもあり、今更

「認める訳にはいきませんっ！ 即刻別れなさいっ！」

と言う訳にもいかず……というので、もうパーティーでは厭味が物凄かったのだ。

例えば、このような物があつた。

「まあまあ、千紗さんがあんなに男っぽい人にご婚約するとは思いませんでしたねえ」

「あら、男っぽいというより……まあ、あれですわね？ つまり、野生的、というか？」

「ええ。それに千紗さん、ちょっとだけ、思慮不足ではありませんせん？」

「お家を継がれる方ですのにねえ」

「長女という自覚が、跡取り娘だという自覚はありますか？」

「せめてねえ……どちらかだけで、良かったんだけど」

「まあ、いわゆる——ではありませんか？」

彼女は、声を出さずに唇で『我儘』と言った。

「まあ、言い得て妙、ですわね」

「それにしても……あの由梨亜さんが家出したのにも驚きましたね」

「ええ。行方を完璧に眩ましてこの本条家にも足跡が掴めなかっただなんて、凄いですねえ」

「戻ってきたのは良かったですけど……」

「でも、あれでしょう？ 他星にまで行って、おまけに働いてただなんて」

「しかも……実の父親を騙して引つ掛けて、婚約者候補達を退けたって」

「まああ……どこまでも、貴女達姉妹は、貴族とはちよつと違うようですねえ」

とまあ、婚約式に言うべきことではない厭味を次々に連発したのだ。

しかも、その言い相手は全部千紗であった。

（由梨亜……睦月……香麻……誰でもいいから、助けて……）

と思いつながら、適当な相槌を打ちそのパーティーを過ごしていたのだった。

式自体は一時頃に終わり、その後から七時までパーティーだったのだが、その内の半分以上を厭味で潰されてしまい、由梨亜と話す時間が全くなかった。

おまけに厭味を言われていた時間帯は丁度お昼とかぶつてもいたので、正直食べた気はしなかったし、食べる量もいつもと比べたら驚異的に少なかった。

もし由梨亜が睦月か香麻がいたら直ぐにその場から連れて行ってくれただろうが、由梨亜は耀太や瑠璃と共に、あまり親しいとは言えないような客の接待に当たっていたし、睦月と香麻は貴族との交流が全くなかったので、本条家に親しい人達の接待に当たっていた。だから、千紗を救うのは到底無理な話だったのだ。

そしてパーティーが終わり、着替え終わった千紗は心置きなく伸びていたのだった。

「これからもあんな調子でパーティーやるんだったら逃げよっかな……それにしてもさ、由梨亜。何であんなきつついドレス着て平気でいられんの？ しかもあんな長時間。あたし、あんなに長くドレス着たことないよ」

「だって花鶯^{かおうこく}国では、王族とか貴族だったら、いつつもあんな感じよ？ 下手したら、あれよりももっと豪華だったかも」

「へー。つまりは、慣れ？」

「ええ。そんな感じよ」

「凄いなあ……あたしなんて、ドレスはこういうパーティー以外着たくないもん」

千紗はそう言うと、ぱつと立ち上がった。

「そう言えばさ、何かお父様に呼ばれてなかったっけ？」

「あつ、そういえばそうだね。じゃあ、行こっか」

と、二人が部屋を出ようとした瞬間、扉が叩かれた。

「……？ どうぞ」

すると、そこには睦月と香麻がいた。

「おお、そっちももう着替え終わってたか。早いな」

「だって、あゝんなきつつい着てらんないよ。いいよねえ、男子は。そう思わない？ 睦月」

「いやあ、分かんないや」

「……そっか」

「そういえば、どうして二人ともこっちに来たの？」

「ああ、二人を誘ってこうって、睦月がさ。俺はどっちでも良かったんだけどねえ」

「ばっ……！ お前も賛成したじゃないか！」

「だけど提案したのはそっちだよ」

ここでもまた言い争いが始まるうとしていたので、千紗が慌ててストップを掛けた。

「ここで言い争わないでつ。さつさとお父様のところ行かなきゃならないから出て！」

千紗はそう二人を急き立てて部屋を出た。

すると、由梨亜が何かを思い付いたかのように手を叩いた。

「あつ、そうだ」

「何？ 由梨亜」

「ねえ、三人とも。競走しない？」

「えっ？」

「はっ？」

「はいっ？」

三人は、固まってしまった。

「だ〜から、競走よ、競走。誰がお父様の所まで速く行けるかを競うのっ！」

「いいねえ、面白そうっ！ さつすが由梨亜っ！」

「ああ、俺も賛成だ。楽しそうだしな」

「ありがと、千紗、睦月」

三人がそう喜んでいる中で、香麻だけが少し慌てている様子だった。

「あ、あの……ちょっとま——」

精一杯、というような、喉から絞り出した声で香麻が言ったが、誰も気付かなかった。

いや、故意に無視した。

「じゃあさ、罰ゲームとかもつけようよ！ そっちの方が断然面白いよっ！」

「いいわねえ。じゃあ、二位の人は一位の人の言うことを聞いて、三位の人は二位の人の言うことを聞いて、四位の人は三位の人の言うことを聞くのは？ 言うことを聞くのは一回限定で」

「面白そうっ！ でもさ、それじゃあ一位の人以外はみんな同じじゃないのかなあ」

「う〜ん……そう言われればそうよねえ……」

千紗と由梨亜と睦月が真剣に考え込んでいると、香麻がまたもや言った。

「あつ……あのさつ、俺、これやるの——」

「ちよつと黙れよ、香麻。なあ、お前だけ仲間外れつてのは……承知しねえぞ?」

睦月が小声で言い、香麻は口を噤む羽目になったが千紗と由梨亜は何も言わない。

婚約者にさえ無視されるとは、何とも可哀想な香麻であった。

「あつ、そうだ。こんなのはどうだ?」

と、不意に睦月が言った。

「何? 睦月」

「由梨亜が言ったのに付け加えるみたいな感じなんだけど、二位の奴は一位の奴の言うことを聞く、三位の奴は一位と二位の奴の言うことを聞く、四位の奴は一位と二位と三位の奴の言うことを聞くてのは? 勿論、一回だけ。そうすれば、下の順位になるほどリスクはでかくなるぞ」

「うっわ、睦月すごいっ! 頭いいねえ」

「まあな」

睦月は、少し自慢げに胸を反らした。

「それじゃあ、これでいい人は手を上げてっ!」

と由梨亜が言うのと、香麻を除く三人が手を上げた。

「よっし、決まりね! それじゃあ、全員一列に並んで! ……行くよ。スタート!」

千紗の元気な声が響き、全員が一度に走り出した……かのように見えた。

事実、千紗と由梨亜と睦月はほとんど横に並んでいる。

だが、香麻はそれよりも三步ほど遅れていた。

どうやら、香麻はこの三人より足が遅いようだ。

けれど、だからと言って香麻が遅いと言う訳ではない。

香麻はこの年代の百メートルの記録の平均より、一秒速いのだ。

だが、この三人はその標準よりも二、三秒速い。
結果、香麻が遅く見えるのだった。

ダダダダダダ、という、凄まじい音がした。

「んっ……？ 何事だ？」

耀太は、思わず目を見開いた。

その音は、しばらく経ってもやまない。

「むっ……？」

さすがに、耀太は狼狽えてきた。

「何が起こっている？ ……おい、沙羅^{さら}？ いるか？ 零斗^{れいと}？ ……

…誰か？ 誰か、いないのか？」

耀太が狼狽えて問う言葉に誰も答えなかったが、そのダダダダという音は更に大きくなり、しかもこちらに近づいてきているようだ。
「一体……」

耀太が立ち上がり扉を凝視していると、いきなりガツと開いた。

そのことに、耀太は目を丸くした。

家の扉は基本的に自動で開くが、万が一の為に常日頃から手動でも開くようになっていた。

……しかも、今の動きは紛れもなく手動で開けられた物だった。

あまりにも勢い良く扉が開けられたものだから、扉の開く限界まで開き、壁にゴン、という音を立ててぶつかり跳ね返った。

そのせいで壁には小さなへこみができ、二人の人物が部屋に駆け込んだ後、三番目に入ろうとしていた人物に扉が激突した。
「フゲッ」

奇妙な音と共に床に沈没したのは、睦月であった。

「よっしゃあ！ ち、千紗に、勝ったあゝ！！」

「由……由梨、亜……は、速い、よお……チエツ、あたし……二位、か……ま、前は……あたしの方、速かったのに……」

「ふうんだ。たまには私が勝ってもいいでしょ？」

「お、俺を……無視しないでくれ……っ！」

悲痛な悲鳴を上げた睦月は、どうやらぶつけたらしい額を押さえ、座って呻いていた。

「全くもう、大丈夫？ 睦月」

由梨亜が呆れ返ったように言うと、睦月が怨めしそうに睨んで来た。

「……これが大丈夫に見えるか……っ！」

「見えない」

身も蓋もなくズバリと言い切ったのは千紗である。

「千紗……ちよつとは遠慮しようよ」

「だって、由梨亜が勢い良くドアを開けたのが原因でしょ？ あたしには何の罪もないよ」

「千紗……ちよつとは気にして、くれ……」

その時、睦月は半分ほど開いた扉の前に座り込んでいた。それが、更なる災難を招くとも思わずに。

コンコン、とノックの音がした。

「失礼致しま……すっ？！」

どうやらお茶の用意を持ってきた、耀太付きの召し使い、沙羅が開けた扉が睦月にぶつかった。

しかも、頭に直撃した。

「ちよっ……睦月、大丈夫なの？ そんなにぶつけて」

「……痛い……ウウツ」

「す、すみませんっ！ 睦月さん」

沙羅は慌てて中に入ると扉を軽く押し戻し、無意識にだらうが、またもやし開いた状態にすると、睦月の前にしゃがみ込んだ。

しかし、悪いことは重なると言っべきか、二度あることは三度あるというべきか——またもや扉が、由梨亜が最初に開けたのに優るとも劣らない素晴らしい勢いで開き——睦月の背中に扉が直撃して睦月が倒れ、その前にいた沙羅も引っ繰り返り、更に沙羅にぶつか

られた千紗が後ろによるめいて、それを踏みとどまろうとして横に動いた結果由梨亜にぶつかり、その由梨亜は綺麗に真後ろに倒れ、そこには耀太がいて――その耀太はテーブルの角に身体を打ち付け、ソファ―に倒れ込み、そこで視線を扉に戻すと、扉は何事もなかったかのように限界まで開き、更に睦月の上に香麻が倒れ込んでいた。全員、苦痛と疲労で一言も発していない。

その中でも気の毒なのが耀太で、変な所を打ち付けたらしく顔を苦痛で歪ませている。

そして、最初に言葉を発したのは睦月だった。

「お、前、ら、な……俺を……どれだけ、痛めつけてると、思っただよ……！」

由梨亜、沙羅、香麻への非難になったことは、言うまでもない。

「いたたっ……でも、睦月、全員何かしらされたっけのは、一緒だよ。あたしと由梨亜と沙羅は倒れるだけで済んだけどさ……香麻は疲れて倒れてるし、睦月は見ての通りだし、お父様なんか……変なところぶつけてるし……」

その千紗の言葉に全員が見てみると、耀太はフラフラしながらも何とか立ち上がり、息を大きく吸い込んだ。

「ゲッ」

「ウツ」

千紗と由梨亜がそう奇妙な音を残し逃げ出そうとしたが、耀太はそれを許さなかった。

「……私は、確かに来いと言った。だが……しかし。走って来いとは一言も言っていない！ 何故走って来るっ！ そして、何故ぶつかりにぶつかりぶつかりまくって全員将棋倒しとなるのだっ！ これから大事な話をしようとする時に、そんなにふざけたいか……！」

「別に、ふざけてた訳じゃ……」

「何だと？ 千紗。では、訊く。何故ここまで走って来た？」

「……競走」

長い、沈黙が降りた。

「……………はっ？」

耀太が搾り出すように声を出すと、由梨亜は唇を尖らせて言った。
「だから、競走よ、お父様。私達は罰ゲームありの競争をしてきたの。それで私は一位だから何もなしで、千紗は二位だから私の言うことを聞いて、睦月は三位だから私と千紗の言うことを聞いて、香麻は四位だから私と千紗と睦月の言うことを聞くの。そういうルールで競走したのよ。で、そうしたらこうなった訳」

「お、お前ら……二度と、この屋敷で走るなっ！！！」

その耀太の怒号に、千紗と由梨亜は平然と言い返した。

「無理よ、そんなの」

「そうそう。絶対に無理」

「何だとう？」

「だって、約束に遅れそうな時とかどうしても急がなきゃいけないって時、どうしても走るでしょ？ だからね、あたし達に走るなってのが無理なのよ」

「だが……無意味に走るなあ！」

「だ、か、ら！ そんなの約束できないよ！ それよりもお父様、何か話すことあったんじゃない？」

「それを邪魔したのは……お前達じゃないかあ！ さっさと私に話させる！！」

「はいはい。ってことだから沙羅、ちょっとあっち行っって貰っていい？」

「は……はい、由梨亜お嬢様」

沙羅はそう言つと、よろよろとお茶を机に並べて出て行った。

「ふう……さ、睦月、香麻、さっさと起きて」

千紗はそう言つと、二人を引き上げた。

「……ったく、重いねえ」

「……ったりめえだろ……チェツ、まだ、頭がフラフラしてやがる……」

「全くもう、情けないんだからあ。さ、立って立って！」

「ほらほら、さっさと座る！」

由梨亜がそう急ぎ立て、ようやく全員ソファーに座った。

「……さて、時間がないからな、さっさと本題に入るぞ」

「時間がない？」

「お前ら……今何時だと思っている？ 八時だぞ、八時。近所迷惑だとは思わんのか。一応防音はされてはいるが、お前達のその大声では……」

「……すみません」

「別に香麻は謝らなくてもいいんじゃない？ どうせ提案したのは由梨亜だし、それに賛成したのはあたしと睦月だし」

「……そうなのかつ！ 千紗」

「うん……そうだけど？」

「なっ……」

耀太は、頭を抱えてソファーに沈み込んだ。

第一章「婚約式」― 3

「お……お父様？」

千紗ちさが耀太ようたの顔を覗き込むと、耀太は呻くように言った。

「……私はてつきり、千紗が提案したものだ……変なことを仕出かすのは、いつも千紗の方だから……」

「どっちでも大した違いはないわ。さ、お父様。さつさと話して下さい」

「ああ……私は昨日、天皇陛下に呼ばれ、皇居まで行った。このことは知っておるな？」

「はい」

「その時、陛下は決して公表できないとても重要なことを口になされた」

「それは……」

「この国……地球連邦と、花鷲国かおしくについてだ」

その言葉に、皆はつと息を呑んだ。

そして、その中でも特に由梨亜ゆりあは、拳を固く握り締め、唇を噛み締め俯いていた。

何を言われるのか……ついに花鷲国が行動を起こそうとしているのが分かったからだ。

「花鷲国は、地球連邦に宇宙連盟へ加盟するようにと、イギリスのオレアン四世陛下に働き掛けて来たそうだ。だが、それは即断できないと仰った。……それもそのはずだろう。何しろ地球連邦は、昔の国の単位で分けるという考え方が一般的で、一応イギリスが首都となっているが、それでも、オレアン四世陛下には、地球連邦に対しての独裁権は全くないのだからな」

耀太はそう言つと、深い溜息をついた。

「だからおよそ一年前に、それぞれの地域の議会の上級議員を呼び寄せた大会議を行ったそうだ。だがその結果は割れに割れ、結局は

まだ加盟には早いという結果に落ち着き、それを花鶯国に伝えたそう
うだ。そして連盟に加盟するのに好意的だった地域の代表は、花鶯
国単品で説得に来るのではなく、『宇宙連盟』で来てくれれば、否
定的な地域も賛成してくれるだろうと言ったそうだ。そして一年。
花鶯国は、こちらが予想もしていなかったことを打ち出して来た。
それは、この国の存亡に関わることだ」

そういうと、耀太はグルツと見渡した。

「皆、衝撃的な内容となるが、どうか心して聞いて欲しい」

「……分かりました。お父様」

そう答えたのは、千紗だった。

千紗は由梨亜から聞いていたので、それほど驚くといったことは
なかった。

これから花鶯国が行おうとしていることには、あまり想像が及ば
なかったものの。

しかし、睦月むつきと香麻かうまにとってはそんな簡単な問題ではない。

なにしろそんな話があったことすら、彼ら庶民はもとより貴族も
知らないことだったからだ。

そして地球連邦の混乱期が治まってから今までの数百年間、地球
連邦はずっと平和であった。

戦争や争い事など、様々な混乱事は既に過去の遺物であったのだ。
そして情報公開制度により、『特別な事情』のない限り情報は公
表されるようになっていた。

だから、その争いの火種が一年も前からあったこと、そしてそん
なことが公表されていなかったということに衝撃を覚えたのだった。
そして、『地球連邦の存亡に関わる問題』と言われたことで、言
葉を発せないほど打ちのめされた。

由梨亜の方とは言えば、次に耀太が何を言うのかも既に予想が付
いていたので、その悲しみによって、言葉を失っていた。

「それは……『花鶯国が、地球連邦を攻めて来る』、ということだ」
重々しい耀太の言葉に、全員言葉を失った。

さすがの千紗でさえも、少しは予想していたとはいえ改めて耀太の口から断言されると、やはりショックで顔色を失っていた。

そして、耀太を除いた全員が蒼ざめていた。

千紗がふと横を見ると、由梨亜が俯いていた。

その顔は思い詰めていて、まるで自分を責めているようだ。

「ちよつと由梨亜、来て」

「……うん」

由梨亜の声には、やはり力がない。

まだ誰も無気力状態なのをいいことに、自分達の部屋まで連れて行った。

「どういうこと？ 由梨亜」

千紗はきつい声で由梨亜に言った。

「どういう……って？」

「とばけないですよ。何で花鳶国が攻めてくるの。まだ一回しか言ってきてないのに。それも話し合いと言えるかどうか微妙みたいな話し方だったし。ねえ、由梨亜が言ってたことと違うよね？ 由梨亜の異母妹いもむこの富瑠美ふるみは、由梨亜が感じてた通りの人じゃないんじゃないの？」

「違うわ！ 富瑠美は……そんな人なんかじゃないっ！ それに、王というのは国の統括者ではなく、象徴的な存在……まずは大臣が主導権を握ってるのよ。それを考えると戦祝大臣せんしゅだいにんか政財大臣せいざいだいにんのどちらか……でも、その二人もやっぱりそんな人じゃないと思う」

「何故？」

「……貴女には教えられないわ。きっと、理解できないでしょうから……」

「だから、あたしには、話せないって言うの？」

千紗の強い口調に、由梨亜は目を逸らして小さく頷いた。

その途端、由梨亜の左頬がピシヤリと鳴った。

由梨亜が顔を上げると、千紗は悲しみとも怒りとも言えるような表情を顔に浮かべていた。

「千、紗……？」

「あたしは……もう嫌。前に由梨亜があたしに隠し事した時……覚えてるよね？ 由梨亜」

「忘れる訳……ないわ。あの時のことは……」

由梨亜は、千紗から目を逸らしながら言った。

「だったら、覚えてるよね。あたしは別に、由梨亜があたしに隠したことは恨んでない。あたしも、あんな状況だったらそうするからだけど、それが原因で口聞かなくなって……結局仲直りしたけど、すぐに由梨亜は花鶯国に行っちゃって……こっちに戻ってきてから、すっごい後悔した。何でさっさと仲直りしなかったんだろって。最初っから、無理にでも訊き出しておけば良かったって。……人に知られたくない傷は、みんな持ってると思う。あたしはそんなこと話して欲しくないし、無理に訊こうとも思わない。けど、そうじゃないのは隠して欲しくないの。由梨亜が今あたしに言えないって言ったのがそういう物だったら、訊こうとは思わない。だけど……そうじゃないのなら、もう隠さないで……お願い、由梨亜」

「千紗……」

由梨亜は、少し考え込むと、驚くほど真剣な眼差しで言った。

「私が今から言うこと、笑わない？ 疑ったりしない？ 私が言わないのは、千紗が信じてくれるかどうか自信がないから。千紗にとっては嘘にしか感じられないかも知れないけど、私にとっては、それが真実。それを疑われたら、何も話せなくなるわ。……勿論、私は人間だから嘘をつくし、誤魔化しもする。冗談も言う。だけど、そうじゃないのに、そういうことにとられたら……私は、千紗を信じるのが難しくなるわ。……ねえ、千紗。誓える？ 今から言うことを、最初は信じられなくて、呆然としてもいい。だけど、絶対に信じるって」

由梨亜の問いに、千紗は即答した。

「誓うよ。絶対に。さすがに全部信じるのは、あたしは無理。そんな人もいるかも知れないけど、あたしはそこまで真っ白じゃないか

らね。だけど、もし由梨亜が最初にそう言ってくれるなら……あたしは、なるべく信じる——ううん、絶対に、由梨亜が言うこと、信じる。だから由梨亜も、悪用しないでね。そしたら絶対、由梨亜のこと信じらんなくなるから」

「ええ。分かったわ。あの……ね、馬鹿にしないで聞いて欲しいんだけど……まず、戦祝大臣の方からね。あの人は、富実樹ふみきと血の繋がりがああるの。今の戦祝大臣は、母方の伯父様なのよ。だから、裏切る可能性が、とっても低い。そして政財大臣の方なんだけど……あのね、彼は、富実樹と何の繋がりもないし、逆に先代の政財大臣は、富実樹のことをほとんど信用してなかったわ。だけど、今の政財大臣は絶対に裏切らないって、言い切れる。あのね……ごめん、千紗。こんなこと言うと、変に思うと思うけど……今の花鶯国の王様は誰か、分かるよね？」

「そりゃあ勿論。花雲恭富瑠美かうきよろうみ、でしょ？ 富実樹の異母妹。王女時代は鶯大臣おうだいじん。そして第二王女。花雲恭峯慶かうきんけいと花雲恭深沙祇みさぎの娘。花雲恭峯慶の第二子で、妃ひの娘」

「ええ。その通りよ。その前の王は？」

「花雲恭富実樹。第一王女。花雲恭峯慶と花雲恭由梨亜の娘。花雲恭峯慶の第一子で、妾めかけの娘」

「その前の王は？」

「花雲恭峯慶。第一王子。花雲恭籐聯とうれんと花雲恭沙羅狹しゃらさの息子。花雲恭籐聯の第一子で、后きさきの息子」

「その前は？」

「花雲恭籐聯。えっと、第一王子で……花雲恭、斑都はんと？ と、花雲恭癒璃亜ゆりあの、第一子」

千紗は、内心いつまで続くのだろうと思いつながら答えた。

「その前は？」

「……えっと、その前は花雲恭癒璃亜。由梨亜とか由梨亜妾ゆりあめかけの名前と同じ読みをするけど、違う字を書く女王様で、その統治していた時代から、既に賢帝と呼ばれていた名君……」

「ええ。詳しく言うと、花雲恭癒璃亜は第一王女で、王女時代は第二王位継承者だったが、異母兄あにが病気で亡くなった為、すぐ下の異母弟である花雲恭斑都と結婚し、王位を継ぐ。花雲恭禊祥おつじょうと花雲恭早莉阿さりあの娘。花雲恭禊祥の第二子で、最女さいじょの娘。今でも賢帝、名君の名を欲しい儘にし、おまけに当時から名高かった女王。そして魔族の力を全て得ていた、前代未聞の人」

「でも、それが何の関係があるの？ あたしには、全然……」

由梨亜は軽く目を瞑ると、千紗を見詰めて言った。

「その癒璃亜女王……富実樹の曾祖母が、今冥界にいるのではなく、この現世にいると言ったら？ もう、何十年も前に死んだ女王が。そして、その人が私に花鶯国の情報を渡しているって言ったら？」

千紗は、後半の台詞が耳に入らなかったかのように呆然と呟いた。
「……えっ？ つ、つまり……幽霊って、やつ？」

「まあ、幽霊って言うか……何て言うか……まあ、視た方が早いわね」

「み、……視えるの？！」

「ええ。ただ……明日の夜を待つて頂戴。私には、そこまでの力がないから……」

「由梨、亜……？」

千紗は全く訳が分からずに呆然としていたが、そこに睦月むつきと香麻こうまが入って来た。

「お前ら、さっさと部屋出てくなよ。まだ話は終わってなかったんだぞ」

「香麻……」

いつもよりぶっきらぼうに言った香麻を、睦月がたしなめた。

「少し遠慮しろよ。千紗の心臓にはぶつとい鉄パイプが生えてるから心配ないけどな、由梨亜のことを考えろよ。あんな状態なの、ほっとける訳ないだろうが」

「睦月……」

千紗の地を這うような低い声に、睦月は何とも場違いに朗らかで

明るい声で返事をした。

「何だあ？ 千紗」

「ほんつきであたしを怒らせたいのね、そうじつ莊傲睦月。喜んで乗って差上げるわ。真剣勝負よ」

「なっ……！」

睦月が慌てて逃げようとしたが、香麻によって扉が塞がれてしまった。

「お、おい、香麻っ！」

「自業自得だ、睦月。諦めてお縄に付け」

「ちよっ……それ意味違うつて！ 正しい言葉使えよっ！ っていうかそこ退け、退けっ！」

「もう遅いわよ、睦月。心臓に毛が生えてるっていうだけでも腹立たしく思うのに……それをよりにもよって鉄パイプだなんて……」

「ねえ、睦月。こゝれゝはゝ。殴られても仕方ないって、思わないかな？ あたしだったら、そう思うんだけどなあ？ それにその台詞は、仮にも婚約者に対する適切な言葉って言えるのかどうか、よく分からないんだけど？ さあ、睦月。覚悟は、決めたよ、ねえ？」

千紗の優しい、けれど恐ろしい声に、睦月は生唾を飲み込んだ。

その後起こった出来事は……言うまでもない。

しかし、そのあまりの酷さに、それを見た召し使い達は極一部の胆力のある者を除き皆卒倒し、生き残った召し使い達はその世話に明け暮れ、主人夫婦もあまりのことに倒れてしまったという。

この日の婚約パーティーに参加した人達はあまりに大人数だった為、誰もこの屋敷に泊まらず、そして誰も残っていなかったことが、唯一幸いだったと言えるであろう……。

第二章「事実と覚悟」――1

「全く、馬鹿じゃないですか？」

鈴南すずなの言葉に、睦月むつきはウツと呻いた。

だが、それでも鈴南は容赦ちさしない。

「あんなに落ち着いてない千紗様を、気付いていない訳がないのに、わざと怒らせるなんて……一種の天才ですねえ」

一見褒め言葉にも聞こえそうだが、単なる皮肉である。

それも、最大級の。

「ほんと、見た時は呆れましたよ、ええ。本気で。あれを見て私と苓華れいかが卒倒しなかったのは、あの千紗様と由梨ゆりあ様がお産まれになった時から付き合っているからです。全くもう、好い加減にして欲しいものです。貴方様は仮にも千紗様の婚約者。将来はこの本条家ほんじょうけを担ってもらおうお方なのですから」

「まあまあ、鈴南さん。そこら辺に置いて下さいよ。もう充分お説教してるじゃないですか。本当は関係ない俺も怒られるのは、割わりが合わないですよ」

香麻こうまのその台詞に、鈴南がジロツと睨んだ。

「関係がない？ ほほう、この人の暴言を止めもせず、喧嘩も止めもせず……それで、関係がないと？ 確かに、見事なまでに、関係がないですねえ、香麻さん？ 本当にねえ」

「うつ……だつて鈴南さん、じゃあ逆に訊きますが、睦月の暴言を止めるだけならともかく、あの千紗を止めれますか？ 俺には無理ですよ、ええ、千パーセント無理ですね、本気で」

香麻の言い分に言い返す言葉が見つからなかったのか、鈴南はフン、と顔を背けた。

「ほらほら、いい歳して拗ねないのよ、鈴南」

おっとりとして、鈴南と共に睦月の手当てをしている、鈴南の先輩である召し使い、唱奈しょうなが言った。

と言っても、唱奈は四十二歳、鈴南は四十歳なのだが。

その後、しばらく静かだったが、睦月の手当てが終わる頃、苓華が入って来た。

「あの、皆さん。ちょっといいですか？」

「ええ、どうぞ。苓華。丁度この千紗様の導火線となった超大迷惑男の手当ては終わった所ですし。そちらも、千紗様の手当ては終わりましたか？」

「ええ。何しろ仕掛けたのは千紗様の方ですし、実力が違い過ぎますからね。特に大きな怪我はなかったです」

苓華はチラ、と睦月を意味あり気な目付きで見ると、視線を鈴南と唱奈に戻した。

睦月が、

（俺つてもしかして……いや、もしかしくなくても、苓華さんに馬鹿にされてる……？）

と思ったのは、言うまでもない。

「それで、何の用なのかしら？ 苓華」

「はい、唱奈さん。旦那様からですが、睦月さんと香麻さんに、明日の午後、今日と同じ部屋まで来て欲しいとのことでした。さっきのお話の続きみたいです」

苓華がそう言うと、香麻が手を挙げた。

「あゝ、ちよつといいかな？ 苓華さん」

「はい。何でしょうか？」

「なんで、午後からなんだ？ 午前中、何か予定でも？」

「ええ。午前中は大事な商談があるそうなんです。なので、午後からと」

「ああ、なるほど。ありがとう、苓華さん」

「んっ？ どうかしたのか？ 香麻」

睦月がそう訊ねると、香麻は笑って言った。

「あ、教えてなかったっけ？ 明日の午前中、あの新しくできたアウトレットに遊びに行かないかって、藍南あいなと尚鈺しょうこと素香もとかと涼斗りょうとと奏そう

谷に今朝誘われたんだよ。これから大学入っちゃうから、今の内に遊んどいた方がいいんじゃないかってさ」

「へえ。いいんじゃないかねえか？　じゃあ、あとで千紗と由梨亜に言いに行くか」

「ああ」

この時、まだ二人は知らなかった。

本当に、遊べる時は『今の内』しか、ないことを。

その入学式は……決して一週間後に、来ないことを。

そして、二人は後に後悔することとなる。

先程、耀太から聞いた話を、自らの少し離れた未来と位置づけてしまったことを。

自らの、本当に近い未来として考えることができなかったことを……。

コンコン、というノックの音と共に、睦月と香麻が入ってきた。

「おい、千紗、由梨亜。ちょっといいか？」

「うん……何の用？」

「ああ。明日の午前中、あの新しくできたアウトレットに遊びに行かないかって、藍南と尚祐と素香と涼斗と奏谷に誘われたんだよ、今朝。どうせ、入学式までもうちよつとだからさ、今の内に遊んどいた方がいいんじゃないかってさ。どうだ？」

「『今の内』、ねえ……」

由梨亜がそう呟いたが、千紗はそれを無視した。

「いいんじゃないかな？　少なくとも、あたしは行きたいな。でもさあ、こういうのはもつと早く言つてよ」

千紗の珍しくも真つ当な非難に、香麻は軽く頭を下げた。

「ああ、ごめん。由梨亜はどう思う？」

「ええ。いいんじゃない？　確かに、『今の内』だもんねえ……」

由梨亜は意味深に言ったが、それには誰も気が付かなかった。

「ああ、分かった。じゃ、俺らは涼斗と奏谷に連絡すつから、そっちは藍南と尚鈺と素香に連絡して？」

「うん。分かった。じゃあ睦月、香麻、また明日ね」

「ああ。また明日」

「じゃあな」

「またね」

四人はそう言つと、睦月と香麻は部屋を出て行つた。

二人が出て行くと、千紗は由梨亜を振り返つて言つた。

「じゃあさ、由梨亜。あたしが藍南と尚鈺に電話するから、由梨亜は素香に電話して貰つてもいい？」

「ええ。分かつたわ」

二人はそれぞれ三人に電話をすると、三人とも即答で

「やった！ 滅茶苦茶久しぶりだもん！ すつごく嬉しい！ じゃあ、明日ね！」

とはしゃいだ楽しげな声で言つたのだつた。

ちなみに、涼斗と奏谷も似たような反応だつたという。

「うつわ〜！ ちょっと見てよ素香！ これ可愛くない？ 素香に絶対似合うつて〜！」

「ほんとだあ〜！ ちょ〜可愛い！ あつじゃあさ、これは尚鈺に似合うんじゃない？ 尚鈺、こつこの好きでしょ？」

「うんうん！ ありがと、素香！」

「ちよつと来て！ 由梨亜、千紗！ こつこのどうかなあ？」

「あつ、いいんじゃない？ 藍南」

「うん、すつごい似合つてるわ」

「それじゃあさ、千紗はあれどう？ 由梨亜はそつちの！」

「うつわあ〜！ すつごい！ 藍南つてやつぱりコーデイナー

としての才能あるわねえ！　ほんつと感心するわ」

「ふふ、ありがと、由梨亜。それにしても、どうしよっかなあ……
ここ結構可愛い沢山あるから、すっごい迷っちゃう！」

「うんうん！　だからって全部買つてるとお金なくなっちゃうんだ
けどねえ……」

「な〜に言つてんの？　千紗。あんた達はお嬢様でしょ？　お小遣
いぐらい沢山貰つてるでしょうが！　それに、買って欲しい物はい
くらでも買ってくれるでしょ？　いいよねえ……あたしなんか、バ
リツバリの庶民だから！」

「ねえちよつと！　そういう『お金持ち』の偏見、やめて貰える？
そりゃあ私達のお父様はお金持ちだけど、お小遣いのこととかお
金の無駄遣いとか、めっちゃ厳しいんだから！」

「そうそう。この前なんて、『お前達にはもう沢山服があるんだか
ら、これ以上買わなくてもいいだろう』って言つて、すっごい氣に
入った服だったのに買つてくれなかったんだよ！」

「え〜！　信じらんない！　交渉とか何もしなかったの？　例えば、
お小遣いを来月分減らすとか、前借りだとか……」

「したけど、『駄目な物は駄目だ！』だつてさ」

「だつたら、あたしの方がよっぽど恵まれてるよ」

「アハハ！」

「あつ、ねえ、藍南、由梨亜、千紗！　もうそろそろ時間になるよ
お！　さつさと決めないと！」

「あ、ほんとだあ！　ありがと、尚鈷！」

「どういたしまして！」

…… 実に、賑やかで楽しそうである。

九人は、少し遠出をして買い物をしていた。

今は、女子五人組の方はアクセサリーや服などが売っているコー
ナーで思いつ切りはしゃいでいて、男子四人組の方は早々に付いて
いけなくなり、一足先にゲームセンターで遊んでいた。

「ったく、女のあの勢いには、付いて行けねえよ……」

「全くだな」

「だけど、今は男四人で平和に遊べてるから、いいんじゃないの？」

「ああ、同感だな。だけど、あいつらが合流してきたら、絶対こっちは付き合わせられるぞ」

その時、睦月の携帯端末が鳴った。

掛けて来た相手は千紗のようだ。

そして二十秒ほど話すと、睦月は難しそうな、変な顔をしてこちらを見た。

「あと十分ぐらいしたら、五人ともこっちに来るみたいだぞ」

「ゲッ……」

「んじゃ、今の内に休んどくか」

「賛成だな」

「俺もだ」

四人の予想通り、千紗と由梨亜と藍南と尚鈺と素香が合流すると、思いつ切りはしゃいで遊び回り、四人はヘトヘトにさせられた。

「なあ、千紗。俺らもう、限界なんだけど……」

「お願いだから、ちょっと休ませてもらえねえか……？」

その男達の嘆願に、千紗は思いつ切り馬鹿にしたような目で見て、言った。

「あんた達って、ほんとに男？ 全然体力ないじゃん」

「うっ……」

「すみません……」

「でも、女の方がこういうでは力があるっていうか……」

「男はそういうのに付いていけるようになってないっていうか……」

「あっきたあ。あんた達、男なのにそんな泣き言言ってていいの？ 名が廃るよ」

「そうそう。あたし達は普通よ、普通。それに付いて行けてないあんた達は、ほんつと情けないわ」

「まあまあ、千紗、尚鈞、藍南。ちよつと落ち着いてよ」

「そうよ。それにいつの時代も、女の方が力ないけど、こういう時のパワフルさはいつつ女の方が勝ってるんだから。まあ、物にもよるけどね」

「ひっどーい！ 素香、由梨亜！ あたし達を見捨てる気いー！」

「うーん……でもさ、時計見てよ」

「ハッ？」

由梨亜の声で皆が時計を見ると、時刻は十一時三十分だった。

「そろそろお昼にしない？ 十二時過ぎると沢山人来ちゃって席なくなっちゃうもん」

「まあ、そうだけど……」

それでも渋る藍南和尚鈞に、千紗が元気良く言った。

「それじゃあ、多数決採る！ 今からお昼食へに行くのに賛成の人、手え挙げて！」

結果、七対二で、お昼を食べに行くことになった。

そして昼食を終えると、九人はそれぞれ帰ることになった。

千紗、由梨亜、睦月、香麻の四人は、急いで本条家の屋敷に行った。

耀太から、昨日の話の続きを聞く為に。

第二章「事実と覚悟」― 2

「たっだいまあ、お父様」

「ただいま。ちゃーんと今日は走らないで来たわよ？ お父様」

「プツ……それが今言うことかよ、千紗ちさ、由梨ゆり亜あ」

「ああ、同感だな」

多種多様な言い方に、耀太ようたは苦笑すると四人を座らせた。

「さあ、さつさと座りなさい。今日はお茶も何も出さないぞ。どうせ昼は食べてきて、お腹一杯だろう？」

「うん」

「だから、すぐに本題に入るぞ。……花鶯国かおうこくはおよそ一週間前、地球連邦の王族や皇族、議会に向かい、通信文書で宣戦布告した。その送り主の名は、花鶯国の王、花雲かうきよ恭富瑠美きよとみ陛下みかどだった」

その言葉に、由梨亜ははっと息を呑んだ。

（やっぱり……誰かに押し切られた？ でも、富瑠美を動かせるようなほどの力を持つ人は、三ヶ月前の報告では誰もいなかったはずなのに……！ 今の花鶯国では、御祖父様も政財大臣せいざいだいじん殿も代替わりをして、恐らく、今花鶯国で一番権力を持っているのは宗賽大臣しゅうさいだいじん殿……）

由梨亜は、小さく顔を歪めた。

（でも、彼は権力に何の興味もなくて、世襲制の大臣家に産まれて、長男だったから王宮に仕えて大臣もやってるけど、いつも、ただ神に仕えられるほどの力があれば、それで充分だと……そういうすごい宗教的で穏やかな考えを持って、しかも明言してる、花鶯国の中では滅多にいない超貴重で希少価値の高い重要人物なのに……。だから、彼は多分違う。だけど、他に誰が伯父様と政財大臣殿と宗賽大臣殿を動かせるって言うの……？！ 分からない……分からないよっ！）

由梨亜がそう考えていると、耀太が話を進めた。

「彼女は、こう述べていた。……ここに、その写しがある」

耀太はそう言うと、端末を起動させ、そこにその文書の写しを映し出した。

そこに書いてあったことを要約すると、こう述べてあった。

『わたくし達花鷲国の、宇宙連盟加盟への再三の問い合わせに全く何も返答がないとはどういうことで御座いましょうか。連盟に加盟したくないのであれば、そう仰れば宜しいのです。わたくし達は必ず御認めになられると思い申し上げたのでは御座いません。勿論、御断りになられることも考えてはおります。ですが、わたくし達は何度も何度もそちらに問い合わせました。そして、何も御返事がない場合は、武力を持って征する可能性があるとも申し上げました。けれど、今までの一年間、何の御返事もないままに過ぎ去っていました。ただわたくし達が言われた言葉は、

「今は即答できかねます。地球連邦の総意がなければ、このことに返答はできません。ここイギリスが首都となっておりますが、私には何の独裁権もありませぬので、今回は御引取り願います」

とだけ。花鷲国の国民の不満は高まりに高まっております。そして、幾ら何でも一年間何の動きも見せぬままで「検討中」などと仰せられても、こちらは疑わざるを得ません。よって、花鷲国は宇宙連盟の長としてではなく、ただ花鷲国一国として、地球連邦に宣戦布告致します。この文書が届く頃には、こちらの準備は既に始まっているでしょう。花鷲国が地球連邦に攻め込むのは時間の問題となります。それでは、これから始まるであろう戦いの、条約制定の時に御会い致しましょう。皆様の御幸運を御祈り申し上げます』

読み終わった四人の顔は、蒼かった。

信じられない内容に、睦月むつきと香麻こうまは顔を引き攣らせ、千紗は心を

落ち着かせようとしているのか、胸に手を当てて軽く喘ぎ、由梨亜は瞑想するかのように目を閉じ、何を思っているのか全く読めなかった。

「戦争が、既に確定事項だったなんて……拒否権がないだなんて、思いもしなかったな……」

「ああ……戦争が起こるとすれば、この国は滅茶苦茶になっちまう……俺らの入学式が延期になるところの話じゃない。下手をすれば、この国の指導者的存在とか、政治家とか、みんななくなるぞ」

「ああ。だから、私達が天皇陛下に呼ばれたのだよ、睦月君、香麻君。そして、いざという時になったらこの国の大勢の人達を守る為に、天皇陛下達は、既に意志を固めている。だから、関係ない人達と、そうでない人達を、引き離すことになった。勿論我が本条家は『関係がある』方だ。睦月君、香麻君、君達は、その『どちらでもない、微妙な立場』となる。好きな方を、決めておいてくれ」

その言葉に、睦月と香麻は顔を見合わせる。

耀太は、追い打ちを掛けるように言葉を重ねた。

「日本州は小さな州だ。花鷲国も狙いにくだらう。だから、もし私達に付くとしたら、二度とこの地を訪れる可能性がなくなること、覚悟しておいてほしい。勿論、全ての王族や貴族や政治家達が行く訳ではない。それでは、戦争が終わっても、この国は立ち行かなくなる。だが、本条家は無理であろう。もし付いてくるならば……死を、覚悟して欲しい。生半可な気持ちで来るならば、この国に残った方がマシだ」

「そう、ですか……でも、死なない可能性もあるんですよね？」

「ああ。どれほどかは、言えぬがな」

耀太の不吉な言葉にも拘らず、睦月も香麻も力強く頷いた。

「じゃあ、俺は一緒に行きます。俺は、由梨亜が好きなんです。だから、護つてやりたいと思っている。それに、もう俺と由梨亜は婚約している。だから、半分は本条家の人間となっています。それを理由にすれば、家族を説得できます」

「俺もです。俺は父さんも母さんもないから、心配してくれるのは兄貴と妹だけ。けど、その二人はきつと説得できます。だから、一緒に行きます」

その言葉に、耀太は息を呑み、ホウツ、と溜息をついて言った。
「分かった。ならば、君達と一緒にいてくるがいい。……だが、くれぐれも無茶な真似はしないでくれ。そうしたら、私は君達の家族に顔が向けられない」

「……お父様っ！ 本当に、いいのっ？」

千紗のその悲鳴に、睦月は穏やかに微笑んで言った。

「千紗……。お前は、本条家の跡取りだ。だから、もしその要求が来たら、突っぱねることは無理だろ？ だから、俺は行くんた。もし止められるのなら止める。止められなくても、少しでも長い間は千紗と一緒にいたいしな。香麻も、そうだろ？」

「ああ。由梨亜も千紗も、色々が無茶をするからな。止められるのなら、止めてみせるよ」

睦月と香麻の意気込みに、千紗と由梨亜は啞然としたが、釘を刺すのは忘れなかった。

「でも……。本当に、その時が来たら、止めないでよ。私達は、その為に行くんだから。それに……。その時が来て私達が死んでも、香麻も睦月も日本州に還ってね。それだけは、約束して頂戴。あの……昨日の約束を、これで一つ使っわ。私の分だけで、香麻と睦月にね」

由梨亜の、その真面目なのかふざけているのだから分からない言葉に、睦月と香麻の顔は一瞬緩んだ。

「……ああ。約束、する」

その顔とは対照的に、絞り出すような声で二人が約束すると、由梨亜は溜息をついた。

（香麻と睦月は、一緒に来て欲しくなかったな……。御母様とか富瑠美とか、身近にいた人が私に会えば、ばれちゃうかも知れないし。もし、他の王族だったら……。例えば、今鶯大臣おうだいじんになつていて、御父様の十一番目の子供で紗羅瑳侍しゃらさじの娘、第六王女の麻笈華まみかか何かだと、

絶対にばれない。麻笈華は兄弟の中でも頭いいけど、私の持つてる力を知らないから。そして……もしばれたら、私はきっと花鶯国に連れ戻されて、王位を再び継がされることになるわ」

由梨亜は、横目でちらりと千紗を窺った。

（千紗はそのことを知ってるから、問題ない。お父様とお母様はそれを知ったら茫然自失になるだろうけど……あの二人は事情を知らない上に、茫然自失になるほど根性なしでもないから、絶対に止められるわ。そうすると、二人の生命が危ないのよね……いざとなったら、二人を千紗ごと置いてきぼりにするしかないわ……）

由梨亜がそう考えている内に、話は進んでいた。

「さて、これで話は終わった。四人とも、好きにしていそ」

耀太のその言葉にはっと我に返ると、千紗がそつと由梨亜の腕を引いた。

「由梨亜……ちょっと、出よ？」

「うん……分かった」

由梨亜はそう言うと、千紗に引きずられるようにして部屋を出た。

第二章「事実と覚悟」― 3

（一体、千紗はどこまで行く気なの……？）

由梨亜はそう思い、隣をスタスタと歩いて行く千紗の顔をチラッと見た。

二人は、外の道を歩いていった。

だが、由梨亜は一体どこに行くか知らなかった。

ただ、千紗に付いて行くだけで精一杯だった。

「あ、あの、さ……ど、どこ――」

由梨亜はそこまで言い掛けてやめてしまった。

千紗が睨んで来たからだ。

由梨亜が言うのをやめると、千紗はふっと笑い視線を完全に前に向けた。

（つたく、千紗ったら……ほんとに、どこまで行くのよ……）

今、由梨亜は嫌な予感に襲われていた。

（この道、通ってるって……もしかして……いや、もしかなくて
も……いや、でも……やっぱり……あそこかも……）

やはり、由梨亜の予感が当たった。

着いたのは、近くの臨海公園だった。

千紗と由梨亜は、小学生の頃よくここで遊んでいた。

二人が初めて会ったのも……ここだった。

「千紗……」

「……うん？」

千紗は、海の方をじっと見詰めていた。

「どうして、私を連れて来たの？　ここに」

「……あのね、由梨亜。これから、地球連邦は花鶯国かおうこくと戦うでしょう？」

「ええ。もう、宣戦布告されたみたいだから……」

「ねえ、由梨亜。地球連邦が花鶯国と戦って、勝算はどれぐらいだ

と思う?」

「それ、は——」

由梨亜は言葉に詰まった。

(千紗は……どこまで知ってるの? 私が、覚悟していることを。だけど……それなら、私は——)

「由梨亜。正直に、答えて。あたしは、ほんとに勝算は少ないと思う。由梨亜。花鶯国の元女王としての考えは?」

「……じゃあ、言うよ。私は……詳しくはよく分からないけど、多分、良くて十パーセント。悪くて……一パーセント未満。それぐらい、今はすごい無謀な状態。ただ……地球連邦の上の人達は……勝算は最低でも三十パーセントはあるはずだって思ってるはずよ。地球連邦の隠してる力は、絶対それぐらいの力を持っているはずだって。そして、花鶯国はそれに不意打ちを食らうはずだって、信じてる」

由梨亜は、瞳を閉じて吐き捨てた。

「けど、花鶯国はその情報を得られる。そして、仮にその情報が僅かにしか得られなくても、花鶯国の力の方が強いわ。中央諸国なら知っていることも、地球連邦は知らないっていうことは沢山あるの。おまけに、花鶯国が他国に隠してることも沢山ある。そこからみると、地球連邦の勝算は、絶望的に低いわ」

「そっか……じゃあ、地球連邦が負けたら、ここに花鶯国の人があるんだよね」

千紗の確認するような、そして妙に穏やかな口調に、由梨亜は気付いた。

(そんな……千紗は、全部気付いてたっていうの……?)

だから、答えることが……できなかった。

「やっぱり……そうなんだね。もしここに王族が来たとすれば……由梨亜のこと、花雲恭富実樹^{かうんきょうふみき}だって気付く人、いるんでしょう?」

それで、もし気付かれたら……由梨亜はあたし達に黙って、花鶯国に戻るつもりでしょう? そうすれば、富瑠美^{ふるみ}は富実樹に王位を戻

す。そして、富実樹なら地球連邦に対して悪いようにはしない——つまり地球連邦は、宇宙連盟に加盟する以外の無茶な要求は、あまり呑まないことができる……。そういうことなんでしょ？ 由梨亜。貴女は、人身御供になろうとしている。……違う？」

「……ええ。そうよ。ただし、ばれたらね」

由梨亜は、そつと溜息をついた。

そつ、ばれたら、なのだ。

もしばれなければ、由梨亜はずっと地球連邦にいられる。

千紗と、香麻こうまと、父と、母と、沢山の友達と。

だけど、ばれたら…… 由梨亜は富実樹になるしかない。

それ以外、何一つ道は残っていない。

地球連邦が、花鷲国と戦う以外に何一つ道が残っていないのと同じように。

「もしばれなきゃ、私はここにいれるわ。私はここにずっといたいから、ばれないように努力する。だけど、もしばれたとしたら……」

由梨亜は、千紗の背中を真つ直ぐに見詰めて言った。

「その時の覚悟は、私にはあるわ。だから…… 止めようとはしないで。誰に止められようと、その覚悟は揺るがないわ。止めても無駄なの。だから、このことは誰にも言わないでくれると嬉しい。特に、香麻と睦月むつきには。お父様とお母様にも言わないで欲しいけど……でも、香麻と睦月の方なんかは、それこそ力に物を言わせて無理矢理止める気がするのよ…… ううん、気がするだけじゃないわ。本気でする。だから、もしばれた時はお願ひ。二人を止めて頂戴。これは、千紗にしか頼めないことだから」

由梨亜がそう言い終わると、千紗は振り返り、穏やかに微笑みながら言った。

「嫌」

…… 由梨亜の、思考が止まった。

（な、に……？ 千紗、今何て言ったの……？）

「……………な、んて、言っ」

「だから、聞こえなかった？ 『い・や』」

千紗は、由梨亜の語尾に被せるようにすかさず言った。

……………やはり、由梨亜の聞き間違いではなかったようだ。

「……………ど、して」

「ん？ 嫌だから」

「……………だ……から、理由、は」

由梨亜は、途切れ途切れにしか言葉を発せなかったが、千紗はくすりと笑い、実に滑らかに、楽しそうに言った。

「だってさ。由梨亜、ほんと嫌なんでしょ？ 花鶯国に戻るの。」

だって、ここには由梨亜が愛する、香麻がいる。そして、あたしとか藍南とか、尚鈞とか、素香とか、睦月とか涼斗とか、奏谷とか、あと他にも沢山の友達——親友がいる。お父様も、お母様も。なのに、どうして由梨亜が花鶯国に戻りたがってるなんて思えるの？」

「千紗」

由梨亜の声に、軽く肯定するような感情が思わず混じってしまっただ。

そのことに気付いたのか、千紗は真剣な口調で言った。

「由梨亜は、ほんとに戻るのが嫌。そして、あたしは由梨亜に行っ
てほしくない。だったら、止めるのが一番いい方法なんだよ？ 由
梨亜。睦月と香麻には、富実樹のことは絶対に言わない。っていう
か、それこそ絶対に言えない。だってあの二人、一体何仕出かすか
分かったもんじゃないもん。だけど、もし止めるのなら二人の力を
借りるよ。だって、あたしはずっと由梨亜と一緒にいたいもん」

「……………」

由梨亜は、何て言ったらいいのか全く分からなかった。

だが、何とか言葉を捻り出して言った。

「……………その、千紗……………さ……………これを訊く為に……………この為だけに、わ
ざわざここまで……………来たの？」

「うーん……………もう一つだけあるんだけど……………いい？」

「……いいも何も、この状況で私に拒否権なんてないと思うんだけど……？」

由梨亜の少し呆れたような、脱力したような声に、千紗は軽く笑って答えた。

「あたしが訊きたいのは、由梨亜の——うつん、富実樹の曾お祖母さんの、癒璃^{ゆりあ}亜女王のことなんだ」

「曾御祖母様の……？」

「うん。今夜、その癒璃亜女王に会ったよね」

「ええ。今夜、花鶯国から曾御祖母様が戻って来るから」

「じゃあさ、その人に訊きたいことがあるんだけど、いいかな？」

「ええ。勿論よ。その前に私に報告があると思うけど……何しろ、曾御祖母様にお会いするの三ヶ月ぶりだから」

「……そうなの？」

千紗の口調には、純粹に驚いたような響きがあった。

そんなに長い間会ってないとは、思っていなかったようだ。

「だって、あんまり長い間花鶯国にいても目新しい情報が入るとも限らないけど、あまり短くても大して情報が入らないもの。だから三ヶ月交代みたいな感じで、地球連邦と花鶯国を行き来しているのよ」

「ふーん……。じゃあ、あたしの訊きたいことはみんな訊き終わってし、戻る？」

千紗の珍しくも真つ当な問いに、由梨亜は笑って答えた。

「折角ここまで来たのに、遊ばないで帰るの？ 勿体ないわよ。遊んで行きましょ？」

「うん！」

千紗の元気な答えに、由梨亜は頬が綻ぶのを抑えることができなかった。

千紗が元気だと、嬉しいと——自分まで元気になる、嬉しくなる。結局、二人はいつもそうだ。

心の奥底で……繋がっている。

その夜、千紗はこっそり由梨亜の部屋を訪ねた。

「由梨亜……来たよ？」

「いらつしやい、千紗」

今の時刻は真夜中の午前二時。

夜更かしをしていない限り、いつもなら起きていない時間である。千紗と由梨亜は双子ということになっているが、さすがに部屋は離れている。

さて、千紗は由梨亜の部屋に入ったが、しばらく何もせずにベッドの上に腰掛けていた。

由梨亜も、千紗とは少し離れた場所に腰掛けてぼんやりしていた。五十分が過ぎ、十分が過ぎた頃……部屋の空気が、揺らいだ。

由梨亜が立ち上がって虚空を見詰め、それを見た千紗もはっとして立ち上がり、由梨亜の様子をじっと見守った。

そして……由梨亜が口を開いた。

「お久しぶりです、曾御祖母様」

由梨亜の口調はいつもより少しは改まってはいるものの、『富実樹』だった頃よりは大幅砕けた口調で、何もない所に声を掛けた。

すると、その由梨亜の視線の先が揺らぎ……二十代前半ほどの姿をした、軽く波打った漆黒の髪に、目が覚めるような、とても濃い紫——貝紫、ロイヤルパープルと言われる高貴な色、王者の色と呼ばれる紫色の瞳をした女性が、目の前に浮いていた。

いきなり現れた上に妙に立体的で、ただど宙にも浮いているということで、千紗の思考は完全停止した。

（な、に……誰？ 癒璃亜女王ってのは、分かってる、けど……でも……こないきなりって……こっちの心がついていかないんですけど……）

そのことだけが、千紗の頭をグルグルグルグルグルグルグル

回っていた。

『ええ。お久し振りですね、富実樹。全然変わっていないようで、安心しました』

（うつわ……すっごい丁寧な喋り方……）

そう千紗は思ったが、これでもまだ碎けている方である。

「曾御祖母様、紹介致します。この方は本条千紗^{ほんじょう}。今は、私の双子の姉となっている方です。そして、私の無二の親友ですわ」

『ええ。千紗さん、初めまして。わたくしは富実樹の曾祖母の花雲恭癒璃亜と申します。どうぞ宜しくお願い致します』

「えっ、あつ、はい。こちらこそ宜しく願います……」

千紗は反射で頭を下げていた。

そして、その頃にはようやく頭が動き始めていた。

「あの、あたし、訊きたいことがあるんですけど、いいですか？」

『ええ。どうぞ』

「えっと……癒璃亜様って、元々花鶯国の女王様だったんですよ？」

『ええ。第百五十代花鶯国国王でしたが』

「それなら、このことはご存知のはずでしょう？」

千紗はそう言つと、今までずっと隠し持っていた物を差し出した。それを見た癒璃亜は、顔色を変えた。

『これっ……！ 何故……何故、これを貴女が……！』

千紗が持っていた物は、片手より一回りほど大きい、四角い小さな黒いケースだった。

「これは、だいたい半年ぐらい前にあたしが発見した物です。これ何なのか、由梨亜は知らなかったみたいでした。本当に、何の心当たりもなかったみたいですけど。そうだね、由梨亜」

「えっつとお、ま、待って、ちょっと待ってねえ………ええつと

………うつん………うつん………あつ！ 思い出したわ！

そう言えば、こんなのあったわね………確かにこれが何なのか、私には全く分からなかったわ。………今も、全然分らないけど」

由梨亜は、半年ほど前にこれを見せられていた。

と言つても、

『ねえ、由梨亜。今日これ見つけたんだけどさ、何だか分かる？』

『うん、分からないわ。でも、どこで見つけたの？』

『え、つとね……うん、すぐその庭の植え込みの陰っていうか、とにかく樹とか草とかに隠れてよく見えないところ』

『ふん……一応お父様に訊いたら？』

『いいよ。ただあたしが気になったただけだから。じゃあこれ、捨てとくように^{れいか}苳華に言っとくね』

『ええ』

といった物で、特に何の変哲もない、ごく在り来りの日常的な会話だった。

由梨亜も、それを見てもすぐには思い出せず、思い出すのにもかなりの時間を要した。

『それ……捨ててなかったんだ』

『うん。実はこれね、庭で見つけたんじゃないんだ』

『そ……そうなの？』

途惑つたように目を瞬く由梨亜に、千紗は申し訳なさそうに首を竦めた。

『嘘付いてごめん。これ、家の客室の中で見つけたの。メモも、一緒にあった。それを由梨亜に言わないままにしたのは悪いと思う。だけどそのメモは、花鶯国に係る物だったから。だから、由梨亜には言わない方がいいと思って。で、由梨亜はこれを知らなかった。だったら、そのメモを見せて不安にさせることはないと思って、今まで隠してたの』

『そうだったのですか。ですが、それは花鶯国に対する立派な武器となります。今まで、よく隠して置きましたね。本当に立派です。これはもしかしたら、地球連邦が勝てるかもしれません。勿論、これを利用したらの話ですが』

『そうなんですか？ そこまでとは思わなかったな……それでは癒

璃亜様、これを利用した場合、勝算は何パーセントぐらいですか？」

『恐らく……六十パーセントぐらいではないでしょうか』

「あ、あの！ 曾御祖母様……！」

由梨亜が、勇気を振り絞ったかのように声を出した。

『何ですか？ 富実樹』

「えっと……その、これって、一体何なんですか？！ 私だけ、話に付いてけないって言うか……とにかく、置いてきぼりにしないで下さいっ！」

『ああ、ごめんなさい、富実樹。わたくし、富実樹がこれを知らないことをつい忘れてしまいましたわ』

「右に同じ」

千紗はそう言うと、由梨亜に向かって一枚の紙を渡した。

それは、植物の繊維で作られた物で、由梨亜は破れないようにそつと受け取った。

「これっ……！ ……何だ。そういうこと……」

由梨亜の、半分納得したような、半分脱力したような声を聞き、千紗は苦笑した。

「やっぱり、これだけで分かったか……。さすが、花鶯国の王様をやつてただけあるね」

その千紗に対し、由梨亜はきっぱり過ぎるほどきっぱりと言いつつ放った。

「ええ。これが分からなかったら、花鶯国の王たる資格はないわ。ところで曾御祖母様、そろそろ花鶯国のことについて伺いたいのです」

『随分と面白い情報が得られましたわよ。これをどうするかは、貴女達次第です』

「それでは、お聞かせ願えますか。曾御祖母様」

『宜しいでしょう。それでは……』

その後、一時間ほど由梨亜の部屋の明かりは点きつ放しだった。

第三章「花鶯国の現在（いま）」― 1

「ちょっとマリミアンさん！ こっち来て下さい！ 早く行きましようよぉー！ あたし、生で初めて見るんですからー！ これを見逃すだなんて、勿体ないですってばぁ！」

「少し待っていなさい、レイシャ。まだ帳簿付けが終わってないわ。もう少しで終わるから……」

マリミアンはそう彼女に言い返した。

マリミアン・カナージェ・スウェール。

それは彼女の名前だったが、ここではただ、マリミアン・カナージェとしか名乗っていない。

マリミアンの異母兄は、花鶯国の貴族の中でトップの位の戦祝大臣である。

またこの大臣職は世襲制である為、官封貴族の『スウェール家』とは、この国の国民にとって有名過ぎるほど有名な家であった。

だからマリミアンが本当の苗字を名乗ることは、スウェール家の世間体にとっても、この国の貴族に対する目にとっても、何よりマリミアンの為にも良くない。

なのでマリミアンは今、夫に先立たれた未亡人の庶民として生活していた。

そして、マリミアンがいる所は、花鶯国の首都、シャンクランではない。

その首都がある、リイウオン大陸でもない。

そのリイウオン大陸は北半球に属していて、その北半球にはもう一つ、シューリック大陸という大陸があるが、そこにもいない。

マリミアンがいるのは、南半球唯一の大陸、ルーシャック大陸の地方である。

とはいってもそれなりに活気のある、国内便限定とはいえ空港まである街はあるが。

そこはスウェール家とそれなりの縁がある、地封貴族の治める土地だった。

だから、マリミアンはその貴族に融通してもらって、家と店が一つになった中古の物件を譲り受けたのだ。

そうして、一年。

マリミアンは刺繍や縫い物などが得意なので、そういう物を自分で作り、店先やインターネットの通販で売っていた。

商売は順調で、その商品はとても高い値が付けられることもしばしばあった。

「……ちよつとマリミアンさん！ 何消えよゝとしてるんですかあ？ ほら、さつさと来て下さい！」

こつそりと二階の自室に戻ろうとしていたマリミアンは、早速捕まってしまった。

「わ、私……遠慮したいのですけれど……」

「何言ってるんですか！ こんな生で一生に一度見れるかどゝか分かんないですよあ？ こゝんな田舎まで、滅多に来る訳ないじゃないですかあ。ほら、早く！」

「ちよ……レイシャ、ですから、わたく……私、そういうのは……」
「ほらほら！ 興味がないだなんて、言わせませんよあゝ」

レイシャのその言葉に、マリミアンは口を噤んだ。

（本当は見慣れている訳ですし……それに顔を見られて、あの方にわたくしの正体があちらに御分かりになられてしまわれるのも、本当はいけないことであって……）

マリミアンの理性がそれを叫んでいるが、レイシャの勢いに全て飲み込まれてしまう。

元々押しの強い性格でないことが災いし、日常生活の面では、全てレイシャ達大学生の同居人が主導権を握っていた。

「あゝ！ やつと来た、レイシャ！」

「お待たせゝ！ マリミアンさん引っ張って来んの大変だったんだから、場所取るの大変だったって言わせないわよ！ マレイ、ミア、

ユリア！」

そう呼ばれた女性達は、皆十九歳から二十歳の大学生だった。彼女達は、マリミアンと共に働き生活をしていて離れた所に実家のある、つまりはマリミアンの所で下宿をしている扱いでもある女性達である。

ちなみに、このユリアという女性の名前が呼ばれる度に、マリミアンは少し反応してしまうのであった。

「あつ！ 来たよ！ ほらほら！ あゝ、やっぱり本物はちよつと渋いけどかつこいい小父様！」

「ほんと〜！ ちよつと遠くて、よく見えないのが残念……」

「ねえ、ミア。貴女どっちの方が好み？」

「え？ どっちってやっぱり、シャーウィン様かウォルト様？」

「当ったり前でしょ！ だってあのシユールって……ねえ？」

「そうそう。まだシャーウィン様とウォルト様はまだオジサン世代だし滅茶苦茶カッコイイからキャアキャア言うことができるけどさ……あのシユールって……もうオジサン通り越してお爺ちゃんでしょ？」

「しかも、あんまり見栄えしないしねえ」

そう、今日ここには、戦祝大臣のシャーウィン、政財大臣せいざいだいじんのウォルト、宗賚大臣しゅうざいだいじんのシユールが来ているのだった。

彼らは、広場に造られた演台の上に乗って、手を振っていた。

三人の目的は、自らの姿を見せることで戦争に賛成してもらい、技術、人共に協力してもらう為だった。

そして、これが終わった後、戦争に対する説明会が講堂で開かれることになっていた。

マリミアンは、ほぼ一年ぶりに生で見る異母兄の姿に目頭が熱くなった。

（シャーウィン御異母兄様……御元氣そうで、良かったですわ……ですが、この国の実権は全て、宗賚大臣が握っていて……嗚呼、この国はどうなるのでしょうか。軍隊の管轄は戦祝省……つまり、シャ

ーウィン御異母兄様の下にあります。シャーウィン御異母兄様は、一体どこまで宗竇大臣に抵抗できるのか……嗚呼、家族に……わたくしの血の繋がっている兄弟に会いたい。わたくしの子供達に……富瑠美達も含めた、仲の良かった子供達に会いたい。そして……峯慶様に、御逢いしたい……！）」

いつの間にか、マリミアンは堅く拳を握り締めていた。

（峯慶様……まさか、峯慶様とまで御別れするなんて、全く思いもしませんでしたわ……それに、峯慶様は今も意識不明……峯慶様、どうか、貴方だけでいい。貴方だけでいいですから……どうか、御元氣になられて下さいませ……！そして、御逢いしたい……いいえ、それはわたくしの我儘。峯慶様には、宗竇大臣を御止め戴いて、富瑠美を……陛下を御助け頂かねばならないのですから……峯慶様！どうか一刻でも早く、御目覚め下さいませ……！）」

マリミアンは自分の考えでばんやりとしていたので、ユリアから声を掛けられたのに気付かなかった。

「マリミアンさん……マリミアンさん？……ちょっと！マリミアンさん！聞いて下さいってば……！」

「……あ、あら、ごめんなさい、ユリア。どうかしたの？」

「マリミアンさん、マリミアンさんって、シャーウィン様やウォルト様と、ほとんど同じ世代ですよねっ？」

「え、ええ……そうだけど？」

「だったら、シャーウィン様とウォルト様、どっちが好みですか？」
「……えっ？」

意表を突かれたマリミアンが、思わず目を瞬かせると、

「レイシャとあたしはウォルト様の方がかっこいいって言うてるのに、マレイとミアはシャーウィン様の方がかっこいいって言うて譲らないんですよ。それで、同じ世代のマリミアン様なら、どっちが好みかなあって」

「ああ、そういうこと」

マリミアンはくすりと笑った。

つまりは、マリミアンが好みだった方がよりかつこいいという訳だ。

「私は、どちらともそれほど好みではないわ。私の中で最高なのは、今は亡き夫ですもの」

さらにマリミアンは言つてのけたが、途端に四人が不満そうな顔になって振り返った。

「えゝっ！　じゃあ、どっちかって言うと、どっちですか？　それだけは答えて下さい！」

「んゝ、そうねえ……二人ともあの方とは似てないけど……どちらかと言うと、シャーウィン——様の方がしらね？」

マリミアンは危うく『御異母兄様』を付けそうになり、言葉を飲み込んだ。

だが、四人はそれに気付いていなかったようだ。

「やったあ！　やゝっぱりシャーウィン様の方がかつこいいのよ！」

「えゝ！　マリミアンさん、ひどゝい！」

「えっ？　でも、私がシャーウィン様の方が好みだつて言ったのは、シャーウィン様が、私の夫のお義兄さんにいに似ているから言ったのよ？　だから、あまりかつこよさでは決めていないわ。というか、かつこよさではどっちもどっちでしょう」

（ええ。わたくしは、嘘なんて吐いていないわ。わたくしの夫……つまり峯慶様のお義兄様の一人は、シャーウィン御異母兄様ですものね……）

「えゝっ！　そんなあっ！」

「ほらほら、前を向きなさい。もうそろそろ移動してしまいますよ？」

マリミアンが注意を促すと、四人は一斉にザッと振り向き、歓声を上げた。

「きゃゝっ！　シャーウィン様あ！　頑張つて下さゝいー！」

「ちよつと何言つてんの！　ウォルト様あ！　シャーウィン様に負けないで頑張つてえゝー！」

「ウォルト様、かつこいいい〜!!」

「シャーウィン様の方が、かつこいいですよ〜!!」

マリミアンは苦笑しながら、真っ直ぐシャーウィンを見上げた。辺りは歓声を上げたりする人が多いのでそれなりに煩いのだが、その中でも特に四人の声は響いたらしい。

シャーウィンとウォルトがこつちを振り返り、手を振って来た。

「んきや〜〜〜!!」

……凄まじい、悲鳴が上がった。

あまりの声の大きさに、マリミアンは思わず耳を塞いでしまった。それが目に留まったのだらう、マリミアンとシャーウィンの目が合った。

シャーウィンは微かに目を睜り、それで何とか抑えたようだ。マリミアンはそんな異母兄の姿に仄かに微笑み、首の辺りで指を立て、小さく振った。

それは、マリミアンが小さな時から気に入っている仕種で、シャーウィンならば気付いてくれるはずの仕種でもあった。

シャーウィンはそれを見たからだらう、やはりそうかとの確信を深めたようで、につこりと笑って視線を他に移した。

そして、その微笑みを目にしたのだらう、マレイとミアは、更に「ギャ〜〜〜!!」

と意味不明な叫び声を発した。

そして、彼らが講堂に移動すると、マリミアンは声を掛けた。

「さ、そろそろ戻るわよ？」

「え〜……まだ、後ろ姿が……」

「もう顔は見えないでしょう。まあ……貴女達はここにいてもいいけど、私はお店に戻るわね」

マリミアンはそう言うと、店に戻って行った。

第三章「花鷲国の現在（いま）」― 2

「戦祝大臣殿……戦祝大臣殿？　どうかなされましたか？」

「あ、いえ……少し気を抜いていただけですから、御気になさらず、政財大臣殿」

「まあ、確かにあの人出は今まで以上でしたからね……それに、あの少女達の悲鳴は……」

ウォルトは苦笑した。

あそこには沢山の人がいたが、その中でも凄まじい悲鳴を上げていた四人の女性のことは、よく覚えていた。

「私達のことを見ようとして沢山の人が集まるのはよく分かりますが……それにしても、あそこまで悲鳴を上げられるとは、思いもいませんでしたね」

「ええ。そう言えば戦祝大臣殿、覚えておいでですか？　あの少女達の後ろに、我らと同年代であるう女性が御立ちになられていたのを」

「ええ、勿論です。恐らくあの女性は、あの少女達の誰かの母親ではないでしょうか？　それか、近所の顔見知りの女性だとか」

誤魔化そうと、敢えて曖昧なことを言ったシャーウィンだったが、ウォルトはそれに乗せられなかった。

「ああ……なるほど。戦祝大臣殿はそう御考えになられたのですね」
「……？　ということは、政財大臣殿は、違うことを御思いになられたのでしょうか？」

シャーウィンが警戒しながら言うと、

「ええ。あの女性には、些南美王女殿下の面影が窺えました。先王陛下とも、僅かでしたが似ておいででしたね」

そのウォルトの鋭い観察眼に、シャーウィンはすぐには声が出なかった。

「……さすが政財大臣殿ですね。鋭い観察眼です。ほんの僅かし

御覧になられていない御婦人の御顔を憶えておいで、おまけにあまり見知ってはいらつしやらない人物との類似点まで見出すとは。貴殿の五人の奥方達が、揃いも揃って美女揃いで、おまけに顔立ちも似通っていることもあるのですかな」

その鋭い反撃に、ウォルトはサラリと言い返した。

「何の。第五妻まで持てるというのに、第二妻までしか持たない貴方の方が、素晴らしい観察眼を御持ちでいらつしやいますよ。審美眼と言い換えてもよいかも知れませんか。私の妻は確かに美しいですが、それだけに争いが絶えなくて。いつの世も、女の争いほど大変な物はありませんよ。貴方の家は、平和そうで羨ましい」

またもや、シャーウィンは詰まった。

確かに、シャーウィンには妻がたったの二人だけだ。

第一妻の方が貴族の娘で、第二妻が、何と普通の庶民の娘だった。勿論、庶民の娘を娶る貴族がない訳ではない。

だが、それは身分の低い貴族がほとんどで、その中でも第四妻や第五妻が大抵である。

しかも、大貴族なのに第二妻までしか娶らないというのも、大変珍しかったりする。

つまり、シャーウィンは貴族の中では珍獣中の珍獣だったりするのだ。

「ええ。無駄に大勢の妻を娶るよりも、数は少ないながらも、真実愛している女性を娶る方が私の主義に沿っていますからね」

「ほほう、それでは話を戻しますが、貴方はあの女性が似ていたと、御思いませんか？」

「いえ、私はそこまでじっくりと御顔を拝見してはおりませんでしたがからね。そこまではよく分かりませんな」

と、和やかに、あまり和やかとは言えないような話をしていた二人の元に、闖入者が入り込んで来た。

「おやおや、御若い人はよいですね。あれほどの人混みを潜り抜け、てもまだ、話をする余裕があるのですから。私のように七十代にも

なつてくると、そこまでの余裕は失われてきておりましてな」

「何を仰られるのでしょうか。貴方は今現役で働いていらつしやる大臣の中では最高齢でいらつしやるではありませんか。まだまだ現役で御働きになられますよ、宗^{しゅき}賽^{さい}大臣^{だいじん}殿」

その言葉に、シユーは皺の浮いた顔に笑みを浮かべる。

「ふふ、やはり御若い人に励まされると元気が出ますね。ありがとうございます御座います」

「おや、それをいうのなら、私達もやはり若くはありませんよ。私はもう四十代の後半ですし、戦祝大臣殿も既に五十代に入っておりますから」

ウォルトの言葉に、シユーは苦笑した。

「そうですね……つまりは、私達は皆年寄り、という訳ですな」

「……ですが、宗^{しゅき}賽^{さい}大臣^{だいじん}殿、何かあつたのですか？ 無駄に御喋りをする為に、貴方が来るとは思えませんか」

「ええ。確かに、私はそのような性格ではありませんね。それでは戦祝大臣殿、政財大臣殿。明日の八時三十分に、ここを出発するようです。そして、ここの地^ち封^{ほう}貴族との対談を致します」

「そうですね。宗^{しゅき}賽^{さい}大臣^{だいじん}殿、わざわざありがとうございます御座います」

「ありがとうございます。宗^{しゅき}賽^{さい}大臣^{だいじん}殿、ゆつくりと御休み下さい。それこそ、私達は年^{とし}寄^よりなのですから」

「ええ。そちらこそ」

そう言つと、シユーは部屋を出て行つた。

この三人では、シャーウィンとウォルトで、仕切られているとはいえ、結局は続いている一つの部屋を、シユーで一つの部屋を使っていた。

その理由は、シユーの方が二人とは歳が離れているので会話もしにくいだろうし、雰囲気も気まづくなるだろうということと、シャーウィンとウォルトが続き部屋の方が気楽だし、お金も掛からないから、ということになっている。

だが本当の理由は、戦費に使う分の費用を捻り出す為と、シユー

ルが今王宮と政治を牛耳っているので、それに配慮をした結果である。

シャーウィンが、ほんの少し溜息をつくと、ウォルトがくすりと笑って言った。

「それで、戦祝大臣殿？ 先程の女性について、私の考えを述べても宜しいでしょうか？」

「おや、まだ終わっていないかったですか……ええ、どうぞ」

軽く辟易して言うと、

「それでは申しますが、戦祝大臣殿。あの女性は……貴方の異母妹である花雲恭由梨亜様、マリミアン・カナージエ・スウェール様では御座いませんか？ そうすれば、富実樹先王陛下や些南美王女殿下の面影が微かにあるのも、納得がいきます。生憎、私は何年も前に、遠目ながらも御顔を拝見致しただけに過ぎませんからね」

「……まさか。我が異母妹、マリミアンはシャン克蘭の屋敷におります。もし異母妹が屋敷を出てこんな国の外れにいるとなれば、現在当主である私の耳に入っていない方が可笑しい」

（……政財大臣……！ どこまで鋭いのだろうか、この男はっ！
だが……まさか、マリミアンがこれを見に来るとは思わなかったな
いいや、大方、あの同居人の少女達に引き摺り込まれたのだろう。
昔から、御転婆かと思えば妙に自己主張が少なかったりして……特に、当時王子であらせられた峯慶王と初めて御会い致した時から、
本当に大人しくなってしまうて……）

シャーウィンは内心穏やかではなかったが、それを何とか誤魔化して見せた。

今はただの官封貴族という地位にあるマリミアンだが、元はと言えば先々代国王の妻、妾。

今は除籍されているものの、かつては花雲恭由梨亜、由梨亜妾の名を得ていた人物である。

そんなマリミアンが、いくら強く希望しそれを渋々ながらも強引に認めさせたとはいえ、庶民として働いていると知られれば、国内

では貴族全体が呆れられ、軽蔑されかねない。

貴族の中でも、スウェール家もこんなものか、零落れた家に成り下がったものだ、と言われかねない。

国外では、花鶯国^{かおうこく}王家は、何故かつての王の妻を（国内外共に、マリミアンが王籍から除籍されていると発表していない為）、離婚もしていないのに庶民と同等に扱うのか、と言われかねない。

つまり、どの面から見ても、何もいいことはないのである。

「ほう……そこまで貴方が仰るのであれば、そうなのでしょいうな
ウォルトはうつすらと笑い、呟くように言った。

「ええ。そうですね。私の異母妹は四人ありますが、マリミアン以外は全て貴族の家に嫁いでおります。そして、いずれも決して御金に困らないだけの身代を持つ家柄です。マリミアンは今現在スウェール家におりますが、勿論困ることなどありません。なので、わざわざこんな僻地にまで赴き、働く意味がありません。恐らく、他人の空似か……可能性としては低いと思いますが、政財大臣殿の見間違いかと思えます」

シャーウィンは声に力を込め、確信を持って言った。

その次の日の夜、シャーウィンは眠らずにしきりと寝返りを打っていた。

（あいつめ……あいつめっ！ あんな顔をして……よくも抜け抜けと！）

普段はそんな言葉遣いをしないのに、その頭はシャーウィンの知り得る最上級の汚い言葉で一杯だった。

そうでもないしと気が休まらないし、それでもまだまだ不十分なくらいだったからだ。

本当は、大声で喚きたい気分だった。

（あいつめ……あいつめ！！）

シャーウインの脳裏に、シユールの顔と、今日の午前中に行っていた演説が蘇って来た。

（畜生……畜生！ 何で、あいつがあんなことを言うのだ？！ 自分が……自分がやったくせに！！）

今日の午前中、三人は地封貴族に会った後、公会堂に向かった。

そして、そこで一人ずつの演説を行ったのだ。

順番は、シャーウイン、ウォルト、シユールだった。

自分の演説が終わり、ウォルトの演説も、シャーウインにとって問題なく終わった。

問題だったのは、シユールの演説だった。

シャーウインが絶句した場面が、彼の脳裏に焼き付いていた。

「つまり、昨年ですね。その年、峯慶王が暗殺者の毒に御倒れになられ、先王陛下も行方不明にならせられました。この国にとって、凶事が重なった悪夢の年と言えましょう。そして、そんな先王陛下が御提案なされ、峯慶王が後押しなされた案件が、『地球連邦の宇宙連盟への加盟』であつたのです。先王陛下は戦をできるだけ回避したいと御考えであらせられたので、今回の結果をもしも御知りになったとしたら、御悲しみになられるでしょう。ですが、これはその御二人の願いなのです。それに御協力下されば、きっとまだ御眠りになられている峯慶王も、御喜びになるでしょう。皆様、峯慶王が御無事に御目覚めになられるよう、先王陛下が御無事に見付かれるよう、御祈り下さい。そして、この度の戦に、どうぞ御協力を、御願ひ致します」

そう、シユールは言ったのだ！

自分が、峯慶に毒を盛る手配を整えたのに！

そして、その当時戦祝大臣だったノワールと政財大臣だったフォリュシエアに濡れ衣を被せ、終身刑を負わせたくせに！

去解鏡の結果を捻じ曲げるといふ、人として信じがたい悪事をやったくせに！

（よくもそこまで……！ 確かに、私の義弟と姪の悲願は『地球連

邦の宇宙連盟への加盟』だった。だが、それを利用し自らの野心を叶えようとしている御前に、そんなことを言う資格など、ない！
だが……私には、そんなことを言う権利さえ、ない……。私がそんなことを言えば、戦祝大臣の地位剥奪、戦祝大臣の地位は私の息子、レイウオン・ミシユー・スウェールに譲ることになる。今でさえも、宗賽大臣とは親子ほどに歳が離れていて逆らうことも難しいというのに……これが更に離れてしまったら、逆らうことなど事実上不可能に近い。宗賽大臣ではなくても、あまりにも若過ぎる大臣にすんなりと従う貴族や官吏などいる訳がない。それに……政財大臣殿は、宗賽大臣に、気付いていらっやらない！

そう、確かに前戦祝大臣のノワールと前政財大臣のフォリュシェアは、真実を知ったが為に濡れ衣を着せられた。

だが、シャーウインは投獄される前のノワールと少しだけ言葉を交わす時間があつた。

そこで、シャーウインは『去解鏡を視ろ』と言われた。
家のどこに去解鏡が隠してあるか、どのような質問をすれば、正しい答えが引き出されるかも言われた。

そして……投獄された次の日の、まだ日も昇っていない早朝に視ること、そして視終わったらただちに去解鏡を壊し、処分すること
も。

シャーウインは、たった独りでそれを行い、そして涙を流しながら去解鏡を壊した。

（父上と政財大臣殿は、無実だったのだ。だから、あの投獄は、冤罪……！）

だが、シャーウインはそれを公表しなかった——いいや、公表できなかつた。

真実を明らかにするのは簡単だ。

生放送の記者会見でも開き、そこで言えばいい。

だが、それを聞いた国民は、宗賽大臣の圧政に苦しむことになる。去解鏡でシャーウインは、その為の根回しまでとつくの昔に済ん

でいることを、知っていた。

だから、公表できなかったし、誰にも話すことができなかった。そして、去解鏡を処分していたので、家宅捜索で新たな罪を認めるようなことにはならなかった。

その一方、ウォルトは何も知らない。

本来に、ノワールとフォリュシアが罪を犯したと、信じ切っていた。

そして、国の為に自分の一切を捧げることによって、父の贖罪をしようとしていた。

（本当は……貴方の父は、何も罪を犯していないのに！）

だから、シャーウィンはそんなウォルトの姿を見る度に、腹立たしいような、苛々するような、真実を語りたいような気分に襲われる。

本当は、ノワールもフォリュシアも、悪くはないのだから。

悪いのは、宗賽大臣、シュールなのだから……。

第三章「花鷲国の現在（いま）」――3

「陛下あ！　こちらも御願ひ致します！」

「はい！　あ、レーン！　ここに積み上げているキエシュを、各省に配つて頂けるかしら？」

「えっ！　私は後宮の侍従で……」

「他に人がいないのですから、代わりにやって下さいませ！　今は人員不足なので御座います！　これでは、他の人が戻ってくる前に溢れ返つてしまいますわ！　ほら、さつさと持つて御行き下さいませ！」

富瑠美ふるみの怒号に、その若い侍従は飛び上がった。

「は、はいいゝ！」

その僅か一分後。

再び執務室の扉が開いた。

「陛下！　本日締め切りの案件にはもう御署名を――」

「その前に、貴方は外務省の人間ですね？」

「は、はい！」

その返事に、富瑠美は一つのキエシュを、王とは思えない凄まじい形相で投げ付け、それを危うい所で目の前の人物が受け取った。

「だったらこれは一体何なのですか？　これでは諸外国が納得致しません！　これが外国から送られて来られた物として考え、さつさと作り直してこちらに御持ち下さいませ！　締め切りは本日ですっ！」

「そ、そんな無茶」

その言葉が言い終わらないうちに、富瑠美は言い募った。

「何が無茶ですか？　本日締め切りの物を昨夜御提出なさるような常識外れの省の人間に言われたくは御座いません！　幸い、今は午前十時。これをしっかりと練り直し作り直して、夕方の五時まで延長しても六時までには御提出下さい！」

「そ、それをどうやって上司に言えって言つのですか、陛下！」

その言葉に、今まで会話を交わしながら書類を捌いていた富瑠美は、視線を上げた。

「貴方の上官は、一体誰ですか？」

「あ、貴族の副大臣の、シェイ殿です」

「……ということは、貴方は官吏ですね」

この王宮では、貴族と官吏が共に働いている。

その見分け方は、貴族は王宮で働いている貴族のことを『かんほう官封貴族』と言い、官吏はただ『貴族』と言うことだ。

その理由は、庶民にとって官封貴族も地封貴族ちほうも貴族だが、貴族にとっては官封貴族と地封貴族は違うからだ。

そして、互いに官封貴族であること、地封貴族であることを誇りに思っている。

けれど庶民にとっては、そんなことは『どうでもいい』ことなので、このような見分けが付くのだ。

「それでは、わたくしが言っていたと仰り、御伝え下さい。それでもし御不満を訴えるようでしたら、貴方を官吏の副大臣であるマレイ殿の部下に致します。そしてシェイ殿の省の移動、降格を致します。そんな我儘を仰る方は、副大臣として不適格ですので。なので、そうでしたらわたくしに御伝え下さいませ」

「は、はい。それでは失礼致します」

そう言うと、彼は部屋を出て行った。

その途端、富瑠美は再び膨大な量の資料に目を通し始めた。

何故、富瑠美がこんなことになっているのか。

その理由は、簡単過ぎるほど簡単だ。

何故なら、ここにシャーウィンも、ウォルトも、シュールもいないからだ。

それぞれの省で対応できる程度の物は、副大臣で対応できる。

だが、その副大臣にも本来の仕事があり、そこに無理矢理押し込める量という物も限度がある。

その結果、富瑠美や麻笈華^{まみか}、その他の王族達で分担してその分の仕事をし、おまけに富瑠美には、三人の代わりに最後の署名をしなければならぬという役割まである。

だから、富瑠美は目の回るような忙しさの中にある。

そしてもう一つ、今花鶯^{かおろく}国が地球連邦と戦おうとしていることも、その原因の一つだ。

他国には、貿易などでその影響が出る為、その説明が必要になってくる。

また軍備を整えたり、いざと言う時に徴兵や志願兵を募ったりする時、それに備えて国民に理解を求め、協力して貰うということもある。

シャーウィン達が今、国中を回っているのもそのうちのの一つだ。

（……早く、御帰りになって頂けないでしょうか。このままでは、わたくしが保ちませんわ。あまり長い間大臣三人の仕事を分担するのも、考え物ですわね。三人揃って御出掛けになるのに反対しておけば良かったですわ）

富瑠美は頭の片隅でそんなことを考え、その考えに自嘲した。

（わたくししたら……何てことを考えているのかしら。宗竇^{しやうさいだいじん}大臣に反対しても、その意見は無視されるだけだと言うのに。わたくしは、もう……逆らえやしないのに。嗚呼……御父様、御母様、御異母姉様……逢いたいですわ。そして、御助けして頂きたい。わたくしには、確かに政治の才能がありますが、それは頂点に立つ政治家という意味ではなく、その補佐をする人間としての才能ですわ。誰かに御助けして頂かないと、わたくしは、わたくしを活かせない……）

富瑠美は、書類を捌く手を止め自嘲した。

（わたくしは御父様にとって二番目の子供ですが、御異母姉様がない今、わたくしが一番上の子供……。もう、誰にも頼れません。弟妹達には、精々兄弟としての助けしか求めることしかできませんし、年長者の助けが必要でも、あの深沙祇妃^{みさぎひ}には決して頼れない。大臣達には、精々臣下に対する相談事ぐらいしか……。もう……わ

たくしは、駄目……！）

強く噛み締めた唇から、血の味がする。

もう、自分が限界に近いことは、理解していた。

（けれど、宗竇大臣にあの御約束を取り付けて置いて良かったですわ。一つだけ、どんな願いでも叶えるという、約束……。あの約束を使えば、たくしは休むことができる。……そうすわ！ こうすればいいのです。そう、こうすれば絶対に休めますし、たくしは楽しいですし、一応御仕事もできます。……そう、このことを望みましょう。これは、わたくしを最も有効活用でき、それでいて休みの取れ仕事もできる、宗竇大臣から逃れる唯一の策ですから……）富瑠美はそう考えると、ふっと心が軽くなった。

（……そうすわ。そうしましょう。それが、一番いいですわ）

富瑠美は先程までの殺気立った様子とは反対に、ウキウキと仕事をしていた。

そのせいで、先程までの富瑠美の様子を知っていた官吏や貴族がその様子を見た時、一体陛下に何があったのか、と心底怖ろしく思ったのだった。

ふと、扉を叩く音がして、杜歩埜は顔を上げた。

「……杜歩埜御異母兄様？ 今、御時間宜しいでしょうか？」

「……些南美か？」

杜歩埜が自室の扉を開けると、些南美がキエシュを胸に抱えて立っていた。

「些南美？ 一体、どうしたのかい？」

「……私のことも忘れられては困りますよ、杜歩埜異母兄上。いくら杜歩埜異母兄上が些南美姉上のことが御好きでいらっしゃっても、そのことは周りの誰にも覺られてはなりませんから」

そう言ったのは、柚希夜だ。

「……おや。柚希夜もいたのか」

その声には、先程些南美を見た時ほどの覇気はなかった。

それに柚希夜は苦笑し、言った。

「ですから、そういった物言いは、他に人がいない場合のみにして下さい。まだこのことは秘密なのですから」

柚希夜はついこの前、十五歳になった。

富実樹ふみきと別れた時、まだ十三歳という幼さの残っていた柚希夜だ

ったが、富実樹と別れてから背がグンと伸び、声変わりをし、大人っぽくなって来た。

既に身長は姉の些南美を抜き、百七十を超えている。

富実樹の身長が百六十センチ台後半で、些南美の身長が百六十五センチほどというそれなりに背の高い姉がいることを考えると、柚希夜はこれからももっと伸びるだろう。

杜歩埜は微妙な笑いを柚希夜に返すと、二人を部屋に入れた。

「……とにかく、部屋に。そう言えば、何故二人はここへ？」

その問いに、手近なソファーに座り、キエシュを目の前のテーブルに置いた些南美が笑って答えた。

「ええ。わたくし達、今まで最低限の政治の知識しか持ち合わせて来ませんでしたの。わたくしも柚希夜も、この王宮に留まり政治をする気など更々なかったものですから。今まではそれで充分だったのです。ですから、いきなりこんなに書類を処理しろと言われまして、困ってしまって……それで、杜歩埜御異母兄様に御手伝いして頂けないかと思ひまして……ねえ、杜歩埜御異母兄様。御手伝い頂けませんか？」

些南美の甘えるような問いに、杜歩埜は苦笑して答えた。

「ふふ、そんな声を出されたら、私が断りにくいではないか。まあ、私に断る気はないし。いいよ」

「まあ！ 杜歩埜御異母兄様、ありがとう御座いますわ！ これで皆も救われます！」

「えっ？」

「はっ？」

その答えに、杜歩埜も袖希夜も間抜けな声を出した。

だがその二人に構わず、些南美は扉を開け、外に向かって声を掛けた。

「皆、いいですよ？ どうぞ、御入り下さいな」

その言葉で、大勢の弟妹達と一緒に入って来たのだ！

「んな……風絃に、早理恵に、涼聯に、羅緯拿到……私は、六人も相手にしなければならぬのか……！」

ちなみに、涼聯は莉未亜貴の次男で第六王子、峯慶の第十二子で、羅緯拿は沙樹奈後の次女で第七王女、峯慶の第十三子ある。

今政治の道に今いるのは富瑠美と麻笈華だけだが、麻笈華が鷺大臣なので、その麻笈華の兄である篠諺は、将来建築デザイン関連の企業に就こうと思っていたが、政治に詳しい。

そして富瑠美以外の深沙祇妃の子供達は、富瑠美とそれほど仲がよいとは言えずに、妾の子供達とは仲が悪い為、こちらは声を掛けようとすらもなかった。

そして阿実亜女の娘の璃枝菜と、息子の第五王子、峯慶の第十子である鳳蓮の姉弟は官吏志望だったので、このような書類が来ても慌てることはない。

結果、その他の弟妹達が集結した訳である。

その後、六人の異母弟妹を相手に自分の書類も片付けなくてはならず、杜歩埜はとても忙しい日々に入ってしまった……。

第四章「再会」――1

「おい、由梨亜！ もう荷物の準備は終わったのか？」

「終わったわ！ 千紗の方手伝って来るから、香麻と睦月も一緒に来て！」

「ちよつと由梨亜！ 何言ってるのよ？ あたしももう終わりましたあ！」

「あら、千紗にしては珍しいじゃない。何？ 天変地異の前触れ？ あ、花鶯国がもう攻めてくるとか？」

「そつちこそふざけたこと言わないでよ。言霊って知ってる？ 口にした言葉通りのことが起こるっていう力。もし本当に今日とか明日とかに花鶯国が攻めて来たら、由梨亜の責任だよ？」

「はあ？ 何言ってるのよ。そんな関係ないじゃない。私はそんな言い掛かりに責任を持つ気はありませんっ！」

二人が睨み合うと、睦月と香麻が割り込んで来た。

「まあまあ二人とも、ちよつと落ち着きなよ」

「今は時間ないんだろ？ ほら、さつさとお義父さんに報告に行くぜ」

「はいはい」

「はい……」

四人は耀太の元へと急いだ。

今は、耀太からの衝撃的な話があつてから一週間経っていた。

彼らは地球連邦の首都、イギリスに集まることになっていた。

最初はアメリカの方が、土地があるからいいのではないかと考えていたらしいが、やはり首都の方がいいとなり、日本州の上流貴族の中でも最も影響力の強い一族の直系数家族と、直系の皇族と天皇がイギリスに行くことになった。

「お父様！ あたし達準備終わったよ！」

「ああ。早いな」

「早くなんかいいわよ。それより、お父様とお母様は終わったの？」

「い、いや、その……」

「まだ終わりません。私はこれぐらいでよいと思うんですが……」

「奥様はこれでは多いから減らすようにと仰ったのですが、旦那様はこれでは少ないと仰って……」

「まあ、意見の相違ってやつね」

「うーん……あたしは沙羅さらが妥当だと思うなあ。これ以上増やしても余るだけだと思うし、減らすのもいざとなったら大変かも知れないし……」

「そうだなあ。俺も千紗に賛成だ。というより、これだったら増やすよりも減らす方が妥当だろう」

「俺も同感だ」

そう言われ、耀太は詰まり、瑠璃るりも少し嬉しそうな顔ながらも詰まった。

「さあ、お嬢様方の賛成は頂けましたから、これでいいですね？」

旦那様、奥様」

と、長らくこの屋敷に仕えている、古参となってしまった執事の風斗ふうとが言った。

彼は耀太が産まれた時から仕えているので、耀太でも迂闊に逆らいがたい人物でもあった。

「ほら、お父様、お母様。お返事は？」

「……はい。これで、頼む」

「ええ。宜しく願います」

その二人に風斗は頭を下げると、四人に向き直った。

「ところでお嬢様、お坊ちやま、荷物はご用意できましたか？」

「あ、はい。できてます」

身分で言えば千紗や由梨亜の方がこの風斗よりは高いが、どうも

この執事だけには反射的に敬語を使わざるを得ないような雰囲気があり、二人は風斗に無意識で敬語を使っていた。

「……それより風斗さん。俺らにお坊ちゃまは、やめて下さいって何度も言ってるんですが……」

「お気になさらず、お坊ちゃま。これはわたくしの趣味ですので」

……ズバリと言い切られた。

睦月は言葉の持つて行き先をなくし、ただただ沈黙していた。

その二人の様子に、由梨亜はプツと吹きだして言った。

「さあ、二人とも。時間ないんだから、さっさと荷物取りに行きましょ？」

「あ、ああ」

「はい。畏まりました」

そう言つと、沙羅と勇いさむという召し使いが耀太と瑠璃の荷物を持ち、そして四人の荷物を苓華れいか、鈴南すずな、陵多りょうた、章平しょうへいに持つように言い、彼らを階下に送り出した。

「それでは、皆様。出発まであと一時間ほどありますから、お茶でも飲みますか？」

「ええ。風斗。お願いします」

そう言つと、六人はソファーに座つた。

「それにしても……とうとう、日本州が出るのね」

「うん……レイメーア大学はアメリカの方にあるから、その時に久し振りに出るのかと思っただけさ……」

「ああ。俺も、日本の外には修学旅行とか……あと、家族旅行で一、二回？　ぐらいかな？」

「俺もだ。何か、アメリカもイギリスも日本と同じ地球連邦っていう一つの国だけださ……何て言うかな、滅多に行かないから、結構近い外国って感じすんだよね」

「まあ、それには地球連邦の歴史が関係しているだろうな。何しろこの星には、かつて二百国近い国々が存在していたし、この国は連邦制だから、そのせいだろう。だがそれと比べると、他の国はもっ

と『一つの星が一つの国』という意識が強いな」

「ふ〜ん……じゃあ、地球連邦の方が、花鶯国と比べると不利だわ」
「あら、どうして？ 由梨亜」

「だって、花鶯国は同じ国って意識強いから、戦いに協力しやすいでしょ？ 国が協力を呼びかければ、それに愛国心の強い人はすぐ協力する。でも地球連邦の場合、州内での結び付きが強過ぎて、自分の住んでる州に対する愛情は強い。でも、国全体での結び付きとか、愛情とか……そういうのは、他国と比べると驚くほど稀薄なのよ。だから、まだ他国と比べると建国約四百年っていう新興国だっていうこともあるけど、国内の結び付きが弱いせいで、他国から侮られやすい。っていうか、完璧侮られてるわ」

「由梨亜、すごい！」

「ああ。さすがだな。千紗より頭がいいだけある」

「こんなに頭がいい娘がいるって、何だか嬉しいわねえ」

「ちよつと香麻、何よ。あたしと由梨亜はおんなじぐらいの頭の良さですからね〜」

千紗と香麻と瑠璃の素直な称讃に対し、睦月と耀太の顔は険しくなった。

「なあ、由梨亜……どうして、そこまで知ってるんだ？」

睦月のその問いに、由梨亜は少し間を空け、あっさりと答えた。

「ほら、私、中一の頃から三年半……だいたい四年ぐらい、かな？ レイリア国で働いてたでしょ？ その時地球連邦の出身だって言ってるだけ、私の年齢での差別よりも、地球連邦出身ってことでの差別の方が強かったわ。他国出身の同い年の子と私が同じとこで働きたいって言ったことがあるんだけど、あと一人しか雇えないって言われてね、試験を受けたんだけど、結局その子の方が採用されたの。それは純粹にそこで必要とされていた才能での問題だったんだけど、そこを出る時にその子が言ったの。」

『結局、あたしの方が採用されたわね。所詮は地球連邦出身ってことなのかな。貴女は知らないようだから、教えるわ。あたしも最初

は、貴女が地球連邦出身だつてことで貴女に対する差別感があった。だけど、貴女自身を知って、それは偏見だつて分かった。でもね、みんながみんな、そういう人だとは限らないわ。貴女が地球連邦出身つてだけで、貴女自身を見ようともしない。差別される。いじめられる。だから、こういう採用関係以外では、信用できる人以外には地球連邦出身だつてこと、自分から積極的に話さない方がいいわよ」

って。確かに、それは正しかった。私はその後も採用試験を三回受けたんだけど、そのうちの二回は、地球連邦出身だつてことで断られたわ。つまり、地球連邦に対する諸外国の見方は、それぐらいまで厳しいってこと」

「……由梨亜。よく、そこまで悟つたな」

「ありがと。でもこれぐらい、外国に長期滞在した地球連邦人なら、全員分かるはずよ。よつぽど鈍い人じゃない限りね」

由梨亜はそう悪戯つぽく言い、誤魔化した。

花鶯国を出て、早二年。

たまに地球連邦の人が知らないようなことを口走ることがよくあったが、由梨亜はそれを誤魔化す術を身に付けていた。

花鶯国では、自分の考えは受け入れられない。

だが、花鶯国で過ごした日々のせいで、由梨亜の中には花鶯国の考えも入っていた。

そのせいで、時々このように感心されたり、奇異の目で見られたりする。

大勢の人に、異端視されるのは辛い。

深い悲しみを覚えるもする。

だが、自分の大切な人が認めてくれるのなら、決して不幸せではない。

（私は……私の大切なものを護る。たとえ危害を加える者が、血を分けた兄弟や、父や母であろうとも、決して、私は……）

そして、穏やかな一時は、流れ去って行った……。

「皆様、着きました。ここが、これから私達が泊まる所です」

風斗の声で、乗り込んでいた人は車を降りた。

千紗は降り立ってすぐに辺りを眺め回したが、誰も道を歩いていなかった。

それもそのはず、この州に住んでいた庶民は、最低限必要な人を残し……と言っても、ほんの数百人程度を残し、他の州に移っていたのだ。

なので、ここの住民はほとんど貴族という、離れ小島になっていた。

ただ、彼らは自らの栄華を極める為ではなく、いざとなったら生命を投げ出す為——ノブレス・オブリージを果たす為に来ているのだが。

他の、多くの人達を護る為に……。

千紗は、用意された部屋に入ると、ベッドの上に倒れた。

「ねえ、由梨亜！ ここのベッド、フカフカで気持ちいい！」

「はいはい。ほら、さっさと荷解きしちやいなさい」

「はい」

二人の為に用意されたのは、二十畳ほどの洋室だった。

もともとここはホテルだったらしく、部屋の中にトイレとお風呂も付いていて、特別用のない時はずっと部屋の中にいれた。

さて、ここに来たメンバーだが、『本条家』^{ほんじょう}という括りで見ると、

本条家として来たのは僅か八人、千紗、由梨亜、睦月、香麻、耀太、瑠璃、風斗、^{れい}漣という、女性の中で最も古参の召し使いだけだった。ちなみに他の部屋は、睦月と香麻、耀太と瑠璃、風斗と漣という

部屋割りになっていて、他にも日本州から来た人も泊まっていた。

「ふあゝあゝ。退屈うゝ……」

「千紗、そんなこと言っちゃ駄目じゃない。だって、お父様やお母様達は、連日ご挨拶に行ってるのよ？ 私達が暇なのは、まだ平和な証拠。いつ、花鶯国が攻めて来るのか分からないんだからね」

「由梨亜はそう言うけど、香麻に逢えなくて淋しくないの？」

千紗の拗ねたような問い掛けに、由梨亜は詰まった。

「そ、そりゃあ、寂しいわよ。でも、二人はお父様とお母様に付いてなきゃいけないし……私達がぐうたらしてられんのも、あともうちよつとだけだし……」

由梨亜は呟くようにして言うと、窓の外を眺め続けた。

「何よ、あともうちよつとって」

「何、お父様から聞いてなかった？」

「何が」

「私達、あと何日かすれば天皇陛下のご一族と面会するんですって」

「え……そうなの？」

固まってしまった千紗に、由梨亜は笑って答えた。

「ええ、そうよ。お父様達が今いないのは、他の貴族の人の挨拶回りに行ってるからだけど、他の貴族もやってるし、天皇陛下もやらないって誰が決めたの？ さすがに天皇陛下が挨拶して回るのは無理だから、少しずつ呼んでるんですって。で、確か……そうそう、明々後日だったっけ？ 明々後日の、午後のうちが面会予定だって言ってたわよ」

「……何で、もっと早く言ってくれなかったのあ？」

「あ、ごめん。完璧、忘れてた」

由梨亜のその言葉に、千紗はガクツと脱力した。

「ねえ、由梨亜。それって忘れることじゃないでしょうっ！ あん

た、わざと黙ってたね！」

「えゝ。何のことゝ？」

そう言いながらも、由梨亜は千紗と距離を取っている。

顔はニコニコ笑っているが、目線は鋭い。

千紗はそんな由梨亜の様子を見て、こちらもまた顔はニコニコ笑いながら言った。

「ふうゝん……そこまでの覚悟があるってんなら、上等じゃないの。あたしと勝負したいって訳？」

「ええ。やっぱり千紗の言う通り、ちょっと暇で身体が鈍りそうだったもんでねえ」

二人はそう言うと、部屋を出ようとした。

この部屋で取っ組み合いをするには、少々狭かったのである。

だが、由梨亜が扉を開けた途端、目の前に漣がいた。

「あら？ 漣、どうしたの？」

「ええ。お嬢様達に、お客様がいらっしゃってます」

「お客様……？」

「どう言うこと？ 漣。あたし達にお客様って」

千紗の疑問に、漣も首を傾げた。

「さあ……？ どなたかまでは私も分かりませんが、お嬢様達と同年代のご令嬢達です」

「あたし達と、同年代って……どう言うこと？」

「取り敢えず会ってみましょうよ。その人は、名前を言わなかったの？」

「はい。誰が来たか分からなくして、ちょっと驚かせてみたいと……」

……」

「ふうゝん。じゃあ、行きましょ、千紗」

「うん、由梨亜」

二人は先程の言い争いを忘れたかのように、仲良く漣の先導について行った。

第四章「再会」― 2

「失礼致します。千紗様と由梨亜様をお連れ致しました」

「ありがとうございます、澪さん。貴女はどうぞ、下がって下さい。私達はお二人とお話がありますから、誰かに聞かれたくないのです」

「はい。承りました。それでは千紗様、由梨亜様、どうぞお入り下さい」

「失礼します」

二人がそう言い入り、澪が部屋を出て行った。

そして、部屋の中にいる人物を見た途端、千紗と由梨亜は固まり、笑顔を顔に浮かべた。

「まあ、双葉に若葉じゃないの！ お久し振り。何年振りかしら。本当に、懐かしいわ！」

「ええ。由梨亜。本当にお久し振り。千紗もお久し振り」

「うん。双葉も若葉も、ほんとに懐かしい！ あたし達、途中で――小五の時に転校しちゃったからねえ」

千紗は沁々と呟いた。

と言つても、千紗には、その時の記憶が他人事のように感じられる程度であるが。

千紗には、今までの記憶が三種類ある。

『彩音千紗』としての……つまり、自分が本当に歩んで来た記憶。

『本条由梨亜』のいない、『本条千紗』としての記憶。

『本条由梨亜』のいる、『本条千紗』としての記憶。

『本条千紗』としての二つの記憶は、どれも他人事にしか感じられない。

一方、『彩音千紗』の記憶は、自分の物だという意識が強い。

そのせいで、『本条千紗』が会ったことのある人と会っても、あまり過去のことを語りにくいのだ。

だから、ほとんど由梨亜が話すことになっていた。

「そうねえ……まあ、お家の事情では、しょうがないのだけれど」
昔、由梨亜は私立の小学校に通っていた。

その小学校は幼稚園から大学まであり、ずっと一緒という人も珍しくはない。

由梨亜は、小さい頃はその学校に何の不満もなかった。

洗練された学校に、洗練された先生、生徒達。

何の問題もない。

だが、それは外から見た話で、中にいる人物にとってはこれが『普通』だ。

由梨亜は、小学校の中学年の時に気付いた。

『外』が異常なのではなく、『中』が異常なのだと。

そして気付いたからには、『中』にいるのが苦しくなった。

その時、丁度引越すことになったのだ。

由梨亜は、思った。

また、この息の詰まる場所に入るのはごめんだ、と。

そこで、無理矢理耀太と瑠璃を説き伏せ、公立の小学校に入った。

そこで、千紗と出会ったのだった。

咲にいじめられる、千紗に……。

「ええ。私も、まさか引越すとまでは思ってもみなかったわ。お父様がまた新しく力を入れる事業を展開させるとは聞いていたけど、まさか、その影響で引越すだなんて……」

「そうねえ……私達も思ってたわ。特に、私達は双子同士だもん。他に双子はいなかったから、学年の中で双子は私達だけになっちゃって……とっても淋しかったわ」

「それにしても……大分印象変わったじゃない。あの頃、ぱっと見では見分けつかなかったけど、今はぱっと見でも何でも見分けられるわ。それぐらい、違ってる」

そう、双葉と若葉は双子で、しかも一卵性双生児だが、双子の姉である双葉はお洒落にとっても気を使っていて、少し派手である。

それに対して双子の妹である若葉は、お洒落はお洒落なのだが、もっとスツキリとまとめていた。

「まあね……けど、貴女達は昔からすぐ見分けがついたわね。二卵性だし、千紗はいつも元気で、由梨亜はいつも大人しくて……なのに、滅茶苦茶仲がいいんだもの。誰でも見分けがついたわ」

若葉は苦笑しながら言った。

千紗と由梨亜も顔を見合わせて苦笑したが、その意味は若葉とは違っていた。

そして、いきなり千紗が口を開いた。

「そう言えば……そこにいるのって、誰？ 誰か……いるよね？」

柱の陰を指して言う千紗に、由梨亜は驚いて目を瞠った。

「えっ？」

「へえ。よく気付いたわね、千紗。やっぱり、そういう勘だけはいいのねえ。いいわ。義彰よしあき、出て来なさい」

そう言われて物陰から出て来たのは、十四、五歳ほどの少年だった。

だがその身長は高く、この中で一番背の高かった千紗の身長は百六十四センチあったが、その千紗よりも高かった。

だいたい、百七十センチほどだろうか。

由梨亜は彼を見て、懐かしい思いに駆られた。

顔も雰囲気も全然違うが、年頃が弟の柚希夜ゆきやと似ているのだ。

癒璃亜ゆりあの話に聞いていた柚希夜の身長も、丁度同じぐらいだ。

由梨亜は義彰を見詰め、しばらく呆けていた。

「ふん。じゃ、彼って貴女達の弟？」

「ええ、そうよ。ほら、義彰。ご挨拶なさい」

「……初めまして。僕は、義彰と言います。宜しくお願いします」
彼はそう言くと、軽く会釈をした。

「初めまして、義彰。あたしは本条千紗。で、こっちは本条由梨亜。宜しくね」

千紗はニコツと義彰に笑い掛けたが、義彰は穴の開くほどジツと

千紗を見詰め、それからスツと視線を逸らした。

「……………」

千紗が首を傾げると、横から若葉が言った。

「こら義彰。無愛想にしないの！ ごめんなさいね、千紗、由梨亜。この子ったら、ほんとに……」

「いつつもお父様やお母様やお祖母様達に言われてるのにねえ……全然変わらないんだから」

「へえ。でもさ、彼って長男だよな？」

「ええ。私達には、義彰の他に兄弟なんていないもの」

「じゃあ、大変だねえ。そんな無愛想じゃ……」

「そうよ！ そうなのよ！！」

いきなり双葉が大声を出し、千紗と由梨亜と義彰は、思わず仰け反ってしまった。

しかし、双葉と若葉は益々身を乗り出し、力説した。

「ほらほら！ 初対面の千紗までが言うのよ！？ サツサと愛想良くしなさい！ このままお父様の後を継いだら、日本州の恥よ！」

「そうそう！ 貴方だけが恥ずかしい思いをするんじゃないわ！ 私達みんなが恥ずかしいのよ？！」

その勢いに義彰はたじろいだが、またもやスツと視線を逸らした。と、その時、由梨亜と視線が合った。

義彰は、その由梨亜の顔を見ると、怪訝な顔をした。

由梨亜が、クスクス笑っていたからだ。

「……………」

義彰が顔と雰囲気のみで疑問を伝えると、由梨亜は口を開いた。

「貴方……義彰って、ほんとに天皇陛下のご子息？ 双葉と若葉も天皇陛下のご令嬢とはちよっと思えないけど……。でも、貴方の方がらしくないわ」

そう、彼らの父親は現在の天皇。

彼らは、天皇の娘と息子、つまりは内親王と皇太子なのだ。

由梨亜のそのあからさまな厭味に、義彰は真っ赤になった。

「ふん。感情の制御もできないのかあ。ちょっとからかっただけでそこまで真つ赤になるなんて……ほんと、日本州の未来が不安だね。でも……もしかして私、図星をついちゃったかしら？」

「あるかもねえ。つまり、貴方が皇太子な訳でしょう？ 自分でもその引つ込み思案なその性格を気にしている……違う？ 義彰」

その千紗の言葉に、義彰は軽く呻くと背を背けてしまった。

まさに、図星をつかれたようだった。

「へえ……そうだったの、義彰」

「全然気付かなかったわ」

「そんなに考え込む前に、この頼りがいのあるお姉様に相談すれば良かったのに！」

「ちよ、双葉！ 自分で『頼りがいのある』『お姉様』って言わない！ このナルシスト！」

「何、ほんとのことじゃない。あ、それとも若葉は、そこまで自信がないの？ 全く、双子の姉として情けないわ。仮にも天皇陛下の娘ともあるう人が」

「それを貴女にだけは言われたくないわよ！ 貴女ねえ、派手過ぎるのよ、分かる？ 派・手！ 貴女がいつもの格好でお客様の前に出たら、何で庶民がここにいるんだって追い出されるわよ！ お洒落なのはいいけど、せめて品格、格式があるお洒落にして欲しいわ！ 貴女の妹として、恥ずかしいわよ！」

千紗と由梨亜は呆れながらもそれを眺めて、止めようともしていなかったが、義彰は違った。

この姉妹喧嘩はかなり頻繁に起こっており、千紗と由梨亜は知っていたもののほんと眺めていたが、義彰は他人のいる前でこんな言い争いを繰り広げられるとは思っていなかったようで、必死で止めようとしていた。

「ちよ、双葉姉上！ 若葉姉上！ やめろよ！ 誰が前に……」

「煩い！」

「お黙り！ ちょっと双葉！ こういう所で檻褸が出るのよ、貴女

は！！」

「ふん、何よ！ そっちこそ『お黙り』ってカッコつけて！ 恥づかしいとは思わないのかしらね！」

「は、品格がないよりマシよ！ それに貴女は全然私の『お姉様』とは思えないわ！」

「何言ってるのよ若葉。私達双子なのよ？ 貴女の方が先に産まれてたかも知れない可能性も半分あったんだからね！」

……この二人の口喧嘩は、いつも妙な所で食い違い、矛盾することが多い。

おまけに、放って置くといつまでも繰り広げられる。

由梨亜は、二人の言い争いを聞き飽きてから、ようやく止めに掛かった。

「ねえ、もうそろそろいいんじゃないの？ 折角久し振りに会ったのに、つまらない喧嘩で終わらせたくはないわ。貴女達だって、来客あるんじゃないの？」

由梨亜のそのおっとりとした言葉に、双葉と若葉は気まずそうに顔を逸らした。

その様子を見ていた義彰は、思わず吹き出して由梨亜に言った。

「慣れてますね……僕が止めようとする、必ず火に油を注いだような結果になってしまって、どうも駄目なんです。貴女のように適確に水を注ぐことなんて、僕にはできません」

「どうも。でも、それは貴方の前だからじゃないかしら？」

「……………」

全く分からない、という顔をした義彰に、由梨亜は悪戯っぽく言った。

「つまりね、この二人は貴方のお姉さんでしょ？ だから、弟の前だとしても甘えてしまうのよ。だから、益々ヒートアップしちゃうって訳。分かった？」

「……は、はい」

義彰が何となく押し切られてしまうと、今度は千紗が双葉と若葉

に問い掛けた。

「そういえばさ、何で三人はここに来たの？ どっちにしろ、明々後日には会うじゃない」

その千紗の当然の疑問に、双葉はあっさりと答えた。

「えっ？ だって、明々後日は他の州の貴族とかも来るでしょう？ そしたら友達じゃなくって、皇族とその州の貴族としてじゃなくちゃ会えないじゃない。それは、結構淋しいから。何て言ったって、八年振りですもん」

「だからお父様と相談して、そしたらこの時間は空いてるって言われたから、義彰も連れて来たの」

「……でもさ、どうして義彰まで？ 貴女達だけでも良かったじゃない」

由梨亜は更に質問を重ねた。

「うん。それがねえ、義彰この頃悩んでることがあるらしいのよ」

「ふ……双葉姉上！ な……何言ってんだよっ？！」

「何惚けたことを言ってるのよ、義彰。何年、貴方の姉をやっていると思うの？ この頃、様子が違うなあって思ってたし、鎌掛けても何にも言わないし……だったら、他の人が訊き出した方がいいでしょ？ でもそうすると、ここに来ている人達の中で、私達が信用している人なんて、ほとんどいなくてねえ……」

「しかも、この子今思春期真っ盛りだし、どうせ訊くなら同年代かそれに近い方がいいでしょ？ 貴方もその方が話しやすいでしょうし」

「それで私と双葉と相談したら、貴女達がいいんじゃないかって結論に達してね」

「だから義彰、私達はちょっと途中退場させて貰うわ。心行くまで二人に相談してね」

「私達、貴女達の部屋で待ってるから、相談が終わったら来て？ 久し振りに会うから、話したいことが山積みなのよ」

若葉はそう言うと、本当に双葉と共に部屋を出て行ってしまった。

千紗はただぽかんと目を丸くして見送り、由梨亜は小さく溜息をついた。

「はあ。ほんと、変わってないわねえ、あの二人……。それで何？ 悩みて」

「な……。しょ、初対面の方に、話せる訳ないじゃないですか……」
「ま、それもそうよね」

由梨亜はそう言うと、さっさと部屋を出て行こうとした。

だが、それを千紗が止めた。

「待つて、由梨亜。……ねえ、義彰。ちょっと、当てててもいい？」

「……………」

「だから、貴方の悩み」

「……………」

義彰が無言で促すと、千紗は悪戯っぽく微笑みながら言った。

「ずばり、恋でしょ？」

「……………。……………？ ………………！ ………………？ ………………！ ………………？ ………………！」

義彰の顔色が、面白いようにクルクルと変わった。

千紗はそれを楽しみながら眺めていた。

「千紗……あんた、こういうとこだけは、鋭いんだから……」

由梨亜の呆れた声に、千紗は自信たつぷりげに言った。

「え？ だって、分かんなかった？ 双葉と若葉の様子から。あと、言い方がね。何か含んでるような感じがしたから、ああ、この二人絶対知ってるなって。で、思春期の悩みて言ったら限られてくるし……それで、双葉と若葉がいたら話にくい内容って言ったら、恋かなあって」

……まさに、凶星をついたらしく、義彰は脱力して床にへたり込んだ。

「ちよつと義彰、大丈夫？ ああもう、ほんとにあの二人ったら……………」

千紗はそうばやくと、義彰を引っ張り上げた。

「ほら、とつとと白状なさい」

その言葉に義彰は益々脱力したようだが、大きな溜息をつくと話し始めた。

「ええ……あの、お訊きたいんですが、貴女達には、婚約者がいますよね？」

「ええ、そうよ」

「まあ、それが慣習だからね」

「そう、ですか……」

義彰は、千紗の『慣習』という言葉聞いて、ガツクリしたようだ。

だが、千紗はそんな義彰の様子を見て確信したらしく、諭すように言った。

「でもね、義彰。あたし達の婚約者は、貴族じゃないわ」

その言葉に余程驚いたらしく、義彰は勢い良く項垂れていた顔を上げた。

「貴族じゃ……ない？ それでは……富豪か、何かで？」

義彰の声には、微かな希望と諦めが入り混じっていた。

「いいえ。そんなことないわ。バリツバリの庶民よ。あたし達には、前に三人の婚約者候補がいたの。眞湖聡さん、蔡条護さん、紺城早宮さん。三人とも、本条家と身分の釣り合う立派な家柄の貴族の直系か、かなり近い傍系だった。だけど、あたし達はその三人が嫌いだったわ。まさに貴族その物っ！ って感じで」

千紗は、面白そうにくすくすと笑った。

事実、千紗にとってそれは、既に思い出だった。

「その時、あたしには好きな人がいなかったけど、由梨亜にはいた。同じ中学校の男子で、しかも初恋だった。で、由梨亜は諦めるのは無理だったし、あたしも絶対諦めて欲しくなかった。だって……そんなの、悲しいじゃない？好きな人がいるのに、それを諦めるだなんて？ だから……由梨亜は家出したの。レイリア国に、

十三歳の時に。それからだいたい四年間音信不通だったんだけど、二年前に戻って来て、あたしとあたしの婚約者を救ってくれたのよ。それで……ちょっと騙し討ちに近かったんだけど、何とかお父様を黙らせて、あたしと由梨亜は、婚約者候補ではなく本当に好きな人と婚約者になれたの」

千紗が嬉しそうに言うと、今度は由梨亜も笑い、身を乗り出して言った。

「だから、貴方も諦めることはないわ。好きな人がそれほどなくなるのはともかくとして、無理矢理諦めるのは可笑的い。人じゃないし、生き物でもない。ただの、利用されている機械に等しいわ。ただの物よ。一人一人が上げる声は、確かに小さいかも知れない。でも、声を上げる人が増えれば、それはとても大きな物になっていく。それを……忘れないでね。これは、身分が高いほとんどの人に忘れ去られてしまう、一番大切な物だから」

その言葉に義彰は目を睜り、寂しげに微笑んだ。

「僕も……そこまで強くなれると、いいんですけどね……」

義彰はそう言うと、軽く頭を下げた。

「……ありがとうございます。僕も、少しは頑張りたいと思います。本当に、ありがとうございます」

由梨亜は軽く息をつくと言った。

「それじゃあ、部屋に戻りましょ。義彰も一緒にどうぞ」

「……いいんですか？」

「ええ、勿論」

その言葉に、義彰は初めて笑った。

それはまるで、凍った氷が暖かい太陽によって融け出し、周りの地面に染み込んでいくような、そんな暖かい微笑みだった。

見ているこちらが、ポツと心の奥が暖まるような——心に陽溜まりを見つけたような、そんな暖かい気持ちにさせる笑顔だった……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7986x/>

時と宇宙（そら）を超えて～分割版～

2011年11月27日19時56分発行